

辞典史

資料による中日大辞典編纂所の歴史 8

今泉潤太郎

第2版、第3版の編集と出版ほか

昭和61(1986)年5月、中国国家教育委員会への辞典贈呈式を兼ね、第2版出版記念会が名古屋駅前の都ホテルにおいて開催された。浜田稔学長の挨拶に続き編纂委員長の今泉から編集経過報告がおこなわれた。参加者200人を超す盛会であったが、壇上に鈴木擇郎編集主幹の姿は見えず御遺族の胸に掲げられた遺影による出席であった。5年前の昭和56(1981)年1月、鈴木は不帰の客となった。また本間喜一名誉学長に代わり御息女の殿岡晟子氏が参列された。

辞書の編集は途切れることなく続くものであり、出版はただ一区切りに過ぎない。時代の要請に応える辞典づくりを追求する鈴木が依願退職し(昭和56年愛知大学教職員定年規程制定施行)、辞典編集に専念することを決意したのを受けて昭和50(1975)年4月、辞典編纂所が再開された。

『中日大辞典』は昭和43(1968)年2月、中日大辞典刊行会(前華日辞典刊行会)の自費出版で刊行され“本格的中国語辞典”として高い評価を受けてきた。その後、発売元の倒産騒動に巻き込まれたが発行部数を伸ばし編纂所再開当時には4刷を重ねた。“編纂所はお荷物”の懸念は払拭され、辞典は大学に学術上、財政上にいさか寄与する存在となったのである。ゆえに鈴木の信念と熱意からでた辞典改訂の申し出は大学当局にとって歓迎すべきものであったと言えよう。

再開された編纂所はこの日付で制定施行された中日大辞典編纂所規程に基づく研究機関となり、中日大辞典刊行会の下に置かれていた従前とは制度上の性質を変えた。辞典に係る経理はすでに数年前、大学会計に包括され、いままた編纂所も切り離されてしまった刊行会は徐々に有名無実の存在となっていった。

編纂所は旧本館1階西ウイングの端（もとの国際問題研究所）に設置された。設備、備品、図書資料などの調達、搬入などを急ぐ傍ら鈴木は編集を始めた。今回の編集は現行版の誤植訂正と文化大革命関連語彙の点検が当面の目的であり、もとより辞典凡例を修正する必要はない。最新の3刷り清刷を原稿として訂正の朱を入れていった。進むにつれて各頁が赤一色となってしまい急ぎ従来の原稿カード方式に戻した。またこれまで研究室でおこなっていた増刷の準備作業も編纂所へ移された。

新規程に基づく辞典編纂所は編集主幹に鈴木、所長兼編集委員長に今泉、所員兼編集委員に陶山信男、荒川清秀、森博達、のち白井啓介ら中国語教員で構成された。高臨渡、のちに黄異の両客員教授がインフォーマントとして協力された。翌年には編集事務員も配属され一応の態勢がととのった。

再開の年の8月、東亜同文書院以来、鈴木と辞典編集の苦労をともにしてきた内山が59歳で不帰の客となった。健康上の理由で改訂版の編集には参加しなかったが、入院わずか20日間で急逝したことに関係者は衝撃をうけた。“強い正義感、責任感を持ち己を持するに極めて厳であり、これが健康に影響したのであろう”と鈴木は追悼している。

昭和51(1976)年に愛知大学は創立30周年を迎えた。中国では1月に周恩来首相が9月に毛沢東主席が相次いで逝去して権勢を振るっていた“四人組”が一掃され、翌年には鄧小平副主席が復活し10年間続いた“無産階級文化大革命”が収束した。やがて待望の中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編の『現代漢語詞典』試用本の公刊、『字源』、『辞海』の修訂本の発行を始め多種多様な参考図書が次々と出版され入手可能となった。初版編集の時代とは様変わりし資料の氾濫する中で編集が行われた。

翌年秋、編集を進める鈴木に瑞寶中綬章が授与され関係者による叙勲祝賀

会が開催された。本間は席上“同文書院廃校、引き揚げ時の献身的な行為、愛大設立への寄与、さらに『中日大辞典』の編纂は歴史に残るもので、日中の文化交流に果たす役割はいかに高く評価してもしすぎるものではない”と鈴木を称賛した。本間名誉学長は第一線を退いて久しいが来校時には辞典編纂所を訪ね鈴木と懇談するのが常であった。この間も鈴木を中心に辞典原稿カードの点検、整理や新語の収集など編集作業は順調に進行した。

昭和56(1981)年1月、辞典編纂に情熱をかけた鈴木は83歳の生涯を終えた。原稿カードの大部分に鈴木の手点検の跡を見ることができた。編集再開のしばらく後に書かれた「中日大辞典の思い出」中の“増改訂の一応の完了予定は昭和56年である”との言葉が予言めいた感を与えた。この年、初版増刷りは7回を数えた。

編集主幹は余人を以て代え難く、編集委員会は残された未処理の原稿カードの完成を急いだ。さいわい後任の専任嘱託の人事枠が認められて前北京農業機械化学院教授黄志明氏を迎えて編集作業は大いに進捗した。またこの頃から南開大学、北京語言大学との学术交流が緒につき、交換教授として赴任した中国人教員から日常的に多岐にわたる協力を得ることが可能となった。

原稿カードの完成をいそぐ折から編集作業の終結を促す声ができ、やがて新版の出版を大学創立40周年記念事業の一項目とする旨が大学当局から伝えられた。

これにともない辞典刊行会で審議の結果、出版社は諸橋『大漢和辞典』で有名な大修館書店、印刷会社はCTS（コンピューター印刷）の凸版印刷(株)にきまった。

昭和61年2月、大学創立40周年に花を添えて第2版は出版することができた。すぐ翌年に増訂版を出した経緯について詳細は今号の資料8-2d「中日大辞典の編纂②」に譲る。なお自費出版であるにもかかわらず辞典奥付の発行者名が愛知大学辞典編纂所と記載されていないのは、大学と出版社で交わした覚書に拠ったものであることが後日判明した。ちなみに第3版では編者・発行者愛知大学中日大辞典編纂所、発売所(株)大修館書店となっている。

印刷には3年かかった。凸版印刷(株)のCTS印刷は優れたもので、誤りない

漢字索引と日本語索引ができたのはこのおかげである。また我が国で規範化される簡化漢字の全てを用いて印刷した辞典は『中日大辞典』増訂第2版を嚆矢とするが、これもそのおかげである。同社はすでに相当多数の簡化漢字を備えていたが『中日大辞典』が必要とする全てをカバーできるほどではなかった。不足分の活字の製作費用は半端な金額ではないが、すべて同社が負担した。同社の御配慮に感謝するとともに、同社といい初版時の図書印刷(株)といい我が国の文化を支える印刷業界の見識を再認識した次第である。

大修館書店により増訂版発売の予告広告が朝日、毎日、読売三全国紙に一斉に掲載され、全国の有名書店で発売されたことは愛知大学関係者にとって何よりの喜びであった。B6版の大きさと初版の3割増の2800頁、ぶ厚くなった増訂版は“小さな大辞典”と揶揄された。

辞典内容は初版に加えて文化大革命前後および改革開放以後の語彙が多数取り入れられた。第2版の編集期間の前半はほぼ文革時期と重なっており、語彙の選択と語釈に偏りが出た点は否定できない。

翌年早々、慌ただしく増訂第2版が出版されたのを見届けたように5月に本間名誉学長が96歳の天寿を全うされた。本間と鈴木なくしてこの辞典は誕生しなかった。縁あって終生この辞典の編集に関わり両先生と身近に接した者の思いは、ただこのことのみ。

第2版もまた学内外から多くの協力を得た。とくに前名古屋市立大学薬学部教授稲垣勲氏は専門知識を提供され、そのお陰で中国医薬学方面の語彙に対する信頼度は揺るぎないものとなった。印刷、校正には3年費やした。この段階では編集事務の加藤寛昭氏、影山裕子氏の協力が大きく、さらに繁忙期には学内の他部門から助勢を得て凌いだが、大修館書店側の協力も大きかった。この作業を短期集中的に完了させるため、初版時と同様に学生諸君の協力を仰いだ。

第2版の出版即第3版の編集開始である。平成に改まってから国際問題研究所編『中国政経用語辞典』の編集を担当した近田尚己氏が、後に山田克利氏が研究員として編集陣に加わり新版の作成に大きく寄与された。

またこの頃、はじめて“辞典編集を主とする中国語教員”の公募をおこ

なって辞典編纂の持続的な態勢の構築を図った。遺憾ながら後日、担当授業回数をめぐる問題が紛糾し他の要因も重なったあげくこの人事は破綻して計画倒れに終わった。

この頃、大学間協定に基づき南開大学の王華馥教授、劉叔新教授、北京語言大学の劉青然教授、張大誠教授、中国人民大学の李宗恵教授らを相前後して迎え各専門分野で協力を得た。

昭和63(1988)年頃、名古屋校舎(三好町。現みよし市)建設に伴い学部再編など大学の将来計画が浮上し全学的な議論が始まった。平成に入り大学の基本計画構想、基本計画、実施計画が次々と発表された。議論の深化とともにやがて“二十一世紀を展望する愛知大学基本計画”が発表され、以後これをめぐる論議のなかで新学部構想が浮上した。編纂所の構成員にとり自己の所属する学部、校舎の将来問題と切り離して今後の辞典編纂所、辞典を議論することは不可能であった。眼前の急務である原稿カードの完成までの範囲内で編纂所の将来問題に関する報告書を作成し大学当局へ提出した。この議論はその後、現代中国学部の開設によって自然に決着した。

一旦ここで話題をかえ、編纂所が関与した辞典編纂以外の行事について主なものを挙げておく。

昭和30(1955)年頃、辞典編纂所が開設された年の前後か、読書週間にちなみ豊橋市立図書館からの依頼で大学図書館、辞典編纂所蔵書の漢籍字典、中国語辞典類2、30点を鈴木の解説を附して貸し出した。隣接する市公会堂とともに豊橋空襲の戦火を免れた市立図書館は市民の文化的オアシスとして愛され、この展示会も好評を得て1ヶ月ほど開催された。

また、昭和61年11月、第2版刊行の記念行事として日中国際シンポジウム“21世紀の日中関係に向けて”が愛知大学主催で名古屋電気文化会館において開催された。当初は北京で中国人学生日本語弁論大会、名古屋で日本人学生中国語弁論大会と両国大学生シンポジウムの開催を計画したが実施に至らず、これに代わるものであった。

またこの頃、通産省出身の日中人材交流協会青木光利事務局長(愛知大学

法経学部卒)から要請を受け、日本企業で実習を終えて帰国する中国人実習生の終業式として、中日大辞典賞日本語弁論大会を主催した。編纂所の名古屋校舎(三好)移転まで毎年実施され、二百人にのぼる実習生が愛大で修業式を終えたことになる。

また平成元(1989)年、協定校の上海外国語大学王宏教授らが国際協力基金へ“日本語中国語対照研究”のための助成申請をおこない、これに協力し同年8月に王教授ら3名の来日調査が実施された。王氏は東亜同文書院(40期)を卒業し、解放後に上海外大教授として中国の日本語教育界で永く指導的役割を担い活躍された人物である。

いま一つ、『中日大辞典』の中国語訳本をめぐる話を紹介する。外国語版については今号の資料8-2d「中日大辞典の編纂②」のなかでざっと触れているが、ここでは中国三環出版社・海南出版社及び王同億氏に関わる“事件”に触れておきたい。

平成4(1992)年10月、上記両社の日本代理店日中新世紀開発(株)から大修館書店を経て『中日大辞典』の中国語訳本を出版したい旨提案があった。両社は海南省最大の出版社で『現代漢語大辞典』、『新現代漢語詞典』、『語言大典』など大型辞書20余種、年間出版物400余種、売上げ全国第6位である由。また同社の高級編輯王同億氏は前記の各辞典や『ウエブスター大辞典』の中国語訳本『英漢辞海』、『漢日科技詞彙大全』などを編集した人物である云々の自己紹介があった。その後に契約書が提示された。おって王氏から中国語訳本出版の趣意書と『中日大辞典』本文の第1、2頁分の中国語訳見本刷りが届けられ、契約すれば即刻同社の翻訳陣を動員し短期間で中国語訳本を完成できる旨の伝言とともに、早急に返事が欲しいとの催促である。編纂所内で慎重に審議し大学当局及び出版社の見解を踏まえて翌年1月に契約しない旨を返事した。辞典編纂所との関係は以上に尽きる。

さて以下が本題である。この頃、中国の『辞書研究』誌上で王同億主編の『新現代漢語詞典』、『語言大辞典』など複数の辞書には重大な剽窃、誤謬が多々あると指弾する論文が次々と発表された。著名な言語学者の呂叔湘氏は同誌に載せた小文のなかで「海南出版社が1993年9月北京で開催した辞

典編集シンポジウムにおいて王氏は“中国社会科学院語言研究所出版の『現代漢語詞典』は日本から導入したもので、日本愛知大学中日大辭典編纂処が1964年に出版した『中日大辭典』の復刻だ”と内幕を暴露した（‘民政之声報’掲載記事）ことを引用し「私（呂叔湘氏を指す）が主編した『現代漢語詞典』は1960年に試印本、1965年に試用本を出版しているので王氏は前後を取り違えたのではないかと揶揄し、このフェイクニュースを一笑に付した。

いかなる理由で王氏が“『現代漢語詞典』の種本は『中日大辭典』だ”と噴飯物の与太話を公開の席で語ったのか見当もつかない。その後、同社と王氏は平成8(1996)年に北京中級法院から著作権侵害で有罪判決、同13年に『新世紀現代漢語詞典』は販売停止、『高級現代漢語大詞典』は差し押さえ処分を受けた。いわゆる“王同億現象“は消滅したが辞書の粗製濫造は後を断たぬようである。

平成8年、大学は創立50周年を迎えた。翌年4月、名古屋校舎（三好）に現代中国学部が開設されたことをうけて辞典編纂所は名古屋校舎へ移転することとなった。校舎内での部屋替えとは違って他地の校舎への移転であり、綿密な移転計画表を作り、平成10(1998)年、恙なく移転は完了した。これまで長く辞典編纂所事務を担当された草場明子氏のおかげで迅速、正確に処理された。今度も従前の編纂所解散と同様に資料、書籍その他もろもろの不要物多数が適宜処分された。この頃、第2版は7刷をおこなった。

中日大辞典編纂所は名古屋校舎の現代中国学部棟3階に開設され、現代中国学部所属中国語教員を中心として辞典編纂が進められた。平成13(2001)年、辞典編纂所の構成は改めて編纂所長兼新版編集委員長安部悟、編纂所委員兼編集委員藤森猛、吉川剛、編集委員前西安交通大学教授顧明耀、編集主幹今泉となった。また研究員に前田克彦のほか編集事務員を置いた。この翌年、退職後あらためて専任嘱託となった今泉、顧明耀を中心に原稿カードの最終点検が鋭意進められた。

この頃に大修館書店から電子辞書化について提案があり、編纂所は検討の結果これを受け入れることとした。従来の著作者一出版社（印刷・製本・販

売)に介在して機器メーカーが入ることや、デジタル化に伴う技術上の問題など新たな課題は大修館書店編集部黒崎昌行氏の協力を得て実行に移され、平成18(2006)年にカシオ、キヤノンの電子辞書に増訂第2版が搭載された。膨大な積載能力をもつ電子辞書にとって言語(日本語・英語・中国語ほか)は情報全体の一部分であり、『中日大辞典』はさらにその中の一つに過ぎない。これを契機に辞典編纂所は“紙から電子へ”の問題に対し真剣に検討を始めるに至った。

平成19(2007)年ようやく凸版印刷による印刷が始まった。第3版の編集も学内外から多くの協力を得た。特に三田良信氏(東亜同文書院40期)からたびたび懇篤な助言をいただいた。松山昭治氏(書院45期、愛知大学旧法経学部卒)は長期にわたり新語の収集に協力された。また後藤峰春氏は貴重な資料を提供されたほか、多数の書籍を現代中国学部へ寄贈された。校正の繁忙期には例の如く学生の協力を得たが、今回は半数以上が中国人学生であった。また編集事務の小川朋子氏、村司香子氏は最終段階における印刷、校正業務を迅速に処理された。このほか大修館書店の手配により船越國昭氏、竹村光葉氏が再校、日本語索引作成に協力された。

平成22(2010)年3月、第3版が出版された。大学の創立60周年に合わせ完成を期したが遺憾ながら4年遅れの出版となった。出版記念会は同年3月6日午後、愛知大学車道校舎コンベンションホールで開催され、佐藤元彦学長の挨拶に続き、今泉編集主幹の「中日大辞典の歩み」と題する講演がおこなわれた。その後、同窓生有志主催の祝賀会が開催された。翌年1月、第17回東亜同文書院記念基金会賞が辞典編纂所に贈られ安部所長が受け取った。4月、これを記念し編纂所は今泉編集主幹の「中日大辞典の歴史」、顧明耀編集委員の「中日大辞典について」の講演会を開催した。顧氏の講演内容は翌年、『日中語彙研究』創刊号に掲載された。

第3版において凡例上変更した点は“親字の分項”である。初版、2版は“親字の集中”としていたので『中日大辞典』としては重大な変更である。また略号を“語の特性”を示すものと“語の分野”を示すものに分けた。なお第3版についての詳細は今号の資料8-4b(1)「第3版の編集を終えて」

に譲る。

平成24(2012)年4月、念願叶い名古屋駅に隣接する笹島地区に開設された新校舎が名実ともに愛知大学名古屋校舎である。

校舎の移転は新しい中日大辞典編纂所の出発となった。『日中語彙研究』(年刊・電子版)の創刊と『中日大辞典』を継承する電子版『中国語彙データベース』立ち上げの予告はその宣言である。安部編纂所長は“『日中語彙研究』刊行にあたって”と題し「現在の組織のあり方を大幅に見直し、これまでの辞書編纂の技術と伝統を活かしつつ、更なる発展を目指して新たなスタートを切ることとなった」と述べている。また編纂所は辞典の電子化を見据えてあらたに研究員として愛知大学、岐阜大学非常勤講師齊藤正高氏を迎え入れた。

『中日大辞典』、正確に言えば紙辞書形態の辞典は第3版を以て終了となる。この背景にある“紙から電子へ”の流れについて多言は無用であろう。第3版は発行後12年間増刷無し、この冷厳な事実から辞典編纂所は再出発した。

平成30(2018)年11月、名古屋校舎本館において中日大辞典発刊50周年記念講演会「中日大辞典愛知大学の遺産から人類の遺産へ」が開催され、これを記念して中国教育国際交流協会へ第3版1000冊が贈呈された。川井伸一学長の挨拶ののち、前編纂所長今泉の「编者から見る『中日大辞典』」、顧明耀編纂所研究員の「中国人の目で見た『中日大辞典』」、齊藤正高編纂所研究員の「『中日大辞典』データベースの機能」と題する講演がおこなわれた。講演内容は『日中語彙研究』第8号に掲載された。

令和2(2020)年3月、待望の「中国語語彙データベース」が公開された。予告された内容によれば、増訂第2版と第3版合わせて中国語28万、日本語釈義38万、例文20万の総計86万項目。機能的には、HSKの重要度による語彙検索ができること、日本語検索ができること、新語登録ができることなどである。詳しくは辞典編纂所ホームページの同欄によって直接検索していただきたい。なお、翌年に第1次増補、翌々年すなわち本年には第2次増補がおこなわれている。

完

資料

- 8-1 編纂所再開と改定版編集
 - a 編纂所の再開
 - b 改定版の編集
 - c 関連記事 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14)
- 8-2 第2版の出版
 - a 第2版序文
 - b 出版記念会・贈呈式 (1) (2) (3) (4)
 - c 関連記事 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7)
 - d 中日大辞典の編纂②
 - e 書評 (1) (2) (3) (4) (5)
 - f 関連記事 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7)
- 8-3 編纂所の将来問題と新版編集
 - a 体制と運営 (1) (2) (3) (4)
 - b 新版の編集 (1) (2) (3)
 - c 書信
 - d 関連記事 (1) (2) (3)
- 8-4 第3版の出版
 - a 第3版序文
 - b 第3版の刊行 (1) (2) (3) (4) (5)
 - c 書評
 - d 関連記事 (1) (2) (3) (4)
- 8-5 中日大辞典をめぐって
 - a 米国における中日大辞典 (1) (2)
 - b ピンポン外交と中日大辞典 (1) (2) (3) (4)
- 8-6 中日大辞典寄贈 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13)
- 8-7 中日大辞典、辞典編纂所説明・案内・パンフ
 - a 説明・案内 (1) (2)
 - b パンフ類 (1) (2) (3)

8-8 曹全碑

今泉潤太郎 Imaizumi Juntaro 愛知大学名誉教授 専門：中国語学

編纂処の解散・再開と第2版の編集

今泉潤太郎 (『中日大辞典』前編集委員長)

インタビュアー 安部 悟 (愛知大学現代中国学部助教授)

■出版の反響と編纂処の解散

安部 今お話にありましたように、『中日大辞典』は、一九六八年二月に正式に出版されるわけですが、出版までに日中両国の実にはさまざまな多くの人々の協力や援助があったことを、私を含め新しく辞典の編纂に携わるようになった者は、決して忘れてはいけなと思います。また、今泉先生が何度も指摘されておられるように、辞典の刊行に本間先生の斬新な発想と優れた経営手腕が不可欠であったということもよくわかりました。こうして出版された『中日大辞典』ですが、初刷りは一万冊、人々の期待もあって、なかなか好評だったようですが、当時の反響と、『中日大辞典』が出版されたことよって、一応当初の目標は達成されたわけで、その後中日大辞典編纂処はどうなったのか、その後の経緯についてお伺いしたいのですが。

今泉 辞典は幸い好評で、もう亡くなられた橋本萬太郎氏が、執筆された三省堂『言語学大辞典』の中国語の項の中で、日本で唯一この『中日大辞典』が取り上げられ評価されています。要するに紙とはさみと糊で切り貼りしただけのものではないということですね。事実そういう辞書まがいのものもあるわけですが、そういうものではないということが世間で評価されたと思っています。

こうして評価も定まったのですが、編集を始めてからとにかく十年もたち、私個人としてもやはり疲れましたね。実際、鈴木先生はその後に大病にかかり、もつとショックなことには内山先生がその数年後お亡くなりになられるのです。これは辞書を一冊作ると目が潰れたり死んだりするといわれるように、やはり大変な苦勞なのですね。他方、大学の方も財政上は不要な支出が減る方がいいわけですから、辞典編纂について今後どうするかという抜本的な検討が我々三名に委ねられた格好になりました。

具体的に言いますと、辞典編纂処には自前の事務室もありましたし、図書資料等が一万数千点ありました。それ以外にも、什器備品の類や万余のゲラ刷り、二〇万枚の辞書カードとカードボックス等の物品も相当あり、これを維持管理するのにどうするかという問題があるわけです。また校正がいかに大切かということが後々わかるのですが、年を追って何万冊と出版されるわけで、何万人の方がこれを利用されるわけですね。そ

うしますと、四校まで校正したとはいうものの、やはり誤植がたくさん出てくるのです。これにどう対応するかという問題もあったわけですが、我々三人が集って話し合いました結果、完成してほっとしていたためか、その後の見直しをあまり考えず、解散しようということになってしまったのです。六九年くらいでしょうか。辞典編纂処がなくなつて、じゃあ何が残つたかという点、辞典刊行会が残つたのです。組織上は辞典刊行会を残して、辞典編纂にかかわる資料等は、三人の研究室に置いておくことになりました。この当時、それぞれに研究室が与えられていたので、まずそこに保管しておき、次の増刷時にはまた集つて、どうしたらいいか検討しようということになりました。図書は大学図書館に寄贈し、什器備品もそれぞれの部署にもらってもらいました。辞典編纂を事業として継続する場合、一旦編纂処を解散することがいかに致命的かということに、後になつて気付かされることになりませう。

というのは、六八年の完成後、中国側に寄贈するという形ですでに二、三〇〇冊をそれぞれ買い上げていただいた方々の名前で送りましたので、是非中国側の反応も知りたいということ、中国との交流を愛知大学としても行いたいということ、郭沫若氏に訪中をお願いしたのですが、これが一九七一年のことです。中国は六六年に文化大革命が始まりましたが、こちらの方としては文化大革命なんということは予想せず作つて、原稿は一九六四年くらいで収集が終わつていました。印刷には一五ヶ月かかりましたから、刊行の一五ヶ月前には原稿が基本的には完成していたはずですが、ところが一九六六年頃から、文化大革命関係のものがぼつぼつ出始め、その後、新しい語彙がどんどん出てくる。そして売り出した途端に文化大革命でしょう。これをなんとかしたいという欲求が出てきて、訪中したいという申請を出したのですけれど、とてもそんな時期ではないということで、実現は日中の国交が回復された翌年の一九七三年になってしまいました。

それで訪中がいよいよ実現するわけです。愛知大学の名前で訪中した代表团としては、この辞典編纂のために行った学術代表团が最初です。一九五五年に馮乃超氏が来られ、それから約二〇年後に愛知大学側がそれに応えて行ったことになりました。代表团は鈴木先生が団長で、私も団員の一人として参加しましたが、内山先生は参加されませんでした。

我々は南開大学、北京大学、復旦大学の三大学で学術交流をしました。南開大学がホスト校となり二日間に渡つて学術交流を行いました。南開大学の言語、文学、歴史、哲学などの教授が座談会に参加してください、『中日大辞典』についてそれぞれ具体的に何頁の何はどうかという具合に逐一指摘していただきました。これほどの見落としがあるのかと大変ショックでした。一つは先ほど言ったように六五年の末には収集を打ち切っていますから、文化大革命に関する語彙はその都度追加という形で入れていったのであり、そのため体系的に入らなかつたということもあります。

さらに言えば、文化大革命についてはいろいろな見方がありますけれど、日本で受け

入れられたのがどちらかという中国側に好意的な理解だったのでしよう。例えば、「五七幹校」は、我々の辞典でもそうですが、強制収容所という解釈ではなかったです。やはり幹部再教育の施設という解釈です。そういう面もなかったわけではないですけどね。こういった実態についても見聞を深めることになりました。

■編纂処の再開と改訂作業

今泉 中国へ行って、いろいろなことを直に目にし、また辞典の簡体字はまだ不完全で、残りの何千字というのは簡化字ではないわけですから、これもちゃんとしたいという思いがあって、帰国後再び三人で集ったのですが、その時鈴木先生から増訂版をやることと、中日大辞典編纂処を再開したいという提案がされたのです。一旦解消したのもをもう一回構築するというこの大変さを私は当時十分にはわかっていなかったのですが、結果的に内山先生は参加を断られました。内山先生は翌年亡くなられますから、お体の調子が悪かったということもあつたでしょう。鈴木先生は、自分一人でもやる覚悟であり、その頃病気で手術されたこともあつて、専任教員を退職してやるとおっしゃいました。そうなるが残っているのは私だけです。私、私も、じゃあやりましょうということになって、初版時の内山先生の役割、つまりマネージャー的な役割を担うことになりました。こうして『中日大辞典』の増訂版の編集が始まります。

増訂版は初版の手直しという形で始まりました。しかし、この間に文化大革命が終わり、その後八〇年代、九〇年代になると改革開放ということで、今度は資本主義——市場経済の社会に変わりますよね。そうなりますと語彙も当然のことながら変わってきますし、何よりもさまざまな言語面での政策が進み、辞書編纂においてもどうしても取り入れなければいけないような事柄が多々できます。そういうことで増訂版をどうしても作らざるを得ないような状況も客観的にみてもありました。もう一つ財政的なことで言いますと、華日辞典刊行会はずっと継続されていまして、そこから提出される収支表を見ると、だんだん黒字になっていくわけですね。結果的には大学の付属事業として唯一、税金を納める、つまり利益が出てしまうくらいの収支になるわけです。七二年以降、日中の全面国交回復を期に、交流が全面的に広がるという背景のもと、中国語の学習人口が増え、また光生館や岩波書店などから中日辞典あるいは日中辞典が出てくる状況でした。これらが要因となって、どうしても増訂版を出さなければという気運が高まってくるわけです。

中国でも『現代漢語詞典』という權威性をもつ国語辞典が出版されます。正式に出版されるのは文化大革命が終わってからののですが、試印本、試用本という、正式に出版される以前の版が日本では公然と市販されていて入手できましたので、これとの比較対照ができました。これをベースにしたさまざまな資料も出てきました。中国国内の状況の大きな変化とも関係があります。

それから『中日大辞典』の初版との比較で言いますと、すでにこの頃は「中ソ一辺倒」から「中ソ論争」になって、四、五〇年代製だったソ連式の機器は第一線から退き、新しく日本やアメリカの機械や新しいテクノロジーを反映したものがどんどん入ってきます。そういう点で、初版に取り入れた新語が古色蒼然とした感じにどうしても見えるのです。そのようなことで、増訂版の編集は客観的に見ても、また我々の側から見ても、どうしてもその必要があったのだと思います。

鈴木先生が編集主任でしたが、お体のこともあり週に二、三日程度の出勤でした。その他のメンバーは私が編集委員長、辞典編纂のために後にお願いました中国人の黄異先生。それから内山先生が亡くなられたあと、陶山信男先生がみえました。その他、現在おられる荒川清秀先生や転出された森博達先生など、中国語の先生方全員に編集委員になっていただきました。安部先生にも編集委員をお願いするのですが、それは増訂版が完成してからのことでした。また、この時は編集協力委員を作りませんでした。というのは中国で『中国大百科全書』などさまざまな権威ある資料が出てきました、これを活用すれば十分足りる状況になったからです。編集委員が新語を入れ、誤りを正し、古いものを取るといような形で進めました。結果的に一九八六年二月に完成します。これも一三年か一四年の編集時期を要したわけですので、初版の一三年とほぼ同じ年月がかかったことになりました。

■増訂版と増訂第二版の出版

安部 初版の完成後、一度は解散した辞典編纂所が、一九七三年の訪中を契機として多少の紆余曲折を経て、一九七五年に再び開設され、そこから増訂版の出版へ向けて本格的に動き出した。鈴木先生が退職され、編集の主任を務められ、今泉先生が編集委員長という、新しい体制ができたわけですね。増訂版の完成までには、初版の時とほぼ同じ時間がかかったわけですが、完成までの道のりは決して平坦なものではなく、その間またいくつかの困難を乗り越えることになりましたね。その中の最大のものはおそらく、今泉先生が「増訂に際して」の中でも書かれておられるように、増訂版の出版に情熱を傾けておられた鈴木先生が、まさに「青天の霹靂」で、八二年に急逝されたことだろうと思います。その後は今泉先生を中心に編集作業を進め、八六年に完成したわけですが、増訂版の特徴やその評価についてお聞かせ下さい。

今泉 この増訂版は、致命的というのではないのですけれど、ある意味では非常に無様なことをやりました。増訂版には簡化字総表に載る簡化字を全て入れました。印刷用漢字字形表というのが中国で出ていて、この七〇〇〇字近くを全部取り込んで作りました。日本の辞書の中で唯一中国の漢字に関する決定を完全に反映したものだという自負があったのですが、実は増訂版が出来上がった翌年にわずかな数ですが、簡化漢字の追加が出たのです。わずか七字ですが、初版のほぼ倍の頁数にあたる二五〇〇頁中のどこ

かに入っているこの七字を百パーセント正確に捕捉することはできません。その後さらに五三個の漢字の発音も訂正されたので、合計六〇字です。六〇個の漢字の字形をすべて網羅して修正したいと、増訂版の増刷の時に見積りをとったら、通常の印刷費用よりかなり高くなることがわかりました。改版すれば完璧なもので、これを評議会にお願ひしたのでありますが、手続き上の瑕疵を指摘されまして、一年待ったがかりました。結局、翌年改訂版が出されるわけですが、大学にも大変迷惑をかけたました。これらの訂正を加えましたので、増訂版は一刷だけで終わり、翌年六〇字を取り入れた増訂第二版を出版し、現在に至っているわけです。

これも非常に売れ行きが良かったです。これは初版の成果の上に立ったということ、出版社を今度は大手の大修館書店にしたことが大きかったと思います。大修館書店は『大漢和辞典』を出したところです。大手出版社ですから全国の書店の店頭で中日大辞典がならび、初版出版時に大学当局から期待されながら実現できなかった、愛知大学の知名度を全国的にすることを実現できたわけです。この増訂第二版は、初版の性格をそのままにしたので、全体の語彙数は相当数増えましたし、新しい語彙も三万語ほど増やしたので、その点では充実したものになったと思います。ただ、初版では新中国の収集を予定していたのですが、あまり実現できませんでした。それからもう一つ、古い語彙をカットせざるを得ず、その点においては比較的古いところをやっておられる方々からは、初版の特徴の一つがなくなつたということでも不満が出たりしました。また、中国語学習者が飛躍的に増えたので、学習者向けの辞書をという期待もあつて、そういった点も盛り込んだこともあり、結果的にかなり分量が増えました。逆に言うと、両者の折衷で特徴がやや曖昧になつたという点もないわけではないと思います。

しかし、この増訂第二版は、初版に劣らぬ売れ行きでした。一方で、中国語学習者や中国語を必要とする人たちの層がさらに飛躍的に伸びましたので、そういった需要に百パーセント応えるわけにはいかないという状況もあります。文化大革命が終わり、八九〇年代以降中国はあらゆる点で大きく変わっていますよね。近代国家になつたというのは変ですけれど。例えば、今度の新型肺炎などでもこれに関連したウィルスなど、要するに近代科学の用語を、今中国では日本などと同時並行的に取り入れていきますよね。そういう事例が急速に増えたので、テクノロジー関係などの語彙については、今の増訂第二版は不足していると思いますね。現在、売上げが当初の半分ぐらいに減っていることも、その一つの反映であろうと思います。もちろんこの間、多種多様な中日辞典や日中辞典が出版されたことの影響もあると思います。

いづれにしても、そのような状況下で、平成一四年一〇月に中日大辞典編纂所を豊橋校舎から名古屋校舎に移転し、第三版の編纂が開始しました。これは愛知大学が八年前に中国関係の特化と名古屋校舎への集中化ということで現代中国学部を設立し、それを背景に辞典編纂所も名古屋校舎に移転したものです。こうして、新しい体制のもとに第

8-1 a

三版の編集が始まったということになると思います。

(二〇〇三年六月二日)

〔注〕『中国21』Vol.18 (二〇〇四年三月二〇日) 所載『中日大辞典と私』より抜
粋。

増訂版の編纂経過について

I - 1. 1955 (S.30) 年 4 月、中国より日中文化交流のため日本人民に贈呈された東亜同文書院大学で作成の 14 万枚の資料カードの到着を出発点とし、愛知大学（本間喜一学長）は中日辞典出版を決意しました。そして、鈴木柾郎編集委員長、内山雅夫、今泉潤太郎、張祿沢等を編集員とする編集委員会及び学外の協力を得、経費の調達を計る辞典刊行会を成立させました。

- 2. 1968 (S.43) 年 2 月、13 年の歳月をかけて辞典は完成しました。2,000 頁、親字 1 万 1 千、語彙 10 万を越え、当時唯一の本格的な中日辞典であったので敢えて中日大辞典と名づけました。

発行・発売は株式会社大安、のち株式会社燎原、印刷は図書印刷株式会社であります。

辞典の出版を記念し、中国人民対外友好協会へ 2,000 冊を寄贈、中国人民の好意を謝しました。この年の中日文化賞を受賞し、1982 年の 8 刷まで好評裡に 7 万冊を印刷、国外では中国をはじめ香港・東南アジアなどから多数、ヨーロッパ・アメリカなどからも需要があり、台湾を含む中国では多数が内部発行されているようであります。

II - 1. 1973 (S.48) 年 6 月、辞典関係者が訪中し、南開大学、北京大学、復旦大学で開催された辞典座談会に参加し有益な教示を得ました。帰国後、かねて時代の変化に応ずる辞典作りを考えていた鈴木先生は増訂版の編纂を提唱、1975 (S.50) 年 4 月、大学当局は正式に辞典改訂を決定、編集主任 鈴木柾郎、編集委員長 今泉潤太郎、編集委員 陶山信男・荒川清秀・白井啓介・黄異（1986 年 2 月現在）らにより改訂がはじまりました。

- 2. 改訂に際しては、基本的性格、編集原則は変えず、誤りを正し不備を補うこと、できるだけ新語彙を加えることに重点をおきました。以来、本学に赴任された北京語言学院の先生方、また北京農業機械化学院の黄志明先生ら中国人スタッフの協力を得て、11 年を費やし、本年完成した増訂版は旧版にくらべ 700 頁増の 2,700 頁、親字同じく 2,000 字増の 13,000 字、語彙 3 万増の 14 万語となりました。発行は大館書店、印刷は凸版印刷株式会社、17,000 冊を印刷いたしました。

- 3. この間、1981 (S.56) 年 1 月、本辞典生みの親ともいう鈴木先生が逝去されました。1984 年 9 月には 2 年間にわたる編纂に協力された黄志明先生が中国に帰られ間もなく逝去されました。中日大辞典増訂版が今日ここで盛大に出版記念会を祝賀されるはこびとなったのも、お二人はじめ日中両国の人々の協力の賜物であります。ま

8-1 b(1)

た本学で中国語を学ぶ学生諸君が多数、校正などに積極的に援助をしてくれたことを申し添えておきます。

甚だ簡単ではありますが、以上を以って編纂経過といたします。

[注] 1986年6月今泉編集委員長の編纂経過報告骨子。

中国文献の勉強

稲垣 勲

現在中国が出している学術雑誌約 70 種のうち薬学関係は化学学報, 化学通報, 中国科学*, 中華医学雑誌* (中草药の臨床報告がよく出る), 植物学報などである。永らく中絶していた薬学学報も今年から出るようである。

* には英文誌もあるが、中文誌は漢字ばかりでこれが誠に読みにくい。化合物名, 術語, その他が日本のそれと非常に違い, また簡体字が次々と増加しつつあるからである。日本人は欧米の文献と情報さえ調べていけば学術の進歩には遅れないだろうが、中国の医薬学には 2000 年以上の独特の歴史がある。現在日本の薬学の水準は非常に高いが、中国には我々がもっと学ばねばならぬものが数多くあるのではないか？ 隣国の文献が満足に読めないというのは我々の大きな手落ちではないのか？

単行本で今出ている無機, 有機などの化学書はまだ日本の高校教科書程度だが、生薬書は本場だけに優れた書籍がいくつかある。少し古いが約材学 1 巻とくに中薬志 4 巻は名著である。中国薬学大辞典上下は充実しているが古過ぎて誤りが多い。新しく中草药学 3 巻と四川中薬志 10 巻が出る。各地方の図譜入中草药～薬物志は診療所で赤脚医生用らしいが草薬草百種を載せている。日本でいう漢方薬は数百種で桁はずれに多い。近來の傑作は江蘇新医学院編中薬大辞典上下と付篇の 3 巻で、本文 2754 頁, 5767 品目 (同一基原でも用部により分載), 各品目に異名, 基原, 性状, 成分, 薬理, 用途, 処方, 古今論説適用, 文献等が詳記され正に 20 世紀の新本草綱目といってよい (香港版が日本でも買える)。林啓寿編中草药成分化学は 876 頁, 中国特有植物の成分の記述もあり, NMR (核磁共振), MS (質譜), 生合成 (正源途径) も書いてある。陳新謙編新編薬物学も洋薬と中草药を豊富に収載した好著である。なお中国薬典 (薬局方) の新版は一応全文が完了して現在各省で検討中だそうだから今年中に出版される可能性がある。

中国の化学辞典 (どれも英漢辞典) には薛徳炯訳編英漢化学辞典 (I), 化学化工名詞彙編 (II), 海氏有機化合物辞典 4 巻 (III) がいる。I は語数 8 万, 解説はなく無味乾燥だが付録の無機有機化学物質系統命名原則が好い。これは IUPAC 命名規約の漢訳ではなく中国式命名法の草案で、漢字の化学名を読解するための鍵である。III は HEILBRON の全訳で上海薬物研究所の先生は推奨していたが、我々にとって重宝な辞典とはいえない。

日本の中日辞典はここ数年間に何種か出たが、これだけでは専門書は読みこなせない。愛知大学編中日大辞典は語数 13 万という大著で薬品, 植物, 生薬, それらの異名まで多数収載され群を抜いているが、誠に惜しいことに専門語に誤りが多い (目下改訂作業進行中)。最近山田編日中化学用語辞典 (IV) と田村・白鳥編中英日化学用語辞典 (V)

が出て、お蔭で中国式化学名が大部解りやすくなった。ただしⅣは中国名の発音が分からないと引けないのが甚だ不便である。Ⅴは字画、発音、日英から引けて好著だが、両書とも薬学用には少し物足りない。

中国の薬学文献を読むための主冊か詞典があってもよい筈だと前から考えていた。6年前大学を定年退職したのを機会にそんなものを作ってみようかと独りひそかに心を決めて、ずっと調査に専念してきた。たまたま前記中日大辞典の改訂に少しばかり参与させていただき、これが実にいい勉強になったが、化学と生薬だけが薬学ではない。薬剤、薬理、生物、中医学基礎（これを知らないと中草药は分らない）等、等、いろんな領域がある。広汎な薬学用語を網羅しようとしたらすぐ膨大なものになるだろうし、到底独りでやれる仕事ではない。うんざりせざるを得ない。しかし日本の薬学研究者はみんな英独（中には佛、露、中国）の文献を大辞典など使わずに楽に読んでいる。専門分野の外国文献を読むだけなら必ずしも語学の達人や生字引になるを要しない。こう考えると一応の詞典ぐらいなら何とかできそうな気もする。帯にもタスキにもならぬようなものを作ろうとは思わない。未完成は覚悟の上だから、気楽に慢慢地にこつこつとカードの作成を続けている。ただ残念ながら既に 69 歳、もう先が見えている。もし恍惚化重篤の気配が出たら、その時はどなたか同じような仕事を考えておられる篤志家かグループに、書きなぐった？万枚のカードと少しばかりの書齋とともに、あっさりバトンをお渡ししよう。それともこんな弱気は出さないで、愚公山を移すという中国の故事もあることだから、少々欲ばってあと 15 年くらいマイウエイを歩き続けることにしましょうか？

注 日本薬学会 ファルマシア vol. 15, No. 4, 1979

书讯二则

(一) 爱知大学编《中日大辞典》修订工作已告完毕，修订目前在排版校对中，预计明年4月出版。自铃木扨郎教授逝世以后，主持修订工作的是今泉润太郎教授。

(二) 早稻田大学森田良行教授著深受广大读者欢迎的《基础日语》(角川小辞典丛书) 1, 2, 3册、已出齐，它的合订本不久即可问世。

注 <日语学习>总14号 1985年4月

今春で改訂作業終わる 中日大辞典

五十九年早々に発刊

愛大 客観的事実を基調に

愛知大学（久曾神昇学長）の中日大辞典編纂（へんさん）処（編集委員長・今泉潤太郎教授）は、同辞典の第一回脱稿以来、十五年間にわたって進めてきた改訂作業をことし三月いっぱいまで終え、終訂版の印刷に入ることを決めた。終訂版は、第八版で二万部を印刷、五十九年早々に発刊にこぎつけた意向である。

十四万語を収録

同辞典は昭和二十九年末、日中友好協会を通じて中国人民保衛世界和平委員会から日本人に寄贈される形で、中国にあった上海の東亜同文書院大学の中日辞典編纂室が集めた中日辞典の単語カード十四万枚が返還され、この単語カードを基礎に、十三年間、及ぶ困難な作業をへて昭和四十三年に初版が刊行された。

同辞典の刊行は、中国で文化大革命が始まったばかりのころで、中国社会の価値観が大きく揺れ動いていた。その語、文化大革命は反革命のラク印を押されて終わりを告げ、四人組事件をへて、いま、四つの近代化、路線を歩む中国社会は、あらゆる面で一八〇度の方向転換をしている。

こうした中国社会の大きな変革の嵐は、言葉の解釈にも変革をもたらしたが、同辞典は、編集の基本方針として「事実を客観的にとらえる」という姿勢を貫いてきたために、収録した一三万余語にわたって基本的な変更はなく、初版刊行以来、十四年余をへた今日でも中国はもちろん、各国の中国関係の研究者たちから高い評価を得ている。

今泉教授は、昭和四十八年、文化大革命の最中に辞典編集の中心となっていた故鈴木攄郎名誉教授を団長に、学術訪中団を組織して辞典改訂のため訪中した。このとき、訪問先で辞典に対する評価を聞くと同時に、中国社会事情から、革命の意義を解説して「いない」との批判も受けた。しかし、鈴木団長は、批判は素直に受けとめるが、客観的事実をとらえる基本方針を変えようつもりはない」と断言したことをいまでも覚えていて、十数年をへた今日、その姿勢に誤りのなかったことが証明されたようだと話している。同辞典の改訂作業は、一昨年一月に他界した故鈴木名誉教授を中心に今泉教授、荒川清秀助教授、黄異客員教授、白井敬介講師、陶山信男助教授、高臨渡教授ら同大学中国語、中国文学関係教授陣をはじめとするスタッフのほか、交換教授の中国北京語言学院劉青然教授など、多数の長年にわたる膨大な作業の集大成として、ことし三月をメドに最終脱稿を行い、印刷を開始することになった。

この改訂作業の結果、同辞典は単語数で約二〇%増の十四万語をこえ、ページ数も現在の本文二千^六から二千四百余^六になるものとみられている。

今泉教授は「単語は、主に中華民国以降の近代中国から現代中国の言葉を中心に、明代の話し言葉である『白話小説』の類からも単語を拾っているほか古典からも単語を収録しており、伝統的の中国を知るうえで役立っはず。単語の解釈、用例は文化大革命を柱に中国社会の中で大きな変革があったものの、現在は、これももとに戻った感じだ。ただ、文化大革命のときに始まった文字改革の簡体字の扱いがどうなるかだがそれも（以下14字不明）うだから印刷開始に間に合うと思う」と話している。

中国語辞典は、昨年十二月に大東文化大学の香坂順一教授が「現代中日辞典」（光生館）を発売しており、この辞典が約十三万語を収録して関係方面に話題をまいているが、内容的には中日大辞典にいま一歩といったところのようだ。

ともあれ、同辞典は初版発行以来、中国国内をはじめ、ヨーロッパやアメリカ、オーストラリアなど中国関係研究機関から高い評価を得ており、同大学からの研究留学生らが各国で「あの中日大辞典を発行した大学ですね」と聞かれるほど関心を集めているだけに、終訂版発刊への各方面の期待は大きい。

〔注〕東海日日新聞 一九八二年一月所載。

一段とビツグに

秋に「増改訂版」発行

愛知大学（浜田稔学長）は今年十一月十五日の創立記念日にあわせて、中日大辞典の増改訂版を発行する準備を進めている。同辞典は創立二十周年記念事業として四十三年二月に初版を発行して以来、八版を重ね延べ十万余冊が、国内はもとより、中国をはじめ世界各国で愛用されている。しかし、中国は文化大革命以後、近代化を目ざして大きく変化し、同辞典の内容に全面的な改訂が望まれていた。

中日大辞典の増改訂版は、収録している十三万七千余語のうち約三割を新しい用語に変えるほか、経済関係を中心に約二万語を追加、全体で十五万語を収録、現在の二千六〇〇から二千五百〇〇余とするなど世界で最も大きな語学辞典のひとつになる。

中国は、一九七六年の文化大革命以後、内政も落ちつき経済発展を目ざした四つの近代化を推進、用語も文革中と比べると大幅に変化している。出版物も自然科学をはじめ政治、経済など全般にわたって数多く出まわるようになった。

中日大辞典は、文化大革命の影響で改訂を重ねたこともあり、現在の中国の国語事情に合わない用語も目立っていたため、五十年（一九七五年）に「中日大辞典編纂所」を再開、十年をついやして全面改訂に取り組んできた。

改訂作業は、昨年三月に脱稿、最終の校正に入っていたもので、今年夏までには印刷に入り、十一月には発行の予定。

同辞典の改訂作業にあたっている今泉潤太郎教授は「一口に十五万語というが、気の遠くなる仕事。私の視力もかなり落ちてしまい、虫メガネを使わなければよく見えなくなった。だから、今度初めて“拡大版”もつくりたいと考えている」と話している。

中日大辞典は戦前、同大学の前身である中国上海の東亜同文書院大学時代に編集が計画され、故鈴木沢郎名誉教授らを中心に十数年をかけて約十四万枚にのぼる単語カードを作成した。しかし、敗戦でこの単語カードは中国側に没収され、中日大辞典の編集計画は挫折した。

戦後、中国側の理解も得られ、二十八年夏に返還されたのを機会に、鈴木名誉教授を中心に今泉教授らも加わって三十年四月から、編集が行われた。

完成までに十三年の歳月をついやし、四十三年二月に初版を発行、世界の中国研究者の賞賛を受けた。

中国で高い評価を受ける

同辞典は、中国国内での評価は高く、同大学に研修生として来日している大連外国語大学の日本語講師の阮守勤さんも「中国の大学では中日大辞典は、多くの人に使われて

8-1 c (4)

います。この辞典と愛知大学を知らない人は「いません」と話しており、今度の増改訂版に熱い期待を寄せている。

〔注〕東海日日新聞 一九八五年一月一日所載。

愛知大学が新たに3校と協定 学術交流の成果吸収へ正念場

第二次大戦後、上海の東亜同文書院大学などを母体に誕生した愛知県豊橋市の愛知大学（浜田稔校長）は、中国との結びつきの強さで知られているが、従来北京語言学院、南開大学（天津）の二校だった中国の学術・教育交流協定校を今年四月から五校に増やすことになった。中国側の申し込みに応じたもので、これにより交流がますます盛んになることが期待できる。ただ、これまで「平等互惠」といながら、どちらかといえば「中国側にプラスが大きい交流」の色合いが濃かったといわれるだけに、愛大側が交流の成果をどう吸収していくか、正念場はむしろこれからだ。

「とにかく中国の方がずつと熱心で。我々は受け身でした。日本滞在中にできるだけたくさんものを利用し、吸収しようという意欲は大変なものです」——中国との交流に携わってきた今泉潤太郎教養部教授はこう言う。

二校と協定を結んだ昭和十五年以来、これまでに同大学が中国から受け入れた交換教員や研修生は二十二人。いずれも四、五十歳代の日本語や日本文学、日本史などの中堅研究者で、一二年間滞日、ナマの話し言葉に接して「たみ水練」だった日本語の軌道修正を図るとともに、それぞれが自分の関心によって「江戸期の日本文学」「日本現代史」などのテーマで研究を進める。もちろん、愛大の学生に対して中国語を教えるケースもあるが、日本から何を吸収するかに留学の重点があるのは間違いない。

一方、愛大から中国へ派遣される教員は自分の研究よりも、むしろ教育が中心だそうで、六十年代に南開大学へ派遣する四人も、一カ月ずつリレー方式で上古から現代までの日本文学史を集中講義する計画だという。日本人学生のための中国語の教科書はまだ編纂の計画段階だが、中国人学生のための日本語教科書は愛大の教員が中国滞在中に書き上げるなど、教材面でも日本から中国へのサービスが先行している。

だから、今泉教授も「派遣教員に比べて受け入れる人数はずつと多いし、研究内容のやりとりでいえば我々の“出超”です」といささかアンバランスな交流ぶりを認める。四月から新たに北京第二外国語学院、上海外国語学院、復旦大学（上海）の三校が学術・教養交流協定校になり、人や図書などの行き来がより盛んになれば、費用もその分余計にかかるといえる。一私大が損得勘定も考えながらどこまで交流を拡大できるか、予算にも限りがあるだけに難しい。

愛知大学は四十三年に中日大辞典を刊行、現在その改訂作業を急いでいる。特に自然科学の分野ではわが国に中国語に詳しい学者が少ないため、中国人研究者の協力は不可欠だ。中国人教師による唐詩の集、講義なども魅力がある。私大ベースの国際交流のヒナ型の一つとして、愛知大学の今後は注目される。

〔注〕日経新聞 一九八五年二月九日所載。

完成近づく増改訂版

六年がかりの作業

来年四月に刊行予定

愛知大学（浜田稔学長）の中日大辞典の増改訂版は五十五年の改訂作業着手以来、滿六年がかりの作業を終えて来年四月刊行の運びとなった。増改訂された中日大辞典は、従来の同辞典と同じ大きさのA5判だが、収録単語は一万語以上多い十四万余語、本文二六二五六に及ぶ国内では最大の中日辞典となる。

国内で最大
十四万余語を収録

同辞典の増改訂作業は、同大学中日辞典編纂（さん）処（編集委員長・今泉潤太郎教授）で続けられていたもので最終の第五校正を今月中に完了し二月から凸版印刷（東京）で印刷に入る。中国の文化大革命、四人組の時代が終わり四つの近代化が始まった一九七八年（昭和五十三年）以降、中国国内でも本格的に出版物が出来るようになり、中国辞典も数多く出版され、同辞典の増改訂にせまられていたことから、一九八〇年（五十五年）四月に同編纂処が正式に発足、鈴木沢郎名誉教授を中心に、改訂作業がスタートした。

当初、四年前にすべての増改訂作業を終え、一九八四年（五十九年）春には刊行の予定だったが、五十七年一月に鈴木名誉教授が他界したこともあって刊行が遅れていた。

しかし、同大学の学術・教育交流の協定校の中国北京語言學院の交換教員、研修生はじめ中国人スタッフの協力と後を引き継いだ今泉教授らの努力で、初版以来十八年ぶりに内容を一新した同辞典が刊行された。

同辞典は、愛大の前身で中国の上海にあつた東亜同文書院時代に鈴木名誉教授（当時同文書院教授）らが「中国語の本格的な辞典を」と単語カードの収集をはじめたのがはじまり。当時、中国語の「国語辞典」はなく、中国語を学ぶ各国の人たちを悩ませていた。本格的な中国語辞典の出現は一九三六年（昭和十一年）で、日本でも一九三五年（同十年）に中国語辞典が出された。しかし、内容的には未完成の部分が多かったことから、常時十数人の日中両国の中国語教師を擁していた同書院で中日辞典の編集を手がけることになった。このとき、集められた単語カードは十四万枚にのぼった。語数が七〇八万語だったというが、終戦のさい、同カードは中国政府に接收され、中日辞典の編集は中座した。

8-1 c (6)

戦後、一九五三年（同二十七年）に当時の本間喜一学長（元同文書院大学長）から、中国側に同カードの返還願いを出し、翌年九月日中友好協会を通して同大学にゆだねられた。

この単語カードを基に十三年間に及ぶ困難な作業を経て四十三年に中日辞典初版が刊行された。しかし、当時は中国の文化大革命がはじまったばかりで激しい文革批判の中、同辞典も一部内容の手直しを余儀なくされた。四十八年、愛大は辞典改訂を目的に鈴木教授を団長とする学術訪中団を派遣、訪問先で辞典に対する率直な評価を聞くとともに「革命の意義を解説していない」とする批判に、鈴木団長は「批判は率直に受けるが、客観的事実をとらえる編集の基本方針を変えるつもりはない」と断言したという。このことが今回の増改訂版の一新を容易にした。

今泉教授は「鈴木先生は、辞書は十年ぐらいたつとボケてくる。新しい血を入れなければいけない」と常々話していた。初版以来、小さな改訂を続けたが満足のいく結果が出なかった。このため、鈴木先生は五十三年退職後、辞典の改訂作業に余生をかけられた。その遺志を継いでようやく完成に近づいた」という。

増改訂版は、これまでの辞典の、主に中華民国以降の近代中国から現代中国までの言葉を中心に、宋、明時代の話し言葉である「白話小説」の類からも単語を拾っている。その他、古典からも単語を収録しており、伝統的な中国を知ることができる。四つの近代化以降、中国出版物の増加で中国辞典は数多く出されているが、今回の増改訂では、基本的な単語の一部変更だけにとどまっている。

このため、今泉教授は「中国の辞書づくりの基本に関する論文も多い。単語の発音、字画についてもまだ不確定の部分がある。これらの点を解決するには増改訂では無理。新しい発想で全く初めから辞書をつくり変えなければならないので、今回の増改訂で最後」と話している。

〔注〕東海日日新聞 一九八五年二月一六日所載。

「中日大辞典」の増改訂版 4月発刊

わが国初の本格的な中国語—日本語の辞典としてさる四十二年刊行された「中日大辞典」の増改訂作業が豊橋市町畑町の愛知大学内「中日大辞典編さん処」で進められている。現在、最後の校正作業に入り、四月下旬ごろには、東京の「大修館」から出版される。収録語も大幅に増え、国内で最大の日中辞典となる。

同大の母体で、戦前、中国の上海にあった東亜同文書院大学が、中国語の辞典を発行しようとして、昭和九年から十九年まで、カードの作成を進めていたが、カードは終戦で中国側に没収された。

敗戦の混乱も落ち着いた二十八年、東亜同文書院大学最後の学長で、当時の愛大学長だった本間喜一・名誉学長の発案で再び、日中辞典を発行する機運が盛り上がった。このため、国交のなかつた中国にカードの返還を求めたが、断られた。ところが二年後の三十年になって、「中国人民から日本国民へのプレゼント」として、同大に返還された。

しかし、カードが返還された当時、中国語は戦前と大きく変化していた。このため、故鈴木辰郎教授が中心となって、カードを基に十二年がかりで編さん、四十二年によく出版にこぎつけた。本格的な中国語の辞典がなかつた時だけに、画期的な辞典として、注目を浴び、これまでに約七万部が出ている。

その後の中国は、文化大革命などで、さらに文字の略字や内容が違ってきたため、さる五十五年から鈴木教授が中心に増改訂作業を始めた。鈴木教授は志半ばの翌五十六年に亡くなったが、教え子だった今泉潤太郎教授（五三）（豊橋市植田町）が、恩師の遺志を受け継いで作業を進めてきた。

〔注〕 中部讀賣新聞 一九八六年一月三一日

中国人民の感情を尊重して

六年がかかりで進められてきた愛知大学の『中日大辞典』増改訂作業が、同大豊橋校舎にある中日大辞典編纂(さん) 処で終盤を迎えている。

「もうすぐ、もうすぐと言って来ましたが、今度こそ本当。四月中旬には出版の見通しです」と中心となって作業に携わっている今泉潤太郎教授(五三)はホッとした顔。

『中日大辞典』は、そもそも愛知大学が戦前中国にあった(前身は東亜同文書院大学等) ころからの“研究遺産”をもとに、昭和四十二年、初版が刊行された。増訂版は、当時の編集委員長だった故鈴木沢郎氏の遺志という。

「翌年、中国・北京へ行って学術的な座談会を行った。その時、非常に歓迎されたけれども、中国人民の感情を尊重してほしい」という意見がでて、手直しの必要を痛感したんですね」

主に歴史観。賊と日本でとらえられたものが、革命だったりする。翻訳は字面の問題だけではない以上、変わりゆく中国への対応は容易でない。この間、文化大革命もあった。

「歴史的事実は曲げられない。しかし、人民感情に違和感ないように……。ミスの子エックはあるし、まあ、一日に一語のペースでした」

増やした語は二割近く、ページ数は一九五〇から二五七〇に。

着手したところは鈴木沢郎氏も健在で、大体のところは支持されていたものの、中国人スタッフの力を借り、学生アルバイトの協力を得ての地道な作業。中国語が目につけばつい「あれ、辞書にどう載ってたかな」と思うクセがでてしまったとか。

愛知大学版の中日辞典は古典を含む点が貴重。北京で、安価な海賊版が出回るのが悩みだそうだ。

〔注〕中日新聞 一九八六年三月五日夕刊所載。

10年かけ増訂版が完成

愛大の今泉教授らが心血

愛知大学（豊橋市町畑町一の一・浜田稔学長）が先に発刊した「中日大辞典」の全面的に改訂した「増訂版」をこのほど刊行した。

同大が中国語についての一般語彙（じ）はもとより、政経時事から科学技術用語まで、十三万語の熟語を網羅した「中日大辞典」が初めて世に出たのは四十三年二月。構想から刊行まで十三年間を要した大辞典は高い評価を受けた。改訂版発刊準備から印刷まで十年を費やし完成、収録親字数一万三千、熟語数は十四万語に達し、文字通りの中国語における全分野の総合辞典となる。

五月三十一日、名古屋都ホテルで、出版記念会および、中国国家教育委員会への贈呈式が行われる。

中日大辞典は、二十九年末日中友好協会を通じ、日本に寄贈された旧東亜同文書院大文学作製の中国語カード十四万枚が愛知大学に付託。これを基礎に故内山完造日中友好協会理事長、故鈴木沢郎教授、今泉潤太郎教授（五三）が中日大辞典編纂（さん）委員として作製にあたり、四十三年に刊行。当時、中国語に関する辞典としては世界の学会に誇りうる金字塔として高く評価。初版一万部から、七万部のベストセラーとなった。

増訂版の出版は、故鈴木教授、今泉教授、大学専任教員中国人ジャヤナリスト黄異さん、中国語教員を編さん委員として五十年から業務を再開。五十七年鈴木教授病死以降は、今泉教授がほとんどの作業を手がけ、十五日完成となったもの。

総ページ数二千八百。用字はすべて正確な簡体字、一般語は、科学技術用語、方言、俗語からことわざ、古語まで十四万語を網羅した増訂版は、文字通り今泉教授ら委員の血の汗の結晶から生まれた。

五月開かれる出版記念会および贈呈式、祝賀会では、文部大臣祝辞、

〔注〕東愛知新聞 一九八六年四月所載。

18年の歳月かけ 中日大辞典増改訂版が完成

愛知大学（浜田稔学長）の中日大辞典増改訂版は六年がかりの増改訂作業を終えてようやく完成し、今月下旬から全国の書店で一斉に発売される。同辞典は昭和二十九年に中国から、同大学の前身の東亜同文書院大学が集めた中国語の単語カード十四万枚が返還されたことから故鈴木枳郎名誉教授を中心に編集が進められ、四十三年二月に初版本を出した。以来、十八年の歳月をかけて最終版ともいえる増改訂版を完成した。

14万語余を収録

今月下旬に全国発売

完成した同辞典の増改訂版は、初版と同じ大きさのA5版だが、収録した単語は約二万語多い十四万語余で中日辞典としては最大。本文二千五百二十二頁、さく引百九十六頁で、従来の同辞典より本文が訳六百頁も増えている。

十四万語余に及ぶ収録単語は、中国の四つの近代化以後の最新語から、政経時事、科学技術用語や方言、諺語、古語まで幅広く、字体も簡体字のほか親文字の見出しには反対（旧字体）、異体字を併記して使いやすい。

中日大辞典はこれまでに七刷まで出され、中国はもとより世界各国の中国研究者の高い評価を得ており、延べ七万部が印刷された。増改訂版は十五年から本格的な作業に着手、故鈴木名誉教授の遺志を継いで今泉潤太郎教授を中心に十年の歳月をかけて今年一月に完了、印刷に入っていた。

今泉教授は「今は増改訂版の新しい中日大辞典を手にうれしい気持ちでいっぱい。反響も大きく、当初予定より五千部多い一万七千冊が刷られたが、評価は従来の辞典と新しい増改訂版を比較して使ってもらい“充実した”との反応が得られなければならないといえない」と話しており、喜び半分、不安半分といったところだ。

同辞典の増改訂版は一万七千部の印刷で、二十四日から全国の書店に発送される。このうち千部は五月三十一日に名古屋の都ホテルで開かれる出版記念会の席上、中国国家教育委員会へ寄贈される。

〔注〕中日新聞 一九八六年四月所載。

愛大の中日大辞典

十数年の労苦、増訂版

中国へ千冊寄贈

日本初の本格的な中国語辞典として日中文化交流にも役立った愛知大学の「中日大辞典」の増訂版が出版された。同辞典が出版されて約二十年。同大中日大辞典編纂（さん）処¹編纂委員長、今泉潤太郎教授（五三）は、著しい変化をとげる中国社会に対応し、十数年余にわたって増補改訂作業を進めていたもので、コツコツとつづけられた地道な作業の中、一人、二人と他界した老教授も。数多くの人たちの情熱がこもった増訂版に、今泉教授は「再度、日中文化交流に役立ってもらえれば」と話す。二十四日に発売。来月末には千冊を中国・国家教育委員会へ寄贈する。

同大の前身、東亜同文書院（中国・上海）時代からの教授らが中心となり、約十三年の歳月をかけて編集した「中日大辞典」は、昭和四十三年に出版。その豊富な内容は内外から高い評価を得るとともに、日中国交正常化を前に、両国の友好関係にも貢献した。これまでに計七万冊売れている。

増補改訂が進められたきっかけは、中心人物である鈴木沢郎教授²五十七年に病死³をはじめ編集スタッフが訪中し、当地の大学などで専門家と意見を交わしたこと。当時、中国を変容させた文化大革命のさ中。教授たちは激しい社会の変化を肌で感じ、それに対応した追加訂正の必要性を実感したという。

五十年、正式に編纂処を再設置。すでに退職している鈴木教授を編集主任に、今泉教授、中国から来た黄異（こう・い）教授ら五人で改訂編集委員会を組み、本格的に取り組み始めた。中国からの訪問学者や研修教員の激励、学生らの手助けもあって、最新の資料を収集、作業は連日連夜、コツコツと進められた。

編纂処（室）は同大本館の一面にある明治時代からの建物。旧軍隊に使用されたせいか天井は高く、照明、暖房などが行き届かない欠点がある。目が悪くなるのは日常茶飯事。高齢教授にとっては厳しい環境だった。この間鈴木教授は他界。ほかにも黄教授の兄で、二年間協力した北京農場機械化学院の黄志明教授らが逝去している。

同大文学部中国文学科を卒業した時から約三十年、一貫して取り組んできた今泉教授は「辞書をつくと目が不自由になったり、人が死ぬということは本当にあるんですよ。何しろ五年、十年を単位とする仕事だから。でも、日中文化交流に役立つなど『いい仕事だなあ』と思うからこそ続けられた」と振り返る。

「中日大辞典・増訂版」（大修館・六千八百円）は二千八百ページに熟語約十四万語を網羅。従来のものには、やや不足していた動物・植物・医学など理工系の言葉、さらにコンピュータなど新しい技術関係も記述し、俗語も豊富に盛り込んだ。

8-1 c (11)

今泉教授は「いまも中国の変化はめざましい。これからは科学的データに基づく辞書づくりが必要でしょう。でも、よほど気力と体が充実してなければ、もうちょっと……」と話している。

〔注〕毎日新聞 一九八六年四月二五日所載。

師弟二代の執念が実る

わが国初の本格的中国語辞典として、愛知大学（豊橋市・浜田稔学長）から四十三年に出版された「中日大辞典」の増訂版が発行され、三十一年午後、名古屋市中村区の都ホテルで、出版記念会と中国国歌教育委員会への贈呈式が行われる。旧版の出版から十八年。日々、時代の流れに後れをとる辞典に、「みじめな姿で世間をふらつくわが子のけじめ」をつけようとする言語学者の執念が実った。

増補改訂作業のため、同大学に中日大辞典編纂（さん）処が設けられたのは五十年四月。旧版の編纂委員長で文学部の故・鈴木沢郎教授が編集主任、鈴木教授の教え子で教養部の今泉潤太郎教授（五三）Ⅱ中国語学専攻Ⅱが編集委員長として始まった。編纂処といっても、木造の同大学本館の片隅にあるストーブもない部屋。鈴木教授と今泉教授の二人は旧辞典をばらし、改める個所に書き込みができるよう、一ページずつ、わら半紙に張りつける作業から手をつけた。

時代遅れになるのは辞典の宿命で、鈴木教授は旧版を出した直後から、改訂版の出版を考えていたらしい。作業は日夜続けられ、北京の新聞社「大公報」の元編集委員で、五十五年中国語教員として同大学に赴任した黄興さん（六六）が用語解説に助言するなど、編集者は最も多い時で六人を数えた。彼らが集めた用語で、旧版を張りつけたわら半紙は朱直して真っ赤になった。

旧版の準備から含めて約三十年間、「中日大辞典」にかかわった今泉教授は、幼いころ、下宿屋だった実家で、上海から引き揚げて愛大に通う元・東亜同文書院の学生が話す中国語に興味を持ち、愛大に進んで鈴木教授に出会った。

その鈴木教授も「辞典を一つ作ると人ひとり、命を落とす」と言われているかのように、五十六年一月、改訂版の完成を待たずに八十二歳で亡くなった。死の間際、今泉教授が病室を見舞った時、鈴木教授の妻しづ江さん（七九）が「辞典は今泉さんが全部やってくれるそうですよ」と語りかけると「うん」と深くうなずいた。「あれは満足感だったんですよ。自分の生んだ子がふらふらとさまよっているのに、きちんとした形でケリをつけたという。それが今、自分で仕事を終えて分かりました」と今泉教授。

大修館書店から発行された増訂版はB6判、二千七百五十六頁。不足していた動、植物の名前や、日本でもなじみになった「万戸戸」、科学技術の進歩で「個人電脳（パソコン）」「語音電脳（ワープロ）」の新語も加えられ、旧版より三万語多い約十四万語が収録されている。

8-1 c (12)

三十一日の会合には、「愛大で中国語を学んだ会」の約百人がお祝いに駆けつけるほか、駐日中国大使館参事官の陳彬（チン・ピン）氏ら中国側関係者も出席、一千部が贈られる。

〔注〕朝日新聞 一九八六年四月二八日所載。

18年ぶり増訂版発刊の中日大辞典 出版記念会

愛知大学（本部・豊橋市町畑町、浜田稔学長）は十八年ぶりに中日大辞典増訂版を発刊、三十一日、名古屋市内のホテルで開く出版記念会の席上、中国の教育委員会へ贈呈される。

中日大辞典は、さる四十三年に出版、全国の中国語学習者の高い評価を受け、計七万部印刷された。しかし、この間、中国の発展は急で、「時代にふさわしい辞典を」の要望が大学内外からあり、五十年から同辞典編集委員会（編集委員長・今泉潤太郎同大教授）を充足、増訂版の編集を進めてきた。

増訂版はB6判、二千七百六十五六。六百六増え、語いは入れ替えも含め二万語多い十四万語が収録されている。語音電腦（ワープロ）や生物工芸学（バイオテクノロジー）愛姿病（エイズ）などが増訂版で初めて登場した。

今泉編集委員長は「多くの人の協力で、『愛大の中日大辞典』の名に恥じぬ増訂版ができた。日中友好に少しでも役立てばと思う」と話している。定価六千八百円。一万五千部印刷、書店で発売中。

〔注〕 中日新聞 一九八六年五月十一日所載。

8-1 c (14)

愛知大が増訂版

14 万語収録の中日大辞典

“百科事典”としても活用

愛知大学（本部・豊橋町畑町、浜田稔学長）はこのほど、中日大辞典の増訂版を発刊した。本格的な中国辞典として四十三年に出版された旧版以来十八年ぶりの集大成で、三十一日には名古屋市中村区の都ホテルで出版記念会と、中国国家教育委員会への増訂版一千部の贈呈式も行われる。

増訂版はB6版大で、二千七百六十五^頁、一万七千部（一部定価六千八百円）を印刷する。

七万部刊行された旧版と比べて、増訂版は三万語多い十四万語が収録されているほか、中国の総合辞典としても役立つよう百科項目はじめスラング、方言などを多用して編さんしたことなどが特色。収録語類の中では科学技術分野や動植物関係、医学部門を主体に新登場のものも豊富で、「電脳」（コンピュータ）「個人電脳」（パソコン）「愛姿病」（エイズ）「録像機」（ビデオ）「健美舞」（エアロビクス）などがある。中国語学専攻の今泉潤太郎教授（五三）は「日中友好合作、学术交流の所産で増訂版を完成させることができた。中日大辞典が今後の日中交流拡大に役立てば」と話している。

三十一日午後二時から開かれる出版記念会には愛知大の中国語講座を学んだ受講生もお祝いに駆け付ける。また、増訂版の贈呈式では中国側から陳彬駐日中国大使館参事官が出席する。

〔注〕静岡新聞 一九八六年五月三十日所載。

増訂に際して

かねてより、日新月異の中国の進展に応じて、いかに増改訂をすべきかを考えておられた鈴木柾郎先生が、本辞典の改訂を始めたいと内山雅夫氏及び私に相談されたのはいつ頃だったか。1968年2月の中日大辞典刊行を機に郭沫若氏に願ひ出していた辞典関係者訪中希望が1973年6月漸く実現、南開大学・北京大学・復旦大学で中国の専門家と長時間に亘り意見を交わすことができ貴重な経験を得たのだが、これを改訂に活かしたいと思っておられた。結局、鈴木先生は教授を辞し、胃切除の身をおして辞典改訂に専念する決意を固められた。幸い久曾神昇学長（当時）はじめ大学当局の賛同を得、1975年4月、中日大辞典編集処を再び設置、編集主任 鈴木柾郎、編集委員長 今泉潤太郎、編集委員 陰山信男、黄異、荒川清秀、白井啓介の諸氏（1986年1月現在）による中日大辞典改訂編集委員会を発足させた。内山氏は参加されなかったが、この年の8月逝去された。心から御冥福を祈る。

今回の改訂は、あくまで現行版の枠組内での全面的増訂であるため、最近の“漢語詞滙の統計与分析”・“国家標準信息交換用漢字編碼字符集”・“統一漢字部首表”・“起筆統計表”・“漢語拼音正詞法基本規則（試用稿）”・“普通話異讀詞審音表”等の資料や最新の工具書を参照した抜本的改訂は将来に期することとした。改訂も軌道にのった82年1月、鈴木先生が急逝された。青天の霹靂である。先生の発意で始まり、情熱で進められてきた仕事であり、余人を以ては代え難いが、我々が引き継ぎ完成させる他なかった。ただ、本文の大部分に目を通されていたことは不幸中の幸いであった。

増訂版は現行版にもまして日中友好合作・学术交流の所産である。前述の南開大学等に於ける辞典座談会をはじめ、交流の拡大に伴い増えてきた中国訪問学者や中国研修教員から多くの激励や援助を受けた。高臨渡氏・黄異氏の終止変わらぬ真摯な協力に対し謝意を表するとともに、高氏の御冥福を祈る。

北京語言学院劉青然氏・諸在明氏・蔡振生氏、中国人民解放軍外国語学院楊春臣氏らの協力に対し感謝の意を表す。特に、北京農業機械化学院黃志明氏は二年間も編集に協力された後帰国、間もなく病を得て逝去された。ここに御冥福を祈るとともに衷心より謝意を表す。池上貞一氏、井芹貞夫氏、岩尾正利氏、大林洋五氏、木田弥三旺氏、中山欽司氏、浜田国貞氏、森博達氏らの一方ならぬ協力に対し謝意を表す。特に名古屋市立大学薬学部稲垣勲氏の専門面での協力に対し感謝の意を表するとともに御冥福を祈る。この十年間、多数の本学学生の協力を仰いだ。この増訂版もまた学生諸君の協力の賜物である。ここに心からの謝意を表す。また当初より各種の事務を処理された松田文美子氏、1981年印刷段階に入り面倒な問題を解決しつつ校正に精進された加藤寛昭氏、日本語索引・檢字表など最終段階の業務を遂行された影山裕子氏らの協力に対し衷心から感謝の意を表す。

本書の印刷・製本は凸版印刷株式会社に依頼した。同社はその CTS を駆使して本書を完成させた。増訂版の発行はこれを大修館書店にゆだねた。またこれまで中日大辞典発行に尽力された燎原書店に対し感謝の意を表する。

ここに見られる中日大辞典増訂版が世に出るまでには長年月に及ぶ学内外の多数の人達から様々な援助があった。衷心より感謝の意を表する。終りにあらためて謹んで鈴木沢郎先生の御冥福を祈る。

1986年2月1日

増訂版編集委員長 今泉 潤太郎

増訂版の補訂に当って

1985年12月、国家語言文字委員会・国家教育委員会・広播電視部の連名で発表された“關於普通話異読詞審音表的通知”及び1986年10月、用字混乱を是正するため改めて人民日報に発表された簡化字総表の説明（国家語言文字委員会による）には、新たに前者には52字、後者は7字についてそれぞれ重要な決定がなされている。昨年出版した増訂版には時間的にこれら決定を盛り込むことは不可能であった。増訂版は幸い好評裡に迎えられ、いま増刷の必要が生じたので、この際これらを全面的に取り入れるとともに、新たに付録として審音表一覧を加え、更に本文の内容を追補し、表装も一新したので、ここに版を改め本書を増訂第二版とする。

1987年2月1日

〔注〕後段は増訂第2版の序。

昭和 61 年度第 4 回評議会速報

日 時 昭和 61 年 4 月 17 日 (木) 18 時 45 分～21 時 35 分
場 所 本館第 1 会議室
出席者 議長 浜田会長
委員 14 名
幹事 3 名 (特別出席 2 名)
欠席者 委員 3 名
幹事 1 名
欠 員 名古屋校舎学監

議 事

I 審議事項

1. 内部委員の選任について
略
2. 中日大辞典 (改訂版) 刊行に関して
 - ① 5,000 部を追加印刷することにした。
 - ② 贈呈式を次のとおり行う。

日 時 5 月 31 日 (土) 14 時～
場 所 名古屋都ホテル
経 費 概算 100 万円
主 催 愛知大学
後 援 同窓会
3. 将来計画について
次回継続審議。

8-2 b (2)

出版記念会と中国への辞典贈呈式

—名古屋で盛大に—

五月三十一日名古屋都ホテルにおいて、各界著名人、同窓生および愛知県内各大学の中国留学生など約三百人が集って、愛知大学中日大辞典増訂版出版記念会と中国国家教育委員会への中日大辞典贈呈式が盛大に行われた。

式典は、浜田学長の挨拶にはじまり今泉編集委員長の編集経過が紹介され、文部大臣（代読）、愛知県知事（代読）、平岩名古屋市助役（本学二十八年卒）等の祝辞が述べられ、さらに中国の南開大学をはじめ提携校からの祝電が披露された。

続いて、中国国家教育委員会を代理して、駐日中国大使館陳彬教育担当参事官に千冊の目録が浜田学長から贈られた。これにこたえて陳参事官より「中日大辞典は、新しい資料とともに語彙は豊富で解釈も正確であり、中国での評価も極めて高い、これを機にさらに中日両国の友好の輪が広がり、学術文化交流の懸け橋となり、船となって欲しい」と強調され万雷の拍手を浴びた。

ここで式典は終了し、記念講演会に移りNHK解説委員で元北京支局長の小林一夫氏（本学旧法二十五年卒）が「現代中国への視点」と題して講演された。

最後に出版記念祝賀会に入り、この辞典の生みの親ともいうべき故鈴木拓郎教授未亡人しず江殿、さらに当初から辞典編纂に深い理解と情熱を傾けてこられた本学名誉学長本間喜一氏代理令嬢殿岡晟子殿、また地味にコツコツと二年余にわたり編纂に協力された故黄志明北京農業機械化学院教授のご令弟林誠（黄異）教授、中日大辞典編纂委員長今泉潤太郎教授にそれぞれ永年にわたる編集事業を労う花束が贈られた。また名古屋国際センター理事長本山政雄氏をはじめ多くの来賓、同窓生の皆さんから祝辞が述べられ、中国歌舞団「華音」の演奏が花を添えた。

なお、これより先の五月二十一日中国大使館において折から来日中の中国国家教育委員会何東昌副主任に浜田学長より、中日大辞典贈呈の申し入れを行った。何副主任は「有難く頂戴し、国内各関係方面に配布し有効に利用したい」と感謝の意を表明された。

〔注〕愛知大学通信第五十五号 昭和六十一年六月二〇日所載

増訂版刊行について

中日大辞典改訂編集委員長
今泉潤太郎

中日大辞典は、一九六八年二月発行以来、八三年の第八刷まで七万余を印刷、唯一の本格的な中日辞典として、幸い国内外より一定の評価を受けるに至った。

この間、中国においては一九六七年から十年に及ぶ文化大革命を経、各方面での変化著しいものがあり、七三年六月我々辞典編集関係者の訪中時、南開大学、北京大学、復旦大学で行った座談会では、これを特に実感した。七二年の日中国交正常化に伴う両国関係の発展には、近年著しいものがあり、また現代化をめざす現在の中国の情勢に適応する辞典とすべく、一九七五年四月、本学は中日大辞典改訂編集委員会（編集主任鈴木沢郎、編集委員長今泉潤太郎）を発足させた。

今回は、あくまで現行の枠組内での全面的増改訂であるため、辞典の基本的性格や編集原則の変更はなく、誤りを正し至らざるを補うことを旨とした。結果、本文は旧版に比し約六百頁増、付録、索引を含め総頁数二千八百頁、所載見出字（簡化字、繁体字、異体字を含む）は、二千字増え一万三千二百字、見出語は増加分約三万語を含め、十四万語となった。

一九八二年初、鈴木先生が急逝された。先生の発意で始まり、情熱で進められた増改訂であり、余人をもつては替え難いが、辞典本文の大部分に一応の目を通されていたことは不幸中の幸いであった。

中日大辞典について、「それは実に日中両国人の心血がそそがれていた」と言われたのは、初版刊行時、推薦文をよせられた故倉石武四郎氏であったが、今回の増改訂も黄異先生をはじめ多数の中国人教員の協力なしには完成し得なかつたであろう。特に、北京農業機械学院黄志明教授は二年間にわたり編集に協力されたのも帰国、まもなく病歿された。ともに大痛恨事である。

校正などには、本学学生や卒業生諸君の熱心にして真摯な協力があつた。本学中国語関係教職員・学生が一体となつて取り組んだ増改訂事業と言つて過言でない。

今回は旧版刊行の際の如き経費面での苦勞はほとんどなかつた。これは中日大辞典に対する評価がすでに確立しているため財政上の目処がたつてゐること、本間学長以来、歴代の学長をはじめとする当局者の理解と援助があつたことと承知している。

中日大辞典増訂版の発行は全面的に大修館書店にゆだねることとした。同社の「大漢和辞典」はつとに有名であり、中日大辞典についてもこれと同様に力を入れてくれるので、誠に力強い。今後は、各地の読者に対して購入についての不便をかけることはあるまい。

なお、中日大辞典初版の刊行について最初から尽力された燎原書店に対しここに謝意

8-2 b (3)

を表する。

中日大辞典増訂版が従来にも増して各方面で活用され、日中文化交流の発展にいささかなりとも貢献することができれば幸いこれにすぎるものはない。

〔注〕愛知大学通信第五号（昭和六一年六月二〇日） 所載。

8-2 b (4)

陳彬中国大使館教育参事官からの謝辞

尊敬する浜田稔学長。尊敬する御来賓、御在席の皆様。

今日、私は光栄にも、中華人民共和国中日特命全權大使章曙に代わり、この盛大で荘厳な、『中日大辞典』増訂版出版記念会ならびに中国国家教育委員会に対する『中日大辞典』贈呈式に出席できますことを、非常にうれしく思っております。

まず、私は、章曙大使に代わり、『中日大辞典』増訂版の出版を心よりお祝い申し上げます。同時にまた、愛知大学が中国国家教育委員会に『中日大辞典』を一冊贈呈して下さったことに対し、中国駐日大使館と中国国家教育委員長を代表して、心よりお礼申し上げます。

『中日大辞典』の出版は、愛知大学の関係部門の先生方が長期にわたって努力してこられた結果であり、愛知大学が中日友好に力を尽くしてきた結晶でもあります。今回の増訂版は、学術的価値からいうと、内容は豊富、資料は清新、注釈は精確で、中日両国の言語を学習・研究する上でのすぐれた辞書です。辞書の活用範囲と影響力は、その他の専門書よりも、いつそう広く深いものです。同時に、『中日大辞典』の価値と意義は、学術面のみにとどまらず、さらに、中日友好と文化交流の橋であり船であると、私は思います。皆様御承知のように、我々中日両国は、一衣帯水の隣国で、二千年にわたる友好往來の歴史をもっております。

国が異なれば言語も異なりますから、友好往來と文化交流の面においては、言語の道具である辞書を欠くことができません。これはちよと、川や海を渡るのに橋や船（もちろん、現在では飛行機も）にたよらなければならぬのと同じように重要なことでもあります。したがって、次のような比喻を用いることができます。『中日大辞典』は中日友好の橋であり、中日文化交流の船であると。『中日大辞典』の出版は、必ずや中日両国人民の友好と文化交流をよりいっそうおしすすめることでしょう。

最後に、中日両国の文化と教育の交流が日に日に発展し、中日両国人民が世々代々にわたって友好関係を維持していくことを、心よりお祈り申し上げます。

一九八六年五月三十一日

〔注〕愛知大学通信第五号（昭和六一年六月二〇日）所載。

8-2 c (1)

中日大辞典増訂版

中国へ贈呈式

愛大が完成記念し

1000冊

わが国で最も権威のある中国語辞典「中日大辞典」の増訂版が完成、三十一日午後、名古屋市内の都ホテルで、編さんにあたった愛知大学から、完成を記念して中国の国家教育委員会へ贈られる一千冊の贈呈式が行われた。

初版の中日大辞典は、故鈴木枳郎同大教授を編集委員長に、さる三十年から十三年がかりで編さんされ、四十三年に画期的な中国語辞典として出版された。

しかし、中国の文化大革命や文字の略字、内容などが変わってきたことから、五十年から鈴木教授を中心に、増訂作業が進められてきた。

五十六年には、鈴木教授が志半ばで死去、今泉潤太郎教授（五三）が、恩師の意志を継続。同大へ赴任中の北京語言学院の先生ら中国側の協力を得て作業が進められてきた。贈呈式は、同大関係者ら三百人が見守る中で、浜田稔学長から駐日中国大使館の陳彬参事官へ目録が手渡された。

陳参事官は「学術的にも高水準の辞典完成は喜ばしい。これも、両国協力の成果」とお礼の言葉を述べた。

増訂版は、A6判、二千七百六十五^六で、収録単語も約三万語増えて、約十四万語となった。

〔注〕 中部讀賣新聞 一九八六年六月一日所載。

中日大辞典の
増訂版千冊
愛大が中国へ寄贈

愛知大（本部・愛知県豊橋市町畑町、浜田稔学長）が刊行した中日大辞典の増訂版出版記念会が三十一日、名古屋市中村区名駅の名古屋都ホテルで開かれ、席上、中国の国家教育委員会に千冊贈られた。

中日大辞典は、愛大が十三年かけさる四十三年に刊行。その年の中日文化賞を受けた。増訂版は三十年に着手。「誤りを正し不備を補う」を基本方針に十一年がかりで完成させた。旧版に比べて七百^六増の約二千七百^六、語いは三万語増え十四万語収録されている。B6判で定価は六千八百円。

出版記念会には、編集委員長の今泉潤太郎教授ら約三百人が出席。浜田学長が中国の駐日大使代理、陳彬さん（文化教育担当参事官）に千冊の目録を手渡した。

陳さんは、通訳を介し「心から感謝している。中日大辞典は、中国と日本の文化交流の架け橋であり、船である」と礼を述べた。

〔注〕 中日新聞 一九八六年六月一日所載。

8-2 c (3)

文化交流の「かけ橋」に

出版記念会
で
中国側に千冊寄贈

愛知大学（浜田稔学長）の中日大辞典増訂版出版記念会・中国国家教育委員会への贈呈式は三十一日午後二時から、名古屋市中村区の名古屋都ホテルで日中両国の関係者、同大学教職員、卒業生ら約二百五十人が出席して開かれた。席上、同辞典編さんの経過報告、中国・南開大学などからの祝電披露のあと、浜田学長から中国大使館大使代理・陳彬文化教育担当参事官に同辞典千冊を贈る目録が渡された。

同辞典は、同大学の前身で中国上海にあった東亜同文書院大学が戦争中に本格的な中日大辞典の編集を目ざして、日中両国の教授陣が収集した中国語十四万枚の単語カードが、戦後の二十九年に中国から返還されたのをきっかけに編さんが進められた。

同大学では、故鈴木枳郎名誉教授を中心に辞典の編さんを行い、四十三年に初版を刊行した。その後、中国は文化大革命、四人組時代を経て現在四つの近代化路線を推進と大きく変化、五十年までに七刷、約七万冊を発行したが、同年四月に鈴木名誉教授から「中国の変化に対応できる増改訂作業開始を」との意向を受けて増改訂作業が、鈴木名誉教授の教え子の今泉潤太郎教授を編さん委員長に十一年の歳月をかけて進められ、今年四月に完成した。

増改訂作業には北京の新聞社「大公報」の元編集委員で五十五年中国語教員として同大学の赴任した黄異さん（六六）が用語解説で助言するなど、日中両国の語学関係者の協力も得て、五十五年暮れに主な朱直しの作業を終えた。しかし、その直後の五十六年一月鈴木名誉教授が他界し、今泉潤太郎教授が意志を継いで作業開始以来、十一年ぶりに完成にこぎつけたもので、師弟二代の努力の結晶となった。

三十一日の式典で、浜田学長は「増改訂作業には長い時間と日中両国の先生方の努力が積み重ねられた。困難な作業を支援してくれた多くの人々に感謝したい。今後とも日中友好に学術文化の交流にまい進する」とあいさつ。

また、同辞典の贈呈を受けた陳文化教育担当参事官は、「完成した中日大辞典は『語い』も豊かで、高い学術的レベルにある。学術的な面で重要なだけでなく、中日文化交流のかけ橋であり、舟でもある」と賛辞を送り盛んな拍手を受けた。

〔注〕東海日日新聞 一九八六年六月一日所載。

「中日友好の懸け橋」

中日大辞典増訂版の贈呈式

愛知大学（浜田稔学長）が十一年の歳月をかけて刊行した「中日大辞典」増訂版の出版記念会と中国国家教育委員会への贈呈式が三十一日、名古屋市千村区の名古屋都ホテルに同窓生、企業関係者ら約三百人が集まって催され、浜田学長が駐日中国大使代理の陳彬・文化教育担当参事官に千冊分の目録を贈った。

記念会で浜田学長は「中国にも大きな変化があるなどで増補、改訂したが、これをきっかけに、さらに中国語学習、日中の友好、交流に努力したい」とあいさつ。編集委員長を務めた今泉潤太郎教授が編集の経過を紹介、浜田学長が陳参事官に目録を贈った。これを受け、陳参事官は「大辞典の語いは豊富で、最新の資料に基づき解釈は正確。今後の影響は大きい。単に学術のためだけでなく、中日友好の懸け橋、船になる」と強調した。

中日大辞典は東亜同文書院大作成の十四万枚の資料カードをもとに、三十年に出版を計画、四十三年に完成。増訂版は五十年に編集を始め、このほど、七百^六増の二千七百^六、親字二千字増の一万三千字、語い三万増の十四万語として結実。大修館書店から出版された。

〔注〕朝日新聞 一九八六年五月三二日所載。

8-2 c (5)

三百人招いて中日大辞典増訂版の贈呈式

愛知大学

「中日大辞典増訂版出版記念会・中国国家教育委員会への辞典贈呈式」が五月三十一日、名古屋駅前の名古屋都ホテルに来賓の本山政雄名古屋国際センター理事長、平岩利夫名古屋市助役ら約三百人が出席して開かれた。主催は愛知大学。

今回の「増訂版」は、一九六八年刊行、内外から高い評価を受けた「中日大辞典」を十一年余かけて増補改訂したもの。中日両国関係者の大変な労力で、二千七百六十五頁、語彙(い)十四万語と旧版にくらべ大幅に充実された。

席上、浜田稔学長から陳彬中華人民共和国駐日大使代理に一千冊(目録)が贈られた。ひきつづき「現代中国への視点」と題する小林一夫NHK解説委員(元北京支局長)の記念講演を聞いたあと、中国歌舞団「華音」のアトラクションで和やかに歓談した。

〔注〕 中部経済新聞 一九八六年六月一日所載。

待望の中日大辞典増訂版発刊

Ⅱ 出版記念会行われるⅡ

中国語学習者によって待ち遠しかった中日大辞典の増訂版が十八年ぶりに発刊された。中日大辞典は、日本はもとより中国でも高い評価をうけたが、中国の発展は目覚しく、それに伴い新しい言葉も増加し、「新時代」を盛り込んだ辞典の出版が強く望まれていた。

増訂版の上部欄外には、そのページの親字が記載され、大変便利になった。又、六百ページも増え、「経済特区」(「経済特別区」)、「万元戸」(「年収一万元以上の家庭」)等の新単語も登場している。

この待望久しかった中日大辞典増訂版出版記念会・中国国家教育委員会への贈呈式が、五月三十一日(土)、午後二時から名古屋都ホテルで、編纂を担当した関係者、日本・中国各界の代表者、そして愛知大学同窓生・在校生二百余名が出席し盛大に行われた。

出版記念会・贈呈式は銀嶺の間で、浜田愛知大学学長の挨拶で始まり、今泉教授の増訂版編纂経過の報告があったあと、愛知大学と友好関係にある中国の五大学(天津・南開大学、北京語言学院、北京第二外国语学院、上海・復旦大学、上海外国語学院)の各学長からの祝電披露、そして日中文化交流協会(井上靖会長)からの祝電披露があった。

中国国家教育委員会を代表して、駐日中国大使代理の参事官陳彬氏が寄贈目録を受け取り、挨拶をされた。

又、愛知大学卒業生でNHK解説委員・元北京支局長の小林一夫氏が「現代中国への視点」と題する記念講演をされた。

次に紫雲の間に場所を移して記念祝賀会が開かれた。鈴木大修館書店副社長の挨拶で始まり、増訂版出版に大きく貢献された、元中日大辞典編纂委員長鈴木沢郎教授夫人、本間喜一愛知大学名誉学長、北京農業機械化学院故黄志明教授の弟黄異愛知大学教授、そして編纂委員長今泉潤太郎教授に、中日大辞典刊行会から感謝の花束が贈呈された。そして青木愛知大学同窓会会長が乾杯の音頭をとったあと、中国歌舞団「華音」の演奏を聞きながら歓談を楽しんだ。

〔注〕一九八六年六月十五日「日本と中国」愛知県版 所載。

8-2 c (7)

「中日大辞典」増訂版を編集した

いまいずみ
じゅんたろう
今泉 潤太郎さん

「約十四万の単語を収録した『中日大辞典』増訂版が愛知大学から刊行された。「日中友好の財産」。中国側からも絶賛を受けた。

「私が編集委員になったのは巡り合わせ。鈴木沢郎先生（故人）の手が入っていますし、私が前面に出るのはどうも……」。大事業の達成にも謙虚に語る。

愛知大学の母体・東亜同文書院大（中国）教授だった鈴木愛知大教授が編纂（さん）に着手したのは、生まれた年の昭和七年。鈴木教授との出会いは地元の愛知大学に入学してから。専攻の中国文学は学生一人で、鈴木教授とのマンツーマン授業が続いた。

終戦で中国側に没収されていた単語カードが愛知大に返還され、三十年に愛知大華日辞典編纂処が設置、辞典づくりが再スタート。この年に卒業し、そのまま編纂処入りした。

四十三年に発刊された初版は、評価を集めたが、文化大革命後は社会情勢が一変した。「辞典が古くなり、十一年前に鈴木先生が中心となり、増訂作業が始まったのです」。

が、鈴木教授は五十六年一月、志半ばで死去。編集委員長として指揮をとっていたが、恩師の“加護”から解かれて陣頭に。「先生の遺志を継いで」と休みを返上して作業に追われてきた。

初版の弱点だった「マルクス主義の理解に欠けるための用語の違い」も補って四月に刊行。肩の荷が下りたかと思えば、「中国側の用語統一に伴う手直しもあり、今も圧迫感が」と表情を引き締める。

細かい作業の後遺症か、視力が落ちた。老眼だ。眼鏡をかけ、さらに天眼鏡を使う。「そういえば鈴木先生も」。辞典に生涯をささげた鈴木教授の姿がダブって見えた。

〔注〕朝日新聞「顔」 一九八六年五月所載。

『中日大辞典』の編纂②

今泉潤太郎

(承前)

辞典の改訂 中日大辞典編集者の鈴木・内山・今泉三氏は辞典改訂の必要性についての認識では一致していたが、改訂編集の開始に対してはおのおのの態度を持っていた。一九七三(昭和四十八)年の、南開大学等三大学における辞典座談会の開催がきっかけとなり、七五年四月、『中日大辞典』の前面改訂をめざし辞典編纂処が七年ぶりに開設される運びとなった。辞典編集者の改訂への熱意に火が着いたことは、辞典座談会がもたらした最大の成果の一つだといえよう。鈴木教授は七四年に胃切除の手術後、教授の職を辞し改訂版の編集に専念する決意を披瀝した。三氏は協議を重ねた結果、改訂を始めることに決した。しかし、内山教授は健康上の理由により不参加となった(同年八月逝去)。

改訂版の編集開始決定に更に拍車をかけたのが『現代漢語詞典』の刊行であったことはまちがいない。一九七三年中国国内でのみ発行されたこの辞典(試印本と試用本)は、中国社会科学院語言研究所の呂叔湘・丁声樹両氏を主編者として一九五八年から編纂が始められてきたもので、正式の出版は文化大革命も終熄した一九七八年になってからである。この辞典は中国における初の本格的現代語辞典といふべきものであり、『中日大辞典』をこれと対照して全面的に見直す必要が生じたのである。

改訂に当たっては編集の大綱を変える必要はなく、文化大革命などによる変化が語彙面に及ぼした影響を正しく紙面に反映させることや、『現代漢語詞典』との対照、新しい語彙の採録、用例の充実などに改訂の重点を置くこととした。紙面上の大きな変化は漢字偏旁簡化を全面的に採り入れ、辞典に使用する全ての漢字を規範化することとしたこと等である。これらにともない、一定程度の増ページは避けられないこと、新活字の作成は費用と時間もかかることなどが明らかとなり、改訂計画の策定も簡単にはいかなかった。

こうした辞典関係者間の話し合いをふまえ、改訂版出版のための辞典刊行会が招集され、審議の結果、基本骨子が了承され、大学評議会に提案された。最重要課題の経費問題は、この時点ですでに初刷一万部、七一年四月第二刷六千部、七三年三月第三刷三千部、七四年二月第四刷七千部、合計二万六千部が増刷され、これらの収入は大学当局の貸付金を返済してもなお改訂版出版経費の捻出が可能となる額であり、さらに今後の販売収入も見込まれることなどから初刷印刷時の状況とは一変し、評議会において、改訂版編纂が異議なく承認されたのである。なお初版本はこの後、七八年十月第五刷七千部、

八〇年四月第六刷八千部、八二年九月第八刷六千部と増刷を重ねた結果、出版総冊数は五万五千部となり、改訂版に引きつがれていった。なお、販売価格は当初三〇〇〇円であったが、最終の第八刷は四八〇〇円となっていた。編纂業務上には経費上の問題に比し、大きな問題が累積されていた。六年前に華日辞典編纂処を解散したため、新たに辞典編纂のための場所を確保しなければならなかったし、最低必要とされる図書資料・各種器材も再び整えなければならなかった。以前使用していた大型カードボックスは大学自動車部へ払い下げられて工具入れとして利用されていたが、再度辞典編纂用に復活した。図書館側に寄贈した旧辞典室蔵書中の多数の参考書を長期借り出すことの了解を得られたなど、再開への段取りも整い、一九七五年四月、大学評議会において正式に中日大辞典編纂処の再設置が決定された。新しい辞典編纂処は当時の本館（現 記念館）西北角の一隅にきまつた。

改訂版編纂の作業は基本的に初版時と同じく、中国語専任教員が講義のない時間を編集にあてることとした。改訂版編纂委員長は今泉潤太郎教授、編集委員に黄異・陶山信男両教授、および荒川清秀・森博達両講師をあて、辞典編纂専従者として鈴木擇郎氏に編集主任を委嘱し、編集委員会が発足した（以上、肩書はいずれも発足時。編集委員はのち高臨渡教授や、白井啓介講師らが加わったりし、出入りもあつた。

改訂版の原稿作成は初版最新刷の清刷を本稿とし、各ページに増補訂正を朱で書き入れる方式によつた。これは内容の増減が一目でわかる利点がある反面、全ページが朱で一杯となり紙を貼り足して記入するなど原稿が乱雑となつたりし、多少の混乱をもたらした。

編集作業が進むなかで一九七七年、中国は文化大革命を終息させたのち方向を大きく切り変え、八〇年代に入ると「改革開放」をスローガンにあらゆる分野で著しい変化発展をとげ、その成果も目に見えてきた。一九八三年改訂版原稿の脱稿までの間に、言語面の成果のうち編集に直接関係する重要な文献としては、七七年計量単位名称統一、八〇年第二次漢字簡化方案草案所載の二四八字の廃止、八一年国家標準（GB）コード制定、八三年漢字統一部首表草案などがつきつぎと発表された。また辞典など参考書類に至つてはさまざまなものが続々と出版された。なかでも戦前から有名な『辞源』と『辞海』はそれぞれ一九七九年に修訂本を出し、編集大いに参照する所があつた。前述したとおり、『現代漢語詞典』は一九七八年に出版され、改訂版編集の上で最も参考としたものである。言語以外の各分野における参考書の出版も活発となり、また出版物は直接中国から取り寄せられることも可能となり、初版編集時と異なり、いわば資料が氾濫する中で、いかに編集上必要な情報を選択するかが必要な時代となつたのである。

一九八一年、本学は中国との学術交流を本格的に進め、まず南開大学・北京語言学院と学術交流協定を締結した。特に北京語言学院からは、毎年交換教員が派遣され、劉青然氏・諸在明氏らをはじめ赴任した中国人教員が辞典編纂に協力する体制もできた。この他、北京農業機械化学院黄志明教授は二年間にわたりその専門分野で編集に協力され

た。

学内ではとくに池上貞一教授・中山欽司氏ら、学外では大林洋五氏、もと東亜同文書院中国語教員の岩尾正利氏・木田彌三旺氏、また浜田国貞氏らから協力を得た。名古屋立大学稲垣勲教授から専門知識（葉字）を余すところなく提供をうけた。¹

こうして改訂版編集が軌道にのり、辞典編集部では十年一日の如く原稿相手に果てしない作業が続けられている中での一九八二年一月、辞典編集に生涯をかけ、余人をもつては替えがたい鈴木擇郎氏が逝去したことは一大痛恨事であった。

改訂版編集に一応のめどがついたのは一九八四年に入ってからであった。

編集の進捗に平行して印刷の問題も検討された。経費の中で印刷費は依然として最大の問題であった。初版では約三〇〇〇の簡化活字の新鑄にとどまったが、今回は一九六四年に発表された印刷通用漢字字形表所載の六千二百余字を全て使用し、さらにこの字形表にない漢字でも偏旁簡化すべきものは簡化した。すなわち辞典に使用する漢字は例外なく規範化された字形とする画期的なものであった。この活字新鑄費用は単純計算によつても初版のその二倍以上になるため、印刷費の総額は巨額なもの予想された。印刷は初版の印刷を担当した図書印刷㈱と、大日本印刷㈱・凸版印刷㈱の大手三社の競争見積りの結果、凸版印刷と決定した。同社の開発したCTS（コンピュータ使用印刷）による本格的な中国語印刷となるため、活字新鑄費は同社の全額負担とすることになり、印刷費を最小限に押え込むことができたのである。またCTS印刷は漢字索引・日本語索引などの作成に威力を発揮することも期待された。

印刷とともに出版のことも懸案であった。初版と同様に増訂版も自費出版行なうことは大方の了解事項となっていたものの、出版社については刊行会内部で長い間議論されていた。初版の出版は当初のいきさつから憐大安に全面的に依託していた。しかし同社は主として自社の店頭販売およびダイレクトメール販売に頼る小売店であり、出版社ではなかった。通常の取次ルートにより注文する全国の書店からすれば、客からの注文があつても『中日大辞典』の版元がどこであるか分らず、また大手取次店でも扱っていないため、辞典を入手する手段がないと思うのも無理からぬことであつた。したがつて個人や書店から大学（内の辞典刊行会）へ直接注文が入ることもしばしばで、この点の改善は最大の課題であつた。

一九六九（昭和四十四）年九月、当時の複雑な日中関係を背景とした騒動にまきこまれた大安は自己破産し、事業閉鎖してしまつたが、七一年に入って、同社社長であつた小林実弥氏は憐燎原を新たに設立した。これ以降、燎原が大安を引きついで『中日大辞典』の発売元となり、引きつづき第二刷からの印刷にも関わることとなつた。

燎原に引きつがれてからは辞典刊行会からの要望もいれ、販売面は一定の改善は図られたものの、読者が一般の書店の店頭で辞典を手にとって見ることができなない難点は依然として解消されなかつた。辞典刊行会からも直接、大手取次ぎ店へ働きかけを行なつたが効果はあがらなかつた。当時、最新・最大・最高の中国語辞典として評価が高まる

につれて、愛知大学『中日大辞典』が全国各地の有力書店に配架されることから生じる宣伝効果を強く期待する学内外関係者の不満は大きく、無視できないものとなっていた。従って改訂版に際して出版社をどこにするかという問題は、以上のような課題を抱えて辞典刊行会内部では長い間話し合われてきたが、印刷に入る段階で最終的に結論を出さずとなった。辞典刊行会については、大安・療原と当初より一貫して『中日大辞典』出版に尽力された小林実弥氏の労に対して深謝するも、前記の課題解決が絶対の条件となり、増訂版は大手出版社に委ねることに決定し、ここに改めて出版社の選考と交渉がはじまった。その結果、『諸橋大漢和辞典』出版の実績をもつ憐大修館書店と決定した。

なおこの間、『中日大辞典』の刊行が大学補助活動事業と位置づけられたため、一九八一年四月に中日大辞典刊行会の経理は大学事務局内へ移し、辞典編纂処事務は庶務課扱いとなるなどしたが、その後の学内諸制度の改革にもよらない、刊行会は事実上活動を停止され、のち九三(平成五)年に至って解散した。

改訂版の印刷・校正には三年を要した。CTS印刷は漢字索引や日本語索引などに十分威力を発揮したが、従来の校正ゲラと全く異なる形で打ち出された初校ゲラには、習熟するまではまごつくことも多々あった。初版時と同じく改訂版の場合にも本学学生の協力があり、校正の追いこみの段階では多数の学生が一斉に点検作業する場面もあった。一九八六(昭和六十一年)二月、改訂新版の編集開始後十二年にして『中日大辞典 増訂版』が誕生した。増訂版は本文二五二〇ページ・漢字索引一〇四ページ・日本語索引九三ページ・総頁数二七六五ページ。初版本に比べ約七〇〇ページの増である。

親字は一万三二六六字(簡化字八八二二字・繁体字二七五九字・異体字二五九五字)で、初版に比し二四〇〇字余り増えた。収録単語数は約十四万三〇〇〇語で、初版に比べ二万数千語増となった。日本語索引の日本語は約一万九〇〇〇語で、初版に比べ約一〇〇〇語増である。増訂版の最大の特色は、辞典本文すべてにわたって規範化された簡化字を使用したことであった。これは簡化字総表・印刷通用漢字字形表に載っていない漢字でも、すべて簡化したものを使用した画期的なものであった。

表紙は初版本の黒に近い紺色から、あざやかな赤色に変った。版型は初版本と同じB6版のため、初版本の二倍近い厚さとなり、ビニール素材の表紙が束を支えきれず割れたりはがれたりして、製本技術上おおいに苦勞させられた。初版に比べ印刷費をはじめ全ての経費が高騰して、これを販売価格に一定程度反映せざるをえなかったが、辞典刊行の主旨に照らしてできるだけ限り押さえ、八六〇〇円と決められた。この定価はその後も変更されず現在に至っている。この年の初め三大全国紙に一斉に『中日大辞典 増訂版』発売の予告広告が掲載された。増訂版初版は一万七千部と大目に印刷した。初版本の「最新・最大・最高」の中国語辞典として確立した評価を再びかつ一層たしかなものにした増訂版が、大手出版社である大修館書店によって三、四月の開学期に全国一斉に発売されるや、好評裡に売行きをのばしていったことは、関係者にとって何よりの喜びであった。本学関係者が待ち望んでいた、全国の有名書店で、愛知大学中日大辞典編纂処編

『中日大辞典』の文字を見ることが実現したのである。

一九八六年五月三十一日、名古屋都ホテルにおいて『中日大辞典増訂版』出版記念会が、中国国家教育委員会への一千冊贈呈式を兼ねて開催された。濱田稔学長の挨拶に始まり、今泉潤太郎編集委員長から編纂経過の報告がなされた。文部大臣（代読）はじめ各界の代表から祝辞がよせられ、中国からは孫平化中国日本友好協会会長・滕維藻南開大学学長から祝電が披露された。来賓を代表し駐日中国大使代理の陳彬参事官から、一千冊贈呈に対する謝辞と出版の祝辞が述べられた。ひきつづき、愛知大学で中国語を学んだ卒業生の会主催の記念講演会・出版記念祝賀会が盛大に行なわれた。

なお、これに先立ち学長と今泉教授は、折から来日中だった何東昌中国国家教育委員会主任と東京の中国大使館において会見し、『中日大辞典』の贈呈を申し入れた。何主任は感謝の意を表すとともに辞典を全国の大学・高等教育機関へ配布し活用させたい旨を表した。

増訂第二版の製作 増訂版の製本も完了し納品の日も近づいた一九八五年十月、人民日報に簡化字総表が再掲載されたが、これに附された国家語言文字工作委员会による説明文で、七字の漢字の字形訂正がなされていた。追いかけるように同年十二月、国家教育委員会・国家語言文字工作委员会・廣播電視部の連名で「普通話異読詞審音表に関する通知」が発表され、五十三の漢字の字形と字音の訂正がなされた。最新・最大・最高の内容を目指し努力を積みかさね、やっと発売を目前にした今、わずか六十字についての訂正が完璧を期してきた編集スタッフに与えた衝撃は、まさに青天の霹靂ともいうべきものであった。

この六十字が約二五〇ページの本文中に使用されている場所を漏れなく捕捉し象嵌・修正することは、あらためてCTSによる製版以外にはない。製版は莫大な費用を要するが、ただ六十字以外は何ら問題ないので、この費用は通常の増刷費の五割程度増と見込まれた。辞典編纂処は直ちにこの訂正を入れた増訂第一版の作製準備を進めた。

増訂版初刷り一万七千部は、一九八六年四月の発売以来まさに飛ぶような売行きを示した。大修館書店発行になつてから流通上の隘路も打開され、全国の書店に配架されて読者が同書を手にとり取って見ることができるようになったばかりか、新聞広告などで書名が広く知られることにより初版以来の評価をさらに不動のものとし、さらには愛知大学の宣伝にも役立つこととなった。某紙日曜版の読者投稿欄に「中日びいきの祖父が大の巨人フアンの孫から、ドラゴンズを詳しく紹介した本がだからと言われて本屋にいつて探したがみつからない、ハハーン、これだなと気づいたが後の祭りで、正体は『中日大辞典』だった」云々と載つたように、一般の話題となるくらいであった。

年末には残部も三千冊を切り、翌年の増刷をどうするか出版社と話し合われた。増刷するならばどうしても改版して、漢字六十字分の訂正を盛りこみ、中国を含め世界でも初めて発行される辞典としたとの編集者の熱い思いが、増刷を増訂第二版として改版することを辞典刊行会に決定させた。ただこの決定に対して大学評議会から、刊行会

の決議のみで処理したという手続上の瑕疵及び、通常の五割増という経費上の問題の二点を追及された。評議会では再三の継続審議でなかなか了承にいたらず、関係者はひたすら真意を訴えてようやく承認された。

また、増訂第二版には付録に「異読詞審音表による修訂音一覽」をつけ加えるとともに、増訂版既購入者の要求に応じてこの表を提供する措置をとった。このような次第で翌一九八七（昭和六十二年）、増訂第二版として六十字の修正を盛りこんで一万部が増刷された。これが現行版として現在まで引きつづき発行されてきているものである。またこの年は大修館書店創業七十周年と重なったため、同社はこれを記念して中日大辞典増訂版の特装大型限定本（特価二万八〇〇〇円）を出版した。

増訂第二版について章曙駐日中国大使は推薦の辞をよせ、

愛知大学編纂の『中日大辞典』は語彙が豊富で大変使いやすく、中国研究者の良き師、良き友でありました。この度、中国の最新資料にもとづき全面的に修訂され出版されたことに心からお祝いの意を表します。

と述べた。

本学の協定校である北京語言学院の呂必松学長は、

『中日大辞典』は中国人が日本語を学ぼうと、また日本人が中国語を学ぼうと、重要な役割を果たし、大きな貢献をなしてまいりました。改訂後の『中日大辞典』はより一層大きな役割を果たし、より大きな貢献をすることでしょう。

と期待感を表した。

増訂第二版はその後一万部ずつ、八七年二月第一刷、八八年九月第二刷、八九年一月第三刷、九二年四月第四刷、九四年六月第五刷、九六年八月第六刷の、計六万部発行されている（その後、九九年に一万部発行）。

国外における『中日大辞典』 『中日大辞典』の出版の発点は、日本人民に対する中国の友好を原点としているといえる。東亜同文書院大学の辞典カードの返還がなかったら、愛知大学の『中日大辞典』は誕生しなかったのである。この日中友好の精神を基礎として編纂されたとの認識は本学と中国側に共有されており、編纂の過程で示された激励や配慮のみならず、本学の教育事業に対して一貫して示された対応からも中国側の好意が読みとれる。

したがって辞典刊行会は、辞典完成の暁にはこれを中国に寄贈し感謝を表すとともに、日本語を学ぶ上で役立ててもらおうとの考えをもっていた。特に初版時の印刷費捻出の手段にした辞典の贈呈は、その後も本学の変わらぬ方針として行なわれ、現在までに次のとおり中国側へ贈られている。

一九六八(昭和四十三)年初版出版時に中国日本友好協会(千二百冊、八六年増訂版出版時、本学創立四十周年を記念して中国国家教育委員会(一千冊、駐日中国大使館へ百冊、八七年増訂第二版出版時に中国国家経済委員会(一千冊、九四(平成六)年に原稿カード返還四十周年を記念して中国日本友好協会に一千冊、駐日中国大使館へ五百冊)とまとまった数量を贈呈した。これらはすべてそれぞれ中国の関係下部機関へ配布され友好に利用されている。

一九七三年、南開大学等における『中日大辞典』に関する座談会のため訪中した愛知大学学術代表団のメンバーが、たまたま上海でバスに乗り合わせた中年婦人が『中日大辞典』を手をしているのを見て尋ねたところ、彼女は上海市政府の幹部で、仕事上中国日本友好協会から上海市教育局に配布されたこの辞典を使用し大変役立つているとの報告がなされている。文化大革命のさなかにおいても本学の期待したとおり、全国の関係機関に辞典は配布されていたのが確認されているのである。八七年の贈呈に際しては中国国家教育委員会からの礼状に

对于贵方的友谊情谊,我们深表感谢。如同所期望那样,我们即将将这些辞典转发下去,同时转达贵方的友好之情,相信这一千册辞典将在中日友好及中日人才交流事业中得到充分利用(……)。

と述べられているのも言葉どおりに理解してよいであろう。

中国に贈呈された総計六〇〇冊余の『中日大辞典』は大海の一滴ともいふべきものではあるが、小にしていえば愛知大学の名を中国において高らしめたのみならず、大にしていえば「日中友好の船、文化交流の橋」となっているのである。中国への辞典贈呈は『中日大辞典』出版の原点から出るものであり、それを常に再確認するものである。

他方、中国国内での『中日大辞典』の売れゆきは微々たるものであった。なかには直接愛知大学宛てに辞典がぜひ欲しいと直訴してくる中国人もあった。中国では近年まで海外の重要な著書は「内部発行」であった。『中日大辞典』もこの例にもれず初版・増訂版ともいわゆる「海賊版」が相当流通していたもようである。香港では一九七九年頃に二、三の出版社から引き合いが入り、結局、(株)大安と取引実績のあった香港三聯書店との間で契約ができ、現地の新聞広告も出されて、二二〇〇香港ドルで売られた。シンガポールへは香港から出ていったもようである。台湾においては辞典の簡化字を全て繁体字にかえ、発音表記と配列を(中国の)ピンインから(台湾の)注音符母にかえ、さらに本文中の見出語・釈語用例などの中、台湾では不都合な部分(ほとんど政治関係に属するもの)だけ除いた『中日大辞典』の剽窃本が『新編中日大辞典』の名で新台幣ドル五五〇円で発売された。韓国で出版された中韓辞典には『中日大辞典』を無断で最大限利用しているものがあるが、八三年ソウルブックフェアへの出展を機に、韓国出版社との間で韓国語出版契約が正式に結ばれた。

欧米へは、初版・増訂版の出版を記念して、アジア研究で著名な二〇余の大学図書館へ『中日大辞典』を贈呈した。特に一九七一年、ハンブルク大学アジア研究所の紀要に紹介され、また七六年『ブックレビューズ』上に紹介されたこともあってか、欧米の書店からの注文もあった。オーストラリアの大学図書館からは直接本学へ受贈の申し入れもあった。

日中友好の船、文化交流の橋

「それは教奇をきわめた辞典であった。はじめ中国は上海の同文書院に呱呱の声をあげ、十数年にして終戦とともに中国に接收された。書院の教授たちは、おそらく永久に日の目をみないものとおもわれたにちがいない。戦後十年にちかく、その膨大な資料が中国から返還された。そだての親たちのうれしさは想像にあまりある。それよりさらに十年、日本は豊橋の愛知大学で根本的な検討と整理がくわえられ、いまようやく刊行されようとしている。それは実に、日中両国人の心血がそそがれていた。(…)

おもえば、この辞典は、かつて日中両国のあいだに介在して教奇の運命をたどったが、それはやがて両国文化交流の使節たる資格を賦与される所以となった。前後三十余年にわたる編集各位の努力にたいし、こころからなる敬意をささげたいとおもう。」

これは、初版出版時、『日中交流の使節』と題する倉石武四郎東京大学名誉教授の推薦の言葉である。また増訂版出版時には、駐日中国大使館の陳彬参事官は

『中日大辞典』の出版は愛知大学の関係者の皆様が長期にわたって努力された結果であり、いままで愛知大学が中日友好に力をつくしてきた結果でもあります。今回の増訂版は学術的価値からいうと内容は豊富で、資料は斬新で注釈は正確で、中日両国の言語を学習、研究するうえで極めてすぐれた辞書であります。辞書の活用範囲と影響力は他の専門書よりいっそう広く深いものがあります。同時に『中日大辞典』の価値と意義は学術面にとどまらず更に中日友好と文化交流の橋であり船であると思います。『中日大辞典』の出版は必ずや駐日両国人民の友好と文化交流をよりいっそう推し進めることでしょう。

と祝辞をのべた。時を違え、国を異にしてはいても『中日大辞典』の原点ともいいうべき『日中友好の船、文化交流の橋』としての役割に対する評価に変わりはない。

『中日大辞典』はこの原点から出発し、日進月歩の中国の発展に応じ、その言語面にあらわれた様相を新版、増訂版、増訂第二版と可能な範囲で正確に反映させるべく努力を重ねてきた。この間、現代中国語の標準的辞典として最も権威ある『現代漢語詞典』が一九九六年修訂された。七八年に初版が出て以来の全面的な改版である。また、最近の国内外における多種多様な中日辞典の出現には実に目を見張るものがある。中日大辞典編纂所は、これを機に『中日大辞典』の新たな船出をめざし第三版の編集にとり組んでいる。

註

¹ 『中日大辞典 増訂版』(一九八六年)「増訂に際して」による。

² 『愛大通信』第2号(一九七三年十一月)による。

³ 一九九八年一月、処を所と改めた。

〔注〕『愛知大学五十年史 通史編』より抜粋。

書評

辻 康 吾

評者が勤務する東海大学でも今年は中国語を選択する学生が大幅に増え、クラスの再編、教員の確保に嬉しい悲鳴を上げた。各地の大学でも中国語選択者が増えているという。一時中国語学習者数は日中関係の動向に従って増減すると言われたこともあるが、両国関係の安定の中で中国語学習も拡大安定の時期に入ってきたようである。

その中で今年は中国語関係の辞典 4 冊がほぼ同時に出版された。その総てをまだ使い込んではいないが、それぞれに新しい工夫や改善のための大きな努力が窺われ、かつて頼るは井上『中国語新辞典』一冊という時代の評者にとってはなにか夢のように思われる時代となった。

とりわけ 68 年の初版に際してちょっとした感激を感じた『中日大辞典』が大幅増訂の後出版されたことは量、質ともに向上、拡大を続ける中国語学習にとって大きな励ましである。

収録親文字 14000 字、収録語 14 万語、中国を含めて当面最大の現代中国語辞典となった。語学というより、主として文学、社会科学の角度から辞典を利用する評者にとって満足しているのは大幅に現代用語が収録されたことである。周知のように社会主義中国もまた文字の国であり、ごく平凡な時事用語を確認するのにかなりの時間を割いてきたものにとって“包干到戸”、“四个现代化”、“关系学”などの採録は大きな助けとなる。

技術的には旧版に無かった各ページ上端に親字が配列され、検索を楽にしている。無いものねだりをするなら、どうせ親字を上端に出したならそこにも声調をつけてあれば発音字典としてもより便利であったような気がする。そういえば旧版で 68 ページだった「日本語索引」も 92 ページに増えている。しかしこれだけ周到な配慮をしながらとも思えるのだが、本文部分のみでも 2522 ページのこの大著を B6 版に仕立てた結果、旧版でも感じた分厚さが一層増したことである。もちろん辞典は小型であることも望ましいが、評者を含め老眼鏡世代のものにとって、これだけのボリュームの辞典はせめて机上版は欲しいところだった。もう一言いえば、最近の美しい挿絵、写真に溢れる英語辞典類をみるにつけても『最新中国情報辞典』(小学館)を先例に、図版や表があればもはやテレビ世代が絶対量を占める最近の中国語学習者にも喜ばれたのではないだろうか。

〔注〕「中国語」1986年7月号所載。辻康吾氏は東海大学教授。

書評

『中日大辞典』評価高く増刷

ことし、十八年ぶりに「中日大辞典増訂版」を発刊したが、愛大が続けている中国との交流が編集の大きな力になった。

中日大辞典は四十三年に出版。「愛大の中日大辞典」と全国的に高い評価を受け、計七万部印刷された。以後、文化、経済などすべてに中国の発展は急で、「時代にふさわしい辞典を」の要望が強くなり、五十年から増訂版作りを始めた。

生活の中の言いまわしの変化、科学、技術分野の新用語の多さは予想以上で、編集作業は大変だった。愛大は中国の北京語言学院、南開大などと学術教育交流協定を結ぶなど、中国との交流は盛ん。そこで、中国の大学からの交換教員や留学生らに協力をあおいだ。

激光自導導弾（レーザーミサイル）や方便面（インスタントラーメン）など、彼らのアドバイスで採用された新しい言葉は多い。縄跳びは中日大辞典で跳縄だったが、留学生の指摘で、増訂版では跳皮筋に。中国でも、昔は縄で遊んでいたが、いまは、ゴムを使うからという。

一万五千部印刷。「中国の人の協力があつてこそ」と、愛大は中国国家教育委員会に増訂版を千冊と中国の大学に約百冊贈った。

〔注〕 中日新聞 一九八六年七月十三日所載。

近代化に対応し生きた言葉を豊富に

外国語の辞書の水準は、その国の語学研究の水準を示すといわれる。この点からすると、日本で出版されている英国の辞書はもとより、フランス語、ドイツ語、ロシア語の辞書の水準には定評がある。中国語の辞書はどうかという点と、それらの辞書に比べて、まだ開きがあるのではなからうか。

そうした中で、一九六八年に出版された『中日大辞典』は、豊富な言葉と的確な解釈で高い評価を得て、長い間、中国語の辞書の『王座』を占めてきたことで知られる。こんど出版された、その増補版は、収録親字数一万三千字、熟語数十四万語。二千五百二十ページで、約五百ページも増えている。

目立つのは、近代化を進める中国で使われている言葉が多く収められていることだ。例えば、「軟件」|| ソフトウェア、「万元戸」|| 年收入が一万元を超える家庭。おなじみの「鉄飯碗」|| 確かな（食いはぐれない、解雇されることのない）職業、「親方日の丸」など。

それだけではない。「文革」中に、しきりに使われた「样板戲」|| 模範劇なども加えられている。かなり、目くばりがきいているのである。

さらに、指摘しておきたいのは、この増訂版は、以前のものにもまして、日中友好協力と学術交流の結晶であることだ。この点で、日中双方の関係者の労を多としたい。

いま、この辞書を手にする、新たな感慨がよみがえってくる。中国語は長い間、日本では『実用語学』の域を脱することができなかったが、この増訂版の出版は、日本の中国語学の研究に、新たな展開を促すことになると思われるからだ。

(英)

〔注〕「日本と中国」第1296号（一九八六年七月五日）所載。

新語や方言など14万語収容

『中日大辞典 増補改訂版』

愛知大学中日大辞典編纂処編

愛知大学が昭和五十年から進めてきた改訂作業が完成したものの。旧版の刊行は四十三年で、二千^六、親字一万一千、語彙(い) 十万語強。五十七年までに八刷、七万冊を印刷した。

今回、完成した改訂版は旧版に比べ七百^六増の二千七百^六、親字は同じく二千字増の一万三千字、語彙は三万語増えて十四万語と政経時事、科学技術用語から方言、ことわざ、古語、俗語におよぶ豊富な内容となっている。また北京語言学院、北京農業機械学院のスタッフの協力を得て新語彙を加えることに重点を置いているのが特徴だ。(大修館書店刊 Ⅱ Ⅲ ○ 三 (2 9 4) Ⅱ Ⅲ Ⅱ Ⅲ B 6、二、七〇〇^六、六、八〇〇^円)

〔注〕 日刊工業新聞 一九八六年七月七日所載。

中国
関係書
81年ベストセラー

東京都内の中国関係書を取り扱う書店六社に、八一年のベストセラー七点を上げてもらった。各書店の特色もうかがわれて、なかなか興味深い結果が出ている。

■ 亜東書店 1 『全国鉄路旅客列車時刻表』中国鉄道出版社、2 『L.L中国語初級』大修館、3 『中華人民共和国地図・日本語版』亜東書店、4 『現代日中辞典』光生館、5 『中国共産党の歴史についての決議』外文出版社、6 『中日大辞典』燎原書店、7 『袖珍日漢会話手冊』知識出版社

■ 内山書店 1 『中日大辞典』燎原書店、2 『中国語基本語ノート』大修館、3 『中国語手紙の書き方』金星堂、4 『中国社会主義経済問題研究』外文出版社、5 『総合力アップ中国語問題集』89年版』現代出版、6 『文芸読本・魯迅』河出書房新社、7 『現代のエスプリNo.162・中国人と日本人』至文堂

■ 東方書店 1 『中日大辞典』燎原書店、2 『一人歩きの中国旅行会話』東方、3 『中国社会主義経済問題研究』中華書店、4 『中国語基本語ノート』大修館、5 『中国語手紙の書き方』金星堂、6 『中国歴史の旅』東方、7 『現代日中辞典』光生館

■ 燎原書店 1 『中日大辞典』燎原、2 『新日漢辞典』内山書店、3 『中医学基礎』燎原、4 『東医雑録』燎原、5 『中医学入門』医歯薬出版、6 『ポケット日漢辞典』燎原、7 『中国貿易用語辞典』燎原

〔注〕「日本と中国」一一四八号 一九八一年二月一五日所載。

いたずら仕掛け人

中三の孫は大の巨人ファンで、私は中目びいき。このいたずら坊主が、先日猫などで「ドラゴンズを詳しく紹介した本が出ていたので、買った」という。

猫などで声は危険信号なのだ。「その手はくわないよ。お子様向けの恐竜の本だろうが」「信用しないんだなあ。本当に中日に關した本だつていうのに」。それほどまでいうなら、と書店に行き、隅々まで探したが見つからない。

ハハーン、これだな、と気づいたときは後の祭り、正体は「中日大辞典」。たしかに「中日（中国語と日本語）」に關する詳しい本には違いないが、それにしても腹が立つ。こうなつたら、天神様に坊主の高校入試絶対不合格祈願の絵馬を奉納せねばなるまい。それも、特別大きく、目立つ、「利益のあるやつを」。

(宮城県・破顔亭立腹・88歳)

〔注〕「朝日新聞」日曜版 一九八六年五月二十五日所載記事。

8-2 f (2)

日中友好の橋、文化交流の船——愛知大学中日大辞典増訂版の刊行

今泉 潤太郎（愛知大学教授）

中日大辞典改訂の歩み

訪中学術代表团は大きな成果をえて帰国した。座談会でも辞典は高く評価された。数百項目にのぼる具体的な指摘も有益であった。上海訪問の際、筆者らはたまたまパスの中で中日大辞典を腋にかかえた中年の中国人女性と隣り合わせ、尋ねてみると上海市教育局に勤め仕事によく利用しているとのこと、一行の来訪も『人民日報』で報道されたので承知している由、偶然の出来事なので感銘ひとしおであった。南開大学に対しては愛知大学として正式に両校間の交流を提案した。状況が許せば応じたいとの返事であったが、両校間の協定が実際に締結されたのは文化大革命が終り四年目の昭和五十五年の事である。このたびの訪中が愛知大学の中国との学術交流に果たした役割も実に大きなものがあつた。昭和五十年鈴木は前年胃切除の大手術を行った身を鞭打つごとく辞典改訂の決意を披瀝した。内山は長年月の辞典編集の苦勞がこたえたのか健康上不安を感じており、訪中代表团の参加も断つていたので、改訂の仕事には加わる考えは無かつた。予感があつたのだろうか、この年の八月不帰の客となつたのである。筆者は協力を約し、結局鈴木は辞典改訂に専念すべく教授を辞した。四月、大学当局は正式に辞典編纂処を設置し、鈴木を編集主任、筆者を編集委員長、陶山信男、荒川清秀、黄興をメンバーとする編集委員会を発足させた。文化大革命を経て四つの現代化を目指す中国では学術界も活気を呈し、各種辞典をはじめ工具書も初版編集時とちがい多数出版されていた。昭和五十五年から愛知大学は中国教育部派遣の研修教員の受け入れをはじめ、また北京語言学院との間で交換教員制度を発足させたので、毎年数名の中国人教員が来学するようになっていた。これらの中国人教員の協力は辞典編集にとって大いに役立った。北京農業機械化学院黄志明教授は二年間にわたり編集に協力、帰国後半年足らずで病を得て逝去されたことは特に銘記されねばならない。改訂作業も軌道にのつた昭和五十六年一月鈴木邦郎が急逝した。その生涯をかけた辞典編纂の情熱は最後の瞬間までうしなわれなかつた。鈴木発意ではじまつた改訂であり余人を以つては替えがたいが、当初より助勢してきた筆者が以降中心となり、ついに昭和六十一年四月増訂版が完成した。改訂編集を始めてから十一年、初版編集開始より数えれば実に三十一年の日子を費やしている。今回の改訂は初版の枠組内での前面増補であり、辞典の基本的性格、編集原則は変更せず、誤りを正し不備を補うこと、できる限り新語彙を加えることに重点をおいた。時間的にも無理であつ

たが「漢語詞滙的統計与分析」「國家標準信息交換用漢字編碼字符集」「統一漢字部首表」「起筆統計表」「漢字拼音正詞法基本規則(試用稿)」「普通話異說詞審音法」等々を織りこんだ改訂は今後に期することとした。「普通話異說詞審音法」は三十年ぶりに文字改革委員会から発表されたものである。初版編集の時、審音に関して百項目に近い質問を同委員会に出したが返事はなかった。それがなんといま回答が出たわけである。かくして完成した増訂版は初版にくらべ七百頁増の二千七百頁、見出字二千字増の一万三千字、新語を加え十四万の語彙をもち、初版の特徴を生かした最新の本格的中日大辞典である。

日中友好の橋、文化交流の船

本年五月三十一日、中日大辞典増訂版出版記念会と中国国家教育委員会への辞典贈呈式が開催された。席上中国側を代表して中国大使館陳彬參事官はこの辞典を「日中友好の橋、文化交流の船」と評し、贈呈に対し謝意を表するとともに刊行を祝福した。これに先立つ五月二十一日には折から来日中の何東昌国家教育委員会副主任と東京において会見、会談のなかで日中両国民の協力で完成させ発展させてきたとも言えるこの辞典が、中国でも広く利用されてきたことを責任者の口から直接聞くことよってあらためて強く認識させられた。現在の日中間における交流の発展は十年前二十年前とは較べることもできぬほど大きなものである。辞典のごとき工具書は両国ともにますます必要になってきている。前述の各資料を参照し、今後の発展に應ずることのできる中日大辞典としていくのは日中両国民の付託に應える愛知大学の責任とも言えよう。また、愛知大学内においてみれば、辞典編集にあたった中国語教員の熱意およびこれを支援した大学当局のみでなく、愛知大学で中国語を学んだ学生たちが三十年余にわたって辞典編纂にかかわるさまざまな仕事に協力してきた事実があるからこそ『愛知大学中日大辞典増訂版』の名に背かないのである。日中両国民の合作と愛知大学教職員学生の協力で完成させた辞典をいかに継承させるかがこれから問われるのである(文中敬称略)

〔注〕「大学時報」一八九号(一九八六年七月)所載。

公開しながら「秘密」とは

日本でもそうだが、僕、旅先ではデパートと本屋さんに必ず寄る。その土地の生活水準、文化水準がわかるような気がするからだ。

中国で南方へ取材に行った。例によって、町の中心部の本屋へ。中国の本屋さんは、例外を除いて「新華書店」という屋号である。二階の学術図書コーナー、熱帯植物の研究など地域の特徴があった。その一隅「日語関係」のコーナーをみつけた。「日語」とは日本語。ここではほかに日本関係図書も入っていた。これは面白い、と十冊近くをカウンタに持っていた。と、ガイドの女性に店のオヤジが何か言っている。聞き耳をたてると「これは、外国人には売れない」。その書名は『中日大辞典』。同じ経験は東北地方でもあった。『中国共産党史』。

こんなクレームがつくだろう、とわかっていた。でも、万一お目こぼしに気づかればの期待、ダメ元精神からのチョッカイなのだ。というのは、この二つ、ともに奥付けに「内部発行」と書かれているからだ。このころは、僕は少しは事情通になっていたのだが、当初「内部発行」という字を見れば、えらく興奮したものだ。「秘密文書をみつけた！」という気になって。「内部」ものは、外国人には「秘密」になっていたから。

「内部発行」には、いくつかの種類がある。辞典など完成品ではなく、広く意見を求め修正して、あとで公刊されるもの、ある研究組織や行政機関などが特定の読者を対象にしたもの、地域を限って発行するもの、などである。もう一つ、日本の出版社が聞くとヨダレが垂れそうな話。それは、中国での出版物は最低でも五万部は出る。いや、それ以上売れるものでないと、出版しにくい。紙が十分ではないからだ。そこで、どうしても出版したいものがあると「内部発行」の手続きをとる。そうすれば、千部でも一万部でも出版許可が得られる、という仕組みがある。『党史』の方は、未完成品、『辞典』は、実は未完成品ではなく、海賊版。そう「内部発行」のもう一つは、この海賊版。そして、その種類が圧倒的に多い。『辞典』は日本製。いま、日本では改訂したてで六千八百円だが以前は四千八百円。それを中国では十元（当時で日本円約千円）の安さで売っていた。紙質や表紙がやや違うが、写真製版らしく中身は全く同じ。海賊版は学術・専門雑誌にとくに多く、ある専門図書館をのぞいたら、書架がこの手の雑誌で埋まっていた。

もっとも、中国は万国著作権保護条約に加入していない。だから、違法というわけではない。いま、加入検討中で、その前準備として国内の著作権問題と取り組んでいる。

同じ「内部」ものといっても、これだけではない。『内部参考』という高級幹部向けの雑誌、『参考資料』という情報誌など、「機密」や「極秘」と表紙に印刷しており、書店にはない。

〔注〕 中公新書「現代中国百景」今田好彦 昭和六一年九月「ヒゲで撫でた胡同」所載。

愛大四〇年

今泉 潤太郎(愛知大学教授)

愛知大学が豊橋市に創立されたのは二十一年一月。ことし四十周年を迎えた。卒業生は短大、二部を含め計六万六千人。東三河地方だけでなく、全国の各界に広がっている。上海の東亜同文書院大学など、終戦で閉鎖された日本の海外大学の後身として創立された経緯などから、中国との交流、研究では常に他をリードしてきた。四十周年を機に、これまでの歩みを振り返って見る。

7回の増刷、全国へ

中日大辞典 上

中日大辞典発刊以来、十八年ぶりの増訂版が完成、ことし四月、最初の刷り上がり百五十冊が、大学に届いた。編さん委員長の今泉潤太郎教授(五三)は、浜田稔学長(五七)と岩井透事務局長(六〇) Ⅱ現・参与Ⅱに見せた後、著書贈呈分の五冊を抱え、同辞典生みの親の故鈴木沢郎教授宅に走り、仏前に供えて報告した。「先生、やつとできました」。

鈴木らが、上海東亜同文書院大学時代に書きため、敗戦により接収された十四万枚の辞典原稿カードが中国側の好意で二十九年暮れ、返還になり、翌春から、鈴木を委員長に愛大での中日大辞典編さんは始まった。

卒業を控えながら就職先の決まらぬ教え子・今泉も、鈴木の前めで見習いとしてメンバーに加わった。

当初、五年間で完成の予定だった。だが、頼みのカードは戦後の中国の変身で既に古典。再び、ゼロからのスタートとなり、十三年後の四十三年二月、ようやく刊行にこぎつけた。

訂正前の原稿の一部が、そのまま印刷されるミスを目前に発見し、再訂正とあわただしく刊行を迎えた鈴木らが、喜びにひたつたのは三ヶ月後。画期的な辞典完成に対し、中日新聞社から編さんグループに中日文化賞が贈られた。授賞式のあつた夜、鈴木は、既に助教教授になっていた今泉らを自宅に招き「長いこと、ご苦労さん」と初めてねぎらいの言葉をかけた。

中日大辞典は七回も増刷、計七万部出版し「愛大の中日大辞典」として全国に知れ渡った。

(敬称略)

中国を訪れ検討会

中日大辞典 下

千二百冊の中日大辞典を中国に贈った後、「もしかしたら」の期待を込めて申し入れた中国公式訪問が四十八年に実現。鈴木沢郎団長率いる愛大芸術訪中団は、南開、北京、復旦の三大学でそれぞれ辞典の内容についての検討会を行った。

中国側は「中日友好に役立つ優れた辞典」と評価したうえで、現在の文化、生活に合わないと約二百項目を指摘。訪中団は、将来の改訂を約束して帰国した。

約束を果たすべく五十年、今泉潤太郎を委員長に編さんを再開。鈴木は自ら教授職を退き、この作業に専念。七十歳代の半ばを超え、体調を崩したこともあり、急いでいた。

五十五年暮れ、一応、全部の原稿に目を通し終わって帰宅した鈴木は妻しづ子(八〇)にうれしそうに言った。「若い人がいるからもう安心だ」。翌年一月六日朝、鈴木は中国語で何か歌った後、静かに息を引き取った。八十二歳だった。

それまでの中日大辞典より六百ページ増え、二万語多い十四万語を収録した増訂版の完成は鈴木先生の死後、さらに、五年間かかったが、すでに一万四千部も出ている。

「増訂版も鈴木先生の辞典。私はピンチヒッターでしのできただけ」と今泉はいう。「今度は自分の」とは口にしなかったが、今泉が「中日大辞典」とかかわってもう三十年が過ぎた。

(敬称略)

〔注〕中日新聞 昭和六十一年(一九八六年)二月二日、三日所載。

『中日大辞典』1000冊を寄贈へ

原稿カード返還40周年 愛大が友好協会に

中国研究者必携の辞典として知られる「中日大辞典」を編さんしている愛知大学中国大辞典編纂(さん)処は、辞典のもとになった原稿カードが中国から返還されて四十年になるのを記念して、中日友好協会に同辞典一千冊を寄贈する。二十八日、石井吉也学長が東京の中国大使館を訪れ、徐敦信大使に目録を手渡す。

二千八百^冊、約十四万語が収録されている同辞典は、国内最高水準の中国語辞典で、一九六八年の初版発行以来、十二万三千冊を出版。香港や北京でも販売され、中国政府には、これまでに愛大から約五千冊が贈られている。

中日大辞典は、愛知大ゆかりの東亜同文書院(中国・上海)が一九三二年に「華日辞典」として出版を計画。辞典の原稿カードを作成中、敗戦のため没収され、その後、中国政府の管理下に置かれた。五三年、当時の本間喜一愛知大学長が郭沫若中国科学院院長にカードの返還を要望。「日中文化交流の懸け橋」として翌五四年、辞典編さんの準備をしていた愛大に引き渡された。

返還四十周年記念事業では、寄贈とともに、九八年刊行をめどに同辞典を全面改定することも決定。八〇年代以降の中国の改革・開放路線に伴う学術成果を盛り込んだ内容にする。

〔注〕中日新聞 一九九四年七月二十八日所載。

愛知大が中日友協に辞典千冊を贈呈

原稿カード返還 40周年記念

中国語辞典の最高峰の一つ『中日大辞典』（愛知大学中日大辞典編纂所へんさんしゅう）の刊行のきっかけとなった、東亜同文書院制作「華日辞典原稿カード」の日本愛媛四十周年を記念する、中日友好協会（孫平化会長）への同辞典一千冊寄贈が七月二十八日、東京・港区の駐日中国大使公邸で行われた。同辞典の編纂にあたる愛知大学（石井吉也学長）が行った。

『中日大辞典』の編纂は戦前、中国研究の中心地とされた上海の東亜同文書院で企画され、原稿カード約十四万枚（約七万語分）が作成されたが、敗戦でカードを国民政府軍に接収された。しかし、終戦当時の同書院院長で愛知大学学長の本間喜一氏は、編纂をあきらめきれず、日中文化交流に貢献したいと内山完造日中友好協合理事長を経て、郭沫若中国科学院院長（後の中日友好協会名誉会長）に返還を希望。その結果、翌一九五四年の引揚船「興安丸」で、日中友好協会本部（東京）へ届けられた。

協会はこれと同書院関係者を中心に四六年に設立された愛知大学にゆだね、同大学では五五年四月から鈴木沢郎教授を編集委員長に関係者が編集に取り組み、六八年二月に初版を完成させた。

以来、同辞典は出版部数十二万三千冊を教え、豊富な語いと百科項目を持つ中国関係の総合辞典として、国内外の関係者に広く活用されている。この日の式典には、愛知大学の石井学長、今泉潤太郎教授（中日大辞典編纂処所長）、山下輝夫事務部長兼広報課長と、中国大使館から徐敦信大使、呉江浩二等書記官、井頓泉三等書記官らが出席。

石井学長は、『中日大辞典』増訂第二版数冊と中日友好協会への一千冊増訂目録を手渡したあと、「ことしは辞典刊行の契機となったカード返還四十周年の記念の年。辞典はまさしく、日中友好、日中学术交流の産物です。カード返還にご尽力いただいた中日友好協会孫平化会長に千冊を寄贈して、感謝の意を表したい」とあいさつ。九八年に出版予定の辞典新版のほか、コンサイス版、CD版の編集の取り組みなど事業の現況も紹介された。

徐大使はこれにこたえて「確かにお受け取りし、直ちに中日友好協会にご連絡いたします。大辞典は引き続き未来への日中関係の中で、両国の人材養成、文化交流に役立つものと信じます」とお礼の言葉を述べた。

出席者はこの後、日中文化交流の展望などについて和やかに語り合った。愛知大学では従来、中日友好協会や中国国家教育委員会など中国側の関係機関に同辞典を五千冊増訂している。

〔注〕「日本と中国」第1555号 一九九四年八月一日所載。

競う ライバル物語

中国文化研究のパイオニア③

中国・上海にあった旧制高等専門学校「東亜同文書院」の中国語教育の伝統は、愛知大学にしっかりと受け継がれた。

教養課程には、英独仏露語とともに中国語が必修となった。また、中国語の授業は、同文書院で使用された「華語萃編」が再び教科書になった。学生たちは、少人数のクラスで熱心に学んだ。

日中間の国交は断たれていたころ。だが、学生たちは生きた中国語を覚えていったのである。

当時、文学部で中国文学を専攻していた現名誉教授の今泉潤太郎（七一）はこう回想する。

「新中国になってから、北京語をもとにした普通話（共通語）が確立した。『華語萃編』にも社会主義体制下、労働者中心の社会の中で新たに現れた語彙を採用するなど若干の改訂を行ったが昭和四十年代まで使った。実際の中国人の会話を取り入れており、日中両国の教員が教えるところも書院の伝統を守っていた」

同文書院の生え抜きの教授陣は、発音の基礎から中国語を学生にたたきこんだ。その一人に、のちに大きな足跡を残す教授の鈴木沢郎がいた。

同文書院の支那研究部華語研究室で研究していた鈴木は一九三三（昭和八）年、華日辞典の編纂を呼びかけた。ここに、中国語の「パイプ」ともいわれる「中日大辞典」編纂に至る長い道のりが始まった。

編集方針は、井上翠が編纂し、戦前出版され、評価が高かった「井上支那語辞典」が出発点。語彙の数は七万―八万語。語彙の収集のために作成された資料カードは十四万枚に達した。作業にあたったのは、鈴木のほか十人の日本人教員と中国人講師八人だった。だが、編纂作業は日中戦争、太平洋戦争のため停滞。敗戦後は、中華民国側に東亜同文書院が接収された際、辞書編纂にかかわる資料も引き渡された。

戦後の混乱も少し落ち着いていた昭和二十八年七月、鈴木は愛知大学学長の本間喜一から辞典原稿の返還を中国側に願う計画を聞かされた。その四年前の十月一日、毛沢東が北京の天安門で中華人民共和国の成立を宣言していた。

そこで鈴木は、接収されたことを思いだした。

「もし、事情が許すようになったら、われわれの手でこの辞典を完成させてもらいたい」。口頭で申し出たのである。

早速、日中友好協会の内山完造理事長を通じて中国科学院の郭沫若院長に願書を送っ

8-2 f (7)

た。内山は戦前、上海で書店を営み、魯迅など中国の知識人と交流が深かった。郭は日本留学の経験があり、知日派の知識人だった。話はトントン拍子に進んだ。

郭の斡旋により、辞典原稿は「日中文化交流のため、改めて日本人に贈る」ことが決まり、昭和二十九年九月、辞典編纂の資料カードが引き揚げ船「興安丸」に託され、日本に返還されたのである。

昭和三十年四月、愛知大学に辞典の編纂委員会が設立され、いよいよ編纂作業が本格化した。

スタッフたちは資料カードの作成、整理、例文収集などに黙々と取り組んだ。今泉は文学部を卒業すると同時に文学部の助手として作業に加わった。「講義以外の時間は、すべて辞典の編纂にあてていた」。そう言うように、今泉は半生を辞典編纂にささげた。

最初の計画では昭和三十六年に完成する予定だったが、作業は大幅に遅れた。

中国で漢字を簡略化する文字改革が行われたこと、原稿の書き直しを迫られたことや、三千字にのぼる新旧の漢字の活字を鑄造したことなどが主な理由だった。

資料カードの返還から十三年。四十二年十一月、ついに中日大辞典の初版が完成を見た。

漢字は簡体字を、発音の表記には中国式ローマ字記号を採用した中日大辞典は四十二年二月、初版一万部が発売された。政治、科学用語から方言、四字成語など約十二万の見出し語を収録した内容は日本だけでなく、広く中国語圏でも高い評価を受けた。中国や台湾では、海賊版まで出るほど、大きな反響を呼んだ。

昭和六十一年に増訂版、翌年に増訂第二版が出された。大辞典の出版を手がけている大修館書店によると、六十一年から現在に約十萬部が販売されたという。

今では、日本全国で中国語を学習したり、中国研究に従事する人たちに欠かせない参考書となっている。

(敬称略)

〔注〕産経新聞 平成十六年(二〇〇四年)一月十四日(水曜日)所載。

両親に会える「中日大辞典」

父

欧陽可亮さん

母

張祿沢さん

〈読者から〉

今年一月十三日から朝刊で連載された「競うーライバル物語 中国文化研究の

パイオニア 愛知大学系「大東文化大学」。ここで取りあげられた「中日大辞典」（愛知大学編）の編纂作業に協力したスタッフの中に、私の父「欧陽可亮」と「張祿沢」がいます。二人とも亡くなっていますが、両親に会いたくなくると、私はこの辞典を開きます。 関登美子（五八） 兵庫県宝塚市

中日大辞典は上海にあった日本の旧制高等専門学校（後に大学）の東亜同文書院で中国語を日本人学生らに教えていた鈴木拓郎教授（後に愛知大学教授）が一九三三（昭和八）年、質の高い中日辞典の必要性を呼びかけ、編纂がスタートしました。

作業にあたったのは日本人教員十人と中国人講師八人。そのうちの一人が欧陽可亮さんです。唐の時代から書家や詩人を輩出した文人一族の出身で、一九一八（大正七）年、北京生まれ。中国の大学を卒業後、昭和十七年四月、東亜同文書院の講師となり、この辞典の編纂に参加しました。

終戦後、東亜同文書院は中国側に接収され、欧陽可亮さんも「日本への協力者」として厳しい状況に置かれ、混乱の中、一家で台湾に移り、その後、昭和二十九年十一月に来日したそうです。

東亜同文書院の流れをくんだ愛知大学に、接収された辞典の資料カードが中国側から返還されたのを機に、翌三十四年四月から、辞典の編纂が再開されました。

この作業に欧陽可亮さんも戻り、張祿沢さんも加わりました。日中の完璧な北京語が話せる人は少なかった時代。二人は中国語ネイティブの専門家として特に貴重な存在で、例文に関する多くの疑問に答え、どの語彙を収録するかについて助言。

張祿沢さんは愛知大のある愛知県豊橋市で地元の女性に中国料理の講習会を開くなど、文化交流にも励み、編纂作業とともにした愛知大の今泉潤太郎・名誉教授は「学生の指導も丁寧で、人格的にも素晴らしい女性だった」と印象を語ります。

欧陽可亮さんは国際基督教大学などで中国語の教鞭をとり、外務省研修所で日本の外交官に中国語を指導。張祿沢さんも愛知大の中国語講師として活躍しました。二人は日中の文化の懸け橋の役割を果たしたといえるでしょう。

〈戦争を挟んで編纂、日中の文化結ぶ〉

〔注〕産経新聞 平成十六年（二〇〇四年）三月十四日（日曜日）所載。

愛知大学長殿

1999年8月
中日大辞典編纂所

中日大辞典編纂所の将来問題について

かねて本編纂所は表題のことについて審議を重ねてきましたが、このほど名古屋校舎に移設して組織の再編を行い、ひきつづき中日大辞典を編集していくとの結論にいたりました。

ここに報告するとともに今後の措置につきよろしく取り計らい願います。

以上

審議の経過

本編纂所は中日大辞典の編集発行を目的として設置され、当初より限られた人々の自発性により遂行されてきたという歴史経過から、他の研究所と異なる構成と運営によって現在にいたっている。

創立半世紀を経てあらゆる面で変化発展の段階にある本学において、本編纂所も例外ではなく、小職の定年を目前にする現在、より深刻な状況にあるとの認識から以上の結論に達したものである。

移設の理由

1. 中日大辞典は依然として本学の誇る研究業績の一つたる資格を持っており、今後もこれを保持すべきであり、本編纂所はこのために不可欠な存在である。
2. 現在の編集責任者の定年にともない、所員の増強、編集体制の確立が緊急に必要である。
3. 名古屋校舎では現代中国学部が新設され、その結果30名の中国関係教員が集中したことから所員の増強を可能とする条件ができた。
4. 現代中国学部の新設にともない中国関係図書が格段に充実整理され、辞典の編集に必要な参考文献面での不安が解消した。
5. さらに国際問題研究所とくにその所蔵図書の直接利用が可能となる。

以上が主な理由であり、結論的に言えば移設にともなうデメリットはほとんどない。

移設にともなう課題

1. 現在使用している部屋面積は約100平方メートルであり、編集、事務が半分、書庫が半分である。これに相当する広さが必要である。
2. 本編纂所の事務局内での位置付けを明確にすること。(従来、本研究所には事務専任者を配属していない)
3. 中国人専門家の住居を確保すること。
4. 移設は遅くとも2002年を目途とする。

愛知大学長殿

1999年11月

中日大辞典編纂所

中日大辞典編纂所の体制と運営について

名古屋校舎への移転の主旨はすでに申し述べたとおりでありますので、移転後の体制と運営につき申し述べます。

1. 現行規定に定める所員—中日大辞典の編纂に協力する専任教員を拡大する。
所員は各自の専門領域において協力する辞典編集協力委員、また語学の領域における専門性を持つ辞典編集委員のいずれかとなる。
2. 現在、名古屋校舎教員を中心として編集協力委員若干名、編集委員8名程度の内諾を得ている。注：現在は編集委員4名。
3. 上に述べた所員（編集協力委員と編集委員）は専任教員であり、兼務して所員となり編集に参画する。しかし、辞典編集は兼務者のみで進捗するものではなく、従来から中国人1名、日本人1名の専任教員枠を与えられてきた。今後も維持できるように要望する。
4. 編集委員会の方針にしたがって、日常の編集業務には専従者が主としてあたり、編集委員、編集協力委員は講義外に適宜編集に加わる。編集委員長は編集全般に責任を持つ。
5. 近年、各種の辞典はコンピューター編集が主流となり、本編纂所もけんとうしたが未だ結論を得ていない。編集責任者に対する負担が大なる従来のありかたを改める上でも、コンピューター化を図るべく本格的検討をはじめます。

愛知大学長殿

2001年8月10日

中日大辞典編纂所

中日大辞典編纂所の名古屋校舎移設について

かねてより本編纂所の将来問題について審議を重ねてきましたが、1999年8月名古屋校舎を移設して組織の再編を行い、ひきつづき中日大辞典を編集していくとの結論に至り、これを学部長会議に報告し、今後の措置につきご検討をお願い致しました。ここに改めてこのことにつき、ご決定をお願いいたします。

経過

本編纂所は中日大辞典の編集発行を目的として設置され、他の研究所と異なる構成と運営によって現在に至っている。

創立半世紀を経てあらゆる面で変化発展の段階にある本学において、本編纂所も例外ではなく、小職の定年退職を目前にして、今後より深刻な状況に至るとの認識から以上の結論に達した。

理由

1. 中日大辞典は依然として本学の誇る業績の一つたる資格を持っており、今後もこれを保持すべきであり、本編纂所はこのために不可欠な存在である。
2. 現在の編集責任者の定年退職に伴い、所員の補強と何よりも指導体制の確立が緊急に必要である。
3. 名古屋校舎に現代中国学部が設置され、その結果、多数の中国関係教員（日本人、中国人）が集中したことから所員の補強を可能とする条件ができた。
4. 現代中国学部の設置にともない中国関係図書が格段に充実整理され、辞典の編集に必要な参考文献面での不安が完全に解消した。さらに国際問題研究所所蔵の中国刊行物の直接的な利用が可能である。

以上が主な理由であり、結論的に言えば移設に伴うデメリットはない。

課題

1. 現在使用している部屋面積は約100平方メートルであり、編集、事務が半分、書庫が半分である。これに相当する広さが必要である。
2. 本編纂所には従来、事務専任者を配属していないので、事務局内での位置付け（支援体制）を確認願いたい。
3. 移設は遅くとも2002年を目途としたい。

愛知大学長殿

2001年8月
中日大辞典編纂所

名古屋校舎移設後の中日大辞典編纂所の体制と運営について

名古屋校舎への移転の主旨は別紙のとおり申し述べたとおりでありますので、移転後の体制と運営につき再度申し述べます。

1. 現行規定に定める所員すなわち、中日大辞典の編纂に協力する専任教員を拡大する。所員は各自の専門領域において協力する辞典編集協力委員ならびに語学の領域における専門性を持つ辞典編集委員のいずれかとなる。
2. 現在、名古屋校舎教員を中心として編集協力委員11名、編集委員8名程度の内諾を得ている。注：2001年4月現在、編集委員4名。編集協力委員なし。編集専従者1名。
3. 上に述べた所員（編集協力委員と編集委員）は専任教員であり、兼務して所員となり編集に参画する。しかし、辞典編集は兼務者のみで進捗するものではなく、従来、編集の段階に応じて中国人、日本人若干名の辞典編集専従者を置いたので、今後もこれを維持する。
4. 編集委員会の方針にしたがって、日常の編集業務には専従者が主としてあたり、編集責任者は編集全般に責任を持ち、編集協力委員、編集委員は講義、公務外に参加する形態をとる。
5. 現在、凸版印刷（株）より中日大辞典増訂第二版7刷のデータをユニコードに変換し、愛知大学に提供すると申し出を受けており、この方向に沿って実現させていく。第三版編集にあたってこれを利用できるか検討中である。
現在、中日大辞典のデータ（増訂第二版7刷本の本文、索引、付録など全部）は凸版印刷（株）のCTSでデジタル化されている。今、これのユニコード化が進行中であり、近い将来、データバンクとして編集に利用できる基礎ができる予定である。

新版編集について

目的：一般に定評のある語学辞典は一定期間を経れば必ず版を改め、日進月歩の社会変化に対応させて内容を改定し、その結果として名声を博すものである。例えば国語辞典では岩波書店の広辞苑、英語辞書では研究社の英和大辞典をあげておく。

改革・解放を標榜し、社会主義的市場経済を実施している中国は今、急激な変化の過程にあり、社会のあらゆる面での変貌も著しい。また急速な工業化を目指し、都市化が進行する中で、人々の生活意識の変化も起こり、これらは言語の面にも影響を及ぼさぬはずはない。近年、新語辞典を称するものが十数種類も出ているのもその証拠の一つである。

80年代以降のこうした変化は言語面では主として新語に特徴的に見られるがこのような時代相を反映させた辞典は中国語日本語対訳辞典としての中日大辞典に今、強く求められている。

1968年出版の中日大辞典初版が、新しい社会主義中国を理解するためのよき工具所であったように、1986年出版の中日大辞典増訂版は文化大革命期を含む時期を適切に解説した工具所であった。今回の新版は、80年代以降の改革・開放、社会主義市場経済体制の確立に伴う社会変化及びこの間の学術研究の成果——中国百科全書、漢語辞典、漢語大詞典、漢語大字典、現代漢語辞海等は一例一を踏まえて17年目に全面改版を行うものである。

中日大辞典は一貫して常に時代の要請に適格にええられる工具所たらんことを念願して編集してきた。いま計画中の新版は改革・解放を急速に推進し、21世紀に工業国入りを目指す中国を理解するための格好の工具書となるであろう。

内容：現行中日大辞典増訂版の基本性格・枠組み、すなわち

- ①現代中国における文字改革・審音等の規範を拠り所とした正確な簡化字と正音。
 - ②一般語彙から、政経、芸術、科学、技術など。方言、俗語、成語、諺語などから古典語に及ぶ。
 - ③充実した百科項目は中国に関する総合字典的性格を持つ。
 - ④使いやすい漢字部首、また日本語索引は日中辞典の機能を持つ。巻末付録は便利。
- を保持しつつも、全てにわたる見直しと新語等の補充をはかる。また体裁などについても見直す。とくに、
- ①文字を同じくするが音・義を異にするものは別立てとする。
 - ②注音は漢語拼音正詞法にもとづき、改める。
 - ③方言字、古漢字など必要な見出し字を補充する。
 - ④新詞はつとめて採録する。
- などに意を用いる。

時期：1999年末を刊行の目処とする。原稿提出は1997年末とする。

組織：中日大辞典編纂処内に編集委員会を設ける。また編集協力委員を委嘱し、専門分野において協力を得るものとする。

中日大辞典について

1.

1986年に出版してからほぼ2年で1万冊を増訂するパターンで推移してきた中日大辞典(増訂版)は、最近売れ行きの鈍化が目立ち、本年は増刷の年にあたっていたが在庫数が十分にあるため、印刷を来年に延ばすことになった。つまりは、ほぼ3年で1万冊程度にダウンしたことになる。

従来、販売については大修館側に全面的にまかせており、本学としては何ら特別の措置はしてこなかった。しかし、大修館の出版広告中での取り扱いが年々低下した感があり、この点について大修館側に働きかけるとともに、昨年度より辞典編集部独自で専門紙1、雑誌1に年間30万円の広告をだしている。

大修館からはできるだけ早い時期に新版が出るのが望ましいとの表記がなされている。しかし、中日大辞典は1968年の初版印刷から2版(増訂版)までは18年、1986年の2版(増訂版)印刷から2003年出版予定の第3版までで17年である。

初版は解放後の社会主義建設期(1949~1965年)、2版(増訂版)は文化大革命期と調整期(1966~1980年代前半)、予定される3版(新版)は改革・開放期(1990年代以降)を背景にしている。つまり、現行の増訂版は80年代後半からはじまる改革・開放期の状況が極めて不十分にしか反映されていないのである。

一方、ここ数年来新しく出版された中日辞典(小学館中日辞典、同中国語辞典、講談社中日辞典など数種)はすべて1990年代以降の語彙を重点にとり入れている。このことが売れ行きの鈍化の大きな理由の一つであることにまちがいない。

2.

中日大辞典増訂版はB6版(181mm X 128mm)、2500頁であるが、通常の活字ポイントを一段下げたうえ、さらに折り返しを過剰なまでにおこなう等、同一サイズの他の辞書に比較し内容は20パーセント以上多い。これを通常の版組みでおこなえば一回り上のA4版のサイズに適当な分量といえる。これは本学の自費出版物として、営利性を追求せず良い品を安く提供することを第一に考えた結果であり、もともとサイズの点では無理を承知で決定したいきさつがあった。新版ではこの点を改善したいと考えているが、辞典の大型化は必然的に価格のアップにつながるため、今後十分に検討をしなければならない。

現在進行中の中日大辞典 新版(第三版)編集は収録語彙の刷新を重点におこなっている。現行版の体裁(サイズ・ページ建て)の維持を前提とする限り、新語録を採録すると同時にそれと同量の旧語彙(文語・古白語)を削除せざるを得ない。このことは結

果として中日大辞典の基本である現代口語から文語、更に百科項目を含む豊富な内容と離反することとなる。

そのようにならないために、細心の注意を払って現行版の削除をおこないつつ、新語彙を増やすことにしているものの、サイズを一廻り大きくすることなしには根本的解決は難しい。

近年、すべて商品は見栄えが良くなければ売れず、また利用者側の便利さを最大限に追求する傾向が強くなり、中国語辞書においても同じことがいえる。中日大辞典はこの点において異なる傾向をもち、見栄えや利便性自体は悪いことではないが、むしろ内容がよくて値段も安ければよいとしてきた。新版ではこの点を修正し、基本的枠組みの中での見やすさを追求していくこととしている。

3.

新版修訂は1994年（平成4年）に企画され、翌年編集担当専任教員を配属するなどに対応をとった。しかし現代中国語学部、国際コミュニケーション学部の創設に伴う業務及びその他の要因により修訂業務は当初予定に達していない。

中日大辞典は来年1万冊を増刷する予定であり、これはむこう3年間の販売数量にあたる。すなわち、現在の販売状況からみて2002年までをカバーする量である。在庫量をゼロにして新版を発売するのが通例であるとすれば2003年に発行されることが適当と考えられる。

4.

現在、新版（第三版）のための収集新語彙約3~4万語のうち、最低必要なものとしてその半分の1.5万~2万程度を収録することとしている。中日大辞典現行版に採録されている現代語の基本語彙4~5万にこの新語を加え、見出語8万、見出字1万、ページ数1500~2000の現代中国語の辞典の制作を考えてみたい。

この中日辞典は主として中級の層を対象とする性格の辞書であり、中日大辞典の対象とする層との重なりはそれほど大きくはないと推測される。

この辞典の作製には一定の時間がみこまれるが、基本的な語彙と新語については現在進行中の中日大辞典新版編集における作業の成果を最大限に活用することが可能であると見え、今その予備調査をおこなっている。

なお、大修館側はかねてより現代語中心の学習者むきの中日辞典を提案してきた経緯がある。

中国語辞書のマーケット

現在の中国語学習者は、①高校生、②大学生〔a〕選択（第二外国語4~6単位）、〔b〕専攻（第一外国語8~16単位）、③一般（既習者）の3種に分かれる。①が現在300校、

15,000人程度との数字があるが、履修単位数は大部分が2~4単位で、8単位以上はごく少数である。②③についてはデータはないが、数の上では、②の〔a〕が圧倒的な数（おそらく数十万人）であり、そのことは辞書が4、5月の販売がその年の売り上げ部数の大半を占めることから裏付けられる。

学習到達度については、①、②〔a〕、③の一部が初級、②〔b〕、③が中級となる。

1. 主として中級の層を対象としたものは現在3種類あり、この既存の辞書の数字をみると、

小学館『中日辞典』	2~3万部/年	1992年初版
光生館『現代中国語辞典』	2~3千部?/年	1982年初版
講談社『中日辞典』(12月発売)	?/年	1998年初版

のようである。英語以外の外国語辞典の特徴として、ある外国語の同一クラスの辞書は、1種類が売れるとその辞書が「一人勝ち」し、他の辞書は売れなくなるように、現在小学館が売れることによって光生館が売れなくなったのもその典型例と思われる。

2. 中級の層を対象とする辞書の判型・規模・定価などは、

①小学館『中日辞典』	B6 (181mmX128mm)・2114ページ・6800円 親字1.3万・見出し語8.5万
②光生館『現代中国語辞典』	B6 (181mmX116mm)・2269ページ・6300円 親字1.2万・語彙13万
③講談社『中日辞典』	B6・2000ページ・7000円 親字1.3万字・見出し語8.6万

・判型はB6が多い。中型の辞書の最も典型的な判型であり、取り次ぎや書店の事情を考えると、一番扱いやすい判型である。①②③は背(縦)はほぼ同じ寸法であるが、幅(横)は1cm余り①と③のほうが長い。(『中日大辞典』と同じ)。見やすさと文字数の収録能力(組み版代と収録文字数)から言えば①③のほうが有利。

・定価は7000円前半である。何ととっても一番に問題になるのは定価である。ここ2~3年の間に①②それぞれ大改訂すると思われるので、改定後の値上げがあったとしても、やはり7000円代の前半の攻防となる。

・収録、親字及び語彙は、少しでも他の辞書を上回っていることが有利である。特に親字は載せていなければそれまでになってしまい、また初級に比して収録語彙(主に熟語)の数は落とせない。

3. 以上は大修館側の提供によるデータをもとにまとめた。

8-3 b (3)

1999年7月
中日大辞典編纂所

1998年度 自己点検・評価について（報告）

(1) 目的と事業活動

◆現状の説明

中日大辞典編纂所の設立は東亜同文書院大学の中国研究・教育と分かちがたい。上海にあった同文書院では1932年頃より華日辞典編集のため原稿カード作りが始まり、敗戦時には約14万語に及ぶカードが敵産として接収された。愛知大学は創立後、この原稿カードの返還を中国側に働きかけ、その結果、1954年12月、カードが返還された。関係者の協議の末、その付託を受けた本学は1955年4月1日華日辞典編纂処を開設し、辞典の編集が開始された。その後13年かけて1968年『愛知大学中日大辞典』が大学の事業の一環として刊行された。

1975年新版改訂のため、編集用務を再開し、中日大辞典編纂所を発足させた。13年の編集期間をかけ『中日大辞典』は1986年増訂第二版を刊行し、以後本年で第7刷を印刷する。初版出版冊数合計55,146冊、増訂第一版出版冊数合計17,000冊、増訂第二版出版冊数合計70,432冊、総出版合計142,578冊となる。

また、1999年3月に韓国の進明出版社との間で『中日大辞典韓国語版』の出版契約が整ったことは特筆すべきである。韓国語版は2002年の出版予定とされる。

(2) 組織

◆現状の説明

- ①所員兼編集委員数・・・4名（現代中国語学部：今泉潤太郎・安部悟・法学部：陶山信男・国際コミュニケーション学部：荒川清秀）
- ②研究員数・・・・・・2名（近田尚己・山田克利）
- ③補助研究員数・・・・2名（吉川 剛・斉藤正高）
- ④編纂所の運営状況
- | | |
|------------|----------|
| 編纂所所員会議開催 | （年間2～3回） |
| 編纂所運営委員会開催 | （年間3～4回） |
| 編集委員会開催 | （随時開催） |
- ⑤経常予算及びその執行状況
- 予算 18,780,000円、執行額 12,653,195円
- ⑥特別事業予算及びその執行状況
- 『中日大辞典』増刷・・・2～3年に1回実施、刷数10,000冊
同上印刷費・倉庫代・・・1,860万円

⑦図書・資料・機器備品の整備状況と利用状況

〔蔵書〕 約 10,100 冊

〔ソフト〕 OFFICE97・CHINESE WRITER V4

〔備品〕 パソコン 5 台、机椅子セット 10 セット、書棚 22 個、
スタンド 5 個、書類キャビネット 4 個、応接セット 1 セット
扇風機 2 機、エアコン 2 機

⑧学生の編纂所利用状況 ・・・・大学院中国研究院生 年間延 50 人

⑨辞典編纂所資料展参観者 ・・・・年間約 100 人

⑩学外機関との交流状況 ・・・・中央大学人文科学研究所との刊行物交換。
中国をはじめ世界各国の主要大学図書館等への『中日大辞典』の寄贈。
現在までに 9 か国 5,000 冊 (中国を含む)。

◆点検・評価及び長所と問題点

①性格

学内研究機関としての中日大辞典編纂所の基本性格は、創立から現在まで一貫して『中日大辞典』の編集にあり、研究も基本的にはこの範囲に限定されたものである。この基本的性格に基づき辞典の発行に責任を持つ中日大辞典刊行会が当初から設置され、編纂所と刊行会は車の両輪の役割を分担してきた。

しかし 1992 年刊行会が解散された結果、刊行会の役割にも編纂所が持たざるを得なくなり、編纂所は辞典を編集し、かつ発行するという特殊な位置づけがなされている。

②専任者の必要性

本編纂所は編纂専任者がいない。現在まで教授会構成員(専任教員)が編集委員を兼務して授業時間外に編集業務にあたる態勢がとられてきた。このため不可避免的に一般の教員、研究所員と異なる勤務態勢を強いられることとなった。従来と異なり、現在なにより辞典編纂に携わる専任者が必要とされる状況があり、この確保ができない以上、継続して『中日大辞典』を発行することが困難となった。また編集上、特定の分野を担当する中国人専任者が必要であるが、これは 1995 年より実現し、現在に及んでいる。

次に、他の研究所等に配属されている専任職員も、本編纂所にはいない。本編纂所の性格からみて専任職員を置く必然はなく、臨時職員で十分である。ただし、刊行会業務は本部事務として専任担当者を明確に定めてもらいたい。

③所員制度のあり方

本編纂所の業務は『中日大辞典』の編集に限定されるため、所員資格の条件におおのずと制約が生じ、本学専任教員で、中国語担当者の中から所員が選ばれてきた。この点の再検討が必要である。

◆将来の改善・改革に向けた方策

①本学における中国研究・教育は最重点の項目として位置してきた。本編纂所の『中日大辞典』もその内の一つとして一定の役割を果たしており、相応の評価を得てきた。今後、ひきつづきこれを堅持するか否か、また堅持することができるかどうかの問題が提起されている。

発足以来、辞典編纂に責任を持つ者は、自ら十分に自覚してこの任に当たってきた。逆に言えば、『中日大辞典』の発行はこのような人と体制を得なければ成り立たないとも言える。現在、学内外の状況は一変し、従来の体制・人を維持できない現状に立ち至った。これが従来の辞典編纂所の在り方に根本的な修正を加える要因である。

全学再編成がなされ、現代中国語学部も設立され、多数の中国関係の専任教員がここに集中されている現状を考える時、広く現中学部を含む全学から所員を募り、底辺の広く厚い編纂所とすることが必要であり、また可能である。これに関連して編纂所の性格、場所、事業内容についての検討を早めて成案を得る必要がある。

②電子機器による情報処理は日進月異、まことに目を見張るものがあり、これとともに各種の電子辞典が無数に出版されている現在、『中日大辞典』においてもこの問題は避けて通れない。これは編集手法だけでなく、編纂所の事業内容にも及ぶ性格の問題である。これについての検討を更に進める。

(3) 研究活動

◆現状の説明

現在、『中日大辞典』第三版（新版）のための作業が進行中であるが、種々の理由で当初の計画に遅れが生じている。また近年、日本国内でも新しいタイプの中日辞典が数種類出版された影響を受け、『中日大辞典』98年度版は販売数をかなり減らしている。中国の急激な変化を背景として中国語日本語対訳辞典は中国の社会情勢を敏感に反映する面を持つ。このため新たに『中日大辞典』に採り入れる新語を中心とした語彙蒐集・研究・整理を進めている。

『中日大辞典』増訂第二版の特色

1. 14万語をこえる広範な単語、熟語を収める。
2. 現代口語から文語、古白語、方言、成語、諺、日常用語、新語、百科項目まで豊富な多彩な語彙。
3. 語釈は正確で詳しく、例文は常用され、典型的なものが選ばれている。
4. 文法説明と用法説明を多く取り入れ、同義、反義、儿化や量詞などもつけ、語の硬度、褒義、貶義、敬語などにも目配りしている。
5. 語釈、用例中の難読字、多音字にはできるだけ注音を施している。
6. 中国特有の百科項目には詳細な注釈を施している。
7. 豊富な情報を引きやすくするために、紙面の組み方に工夫が施してある。

◆点検・評価

第二版出版以来、すでに13年を経た。この間、中国は改革・開放の時代に入り、大きく変貌を遂げた。言語面でも、1996年「現代漢語詞典 修訂本」が出版され、これの成果を取り込んだ『中日大辞典』の新版発行が焦眉の急となった。

◆長所と問題点

『中日大辞典』は当初より日中双方の教員が編纂に参加したが、改訂作業の続く現在も、中国人学者、研究者を招いて編集上の協力を得ている。今後もこれを維持する必要がある。ただ、招聘の手続上、現在種々の問題があり、この改善策が必要である。

◆将来の改善・改革に向けた方策

研究活動は『中日大辞典』の編集、出版に限定されたものとなるため、毎回、部分的に訂正修正を加えて増刷される『中日大辞典』そのものが研究活動の成果であるとしてきた。今後はこれに加え広く辞書学的課題について研究成果を発表する機関誌の発行を検討中である。

(4) 友好・交流活動

◆現状の説明

『中日大辞典』は、出版目的たる日中学術文化交流のため、初版以来、これまでに約5,000冊を中国側に贈呈し、その一役を果たしてきた。

1968年	1,200冊	中国日本友好協会
1986年	1,000冊	中国国家教育委員会
1988年	1,000冊	中国国家経済委員会
1994年	1,000冊	中国日本友好協会
1995年まで	約500冊	中国大使館等
合計	4,700冊	

◆点検・評価

愛知大学は今後も機会あるごとに広く社会（中国を含む）に対し『中日大辞典』の贈呈をおこなう社会的責務を持つと考える。現在まで本学を訪問された中国人各位、各代表団に贈呈したり、訪中する本学代表団や個人が中国側に差し上げたものなど多数にのぼる。また、中国以外の国から訪問者にも贈呈されており、これらの合計で年間約100冊に達する。『中日大辞典』はその誕生から日中友好の絆に結ばれており、まさに”日中友好の船、文化交流の懸け橋”である。

◆長所と問題点及び将来の改善・改革に向けた方策

愛知大学の誇る学術研究上の業績の一産物として『中日大辞典』は今後も日中間の文化交流に役立てる。これからも機会あるごとに中国側へ贈呈していく必要がある。

今泉潤太郎様

やっと記録的な猛暑も去り、初秋の候となりました。今年の暑さは老人には特別にこたえました。最後の学徒出陣として18歳で初年兵として招集され「真夏にストーブをたく」という暑さで有名な南京で泥水をすすりながら過した日々を想い出す毎日でした。しかし「大汗淋漓」の中で今泉さんが書院基金の受賞者に決定したとの報に接した時には暑さも忘れる喜びを覚えました。9月29日に授賞式があるとのこと、中島寛司君より小生も是非出席してほしいとの要望がありましたが、あいにく当日は通院日に当たりますので、やむなく欠礼し、直接お祝いの言葉を差し上げることができないのが残念です。この手紙を以てお祝いの言葉に代えさせていただきますので何卒ご了承下さるようお願い申し上げます。

さて「COEプログラム」「特色ある大学教育支援プログラム」の指定は愛大の多年の地道な努力が結実し、誇るべき業績であります。しかし正直に言ってこれが愛大の名を高める永久の手段として利用できるか、ということになりますと、必ずしも“そうだ”とは言い切れません。毎年毎年、新しいプロジェクトが文部省から指定されるからです。その点中日大辞典は“中日大辞典を発行した愛知大学”として日本でも中国でも知られています。どうか今後とも末永く中日大辞典の改訂版を発行し“中日大辞典の愛知大学”という言葉が国内外で語り継がれることを願っています。日本で唯一世界の辞典を発行することをいつまでも続けてほしいのです。これに対しては資金面、人員面から反対の声が出てくるかもしれませんが、今後生存競争ははげしくなっていく中であって“中日大辞典を作った愛知大学”という言葉こそ、最も大切に守るべき財産であると信じています。

創立当初のことに触れましょう。昭和22年正月過ぎ予科の授業が始まるのに先立って書院出身者に本間先生と小岩井先生からお手紙があり、早目に学校に集まるよう呼び出しがありました。大学に来てびっくりしました。教室には机や椅子もないのです。私たちは吉田公園にあった旧陸軍の倉庫から机や椅子を大八車にのせて、北風に吹かれながら、授業開始に間に合うよう毎日何回も大学に運んだのです。腹を空かせながら小池の坂を大八車で運ぶのは大変な作業でした。これは予科生として愛大に入った書院生だけが知っている話であり、4月に学部生として入学した方々は知らない話です。

さて3月初め短い予科の3学期が終わりました。何と予科1, 2, 3年生の20%~30%が落第したのです。成績発表の夜、本間先生と小岩井先生のお二人がお揃いで一部屋一部屋寮の部屋を深夜まで回られ、“愛大は全国のトップ大学であらねばならない。だから敢えて非情な措置をとり、語学的不合格者は全員留年してもらうことにした。一流大学建設のため諸君どうか頑張ってください”と落第生を激励されました。こうした経験があるだけに、私たち愛大の予科に入学した書院生は、愛大が中部の地方大学である現状に悲憤を覚えているのです。それだからこそ、中日大辞典をバネに愛大が全国区の大学になり、昔の書院同様、全国から英才が集ることを願っているのです。

今泉さんの話の中に“辞書の仕事をやると盲目になるか早死にする”とありましたが、私も視力がにぶり眼鏡を替えるための眼鏡屋に“いくら補正しても眼自体が衰えているので0.4以上にはならない”といわれ、“我老了”を痛感しました。しかし弱い視力を奮い立たせながらこれからもカード作りに精を出すべく頑張る覚悟です。今後ともよろしくご指導下さるようお願い申し上げます。まだまだ長生きするつもりですが、万が一ということもあります。その節は次の3カ所に新しい辞典の送付をお願いします。

- ① 辽宁省沈阳市和平街 中国医科大学日语组 全体老师
- ② 南京市北京东路30号 南京外国语学校日语组 全体老师
- ③ 〒247-0033 横浜市栄区桂台南1丁目11番12号 福原昭二 tel (045)892-4668

以上何かとお気にさわることを書いたかとは思いますが、年寄の冷水としてご寛恕頂ければ幸甚です。御健勝をお祈り申し上げます。

2004年9月

松山昭治

[注] 松山昭治氏の書信。松山氏は東亜同文書院大学45期入学、愛知大学旧制法経学部を卒業後、中部日本放送(株)記者、同論説委員長。定年後は中国医科大学を始め上海交通大学などで日本語、日本事情の講師を勤めた。著書に竹内書店新社『バンドの遺言状』など。

思
う

億単位の金がかかるが、今世紀中に

「中日大辞典は十三年の歳月をかけて一九六八年に初版を出し、五万冊を発行。一九八七年に増訂版を印刷し、二年ごとに一万冊の増刷を続け現在約八万冊になります。増訂版は本文が二千五百二十ページ、十四万三千語を収録していますが、増刷ごとにミスや表現に工夫するなど手直ししています。これまでの十三万冊のうち初版千二百冊は、尽力頂いた故郭沫若中国科学院院長に贈りました。ちょうど長崎国旗事件など日本に関心が高まった時期で、中国各地の日本語に関係した研究所などで評判がよく対日関係者は皆知っています。増訂版も四千冊贈りました。一時は海賊版も出るほどで、敦煌の研究所でもこの版を使っています」

「九六年に大学が創立五十周年を迎えるので、この夏、記念事業として全面改訂することになりました。この大学は戦前、上海にあった東亜同文書院大学の学長、本間喜一さんから同大教授、学生が集まり作ったもので、東亜同文書院時代の一九三二年に辞書編纂の機運が広がり、約十五万枚カードに七万語が採集されました。戦後、国民党の国立翻訳館に木箱四、五個に入って保存されているのが分かり、郭沫若さんの協力でこの大学に贈呈されました」

「しかし、新政権後は国民党時代の言葉が排除され、文字の形、内容、意味、発音記号などが一変、使い物にならなくなった。幸い四六年から中国と交流があり、新中国の新聞、月刊などの雑誌、学術論文集を資料に片っぱしから語彙を採取。数十万枚のカードから十一万語を約二千ページに収録したのが初版でした。文化大革命後、簡化字が第二簡化字になり八千八百字と四倍に増え、増訂版にしました。語彙も三万語増えています」

「辞典作りは金食い虫で、金があるのすごくかかる。初版の時も『いいことかもしれないが、金がかかり過ぎ』と猛反対があったほど。略字作るのに一本一万円もします。それが一万字もあるのですから。しかし、出版社の好意でなんとか出せました。今回は全面改訂するので、億単位の金がかかると思います。また、最近是中国でも復古調が目立ち同文書院時代のカードも役立ちそうです」

「大学卒業の時に『職なかったら残らんか』と言われ、初版から辞典作りしてきましたが、中国の日本語教育学会には五、六百人のメンバーがあり評判が良く、中国へおみやげに持って行く人も多い。大学には毎年、中国から十人余の研究者が来校し、五、六十人見える代表団には一冊ずつプレゼントしています。日本でもここ数年やつと辞典を使って中国語を学ぶ時代になりました。この辞典は研究者用なので、初学者向けや発音辞典も出したい。大学は四年後に、と言っていますが、専任四人ですから今世紀中に出世れば、でも、元気で最後までやれるかどうか。大学院に研究者がおり、後継者は育つ

8-3 d (1)

と思っております」

今泉 潤太郎さん

いまいずみ じゅんたろう

一九三二年豊橋市生まれ。愛知大学文学部中国文学専攻卒。五十五年から同大華日辞典編集部嘱託、教養部助手、講師、助教を経て七十六年から教授。辞典のほか著書に「21世紀への日中関係」「中国語簡化漢字要覧等」「中文会話教科書」。

(聞き書き・星出 敏男)

〔注〕毎日新聞(一九九五年十二月二日 家庭面) 所載。

前略

先般は御多用中の折、取材に応じていただきありがとうございます。

その後、中日大辞典について、今泉教授に取材、家庭面に掲載しましたが、読者から同封の手紙が届きました。

皆様の励みになればとお送りします。

今泉先生にも宜敷くお伝え下さい。

石井様

平成七年一月十一日

星 出

前略

十二月二十二日の朝刊に「中日大辞典」に関する記事があり思わず筆をとりました。私は現在二十九才の子育てに忙しい主婦です。一九八三年に群馬県高崎市に開校された新島学園女子短期大学国際文化学科・中国語文化圏コースに一九八四年に第二回生として入学しました。開校二年目のほとんど無名の学校で中国語文化圏コースの学生は確か四〇名で私は期待より不安と絶望に近いものを持っての入学でしたが、何と中国語だけで週に十時間(単位)はあり、その他中国語文化圏の文化や歴史を学び、(指導下さる先生方にも恵まれ)学ぶにつれ中国語が面白くなって来ました。

そして入学して一ヶ月ほどして中国語の辞書の使い方を教授され、その時に勧められた辞書のひとつに「中日大辞典」がありました。

私はどうせ手に入れるならとその辞典を探して何軒かの書店を歩きましたが、県内で一番大きいと言われる所ですら無く、結局某有名書店でとり寄せてもらう事となり、二週間ほど入荷したと言う連絡を受けた時は、すっかり有頂天でこれで中国語はマスタ

8-3 d (1)

—できるなどとうぬばれたものでした。そして、「見つかって良かったですね、この本はどちらで紹介されたのですか」「愛知大学中日大辞典編纂所」という聞きなれない出所にきつと、とり寄せるのに苦労されたであろう店長も喜んでくれたのを印象に残っています。

初心者の私には少しぜいたくな買い物だったかもしれませんが。他の中日辞典より価格も高く、毎日持ち歩くのには重かったかもしれません。しかしその辞典はいつも私と共にいて、毎日の中国語の学習になくはならないものとして在りました。

無名の短大で中国語を勉強していると人に言うと、好奇と冷笑の視線を受けましたが、私も多くの友人も中国語を楽しんで喜んで学び、充実した二年間を過したと思えます。今でも友人たちの中には中国語の学習を続けている者、父親の工場で働く中国や台湾からの研修生たちのために役立てている者、後輩の中には留学してそのまま大陸で仕事に就いた者もいると聞きます。

友人のひとりとは卒業してから「中日大辞典」を購入したと言っておりました。

私は記事を読みあの毎日辞典を片手に、読み方、四声、意味を調べた学生時代を、友人のために難しい字を引いたあの少し優越感を持った時を、懐しい先生方、友だち、を思い出しました。そして何よりあの辞典には「大辞典」と言われるだけの歴史と価値がある事、今でも作り続けられている生きたものであると知り、感動にうち震えています。

先日、友人から中国語を勉強してみたいと言われ、確かに中国語を学ぶ人も増えて来た、辞書をはじめ、中国語関係の書籍が見られる様になり、喜ばしい事だと思えます。

私は「中日大辞典」の発行数の少なさと「研究者向け」とあったのに驚かされました。初心者の私には辞典を引いて決してがっかりさせられる事の無いものだったからです。ですから願わくば「研究者用」などと言わずに中国語を学ぶひとりでも多くの人が出合える事を活用される事を思わずにいられます。

そして何よりこれもこの「大辞典」が発行され、改訂編纂の作業が続いて守られ、まず様に祈らずにいられます。

まとまらない私事ばかりでしたが、記事を読み本当にうれしくなりました。感謝いたします。

そして何より愛知大学の先生方のご活躍を期待いたします。

かしこ

一九九四年十二月二十二日

阿部 尚子

〔注〕前掲の記事を読んだ一読者から新聞社に寄せられた手紙。石井学長に転送されたもの。

第3版の出版に向けて

今泉潤太郎 (『中日大辞典』前編集委員長)

インタビュアー 安部 悟 (愛知大学現代中国学部助教授)

■第三版の出版に向けて

安部 八六年に増訂版が出版され、翌年の八七年には増訂第二版がまたすぐに出版されるわけですが、この間の事情は、先生が書かれた「増訂版の補訂に当って」でも簡単に触れられてはいるのですが、事情を知らない方にも、今のお話でなぜ第二版を出さざるを得なかったかということがよく理解できたのではないかと思います。こうして出版された増訂第二版も好評で、初版に劣らぬ売れ行きを見せたようですが、その増訂第二版も出版からすでに一五年以上の年月が経ち、時代の変化や要求に対応できなくなってきたおり、第三版の出版が強く求められるようになりました。こうしたニーズにあわせて、また辞典編纂所の移転とそれに伴った新体制への改組などを経て、これまで少しづつ準備を進めてきた新版出版のための編集作業を本格化させ、愛知大学の戦略的事業項目のひとつとして、第三版の刊行に全力を注ぐことになったわけです。新体制では、中日大辞典編纂所の所長および編集委員長は私が務めさせていただくことになり、先生には編集主幹として引き続き第三版の編集に携わっていただくことになっております。編集主幹のお立場から、第三版出版に向けての抱負をお話いただければと思います。

今泉 第三版は新しく成立した中日大辞典編纂所での編集となります。編纂所の新体制は安部先生が所長で、現代中国学部の教員を始めとして、名古屋、豊橋両校舎の中国語教員あるいは中国関係の各分野の教員が所員となり、スタッフは飛躍的に増強されたと思います。また編集も、初版の時の編集形態に戻り、中国語専任の先生方が編集委員、それから中国関係各分野の先生方が編集協力委員という体制で行います。

内容的には先ほど言ったような点が主となりますが、ポリュームを増やすことなくいかに充実させるかということになると思います。第三版は当然初版、増訂版、増訂第二版と続いた基本的な性格をさらに徹底するということになると思います。

それから中国ではその後もさらに辞書編集に関するいくつかの政策的な決定がなされています。例えば、漢字の部首の数をいくつにするとか、どういう形の部首を残すとか、あるいは辞典の約物といましようか、記号類、符号類ですね、こういう場合にはこういう矢印を使うとか、そこまで中国は次々に決めてきています。『現代漢語詞典』の二〇〇二年版はそれに従って編集されています。こういったものを第三版に取り入れるかどうかは、最終的に編集委員会で決定されておりませんが、中国でいうところの現

代漢語をできるだけ正確に反映させた辞典にするという基本の考え方は変わりません。例えば香港や台湾の語彙は港台という括り方で方言として入れることも考えております。いずれにしても、従来の基本的な性格を生かして現代の需要に合わせるという点では、愛知大学の『中日大辞典』ということで一貫させたいと思います。

それから増訂版が出た過程でCD-ROMなど、電子版の話もありましたが、これについては編纂委員会でも一定の方針が立てられるだろうと思います。私の今の仕事は、『中日大辞典』第三版の編集を責任もつてやることで、残された時間も多くはないので、できる限りこれに集中したいと思います。

『中日大辞典』は、初版以来多くの利用者の支持があつて今日まで存在していますが、とりわけ今度の第三版の出版に関しては、非常に熱心に支えてくれる東亜同文書院や愛知大学の卒業生の方々がおられます。特に松山昭二氏は、『中日大辞典』所収の語彙が、人民日報などで今どのように使われているかという情報を、長年にわたり多くのカードにして送って下さっています。その他いろいろな方々の協力もありますので、現在の需要に応えられる新しい第三版をできるだけ早く完成させたいと思っています。『中日大辞典』の編集は、愛知大学創立一〇周年記念事業として始まりまし、節目ということ言えば、第三版の出版が六〇周年記念に間に合えば、これは願つてもないことだと思ひます。ただ、それは大変厳しいですけれどもね。

安部 私自身、外大の中国語科に入学したのが七四年で、その時に購入したのが『中日大辞典』の初版本だったのをよく覚えています。それ以来の愛用者です、この辞書の恩恵を大いに被つた一人です。今は逆に、それを出版する側に身を置くことになつたのも、きつと『縁がある』からなのだろうと思ひます。前回増訂第二版の出版には参加できませんでしたが、今回は第三版の出版に向け、これまで鈴木先生や今泉先生がやってこられた仕事とその思いを引き継ぎ、微力ではありますが鋭意努力したいと思つております。第三版を、従来の特徴は残しつつも可能な限り現在のニーズに合わせてより充実したものにし、これまでこの『中日大辞典』を利用してくださった多くの方々や、第三版の出版を心待ちにしておられる方々のためにも、一日も早く出版したいと考えております。本日は長時間にわたり、『中日大辞典』に纏わるさまざまなお話をお聞かせいただき、どうもありがとうございます。

(二〇〇三年六月二日)

[注]『中国語』Vol.18 (二〇〇四年三月二〇日) 所載。『中日大辞典と私』より抜粋。

中日大辞典的编纂经过

今泉 润太郎

下面介绍同文书院编写华日辞典的经过。

在1933年前后,同文书院华语研究会一该校汉语教研室一决定编写华日辞典的计划。

在中国历来的学者中有重文言、轻口语的习惯。因此,中国学者对当代汉语的研究是不足的,关心也很低。

中国出色的辞书《辞源》在1915年问世。但这是以文言为对象的辞书。作为汉语口语辞典最早的大概要周铭三编《国语大辞典》(不到三百页的小型辞书)问世于1922年,《王云五大辞典》是1930年,真正的汉语辞书《国语辞典》(中国大辞典编纂处编)第1分册的问世已是1936年。

汉语辞书(内容是汉日词典)的出版莫如说日本更早。在1910年代初期就已有石山福治编《中国语辞典》了。其后,1928年《井上中国语辞典》问世。但这些都就连学生使用起来都觉得不满意的。

这样情况下,原来的同文书院平时有十几名中日两国汉语老师,有能力编写出汉语辞书,也感到有其责任。编写华日辞典工作由铃木择郎教授指导。当初的编写方针是:以《井上华语辞典》为起点,补充必要的词汇,编写出能够适应现实需要的汉语辞书。

编写业务都是由全体人员利用教学以外的时间进行的。败战后,被作为敌产由中华民国政府接收时,原稿卡片约有14万张,词汇数有7,8万条。

新中国成立后,1953年爱知大学本间喜一校长(原同文书院大学校长)跟铃木教授热心说要回辞典原稿卡片。铃木想起在交原稿卡片时,对接收委员郑振铎先生口头提出的愿望:等条件允许时,我们想用我们的双手完成这本辞典。

以此,本间试探性地提出了请求。请求信委托日本中国友好协会内山完造理事长送交中国科学院郭沫若院长。结果,遵照“为了中日文化交流,将原稿再赠送日本人民”这一宗旨,1954年,中国人民保卫世界和平委员会刘贯一秘书长托付回国船兴安号送来了原稿卡片。接收单位日中友好协会召集了原有关人员进行协商,最后决定委托原有关人员多,并对完成这个有意义的历史性的事业抱有热情的爱知大学。

这样,1955年爱知大学创设华日辞典编纂处就开始编写工作。那年在爱知大学刚毕业的我本人能有机会参加这个工作。以后我直到现在从事着编写工作来的。

1967年,用了12年的时间,从同文书院开始编写的时期来算够34年,才能出版了《中日大辞典》。

在编写期间,中国方面给予我们很多支持。1956年,我们收到了由中国人民对外友好协会赠送的《同音字典》、《中国语文》等其他资料。1955年,中国学术考察团冯乃超副团长、1958年,中国法律家代表团韩幽桐团长等访问我校并给予我们鼓励。1966年,郭沫若先生还写给我们“激浊扬清”四字给予我们鼓励。

8-3 d (3)

这《中日大辞典》是从中国送到日本、从同文书院继承到爱知大学而完成的辞书。它是中日学术合作的一个模特儿。

我相信《中日大辞典》是不但作为一个有价值、有意义的工具书，还作为中日友好的船、文化交流的桥。1986年出版了第二版，正在进行要明年秋天出版的第三版印刷工作。

〔注〕日中研究者による東亜同文書院研究シンポジウム（2007年7月28日、愛知大学記念会館）における報告の抜粋。

まえがき

2006年の愛知大学創立60周年記念事業の項目に『中日大辞典』の新版刊行が採用され、あらためて新版編集委員会が編纂所内に組織された。

新版編集委員会委員長 安部悟、委員 顧明耀・黄英哲・藤森猛・吉川剛、編集主幹 今泉潤太郎。

第二版刊行中も編纂業務は継続していたが、以後、鋭意改定作業につとめ、漸くここに版をあらため、『中日大辞典』第三版を出すに至った。とくにこの間、安部悟氏は中日大辞典編纂所長として指導力を発揮し、この辞典の完成に尽力された。

20世紀末から21世紀10年代にかけての20年間、変化の著しい中国の相貌がどのように語彙の面に現れているかを知る為の手懸かりを提供するのは、この辞典の大きな役割である。第三版は新語と百科項目の充実と一段と意を用いた。なお、初版以来の『中日大辞典』の性格は堅持したが、親字・見出し語・訳語・用例の全てにわたって見直した。辞典の構成上で変わったのは、異なる字音を有する親字の扱いで、集中を廃し字音別にそれぞれ立項した点である。詳しくは凡例4を見られたい。

第三版の作製に際して多くの人々から長短期間にわたる様々な御支援御協力をいただいたことに対して、ここに心から感謝の意を表すると共に以下に記してその労を謝する。

中国では主として愛知大学協定校の教員諸氏から、語彙の選択・発音の表記・新語の採録など編集上多岐にわたり専門的な御助力を得た。

王華馥氏・劉叔新氏（以上南開大学）・劉青然氏・張大誠氏（以上北京語言大学）・李宗惠氏（中国人民大学）。

特に最終段階に至り編集・校正に於て顧明耀氏（西安交通大学）の6年間にわたるたゆまぬ努力に対し深い謝意を表すものである。

学外では舩越國昭氏は校正に、竹村光葉氏は校正・日本語索引作成に御協力いただき感謝の意を表す。

とくに松山昭治氏は十数年にわたり自発的に大量の新語資料カードを作成・提供されたが、刊行を目前にして惜しくも逝去された。衷心より感謝すると共に謹んで御冥福をお祈り申し上げる。

また近田尚己氏・山田克利氏・前田克彦氏の長年にわたる編集協力・辞典本文及び付録の校正に対して、感謝の意を表す。小川朋子氏・村司香子氏の最終段階に於ける印刷・校正業務の正確な処理に対して感謝の意を表したい。

終わりに、印刷・製本の凸版印刷の関係者各位に対し謝意を表す。また大修館書店編集部黒崎昌行氏には第二版・第三版と長年にわたりお世話になった。心から感謝の意を表す。

1930年代初の東亜同文書院に於ける中国語辞典編集の計画はあらためて愛知大学に引き継がれ、1968年に初めて『中日大辞典』として達成された。刊行以来40余年にわたり、『中日大辞典』は幸いにも広く世に受け入れられてきた。この第三版の刊行が21世紀に飛躍せんとする愛知大学の発展に些かなりとも寄与する所あれば、初版以来ひたすらこの辞典の編集に携わってきた者として、これに過ぎる喜びはない。

2009年11月15日

編集主幹 今泉 潤太郎

〔注〕 第三版の序。

——特集●辞書のゆくえ

『中日大辞典』第三版の編集を終えて

愛知大学『中日大辞典』第三版の完成を間近にひかえ、編集所の主要編集スタッフが集まり第三版編集の苦労話や理想とする中国語辞典について、さらには紙辞書か電子辞書かといった辞書の将来をその豊富な経験に基づき、時には裏話などを交えて大いに語り合う。

今泉潤太郎（愛知大学中日大辞典編集所編集主幹）

× 顧 明耀（同編集所編集委員）

× 吉川 剛（同編集所編集委員）

司会 安部 悟（同編集所所長）

安部 待望の『中日大辞典』第三版がいよいよ年内完成の運びとなりました。私は、今泉先生の後を継ぐ形で二〇〇三年から中日大辞典編集所の所長となり、力不足は承知の上でしたが、第三版を何としても出版したいという一念でここまで来ました。そして今やっと年内完成の目処が付き、これまで第三版出版のために「尽力いただいた多くの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

本日は、編集作業を終え、現在はその校正作業に追われている先生方に、お忙しいなかお集まりいただきました。実は今回、『中日大辞典』第三版の完成を目前にし、『中国語』で辞書特集を組むことになり、その編集を任されたものですから、本日は私が司会を務めさせていただきます。先生方には、『中日大辞典』に関することもそうなのですが、さらにそれを押し広げ中国語辞典の現状と将来といったようなテーマでお話いただければと思います。所長の立場から言いますと、『中日大辞典』のことをできるだけお話しただけ、これを大いに宣伝したいところですが、そういうわけにもいきませんのでよろしく願います（笑）。

ではまず、当初からこの辞典の編集に携わってこられた今泉先生に、『中日大辞典』の歴史を簡単に振り返っていただきたいと思います。

■華日辞典編集処の設立

今泉 『中日大辞典』は一九六八年二月に初版が出版されるのですが、その編集が本格化したのは、一九五五年四月に愛知大学に華日辞典編集処が組織されてからで、出版までに十年以上かかっています。編集委員長は鈴木拓郎先生で、私はちょうどその三月に愛知大学を卒業し

たものですから、そのまま専任スタッフの一人として参加することになりました。私の最初の仕事は、中国語から返還された十四万枚のカードを整理することでした。これは華日辞典カードと呼ばれるもので、愛知大学の前身である東亜同文書院時代に作成が開始されました。鈴木先生によると一九三三年に華日辞典の編纂が発起されたそうですが、その頃から日本の敗戦までカード作成は継続され、敗戦と同時に当時の中華民国政府に接收されてしまいました。その後、東亜同文書院関係者により一九四六年に愛知大学が創立されるわけですが、東亜同文書院大学（編者注：東亜同文書院は一九三九年から大学となった）の学長であった本間喜一先生が愛知大学での華日辞典の完成を強く望まれ、中国側にカードの返還を申し出ることを鈴木先生に相談します。鈴木先生は、カードが接收される時、接收委員であった鄭振鐸先生、この方は皆さんご存じのように著名な文学史家で、後に教育部の副大臣になられた方ですが、その鄭先生に口頭で、将来我々の手で是非華日辞典を完成させたいと伝えたことを思い出し、鄭先生にカードの返還を申し出ることになったわけです。ただ、当時は日中間の国交がまだ回復されておらず、日本中国友好協会を通じて中国側にお願いをしました。この時の協会理事長が内山完造氏で、内山氏はもともと上海に書店を出しておられ、魯迅とも交友があった方ですが、実は東亜同文書院とも関係が深く、例えば、東亜同文書院に華語研究会というのがあって、そこが出していた『華語月刊』なども内山書店を通して日本に送っていたようですし、先生方や書院生もよくそこで本を注文したりしていたそうです。鈴木先生が魯迅に記念講演をお願いしたのも、内山書店でたまたま会われていたことだそうで、同文書院そのものが内山書店をひききしていたといえるかもしれません。また、本間先生は友好協会設立の際の発起人の一人でもあり、それでそういう話になったんだと思います。

安部 個人的には、そのあたりのお話をもっと詳しくお聞きしたいところですが、そうもいきませんので、内山氏と魯迅、さらには同文書院との関係については、または是非他の機会にお伺いしたいと思います。とりあえず話を辞典の話に戻していただいて、カード返還の要請を日本中国友好協会を通じて行っただけですが、現在編纂所には本間先生がお書きになられた返還願いの文書の原本と、内山氏の書かれた文書のコピーが保管されていて、その送付先が当時中国科学院院長をしておられた日本でも有名な郭沫若先生となっています。

今泉 そうです。内山氏の文書はこちらで準備した下書きのコピーで、残念ながら内山氏の書かれた原本ではありません。後に日本中国友好協会にお願いをして探していただいたのですが、よくわからないとのことでした。先ほどお話しした鈴木先生が鄭振鐸先生宛に出された手紙の原稿もあると思います。こうした多くの方々のご尽力があつて、「本来なら返還できないが、日中友好の見地に立つて日本人に贈呈する」という形で、一九五四年にカードが返還されたわけです。

返還後、日本中国友好協会主催の会議が開かれ、最終的にこれを愛知大学にゆだねるということになりました。返還の翌年、学内に編纂委員会が組織され、華日辞典編纂処が設立されることになりました。返還された十四万枚のカードのうち、語彙が古くなったものや使えないものが結構あつて、すべてを活用したというわけではありません。編纂委員会では、最初に編集方針や執筆

基準などを決めなければならぬわけです。これは確か二年ぐらいかけて徐々に決めていったと思うのですが、日本の国語辞典のような辞典を作りたいというのは最初からあって、さらに時代も大きく変化していったから、カートの語彙に限らなくてもいい幅広くオールラウンドに集めようという方針ができたように思います。こうして編集作業が始まりますが、当初は五、六年、長くても一〇年ぐらいで完成すると思えます。しかし実際には基礎的な作業だけで一〇年かかりました。その原因は二つあって、一つはスタッフ数と勤務時間にかなり制約があったこと。もう一つは、中国における学術研究の成果をできるだけ反映させようと考えていたことです。よく考えれば、これはきりがいい。次から次に出てきますから(笑)。

結果的には当初の予想よりもはるかに長い一三年もかかってしまいました。これは見通しが甘かったこともありますが、本来辞典編集という仕事そのものがやり始めるときりがいいということもあると思います。このような点から言えば、辞書の刊行には、編集側のチェックと同時に出版側というか経営側のチェックがどうしても必要ですね。我々は、できるだけ新しい情報を正確に伝えたいという思いが強かったので、時に刊行スケジュールを無視したりしますから。

安部 その点は私も今回実感しました。よりいいものを出したいと思う気持ちと刊行スケジュールとの板ばさみになり、かなり苦しい思いをしました。先生方にもかなり無理をお願いして申し訳なく思っています。結局どこかで、エイヤツと出さなければなりませんからね。ただこの問題は、一度出したものに随時改訂が加えられるようになれば、かなりの部分解決できるのかもしれない。この点はまた後ほどお話いただくことにして、初版出版後のことをお聞かせください。

■『中日大辞典』の刊行

今泉 こうして初版が刊行されたわけですが、苦労した甲斐あって、世間から非常に歓迎されたのは確かです。中日新聞社から中日文化賞もいただきました。ところがその後辞典編集は一旦解散します。何とか刊行でき、またそれが好評だったために、少しほつとしたのかもしれない。やはり辞書編集は大変な苦労で、鈴木先生もその後大病にかかったりしましたから。ところが、一九六六年に始まった文化大革命によって、新しい語彙がどんどん出てくるようになり、我々も対応を迫られることになりました。これは予想外でした。その後、訪中の機会があり、これが契機となって辞典編集が再開されます。ここから増訂版の編集が始まるのですが、これも結局、初版同様一〇年以上かかって、一九八六年の出版となりました。この間に文化大革命が終わり、改革開放で市場経済が導入されるなど中国の体制も大きく変わり、それによって語彙も当然変わりますよね。今から考えると、増訂版をどうしても出す必要があったわけです。ところが編集スタッフは二人だけで、鈴木先生が体調を壊されたので編集主任となり、私が編集委員長となりました。その後新しく何人かの先生にも加わっていただきましたが、やはり時間がかかってしまいましたね。また、一九八二年には鈴木先生が急逝され、その影響も

8-4 b (1)

大きかったと思います。

安部 増訂版が出されたあと、翌年には増訂第二版が出されますね。増訂版で簡化字総表を全面的に取り入れたところ、翌年簡化字が追加されたり、発音が訂正されたりしたため、これに対応したと伺っております。私は増訂第二版が出版された翌年に愛知大学に赴任し、その後編集委員となったものですから、その間の事情はよく知りませんでした。増訂第二版の評判はいかがでしたか。

今泉 これも非常によかったですね。新しい語彙もかなり入れましたし、全体の語彙数も相当多くなっています。ただ、古い語彙を削ったために、そういうところをやっておられる方からは不満も出ました。

安部 これは非常に難しい問題で、紙幅が限られているわけですから、新しいものを入れるためには古いものを削らなくてはいけない。我々にとっては最も悩ましい問題の一つだと思います。今回の第三版でも同様の問題がありましたので、この点については、後ほど改めて取り上げたいと思います。

今泉 増訂第二版も初版同様よく売れたのですが、出版から一〇年以上経つとやはりこれも時代のニーズに対応できなくなってきました。改訂のための基礎作業は続けていたのですが、本格的に第三版の編集が始まるのは、二〇〇二年に編纂所が現代中国学部のある名古屋校舎に移転してからです。

安部 その時、私が所長兼編集委員長となり、今泉先生には編集主幹として引き続き編集をお願いしました。同時に、現代中国学部の先生方にも編集委員や編集協力委員になっていただいたのですが、この時に今日ご出席の吉川先生も編集委員をお願いいたしました。吉川先生はコンピューターに詳しく、増訂第二版を電子辞書化する時にいろいろとお願いました。

吉川 愛知大学に赴任したばかりで、事情もよくわからないうちに編集委員になっていったという感じです。私自身も『中日大辞典』にはお世話になっていたので、とても光栄に思いました。電子辞書化のときは、やはり初めての試みということでいろいろ大変でした。今泉先生、安部先生の英断ですが、待望のといった感じで、好評だったのでではないでしょうか。辞典編纂の大変さ、諸先生方のご苦勞を垣間見た気がしました。『中日大辞典』収録の電子辞書は、上級機種としてラインアップされていて、上級者向けとかエキスパート向けといった展開がされているようです。この点はメーカーも市場を意識しているというか、この辞書の利用者、辞書の性格をつかんでいるなという気がしますね。

安部 二〇〇四年には、編集業務をさらに強化するため、顧明耀先生に来ていただきました。顧先生は、すでに日中辞典を何冊も出しておられ、その豊富な経験を今回も大いに發揮していただきました。途中参加ということで、戸惑われることも多かったと思いますが、五年間という限られた時間の中、本当にお世話になりました。本来ならこの三月末で退官され、帰国される予定だったのですが、帰国を半年延ばしていただきました。

この場を借りてお礼を申し上げます。顧先生はこちらに来られる前に、『中日大辞典』にどのような印象をお持ちでしたか。

顧 実は、『中日大辞典』の初版が発行されたのが一九六八年ですが、たぶんその直後に入手してずっと使ってきました。私にとっては最も大きな中日辞典、そういうイメージです。私はこの二、三十年来ずっと辞書のことに関わってきました。ある大学で一度辞書についての講演をしましたし、また「辞書の間違い」という論文も出しました。これに対して、私の昔の教え子で、今ではある大学の教授をしている人が私に言いました。「先生、もし辞書の間違いということだったら、小さな辞書ではだめですよ。愛知大学の『中日大辞典』が読者の心の中でどれほど重いものがこれでわかるだろうと思います。五年前、私が広島女子大学を定年になった時、ちょうどこういう仕事がありまして、第三版の編集に携わらせていただけたことは、私にとつては非常に光栄なことだと思います。他の辞書もいろいろやってきましたが、五年間連続して、他のことはほとんどやらずに編集に専念したのはこれが初めてです。

安部 顧先生に来ていただき、第三版の編集体制が整ったところで、二〇〇六年に愛知大学は創立六十周年を迎え、その記念事業の一つとして第三版の出版が正式に認められるのですが、初版の編纂が創立十周年の記念事業として認められたことを思うと、何か不思議な巡り合わせを感じます。実際の完成は二〇〇九年になってしまったわけですが、これからはお二人にも加わっていただいて、第三版についてお話いただきたいと思えます。

■第三版の特長

安部 ではまず、第三版の特長といいますが、主な改訂点についてお話しください。

今泉 第三版も編集の基本は変わりません。ただ従来と違って一番大きく変わったのは、それぞれの分項というか、項目を分けたことです。複数の発音があるものはそれぞれの箇所に見出し字それから見出し語をおいたということですね。編集の内容からいうとこれが最大の変化ということになると思います。

顧 今、今泉先生がおっしゃったように第三版は分項したんですが、やはり分けた方が便利だと思います。以前だと、調べる時にそこになければもう一回調べなければならぬ。今回は一発で調べることができる。これは第三版の大きな変更点ですが、非常にいいことだと思います。

安部 分項でより使いやすくなったわけですね。それ以外の点で言いますと、新版になると、大体どの辞書もそうだと思いますし、増訂版の時もそうだったわけですが、語彙に大きな変化があると思うんですね。特に中国のこの二〇年間の変化は非常に大きかったと思うので、そういう部分で苦労された点とか、新語をどのように取り入れたのかと

8-4 b (1)

いった点を少しお話いただけますでしょうか。

今泉 語彙は、これはもう時代に伴って変わるものですから。第三版では特に、『現代漢語詞典』『応用漢語詞典』『現代漢語規範詞典』という中国で出されている辞典が依拠すべき文献となりました。それから編集、特に辞書作成の面では、『中日大辞典』は日本で出す辞典ですから、そういう規制に細かなところまでは一致させておりませんが、『中日大辞典』は日本で出す辞典ですから、そういう規制に細かなところまでは一致させておりません。我々の独自基準で編集をしたわけです。新語については、抛るべきものをどこにするかということまで議論がありました。先ほど言った三種の辞典がいずれも比較的新しいものでしたので、これらの中にも含まれていれば、当然『中日大辞典』にも入れる必要があります。それ以外にも各種各様の新語辞典というのが出ておりまして、どれをとるかには相当な問題で、結局、比較的信頼できるもの一冊を参考のメインに置きました。

願 新語については三種類あります。一つは比較的定着したもので、これはほとんど取り入れました。次は他の辞典にはないような本当に新しい語彙ですが、第三版にはある程度入っています。もう一つは、その意味が定着するかどうかまだわからないような新語です。もしかしたら三年、あるいは五年だったら意味が変わるかもしれませんし、二、三年経つたら死後になるかもしれません。我々は新語を採用するとき、インターネットでチェックしていますが、新しい語彙ですから市民権をもっているかどうかわかりにくい。そういう新語もあります。

安部 新語の扱いはなかなか難しいですからね。大まかな数字で結構ですので、今回だいたいどれくらい新しい語彙が増えたのでしょうか。

今泉 まだ精査しておりませんが、三分の一は替わっただろうと思います。新語というわけではないんですけど、出典が明らかでないものを思いきってカットしましたので、それらを削った分は何らかの形で新しい語彙が入っております。ですから、三十年ぐらいの間に新しく出た、または新しい意味を付与されたという新語は三分の一もないかもしれません、従来の初版や第二版に載っていないなかったというものは入れますと、三分の一は替わったんじゃないかと思えます。大雑把にいいますと、全部で十数万語です。それから五、六万語は入ったであろうと。それからもう一つ、我々スタッフ以外に愛知大学の同窓生の方が、それこそ献身的にというか、ボランティアで多数の新語を集めて送ってくださいました。新語の一部にはこれらも入っています。

安部 それ以外に何か特長はありますか。

願 他の辞書、特に中型以上の辞書はたいいてい複数の方が分担してやります。主編者がすべてに目を通して加筆訂正している場合があるかもしれませんが、ほとんどがそうではないと思います。私は日中辞典を多く手がけてきましたが、こういう研究を少しやったことがあります。例えば月曜日から日曜日までを全部辞書で調べてみたら、ほとんどの辞書はその説明がばらばらです。「日曜」だけ、あるいは月曜の時は「月曜日」、火曜日は「火」のところで説明する。統一されていない。なぜかという分担するから

です。日本語の「こ・そ・あ・ど」も私は調べてみました。そういうものも説明が統一された辞典はほとんどないです。例えば、「こんな」、「こんなに」。これを一つの単語にするか、二つの単語にするか、それぞれ違う。「あんな」、「あんなに」は一緒。しかし「こんな」の場合、「こんな」はあるが、「こんなに」はない。「そ」の場合、「そんなに」はあるが、「そんな」がない。この点、今回の第三版は、最初から最後まで主幹の今泉先生が何十年もかけて目を通し、加筆訂正してこられました。その点から言いますと、他の辞書と違ってバランスをとりやすい。一人でも長年やれば最初の頃と後の方では少し違うところがあるかもしれません。でも大勢で分担してやるよりはいいと思います。これは『中日大辞典』が他の辞書と全然違うところだと思えます。

安部 ありがとうございます。第三版は、百科事典的な性格など基本的な編集方針は変わらないものの、形式の上でも、また内容面でもかなり大幅な改訂が加えられていること、さらには全体を通して編集主幹の今泉先生のお考えが反映されているということですね。

顧 もう一つ。これは第三版の特長というより、『中日大辞典』の特長といった方がいいかもしれません。『中日大辞典』以外にも中日辞典は何冊もあります。ただその目指しているところは日本人でも中国人でも使えるということだと思います。実は日本人の立場で見た中日辞典と中国人の立場で見た中日辞典は違うと私は思います。中国人が中日辞典を調べるとき、中国語の意味は分かっています。ただ、どういうふうか日本語で表現するか、そのために調べる人が多いのではないかと思います。しかし日本人の場合は、その中国語がどういう意味か、あるいはどういうニュアンスを持っているか、そういうことに重点があるのではないかと思います。ですから同じ中日辞典が、中国人にとっても最適、日本人にとっても最適というものは、まずあり得ないと思います。いま市販されている辞書は、中国人も使えますし日本人も使えますが、結果的にはどちらにもちよつと足りない部分があるのではないかと思います。私がこの数年間こちらでお手伝いさせていただいて痛感したのは、『中日大辞典』は日本人のための辞典だということです。これは中国人のためのものではない。もちろん中国人が使っても結構プラスになりますけれど、でも出発点は日本人のためというのが私の感想です。中国人だったら見ればわかるけど、日本人だったらわからない、そういう語彙も入っています。中国人のための中日辞典とはちよつと違うというのが私の感想です。

■ 中国語辞典の現状と今後

安部 これまででは『中日大辞典』のを中心に話していただきました。次にもう少し広く中国語辞典の現状と今後についてお話したいと思えます。今、顧先生が指摘されたように、日本人が使う中日辞典と中国人が使う中日辞典は異なるべきなのに、多くの辞書が両方を追い求めた結果、中途半端になっているという現状があるとすれば、

8-4 b (1)

今後中国語辞典がよりいいものになっていくためにはどのようにすればよろしいでしょうか。この点について、今泉先生、何かお考えがあればお聞かせください。

今泉 (二〇〇〇年ぐらい、主として日本で言います。まだドイツ語、フランス語のレベルには達していないかもしれませんが、何といっても日本の中国語辞典は、辞書学的なレベルが低いところがありましたから、それを頑張って一定のレベルに急速に引き上げましたよね。と同時に、例えば文法的な機能に詳しいとか、用例が豊富であるとか、いろいろの特長をもった辞典も数は少ないにしても出ております。このことを踏まえていくと、次にどんな形で日本人のための中国語辞典というものが追求されるべきなのか、これは大きな問題点だろうと思います。ただ、多様性、汎用性というよりも、どうもそれぞれの向き、専門性といましようか、そういう辞書がいくつか出るのは大事なことだと思います。これは電子辞書のところでもたぶん問題になりますけど、例えば一つの単語を検索すると、五種類の辞書の意味が同時に見られるようになった場合、その次は違うものが必要なあとという感じはしないでもないですね。ただ、本国の中国における辞書のレベルがさらに上がることは確実ですので、例えばコーパスのようなコンピュータを使ったものが出てくると、今の問題に新しいヒントを与えてくれるかもしれませんね。

安部 顧明耀先生は中国の辞書の状況にお詳しいと思いますが、そのことを踏まえて先生はどのようにお考えでしょうか。

顧 今泉先生がおっしゃったことに私も同感です。要するに辞書は、私の考えでは、誰のための辞書がということが大切だと思います。先ほど申し上げましたが、『中日大辞典』は明らかに日本人のための辞書です。その上で、日本人の何のための辞書かということもちょっと考えなければなりません。私の考えでは、『中日大辞典』は日本人のための辞書ですが、さらに、読むためのものつまり読解用と書くためのものつまり表現用のものがあると思います。『中日大辞典』は表現用ではありません。今出されている多くの辞書は、その両方を狙っていて、結果として中途半端な気がします。もし語彙量が一万程度の小型辞典で、完全に学習者向けのものであれば、両方ねらうことは可能でしょう。しかし、読解用としては語彙量が少なすぎます。語彙量が増えると作文のための情報が入らなくなってしまう。ですから目的によって編纂することがたぶん必要ではないかと思えます。

吉川 確かに今の紙辞書には量的な制約があるので、両方を狙うことは難しいかもしれませんが、電子辞書になるとその制約が薄れるので、可能になっていくかもしれませんね。ただ、そうする必要があるかどうかは別の問題ですが。

顧 電子辞書については私なりの考えがあります。電子辞書は調べやすいし、持ち運びが便利なので、多くの人に愛用されていますが、私は実際あまり使っていません。なぜかといいますと、一つの単語を調べる時に、その周辺の情報が見にくいという問題があ

ります。辞書は引くものですから、読むものでもあるんです。ですから私は、学生には紙辞書を薦めています。

安部 確かに、現状では紙辞書にも電子辞書にも一長一短がありますね。ただ、電子辞書の普及率を考えると、辞書の編集者としても対応を考えなければなりません。

顧 話を戻しますが、もう一つ例文の問題があります。例文の中にはかなり古いものもあれば、新しいものもありますが、これは読者にはわかりにくい。もしその辞書を使って作文する場合、場合によっては自分の書いた文章の中に、古い表現と新しい表現が同時に出てきてしまう。でも、読解用であれば問題ありません。ですから先ほど今泉先生がおっしゃったように、辞典はやはりいろいろな必要に応じて使い分ける。我々も読解のためか、表現のためか、それぞれの用途に合わせて個性のある辞典を作らなければならぬと私は思います。

今泉 今、顧先生の指摘された『中日大辞典』は読解用の辞典であるという点はおっしゃるとおりで、初版以来の特長で、鈴木先生のお考えもそうだったと思います。特に私なんかは中国語を耳からあるいは口からというよりもやはり文字を通して覚えましてから。一般的に日本人は二千年來、文字を通して、つまり漢字を通して中国語を知るといのが基本で来ました。我々が中国語を教える場合、ドイツ語やフランス語と比べて何が決定的に違うかということの点です。日本語の中に漢語が入っている。このことから日本語が逃れられないという、これがやはり非常に大きな影響を与えていると思います。読解を中心とするというのはつまり二千年來の歴史なんです、簡単に言うところ、つまり異形字ですね、これをずらっと並べたほうが、日本人にとっては、少なくとも文字から中国語を知るとい場合は、ごく常識的に必要だろうと思います。ただこれは、人によってはばかばかしいことで、今使われているものを残し、その他は排除すべきということになるかもしれません。

顧 私はばかばかしいとは思いませんし、読解用であれば当然必要だと思います。私も先生と同感で、日本人のための中日辞典は、他の外国人のための中日辞典、あるいは中国人のための中日辞典とまったく同じであってはいけないと思います。

■ 品詞分類について

安部 最近では、先ほど今泉先生もおっしゃられたように、様々な出版社から質の高い辞書がたくさん出ています。そこにはいろんな工夫が凝らされており、以前はなかった図版や写真が入ったり、印刷にしてもカラー印刷などを使って見やすく工夫されています。また、『中日大辞典』にはないものとして、品詞分類が多く辞書で付されるようになっております。この品詞分類はなかなか厄介な問題なのですが、例えばその点について今泉先生はどのようにお考えなのでしょうか。

8-4 b (1)

今泉 品詞の問題も先ほどの話と若干絡んでいると思います。つまりこれは中国の方も認めておりますけど、例えば先ほどの三種類の権威ある辞典が、同じように決めている時はいいんですけど、そうでない場合が当然出てきます。同じ形容詞でも、日本語の場合、形容詞と形容動詞はどう違うかという問題が出てきます。文法論でいうと、今度はその形容詞が本当に形容詞かというようなことも出てきます。そういう問題点がどうしてもありますから、『中日大辞典』はそのことに完全に背を向けました。積極的の背を向けたというか、採用しないという方針で来ました。しかしこれも、品詞分類を含めて語の認定の基準を厳密にすれば、例えば「兼詞」ですが、二つ以上になつてくるものを排除して形容詞と名詞という二つの品詞のみにしたたり、中核となる、これだけは絶対に譲れないというものだけをを選んで編集するということも可能かも知れません。こうすると中国で出ている辞典と基本的に一致するかも知れません。だけど私は、これももう個人の考えが大きく影響してきますけれど、品詞分類とその読解が、漢字が日本に与えた影響といえますか、日本語の中にある漢字との違いといえますか、その共通性と非共通性といえますか、そういう問題から逃れられないということが強く働いています。この点については批判があるところで、第三版もその点では当然その批判は甘受すべきであろうと思います。

安部 品詞分類は、批判を覚悟の上で、意図的にそれを排除しているということですね。**今泉** そうです。それから先ほど顧先生がおっしゃった点ですが、「A」から「Z」まで全部一人で見るとはプラスの面とマイナスの面があつて、私自身は非常に自分の力不足を痛感しています。これまで多くの方々の協力があつてこうしてやってくる事ができたわけですが、果たして、神様以外の限界のあるものが、一人で割り振ってしまったのか、自己の判断だけでやるのはどうかかと、そこまで考えていきますと自己矛盾です。かといつて、五人が五分の一ずつ分担しても、どこかで統一しなければいけないということになります。そうすると、例えばある辞典がそういう作業をしていますか、いわゆる見出し語と見出し字の部分で分担するというのも一つの手だと思えます。ただ、これにもいろいろと批判があり、それは免れない。ですから、これからの辞典は可能性としては今言ったようなことがそれぞれところで追求されるべきだろうと思えます。それから、辞典の編集と出版は別物ですね。出版するには当然お金がかかります。それを考えると、私も顧先生もそうだと思いますけど、作る側から言えば一つの夢にか過ぎないんです。こうあればいいなあということだけで、それが実際に辞典の形をとるには非常に困難が大きいというか、実現性が少ないということになります。

顧 確かに出版するというのは大変ですか。

先生が先ほどおっしゃった品詞のことについて、ちよつと私の考えを申し上げたいと思います。最近の中国語の辞書にはほとんど品詞分類がついています。今泉先生がおっしゃったように、辞書によって品詞が違う場合があります。例えばある語彙を最初は名詞としていたのに、あとで接辞として名詞ではないという。『現代漢語詞典』にもあり

ました。品詞分類は確かに難しいことですけれども、しかしやはりこれは何のための辞書かということを前提にして考えなければならぬと思います。『中日大辞典』は読解のため、閲読だけのための辞書だと考えれば、品詞はそんなに強調しなくても差し支えないかもしれません。もし中国語で何かを表現するのであれば、やはり品詞が必要だと思います。『中日大辞典』の場合でも、文法について詳しいところは非常に詳しいです。例えば方向補語の使い方とかあるいは数量詞の数え方とか、場合によっては普通の文法書くらい詳しく説明しています。その点から見れば、それは学習者のためです。しかしもう一方で、基本的な品詞分類のことには触れていない。触れていないというのは、ただはつきりと書いていないだけだと私は理解しています。その語釈、説明の方法から見れば、品詞のことを考えているのは明らかです。私は読解用としてはこれでいいのかなと思います。ただ表現用だとそうはいきません。同じ意味をもつ言葉はいくつかありますが、一〇〇%同じことはまずない。意味の幅が違う、他の語との結びつきが違う、品詞が違う、ニュアンスが違う、マイナスイメージかプラスイメージかが違うなどいろいろあります。もし表現のための辞書だったら、そういうことをはつきり示さないと読者にはわかりません。『中日大辞典』はやはり読解用ですから、読者にはまずこういうことを念頭において使ってほしいです。どんな場合でも同じように使えるというわけではまったくないのです。

■コーパスの活用と電子化

安部 おそらく使っておられる多くの方も、その点はある程度理解していらっしゃるのではないかと思います。実際にこの『中国大辞典』を使っていらっしゃる方を見てみますと、例えば初めて中国語を勉強するという方よりも、ビジネスで実際に中国語を使われている方ですとか、あるいは中国研究者、それから学生でいますと、専門課程に進んでちよつと難しい論文ですとか小説を読むときに利用しているようです。それから先ほどの話になりますが、この辞書の大きな特長は百科事典的な性質です。できるだけ多くの語彙を入れようというコンセプトで作られています。要するに他の辞書で引いて出てこない語彙が『中日大辞典』では出てくるというのが大きな特長になっています。実際私も学生時代からその恩恵を被った者の一人です。確かに、顧先生が今おっしゃったような細かな点について、すべての方に本当に理解していただけているかどうかとなくりますと、断定はできませんが、また文章を書くとなると、全然違った意味を持つてくると思います。例えば、語の軟らかさ、硬さみたいなものも実際に使うときには本当に重要で、ある語彙がどのようなシチュエーションで使われるかを知る必要がある。これは有名な話ですが、国交回復の交渉時に、「中国国民に多大な迷惑をおかけした」という部分を、通訳者が「添了很多麻烦」と訳して問題になった。辞書には「面倒をかける」＝「添麻烦」という形で必ず出てくるわけですが、実はそれがどのようなシチュエ

8-4 b (1)

ーションで使われるのかということも、大切になってきます。それをどこまで辞書が網羅できるかということ、やはり大きな問題が残ると思うのですが、表現用ということであれば、そういうことも考えていかなければいけないでしょう。実際に岩波書店の中国語辞典はこの点に配慮しています。ですから、それぞれの辞書がそれぞれの特色を持つことと、使う側がその特色を理解した上で使うことがとても重要になってくると思えます。またシチュエーションということを考えるなら、先ほど今泉先生も触られたようにコーパスの活用ということも出てくると思えます。この点について、吉川先生はどのようにお考えですか。

吉川 英語辞典ではすでにコーパスの活用が進んでいて、その便利さは多くの人が実感していると思います。中国語辞典でも今後その活用法が問題になってくると思いますが、まずは常用語とか基本的な語彙に、コーパスによる成果などを取り入れるのもおもしろそうですね。あと、中国でも大型のコーパスが整備されてきているようです。またコーパスを利用するソフトとしては、語の頻度や共起を検索するといったコンコーダンスソフトウェアなどがあります。やはり、英語が主だった気がしますが、オンラインも含め、個人ユース、研究ユースでも使えるソフトウェアも出てきています。有償、無償のソフトがあるので、興味がある方は、無償というか、フリーウェアを利用してみるのもよいと思います。コーパス言語学の裾野が広がっているなという気がしています。

安部 今後、中国語辞典についても、コーパスの活用というのは大きな課題の一つになってくると思います。では、電子辞書についてはどうでしょうか。

吉川 国内では、確か二〇〇四年だったかた、出荷台数が二〇〇万台ペースを超えてから、火がついたみたいですよ。各社、入門から上級まで、搭載する辞書や機能に応じて製品構成を工夫しているようです。最近、あまりチェックしていなかったのですが、日本メーカーの中国向け製品もおもしろいようです。

安部 ジワリというより、あれよあれよで普及した感じがありますよね。愛知大学の場合、二年生で中国に語学研修に行くので、そのことを考えて電子辞書を買う学生もけっこういるようです。持ち運びに便利ですから。

吉川 ええ、そうですね。先ほど今泉先生が触れられていたように、複数の辞書を串刺し検索できるモデルもあって、便利になりました。あとは手書き認識ですね。学生を見ていると、画数で引かずに、文字認識機能、それと音声機能も使っているようです。私も学生時代は、中国書を読むときには、『中日大辞典』もそうですが、『現代漢語詞典』などの中国の辞書も机の上に何冊も並べて、さらには初版とか前の版も引いて、これはどういう意味だろうと考えていました。入門段階の時は薄い辞書から始めて、様々な辞書をそれこそ引き倒したといえますか、それぞれの特色を味わってきたところがあります。今ではそれが、電子辞書ひとつでできてしまうわけですから、本当に便利な時代になってきましたね。あの頃の苦労が懐かしい気もします。個人的な要望なのですが、『中日大辞典』のこれまでの各版が串刺し検索できるというのかなと思います。もし

もですが、辞書に入れるのを断念した、あるいはカットした語彙まで検索できると、とてもおもしろいですね。

安部 その問題については、例えば『中日大辞典』を基にしたデータベースの構築といったことも考えられるのではないかと、個人的には思っています。

吉川 顧先生が、先ほど挙げられていた一覧性についてですが、電子辞書は画面サイズが小さく、これは決まっていることだと言えないですね。ただ今後、例えばA4サイズの電子ペーパーやタッチパネルといった、新たなデバイスの動向によっては、現在の製品とは違った電子辞書が出てくるかもしれません。私はジャンプ機能やら、あいまい検索で遊んだりもしています。

顧先生にお伺いしたいことがあるのですが、例えば先生がお考えの究極の一冊、それも紙とか媒体の制限がない場合、理想的な辞書っていうのはどういう形が考えられるかということですか。

■理想的な辞書と『中日大辞典』

顧 それは非常に難しい質問ですね。私は日本に来る前、基本的には日本語教育をやってきました。国家教育委員会、教育部に頼まれて教材を作りました。教材を作ると同時に、教材のための文法書と辞書も作らなければならない。その時に作った辞書はまったくの学習用の辞書ですから規範でなければならぬ。こういうふうにも使ってもいいし、こういうふうにも使えんといった表現は極力避け、このように使いますという表現になります。品詞とか意味も。そういう辞書を作りました。日本でも売っていますし、台湾でもすぐ出版されましたが、今考えるところの利用者層は非常に狭いです。これはあくまでも学生用の辞書ですし、理想の辞書というわけにはいきません。

『中日大辞典』のことで言いますと、これから完璧にする余地もまだありますが、例えば表現用の『中日大辞典』も企画したらどうかと思います。また、私は初版も第二版も使わせていただきましたが、私の感じとしては、文学、古典を読むなら初版の方が使いやすい。もちろん今から見れば間違いや不備などところがないわけではありませんが、でも貴重な部分もかなりあります。第二版にはプロレタリア文学の言葉が結構入っています。それらを、例えば今の中国の若い人に言ってもわからないものがたくさんあります。だから過去のある時代の語彙を集めた時代別辞典のようなものもあればいいと思います。今回の第三版はプロレタリア文学に出てくるような語彙は、一部を歴史的な単語として残しましたが、あとはカットしました。カットすることは第三版にとっては必要な作業でしたけれども、プロレタリア文学を研究する人にとってはもったいないような感じがします。ですから辞典編纂所としても、もう少し高いレベルを目指して、『中日大辞典』をより完璧にすると同時に、表現用や時代別といった新しい辞典を作っていくば、愛知大学の中国語辞典は日本一どころか世界一になると思います。

今泉 例えば、自動車考えた時、それぞれのメーカーが用途別に実に様々な車種を出していますよね。辞書と自動車を一緒にはできませんけど、それぞれの用途に向けた特長を持ったものが必要で、さらに基準を明確にして、後部ワイパーはこの車種にはあるけどこれにはないといったことが、ユーザーにもよくわかるようにする。自動車の場合には主としてお金儲けですけど、辞書の場合は、その基準というか、スタンダード作りと理論化に愛知大学が貢献できるのであれば、それは顧先生のおっしゃるように世界的な寄与になります。具体的にも作ることは大変なことですけど、辞書学の理論化とスタンダード作りの方は、総力を結集すればひよっとすると可能かなと思います。皆さんもおっしゃっています、古典をやる人は黒の初版を、プロレタリア文学をやる人はやっぱ赤の二版を、汎用向けは青の第三版ですよ、在庫ありますよ、といったふうにはやればいいんですよ(笑)。それを、語の基準とか品詞分類も含めて、それぞれの辞書の特色をもう少し整然とした形に整理できれば、それは非常に大きな貢献になるかもわかりませんね。愛知大学はせっかくこれまで六〇年間も辞書編纂をやってきましたから、それなりに蓄積されたものがあるはずで、何か辞書学的な理論の構築といいたしうから、それが必要かなと思います。

吉川 その上で『中日大辞典』の体系化といいますが、シリーズ化を行うということですね。

今泉 ええ。そういうものが出ればいいですね。

吉川 紙辞書で歴代築いてきたものがフラッグシップ、その系列に電子辞書もあって、これには時代的、技術的な制約もあるわけですが、つまりこれまでの辞書作りの蓄積は中心にあり、その特色が分化していく中で『中日大辞典』スピリットとでもいうものが体系化できていくのかなというところは、編集委員となり先生方に面倒を見ていただいている中で感じていましたし、そのスピリットが、この編纂所の一番の大きな役割である次の辞書を生み出すジェネレーターというか、動力といいますが、そういったものじゃないかなと感じているところだったんです。安部先生、いかがですか。

安部 そうですね。私も編集委員となって随分経ちますが、今回は所長として第三版の編集、出版にかかわって、『中日大辞典』に対する思いがかなり変わりました。今、吉川先生が言われたように、これまでのその編纂に尽力してこられた、今泉先生や顧先生、その他多くの方々の熱い思いを、辞書編纂の大変さとともに本当に肌で感じることでできました。と同時に、そういうスピリットを決して絶やしてはいけないという、強い責任も感じています。先ほど顧先生がおっしゃられた、表現用あるいは時代別の『中日大辞典』の編集の問題や、今泉先生がおっしゃられた、用途別辞典の理論化とスタンダード作りの問題など、我々がやらなければならないことはまだまだあります。さらには、電子化の問題や、これまでカットしてきた語彙や入りきらなかった語彙を加えたデータベースの構築なども考えていかなければなりません。これらの問題を、吉川先生を含めた新しいスタッフの協力をおおきながら、すべて実現するのは難しいとしても、これま

8-4 b (1)

で同様、実現に向けて少しずつ努力していくことが大切だと思っています。『中日大辞典』の伝統の上に、辞書の将来を見据えた、新たな挑戦をしていきたいと思えます。なお、本日今泉先生にお話しいただいた『中日大辞典』の歴史について、さらに詳しくお知らせになりたい方は、『中国21』Vol.18に今泉先生のインタビュー記事がありますので、そちらをご覧くださいと思います。

先生方、本日はありがとうございました。

(二〇〇九年七月二一日)

(テープ起こし||宮田千信、文章整理||安部 悟)

〔注〕愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol.32 (二〇〇九年十二月) 所載。

8-4 b (2)

愛知大学と『中日大辞典』〈第三版の刊行をめぐる〉

安部 悟

●愛知大学と『中日大辞典』の歴史

上海にあった愛知大学の前身・東亜同文書院は非常にユニークな学校で、中国語教育や中国研究の面で当時としては第一線級だった。その中に華語研究会というのがあり、一九三三年頃から華日辞典を作ろうと語彙の収集を始めた。

その後、戦争になり、収集した語彙のカード十四万枚は、敗戦で中華民国政府によって接収されてしまった。一九四九年に中華人民共和国が成立し、翌年当時の本間学長がカードを返してもらうことを発案。中国の鄭振鐸先生や郭沫若先生、日中友好協会の理事長だった内山完造先生らにお骨折りを頂いて、日中友好のため、カードは日本に返されることになった。

カードの返還を受けて、関係者で協議した結果、愛知大学が編纂して辞書の形にすることが決まった。一九五五年、華語研究会のメンバーだった鈴木擇郎先生を中心に華日辞典編纂処が創立される。

編集方針としては、広辞苑のような辞書、その中国語版のようなものを作りたいということが最初からあった。返還されたカードの語彙は使えるものは使い、なおかつその時代に必要な中国語の語彙を新たに集め、分りやすい解説を付ける。古いものから新しいものまで幅広く、まさに百科项目的な辞書にして、多くの人が中国語を理解する一助としたい、という強い思いがあった。解説は少なくして、できるだけ多くの語彙を入れようという、その伝統は今も強く生きている。

実際に初版が出たのが一九六八年で、翌年には中日文化賞を頂いた。辞書というのは作っている間にもどんどん語彙が変わっていく。中国の体制が変われば、制作も変わり、語彙や漢字などにもその影響がある。それを追いかけていくと、なかなか出せない。最終的には、編纂処ができてから十三年かかった。

初版は非常に好評で、大体六万冊出ている。私も大学の時にこの初版本を愛用した一人である。今は色々なところから中国語辞典が出されているが、当時は本格的な辞書はほとんどなかった。少し古い小説などを読む時には、『中日大辞典』にしか載っていない語が沢山あった。

初版出版の後、編纂処は一旦解散するが、すでに中国では文化大革命が始まっており、それに関連した新しい単語が出てきて、それらに対応できなくなっていた。その後訪中したりして新たな辞書を作る必要があると、一九七五年に再び辞典編纂所を立ち上げて、改訂版の編集に取り掛かった。

八六年に出版された増訂版は、実は一年しか出ていない。出した直後に中国で新しい

簡化文字七字の追加発表があり、更に発音などの訂正が五十幾つ出て、そのために刷り直すことになった。翌八七年に増訂第二版が出される。増訂版の表紙は従来と同じ濃紺だったが、増訂第二版は真っ赤で、まさに中国をイメージさせるものだった。

●第三版の刊行

それからまた二十年以上が経ち、今年の二月末に第三版が出された。初版は三〇年代に集められたカードが基本となっていて、古い語彙が豊富に入っていた。赤い増訂第二版は文革関係の言葉が大量に入っている。今回第三版を作るに当って、これらの語彙をどうするかが大きな問題になったが、我々は基本となるものだけを残して、あとは大幅にカットした。

その代わりに新語を大量に入れた。

『中日大辞典』は語彙が非常に豊富なのが売りの一つである。最近では学習者向けの辞書が沢山出ており、書店に行けば、分厚いものからポケットタイプまで、中国語関係の辞書がずらりと並んでいる。中国語や中国が注目されている証拠だと思うが、『中日大辞典』はそういう辞書とは違うスタンスを一貫して貫いてきた。初学者向けの辞書は基本的には文法説明が詳しく、見やすさを追求して、イラストや写真を入れたり、カラ―刷りしたりしている。今回の『中日大辞典』は、体裁が多少変わったものの、中味はこれまでの伝統を守り、初学者向けというよりは、プロフェッショナル、つまりビジネスマンや研究者が実際に使うことを意識して作られている。

この『中日大辞典』は、海外でもよく名前を挙げて頂く。特に中国では日本語を学ぶ方たちに、これで勉強したという方がかなりいるし、研究者の評価も高い。また、幅広い分野の語彙を収集しているのも、様々なシチュエーションに対応できるようにになっており、実際にビジネスの現場でも使って頂いているようだ。今回の三版も好評をいただいております、売り上げの方も順調である。

●未来の『中日大辞典』

技術的な問題があつて、紙辞書はこれ以上厚くできない。初版本や増訂第二版、それぞれが持っていた良さを保ちながら、新たな語彙を如何に入れるかが大きな問題である。中国のこの十年・二十年の変化は非常に激しいものがある。文革期に使われていた語彙の中にはほとんど死語のようになつたものがある一方、近年IT関連など色々な新しい語彙が大量に出てきた。また、新語といえどもすぐに消えていく語も沢山ある。どの新語を入れるかが重要な問題になる。厚さに限りがあるから、新語を入れるためには、同じ量の語彙をカットしなければならぬ。この何を切るかが実は一番悩ましい問題で、今回厳選した三万語の新語を入れたが、逆に言うと三万語を落とさざるを得なかった。

8-4 b (2)

新たな語彙を入れるにも、古い語彙をカットするにも、どちらも明確なポリシーが必要である。

我々は、古いところをやる方は初版を、文革のことをやる方は増訂第二版を、新しいところを勉強するならば第三版をと奨めている。三冊の良いところを全部まとめたらと言われるが、紙辞書ではそうはいかない。

ただ、今の時代、紙辞書そのものが岐路に立たされている。私は、紙辞書は永遠になくならないし、なくなってもほしくないと思っている。なぜなら現状の電子辞書だと、どうしても調べるためだけのものという感じが強い。辞書は読んで楽しむものであって、単に引くだけの手段にしてはもったいない。辞書には多くの先達の叡智が詰まっております。慣れ親しんで、何かの折に引いては色々な発見をしていくものだと思う。そうは言っても、重いので今の学生は持つのを嫌がる。すぐにとりわけにはいかないが、今回の第三版も電子辞書化を一応考えている。

最近ではコンピュータを使ったコーパス言語学というものがあり、膨大な量の新聞・雑誌・小説をコンピュータに取り込み、使用頻度などが一発で分るようになっていた。従来の辞書だと、最初に名詞が来て次に動詞が来る。その名詞がほとんど日常で使うことがなくても、まず名詞からである。それがコーパスを使えば、頻度順に並べることができると、作文をする時に役に立つ情報も色々得られる。そういうコーパスの活用が、今英語の辞書を中心に進んでいるが、中国語辞書にもこの波が押し寄せてきていて、今後どのように活用していくかが問題になっている。

辞書を作文用・読解用の二つに分けるとすれば、『中日大辞典』は後者、文章を読むためのものだと考えている。作文用であれば文法説明も必要だろうし、品詞も明記すべきだと思う。今の多くの辞書が、作文用でもあり読解用でもある辞書を目指しているが、実際には中途半端である。作文用となれば、もっと徹底的にコーパスなどを利用しないと、実際に使う場合に困る。そうすると、作文用の辞書は今後別の形をとっていくのではないか。

それに対し、『中日大辞典』は読むための辞書である。このスタンスは是非守っていただきたい。できるだけ多くの語彙を入れ、最終的にこれを引けばどんな語彙でも載っているようにしたい。紙辞書では限界があるならば、その限界を他の方法で解決する。それが可能であれば、愛知大学が考える一番理想的な中国語辞書ということになる。紙辞書を残す一方で、そういうものを考えておく必要がある。

そこで、データベース化を検討中である。初版や増訂第二版・第三版の語彙が全部見られるようにすれば、多くの人にとって一番使いやすいものとなるだろう。そのようなものも大学として検討して、将来に備えていこうと考えている。

二〇二二年には、現代中国学部のある愛知大学名古屋校舎が笹島に移る。笹島のキーワードとなる「国際化」に、『中日大辞典』が少しでもお役に立てればと思う。

『中日大辞典』には長い歴史がある。一九三三年の語彙収集からスタートし、中国や

8-4 b (2)

日本の数多くの方々の協力を得て、今回第三版が出せた。この伝統を絶やしてはいけな
いと強い責任を感じている。我々の使命はまだまだ終わっていない。データベース化も含
めて将来を見据え、愛知大学の大切な財産を引き続き皆様方にご利用頂ければと思う。
それを通じて中国との橋渡し、更には世界の橋渡しができればと考えている。

〔注〕第三〇六回産学官交流サロンにおける講演。MIKAWA・NAVI
2010 vol. 47 所載。

8-4 b (3)

「中日大辞典」第3版の刊行

愛知大学名誉教授

今泉 潤太郎

変わる中国の現状を反映

『中日大辞典』第3版がこのほど出版された。

愛知大学が編纂・発行するこの辞典は1968年に初版が刊行された。その際に中国語研究の泰斗・倉石武四郎東京大名誉教授が寄せた推薦のことばに、「こんな一節がある。

「この辞典は、かつて日中両国のあいだに介在し、教奇の運命をたどったが、それがやがて両国文化交流の使節たる資格を付与される所となった」

私事になるが、愛知大学を卒業した55年に学内に設置された華日辞典編纂処（現・中日大辞典編纂所）に勤めたことから、私の人生は定まったと言っても過言ではない。初版から第3版まで編集・出版に一貫して参与した関係者は今では私のみとなった。この辞典の「教奇な運命」を振り返ってみた。

接収された原稿カード

20世紀初頭、中国関係の人材養成のための高等教育機関が上海に設立された。東亜同文書院である（後に大学に昇格）。その華語研究会で33年ころから中国語辞典の刊行が構想され、原稿カードの作成が進められた。このカードは戦後、当時の中華民国政府に接収されたが、その時点で約14万枚に及んでいた。

敗戦で引き揚げた東亜同文書院大学の教職員・学生を主体として46年、豊橋市に創設されたのが愛知大学である。中華人民共和国が成立した翌50年、愛知大学は原稿カードの返還を新中国政府に願ひ出た。この年6月には朝鮮戦争が起り、米中両軍がついに戦火を交えるに至った。緊迫した国際情勢の下、わが国はまだ占領下に置かれ、中華人民共和国とは国交もない状況であった。

愛知大学は創立から日も浅く、困難な経営を強いられていた。その中で行われた返還願ひは、東亜同文書院大学の責任者でもあった本間喜一学長の並々ならぬ責任感と強い決意の現れと見られる。

返還の要望は、日本中国友好協会の内山完造理事長を通して中国科学院の郭沫若院長らに行われた。これら関係者の熱意と尽力により、カードは54年「日本人民に贈呈する」形で返還された。

付託された愛知大学では、華語研究会の責任者であった鈴木擇郎教授が委員長となつて辞典編纂にあつた。大学を卒業したばかりの私は、カードの整理作業に追われた。13年にわたる編纂の結果、『中日大辞典』初版が出版された。カードの作成から三十数年をへて辞典は完成したことになる。

社会主義に転換した中国では社会全般にわたる大変革が進み、言語の様相を一変させていた。例えば「老爺」(「たんな様」)、「太太」(「奥様」)は「愛人」(「夫または妻」)、「同志」に変わった。『中日大辞典』初版はこの変化に対応して、簡体字を全面的に使用し、新時代の息吹が伝わる本格的な中国語辞典として世間に迎えられた。

文革の新語収録し増訂

しかし、中国では66年から世界を震撼させる文化大革命が起こつていた。文革もまた数多くの新事象、新語を生み出し、「開門辦學」(「社会に出て学ぶ」)や「上山下郷」(「大学生らが農山村に定住する」)が叫ばれた。その終焉から10年後の86年に出版された増訂版では、これに関連する語彙も多数収められ、初版にも増して中国事典的な性格をもつ辞書として評価された。

今度出版した第3版は、「改革・開放」のスローガンを掲げ目覚しい発展をとげる中国の現状を踏まえて、全面的に内容を見直した最新の中国語辞典である。

中国はいまや「高技术」(ハイテク)産業社会に突入し、「手機」(携帯電話)から「私家車」(マイカー)、「綠色汽車」(エコカー)までもが当たり前になり、「奧運」(オリンピック)や「世博」(万博)の開催で「文明」(マナー)が問題とされる。

『中日大辞典』は現在までに5千冊以上が中国へ寄贈され、大学や中国日本友好協会、駐日中国大使館などで広く活用されている。「日中友好の船、文化交流の懸け橋」と呼ばれる所以である。中国語を一定程度学んだ日本人が主な対象となるこの辞典を、多数の中国人が日本語を学ぶ学生時代に愛用したという声を耳にするたび、大いに意を強くしている。

振り返れば、『中日大辞典』はほぼ20年ごとに版を新たにしてきた。今後、情報の多重化、媒体の電子化が進む一方で、中国語の需要はますます高まるであろう。そうした状況にも十分対応できる辞典として存在することを念願している。

〔注〕朝日新聞夕刊 二〇一〇年六月十七日(木曜日)所載。

8-4 b (4)

著者に聞く『中日大辞典』を改訂

編集主幹 今泉潤太郎さん 愛知大学名誉教授

〃文化交流の架け橋に〃

日本初の本格的中国語辞典として広く活用されている『中日大辞典』（編・発行Ⅱ愛知大学中日大辞典編纂所、発売Ⅱ大修館書店）の第3版が、十数年におよぶ改訂作業を経て刊行された。『中日大辞典』は〃日中友好の船、文化交流の架け橋〃と呼ばれ、日中関係者の尽力で完成し、日中友好協会とも関係が深いという。その辺りの事情と合わせ、第3版の特徴を編集主幹の今泉潤太郎・愛知大学名誉教授にうかがった。

中日大辞典は、上海にあった東亜同文書院（愛知大学の母体）の中国語の教授が作成した資料カードが元になっている。敗戦でカードは国民政府に接収されたが、戦後、本間喜一・愛大学長がカード返還を中国の新政府に願い出た。内山完造・協会理事長、郭沫若・中国科学院長をはじめとした関係者の尽力で、「日中文化交流のために改めて日本人に贈る」という異例の取り扱いで返還されることになり、1954年秋、カードは木箱に梱包されて引揚船・興安丸で日本へ運ばれた：



本間学長は日中友好協会発起人の一人でした。50年、協会の発起人会で本間学長が顔見知りだった内山理事長に返還の希望を中国側に伝えるようお願いしました。そこで島田政雄・協会理事が友人の康大川・新聞総署日本課長（「人民中国」初代編集長）に伝えて、カードの保管場所を突きとめます。返還が実現すると、協会は関係者を集めて協議し、辞典完成に熱心な愛大にそのカードを委託することを決めました。私が愛大を卒業した55年に華日辞典編纂処が開設され、私の指導教授だった鈴木澤郎先生が編集委員長になられたのです。

中国語版「広辞苑」に

中日大辞典の初版は新中国建国後、第2版は文革を含めて80年代まで、そして第3版は90年代から2008年までと、3つの大きな時代を反映しています。他の辞典に比べ1・4倍ほど分量が多いので、第3版は1割カットをめざして編纂し、結果的に5パーセントカットしました。

中日大辞典がめざしているのは中国語版「広辞苑」で、大学院生など中国語が一定レベルにある人が、近代以降の文献を読む時に大きな力を発揮します。また、科学技術開

8-4 b (4)

係の語彙をできるだけ入れたので、中国と関わる理系の人たちにも使ってもらいたい。辞典に対する“日中友好の船”という呼び方は、中国の方が揮毫してくれました。(原稿を) 船に積んで持ち帰ったことをふまえているのでしよう。長く編纂に携わってきた本間学長、内山理事長、郭沫若さん、康大川さんら(日中友好と中日大辞典完成のために) “井戸を掘った人”を忘れてはならないと強く感じますね。

〔注〕日本と中国 第2055号(二〇一〇年三月二十五日)所載。

8-4 b (5)

東亜同文書院 記念賞第十七回授賞式

受賞者挨拶

安部 悟氏

本日はこのような栄えある記念賞をいただきまして、中日大辞典編纂所の代表としてお礼を申し上げます。

先ほどの高瀬先生のお言葉にもありましたように、1933年に東亜同文書院の華語研究部で鈴木擇郎先生を中心として華日辞典の編纂が始まりました。語彙カードを蒐集することから始まり、最終的には14万枚ほどのカードが作成されましたが、日本の敗戦で接収されました。

その後多くの方々のご努力でそれらが戻り、愛知大学で編纂を行うこととなりました。本格的に編纂が開始されるのが1955年で、この時に華日辞典編纂所が設立されました。そこから考えますと今の中日大辞典編纂所は56年目に入るわけで、かなり長い歴史がございます。

その中で68年に初版を出し、86年には第2版、87年には増訂第2版という形で版を重ねてまいりましたが、この間、その中心となられた鈴木擇郎先生や今泉潤太郎先生のご努力はもちろんのこと、本当に多くの方々のご尽力、ご支援をいただいで編纂作業を進めてまいりました。そして昨年、何とか第3版を出す事ができ、私も非常に嬉しく思っておりますし、正直ほっとしております。

この第3版につきましては、今考えられる我々の力をすべてその中に注ぎ込んだつもりでおります。辞書というのは厚さに制約がございますので、あれ以上厚くすることはできません。今回の辞典編纂の中で一番苦労したのは、前回の改訂以後新しい語彙が飛躍的に増えているということです。

皆さんもご承知のように、改革開放路線以降の中国の変化は目まぐるしいものがございます。その中で中国語の語彙もどんどん変化しております。その新しい語彙をいかに取り込んでいくのかというのが非常に大きな問題でありました。新しいものが出たのなら古いものは捨てたらいというわけにはまいりません。辞書はやはりどうしても必要な語彙というものがございます。初版本で言いますと少し古い時代の語彙がたくさん入っております。増訂第2版では、文化大革命中の語彙がかなり含まれております。これらの語彙をどのように残して新しい語彙を入れていくのかというのが非常に難しいところでありまして、この点につきましては編集主幹の今泉先生のご判断で、本当にきちんとした形、つまり古いものでも残すべきものは残す、どうしても必要な新しいものは入れるという考えのもと、今回の第3版は作られております。

華日辞典編纂所は1955年にできておりますが、私も実は1955年生まれで、中日大辞典編纂所と同じ年を経てきており、これも何かのご縁かなと思っております。豊橋にごさいました編纂所が2003年に名古屋校舎のほうに移転いたしました。私はその時から所長をやらせていただいております。

ただ先ほども申し上げましたが、第3版の出版は編集主幹の今泉先生のお力に負うところが多いですし、今回はこれまでご尽力いただいた多くの方々を代表していただいたものと思っております。

これまで我々は、東亜同文書院からの伝統をしつかり受け継いでしつかり頑張つてやっつけていけという励ましのお言葉だろうと私は理解しております。来年から笹島に移転することになりますが、これまでの諸先輩方や多くの先生方のご努力を引き継いで、さらに発展したものにしていきたいと念じております。本日は誠にありがとうございました。

宮田一郎氏挨拶（41期）

中日大辞典の第3版が出ました。辞書の編纂は大事業です。中日大辞典の第1版が出た当時、日本にあれだけの規模・内容の辞典はありませんでした。その後は匹敵するようなものが幾つか出ましたけれども、改訂版を出したものは一つもありません。ポケット辞典クラスではありますが……。この中でこの40年ほどの間に2回も改訂版を出したというのは、愛知大学以外にありません。それほどに大変な事業でありまして、愛知大学の皆さまが払われたご努力に対し、心から敬意を表したいと思います。

かつて辞書を1冊出すのに、一人は命を縮めると言われていましたが、内山雅夫先生の訃報を耳にしたとき、このことがわたくしの脳裏によぎりました。先生は書院34期、もともと丈夫なお体ではありませんでしたが、中日大辞典の完成のため命を縮められたと、わたくしはいまも思っております。辞典編纂のころ、鈴木樺郎先生にお会いすると、「内山君が頑固でねえ・・・」とよく言っておられました。一つの親文字にいくつ意味を立てるかなどで、師弟の間できびしいやりとりがあったようです。学問を語るときの内山先生のきびしいお顔、「内山君がねえ・・・」とぐちりながら、愛弟子に目を細めておられる鈴木先生の温容がいまも目に浮んで来ます。

これらの先生がたの志が愛知大学によつて脈々と受け継がれていることに、書院同窓として心から感謝申し上げたいと思います。

〔注〕滬友会 基金会にゆーす第12号 二〇一一年三月所載。

平成22年度東亜同文書院記念賞・愛知大学同窓会最優秀奨励賞

受賞記念講演会

この度、愛知大学中日大辞典編纂所は、『中日大辞典』第三版の刊行（2010年2月）と初版刊行以来の長年にわたる改訂作業に対して、平成22年度東亜同文書院記念賞および愛知大学同窓会最優秀奨励賞を受賞いたしました。これを記念し、前身の華日辞典編纂処創設以来50年以上一貫して辞書編纂に携わってこられた今泉潤太郎先生と、『中日大辞典』第三版刊行にご尽力いただいた顧明耀先生をお招きし、記念講演会を開催する運びとなりました。みなさま是非ご来聴下さいますようお願い申し上げます。

日時：2011年4月9日（土）15:00～17:00

場所：愛知大学車道校舎3階コンベンションホール

主催：愛知大学中日大辞典編纂所

【講演会】

挨拶 佐藤元彦（愛知大学学長）

安部 悟（中日大辞典編纂所所長）

講演

「中日大辞典編纂所の歴史—書院から愛大へ—」

今泉潤太郎（『中日大辞典』第三版編集主幹）

『中日大辞典』第三版について」

顧 明耀（『中日大辞典』第三版編集委員）

※参加費・申込み不要

『中日大辞典』第三版

金子 眞也

1968年に『中日大辞典』が初めて刊行された当時、親字は7876字（併記されている繁体字・異体字を入れると11,195字）、1987年の『増訂第二版』が8812字（同13,166字）であった。今回の『第三版』は8921字（同13,840字）であるから、親字の数は前回より若干増えている。

愛知大学中日大辞典編纂所ウェブサイト(<http://leo.aichi-u.ac.jp/~jiten/>)と『第三版』「凡例」によると、2009年8月12日に、中国の教育部・国家語言文字工作委員会が発表した《通用规范汉字表》の中に、本辞典に未収録の漢字があり、詳細についてはウェブサイトに対応するとのことである。《通用规范汉字表》じたいが“征求意见稿”という位置づけであることを考えると、《通用规范汉字表》についてウェブサイト対応としたことは、妥当な判断であると評者は考える。

『第三版』の特徴は、ひとことで言うと「利便性の増大」にある。初心者にもなじみやすい作りが変わった。項目に分ければ五つ。

まず、第一に、「メリハリがあって内容を追いやすレイアウト」があげられよう。これは、辞書をつい読み込んでしまう老眼の評者にとっても、ありがたいことだ。

第二に、「発音ごとに別々に立てた見出し」をあげよう。“得”を引く場合、“dé”は“de”、“dei”は“dei”で引く。好みが分かれるかもしれないが、初心者にはこの方が便利だ。

第三は、「調べやすくするための工夫」である。たとえば“不好意思”は単独で見出し項目としてあがっているほか、“好意思”で引いた場合でも、語釈と例文を読めば、“不好意思”の意味がたどれるよう作られている。ちなみに、本書の“不好意思”のピンイン表記は、bù と hǎo yìsī の二つに分けない bǔ hǎo yìsī で、2004年の《現代汉语规范词典》、2010年の同第二版と同じ表記になっている。

第四は、「財布にやさしい値段」である。税別8,600円で、学習者からみたら決して安いとはいえないものの、20年以上前の『増訂第二版』がつい先日まで同じ値段で売られていたことを考えると、相対的に言ってすいぶん安くなった。評者などは、『中日大辞典』も安くなったものだなあ」という感慨を禁じ得ない。

第五は、「中国の現状への対応」である。“公交车”“动车组”“八卦”（ゴシップ）など新語・俗義はもちろん、“和谐”を引くと“和谐社会”が用例に出てくるなど、なかなか頑張っている。

レイアウトを見やすくし語彙を増やした分、どこか減らさなければならないのは、自然な道理だ。『第三版』から外された例として、“二位”（二人を表す尊称）をあげてお

く。こういう外国人に分りにくい敬意の表現が省かれたのは残念である。

最後に、ひとこと。紙の辞書には「読み進む楽しさ」があり、電子媒体には「例文検索の便」がある。『第三版』が早期に電子化され、紙と電子媒体の両方で『第三版』が楽しめる日が来ることを、評者は強く望んでいる。

〔注〕「漢字文献情報処理研究」 第11号（2010）所載。

中国連携

辞書に結実した東亜同文書院の偉業

中日大辞典編纂所

概要

愛知大学の前身である東亜同文書院の華語研究会では、1933年ごろから華日辞典編集のための原稿カード作りが行われていた。敗戦まで14万のカードが作成されたが、これらの成果物は中華民国に接収されてしまった。愛知大学創立後、本間喜一学長は鈴木樺郎教授（同文書院、華語研究会の責任者）に相談し、原稿カードの返還を中華人民共和国に要請。働きかけが実り、カードは1954年9月に返還された。関係者が協議の結果、このカードは愛知大学に付託されることになり、翌年4月に華日辞典編纂処が開設、「中日大辞典」編纂の歴史が始まった。しかし中国語の変化も激しく、カードは一から作成し直すことに。13年の年月をかけ、1968年、愛知大学「中日大辞典」が刊行された。

13年をかけた初版刊行の労苦

初版「中日大辞典」は、本学の創立20周年の記念刊行物として刊行された。我が国初の本格的中国語辞典として大きな評価を得、出版の翌年には中日文化賞を授与された。刊行までの華日辞典編纂処（編集委員長鈴木樺郎、編集主幹内山雅夫ら）の労苦はもろろん、本間名誉学長も刊行実現のために労苦を尽くされた。大学とは別機関の「華日辞典刊行会」を設立し、刊行を見通して印刷費原資の確保のために奔走された。

なおカードの返還には、文学者、文字学者、歴史学者として著名な郭沫若先生に多大なるご尽力をいただいた。中国初の訪日学術代表团が来日した時には、郭沫若先生を招待したが、これが本学における国際交流事業の端緒となったことも見逃せない。

文革と改革開放を経た第2版

初版刊行後、辞書編纂処は一旦解散したが、1966年から始まった文化大革命により、多数の新たな語彙が登場し、対応を迫られた。郭先生の尽力により、文革さなかの1973年、辞書編集関係者による愛知大学学術代表团が訪中し、南開大学・北京大学・復旦大学で「中日大辞典」座談会を開催。種々の指摘や提案を受けたことを契機に、辞典編纂処の再開が決定された。

その後、中国では文化大革命を経て改革開放政策を導入、次々と新語が登場した。こ

8-4 d (1)

のため内容の全面的見直しを進めた結果、10年以上の歳月を費やし1986年に大修館書店より第2版が、さらに翌87年、簡化字総表などの追加訂正による増補第2版が刊行された。

なお、1994年には辞書カード返還40周年を記念して中国日本友好協会に贈った1000冊を含め、初版以来、5000冊が中国に贈呈された。

中日大辞典編纂所と改称

2003年に名古屋校舎（現みよし市）に編纂処が移転、中日大辞典編纂所と改称。辞典内容の見直しのため、中日大辞典新版編集委員会が発足した。編集委員長に安部悟、編集主幹に今泉潤太郎が就任し、第3版の編集が開始され、2010年2月、大学創立60周年記念として、20年ぶりに第3版「中日大辞典」が発行された。

最新の研究結果を取り入れ、内容の全面的な改訂がなされた。同窓生がボランティアとして献身的に協力し、多数の新語資料を提供したことも特筆に値する。

第3版の主な特徴

- ① 収録親字数は1万4000。親文字には繁体字（旧体字）・異体字を併記。
- ② 一般語彙はもちろん、文語・古白話・方言・成語・慣用句から新語まで、幅広く豊富に収録している。
- ③ 語釈は正確で、例文は常用される典型的なものを多数収録。語釈・例文中の多音字には適宜、読み（ピンイン）を示す。
- ④ 文法説明を豊富に取り入れ、同義語・反義語などを示すと共に、語の硬軟・褒貶などにも十分に配慮。
- ⑤ 中国特有の百科項目もふんだんに収録し、それぞれに詳細な解説を施す。
- ⑥ 部首索引、日本語索引、付録13点。

これからの姿

電子化と用途別の2つの将来像

電子辞書や電子書籍の普及が本格化し、辞書の世界は変革の時代を迎えている。「中日大辞典」も例外ではなく、電子化も一つの将来像となるであろう。

「中日大辞典」の大きな特長に、もともと非常に多くの語彙を収録する「百科事典的」という要素がある。すなわち、多様な検索を容易にするコーパス（コンピュータによる検索が可能な大量の言語データ）化のメリットが大きい。

また、紙媒体では紙面の制約で削除されていた語彙も、デジタル化すれば無限大に収

8-4 d (1)

録が可能となる。さらに第1版・第2版も含めた「串刺し検索」も可能になれば、その時代ごとに即した語彙を選ぶことも可能となる。

それとは逆のアプローチとして、編纂所の今までの蓄積を活用し、例えば「古典」「汎用」「表現」といった、用途別の「中日大辞典」の登場を期待する声もある。こちらも一つの将来像として検討したい。

〔注〕愛大『同窓会報』NO.106 (二〇一〇年六月一日) 所載。

8-4 d (2)

知を愛し人を育み

—愛知大学物語—

(八八〇九二、一〇〇、一〇二)

和 木 康 光

宿願の『中日大辞典』

愛知大学が『中日大辞典』の編纂にかかったのは一九五五(昭和三十)年からだったが、その源流は一九三三(昭和八)年頃にまでさかのぼる。その頃、東亜同文書院で『華日辞典』を編纂するため原稿カードの作成を始めた。その作業は一九四五(昭和二十)年半ばまでにカード約十四万語を集め、整理も済ませて出版準備をするまでに至った。だが、ここで終戦。原稿カードは中国側に接収されることになってしまった。「くれぐれも散逸しないように」……学長だった本間ら大学関係者はこれを大きな木箱五つに入れて保管を依頼し、心を残しながら引き揚げた。

日本に引き揚げた東亜同文書院大学を中心とした学生、教授によつて愛知大学が創立された。しかし、『華日辞典』の編纂は途絶えたまま。いつしか八年が経ってしまった。本間はこの途絶を惜しんで、当時の関係者であった小岩井浄、鈴木擇郎らの教授と相談、辞典原稿を何とか返してもらい出版しようと語り、中国側に返還を申し出ることにした。「接収された東亜同文書院大学で手がけていた華語辞典の原稿を改正し、中日文化交流に使用したいから原稿資料カードを返してほしい」

日中友好協会を通じて中華人民共和国政務院科学委員長の郭沫若らに連絡した。すると、ややしばらくして中国側から反応があった。

「あり場所を調べるために手間どつたが保存されていると分かった。返還を正式に申請するように」

カード類は中国内戦などで散逸してはいないか、と半ば諦めかけていた本間らの喜びはひとしおだった。さっそく手続きをし、原稿カードを取り戻した。それが一九五四(昭和二十九)年十二月。これをうけて愛知大学では、簡略文字など激変する戦後の中国語の変化を取り入れながら『中日大辞典』の編纂事業を行うことにし、十余年を経て一九六八(昭和四十三)年、『中日大辞典』初版が出版されたのだった。

『中日大辞典』は、一定の中国語の学力をもつ日本人が中国の新聞・雑誌・一般書を読む場合に役立つ辞書、いわば『広辞苑』の中国語版を目指したとあって、中国の政経時事・科学技術用語から方言・成語・俗語・諺語・古語に及ぶ語彙(こい) 十三万余が取り上げられ、そのボリュームもB6判、総ページ二千二百二十三ページにおよぶ大冊。

こうした本格的な中国語関係の辞典刊行に反響は大きく、画期的な中国語辞典として高く評価されることになった。

「語彙は政治、科学用語から方言、成語、諺、古語に及び…読者に親切な編集である」
 (『朝日ジャーナル』)

「この辞典の出版によって、日本は中国に関して世界の学界に誇りうる金字塔を建てたといっても過言ではあるまい」(毎日新聞記事)

マスコミにも好評だった。中日新聞社は、その文化的意義を認めて、一九六八(昭和四十三)年度中日文化賞を『中日大辞典』編集グループに贈った。

国際的な評価も高かった。

中国カード返還にかかわった一人、中国科学院長・郭沫若(かくまつじやく)は、辞典編纂に励む愛知大学を激励するため「激濁揚清」という書をしたため、辞典編纂中の一九六六(昭和四十二年)、折から訪中した豊橋市長であり愛知大学理事でもある河合陸郎(ろくろう)に托した。それは「濁ヲ激シテ清ヲ揚グー語彙の大海から基準となるべき詞語を探るーという意を表したもので、中国側でも『中日大辞典』への期待が高いことが知られていた。

大学は中日友好協会へ、これまでの好意に感謝の意をこめて千二百部贈呈したが、これが中国各地へ送られ、広く利用されることになった。

辞書は中国以外にも、アジア研究で著名な世界各国の大学の図書館に贈呈したが、これらの大学でも学究者の中で極めて有用な中国文献資料として注目された。『アイチダイガク』の名は国際的に広まり、掛値なしに「世界に誇る『中日大辞典』」のレッテルが張られることになった。

『中日大辞典』はその後、増訂版が出されていく。

改訂版編集に一応の目処がついたのは改訂作業開始後、十年の歳月が経過した一九八四(昭和五十九)年のこと。一九八六(昭和六十二年)二月に『中日大辞典 増訂版』が誕生した。増訂版は本文二千五百二十ページ、索引を加えると総ページ数二千七百六十五ページと厚みを増した。

増訂版は一万七千部刷った。ところが売れ足は速く、一年のうちに残部三千部を切る、まさに「飛ぶような勢い」に、翌年、一万部増刷した。

こうして多くの研究者・実務家・学生に長年愛用されてきたが、日中間の進展とともに国内外で多種多様な辞典が見られるようになる中、さらに『中日大辞典』のグレードアップを図って、名古屋(三好)校舎に「中日大辞典編纂所」を移して、第三版の編纂に取り組んだ。

そして一九八七(昭和六十二年)年刊行の「増訂第二版」から数えて二十数年ぶりの改訂として、二〇一〇(平成二十二年)二月に「第三版」が刊行された。

「第三版」では、新語の追録やフォントをより読みやすいものに変更するなど、より使い良い辞書とされている。

この「第三版」の刊行について、神戸市外国語大学学術情報センター(図書館)のホームページにはこんな記述がされている。

「この『愛知大学 中日大辞典』は、中国語―日本語辞典では数少ない、普通話や方言だけでなく文語や古語も引くことができる辞典であるため、多くの研究者・実務家・学生の方々に長年愛用されています。」

「この『愛知大学 中日大辞典』は、中国語と中国を、より広く深く知りそして学ぶことができる、最良の辞書の一つです。」

「現在、大学等で中国語を学んでいる学生さん、そして仕事で中国語の読み書き会話や翻訳等をおられる方には、ぜひお手元に一冊『愛知大学 中日大辞典 第三版』を持っておかれることをお勧めします。中国語のスキルアップや仕事に、大いに役立つ一冊です。」

これまた、的確な評価のもと『中日大辞典』の今日的な存在意義をしっかりと捉えた紹介ではなからうか。

『中日大辞典』の出版は、愛知大学の中国研究の業績において一つの金字塔をなすものだが、大学史上、その後の国際交流に大きく扉を開き、画期的な進展をみせていく契機となるものでもあった。

「資料カードを快く返してくれたうえ、その後の資料提供など中国の好意に感謝せざるをえない。辞典編集のために約五千万円の経費がかかったが、これを辞典の収益でまかなうつもりはない。辞典の売り上げは出版社の経費を差し引き、すべてを日中友好基金にすることを大学として決めた」

一九六八（昭和四十三）年二月八日、豊橋校舎で『中日大辞典』出版披露のセレモニーを開いた時、本間名誉学長が発表したこの「基金」は、日本と中国の交流などに役立てられることになる。

大学では、その後、郭沫若を通じて、中国側に愛知大学学術代表団の派遣を要望するなど、交流の実現に努めるが、その努力は一九七二（昭和四十七）年九月に田中角栄首相が訪中し、日中国交正常化がされることとなって実現を見る。

翌一九七三（昭和四十八）年、中国側から「南開・北京・復旦三大学に愛知大学代表団を受け入れる」という招聘状が届いた。愛知大学では辞典刊行委員会で鈴木擇郎団長はじめ四名の派遣を決定し、三週間に及んで訪中した。

責任校として世話に当たった天津の南開大学では、二日間にわたって『中日大辞典』に関する座談会が行われた。上海の復旦大学でも、語釈、用例などについて熱のこもった座談会が持たれ、辞典に対する評価と共に、さらに充実した内容とするための共同作業など、これからの辞典改訂のめどもにも明かりを見ることができた。

この愛知大学学術代表団の訪中は、中国側からも高い関心が寄せられた。郭沫若を表敬訪問し謝辞を述べる機会もあったが、人民日報の国際面は「友好を深める日本学者」としてその会見を写真入りで報道した。中国の中央紙や地方紙も、訪中を終えた記者会見記事で『中日大辞典』と愛知大学の学術交流について大きく紙面を割いた。

この代表团は愛知大学が海外に派遣する最初の代表团であった。だが、これはまた、その後一九八〇年代から始まる愛知大学の本格的な国際交流の幕開けと位置づけられる出来事でもあった。

大学代表团が南開大学等を訪問したのを契機に、中国の各大学、機関との交流が活発化して、南開大学・北京語言学院から交換教員が愛知大学に派遣されることになり、中国人数員が辞典編集に協力する体制もつくられた。中国の大学と協定が結ばれることにもなった。

将来計画の検討

本間は、前年の一九八七（昭和六十二）年五月九日、九十五歳で死去。大学では六月、「元学長大学葬」を執行。その他界を悼んだ。

顧みれば、三好町が愛知大学誘致の意思表示をしてから半年、一九七七（昭和五十二年）十二月の評議会には、土地購入に関して賛否で紛糾するなか、本間は名誉学長として特別に出席して審議に加わり、その結果、三好町の土地購入に関する意思決定がなされた。こうして土地入手の最終決断にまで持っていった本間だったが、この昭和六十三年の名古屋校舎（三好）のお披露目を見ることはなかった。

しかし、晩年の本間は、なお愛知大学に心をかけていた。

「僕はハレー彗星をもう一度見てからでないと死なないよ」

本間は、生前一九七六（昭和五十一）年初夏るとき、十年後の一九八六（昭和六十二年）年に接近する機会を期して、そう言った。

約七十六年で地球を周回するというハレー彗星がもつとも接近したのは一九一〇（明治四十三）年の五月十九日、それを見た本間は、二回目のハレー彗星望見を夢見たのだった。それは、老いてなお矍鑠（かくしゃく）として人生を謳歌する気概に満ちていた。

本間は、この言葉どおりに、一九八六（昭和六十二年）年に接近したハレー彗星に望み、その希望を果たした。

しかし、このころは本間もさすがに行動に制約を感じるようになっていた。

折から一九八六（昭和六十二年）四月、『中日大辞典』の増訂版が十七年ぶりに刊行され、その出版記念会が開かれた。

だが、本間は体調優れず、欠席やむなく長女の晟子に代理出席させた。その晟子は、今泉編纂所長に宛ててしたためたお祝いの書簡の最後に、添え書きのかたちで本間の現況をこう記した。

「私の見てます所、父はこのようにみえます。

老驥伏櫪 志在千里（曹操）」

引用されたA曹操Vのこの句は、『三国志の英雄、魏の曹操が著わした『歩出夏門行』

8-4 d (2)

から採った「老驥伏櫪志在千里 烈士暮年壯心不已」(老驥(ろうき) 櫪(れき) 二伏シテ志千里ニ在リ 烈士ノ暮年壯心已(や)マズ)。

その表す意は、老いた駿馬(しゅんめ)は飼葉桶につながれていても千里を走る気持ちに変わりはないし、節義の固い志士は年をとっても意気盛んな心は抑えられない。

晟子は、本間が業を成し遂げた将に晩年になっても元気の衰えない様を中国英雄の言葉に仮託したのだった。

しかし、愛知大学に燃やし尽くした使命感はいつか尽きる。

愛知大学は創立の人を喪い、三好に新天地を得て、ここに時代を画するエポックともなったのであった。

〔注〕中部経済新聞二〇一一年四月一日より連載の「愛知大学物語」より抜粋。

「中日大辞典」DB方式へ

愛知大・発刊50年 来年にも公開

～IT分野の新語など随時更新～

愛知大学の「中日大辞典」が今年で発刊50年を迎える。本格的な中国語辞書として研究者や学生に使われてきたが、「紙の辞書」は現在の第3版が最後になりそうだ。情報を随時更新できるデータベース方式に完全移行する準備が進んでいる。

中日大辞典編纂所所長の安部悟教授＝現代中国学部長＝が、大変身を決めた理由を話す。

「ほぼ20年間隔で新版を出してきた。第3版刊行から10年もたつてないのに、IT分野などの新語が恐ろしいスピードで増えている。電子辞書でも対応は無理。データベース方式ならいつでも情報を追加できる」

準備は第3版刊行2年後の2012年に始まった。編纂所の研究紀要「日中語彙研究」を大学ウェブサイトで限定のデジタル版として創刊した。辞典編纂にかかわる現代中国学部の日本人・中国人の教員や、愛知大から中国に戻った元教員らが、データベース構築に直結する研究成果を発表してきた。

「文化大革命時代の用語を豊富に収録した増訂第2版と最新の第3版を踏まえたデータベースがほぼ完成している」と安部所長。大学ウェブサイトでアクセスし、誰でも無料で使えるようにしたいという。早ければ来年にも公開されそうだ。

「中日大辞典」の発端は、中国・上海にあった東亜同文書院大学（愛知大の前身）が、まだ専門学校だった1933年に手がけた幻の「華日辞典」にさかのぼる。45年の敗戦で接収された辞書カードが、54年に愛知大に戻り、68年に「中日大辞典」が誕生するまでの経緯は、戦後の日中交流を象徴する物語として語り継がれている。

物語の主人公は、当初から一貫して編集責任者を務め「中日大辞典」を完成させた鈴木拓郎教授、辞書カード返還をいち早く提起し実現させた本間喜一初代学長。そして、中国政府の要職にあつてカード返還とその後学術交流を促した知日派の文人政治家、郭沫若だ。

「激濁揚清」。郭沫若が愛知大に贈った文字が、鈴木木の遺影とともに辞典編纂所に掲げられている。「濁を激して清を揚ぐ」。言葉の海に言葉を探る辞書編集をたたえ、日中関係の将来を見据える言葉だといえる。

初版、増訂第2版、第3版の総発行部数は約15万冊。創刊経緯を踏まえ、中国政

8-4 d (3)

府や中日友好協会、中国の大学などに1万冊近くを贈ってきた。

安部所長は話す。「中日大辞典は、日中の若者が学んだ東亜同文書院の流れをくむ愛知大学を代表する企画。電子辞書を学生に推奨する大学が増え、もはや紙の辞書の時代ではなくなった。今後は、データベースの中で中日大辞典が生き続ける」

学術交流のさきがけ

今泉潤太郎名誉教授

初版から第3版まで編集にかかわった今泉潤太郎・愛知大名誉教授に聞いた。

「中日大辞典」は60年代後半から90年代にかけて中国でもかなりの部数が出回り、幅広く活用された。日本語を学ぶためだけではなく、日本の明治大正期にあたる清末民初の庶民の言葉、経済や政治の用語など、中国の辞典に収録されていない中国語が豊富に載っていたからだ。東亜同文書院時代の蓄積とイデオロギーにとらわれない編集方針のたまものだった。文化大革命のさなか、大学間の学術交流のさきがけとなり、欧米の学界にも愛知大学の存在を知らしめた。

「中日大辞典」は愛知大学の顔だった。

〔注〕朝日新聞二〇一八年二月七日朝刊所載。

中日大辞典を巡る人々

石田卓生（愛知大学非常勤講師）

第1回 グローバル化の中の日本と中国

一昔前、国際化という言葉がもてはやされたが、近頃はグローバル化が良く使われているようだ。

グローバル化は国境を越えた社会や経済などの結び付きのことだ。サッカーにたとえると、国別代表チームが国際化、さまざまな国籍や地域の選手が集うクラブチームがグローバル化となる。

最近、とくに英語教育が重視されているがグローバル化と関わりがあるだろう。これもサッカーにたとえてみると、国別代表チームは共通の母語を使えば良いが、多国籍状態のクラブチームでは話者の多い英語が役立つ。

注意が必要なのは、グローバル化は国境を乗り越えはするが、均一化するものではないということだ。互いの伝統、文化などを尊重し合ってコミュニケーションを取らなければならぬ。そうでなければ、多国籍チームはまとまらない。

それは実際にはたやすいことではない。私たち日本人の異文化圏との関わり様について、中国文学者の高島俊男氏は「日本人にとっては、二種類の外国人がある」と述べている。「本が好き、悪口を言うのはもつと好き」ちくま文庫、2018年。

「第一種外国人」は英語などを話す欧米人。「第二種外国人」はアジアや中東などの人々。

そして日本人は第一種外国人を「善良無邪気なほほえみ」で迎え、第二種外国人を「眉をしかめて見おろして」いるのだと言う。

こうしたことは今に始まったことではない。明治時代には「脱亜入欧」（遅れているアジアを離れて先進的な西欧を目指す）と日本人は言っていたのだ。

アジアと欧米をことさら区別するというのは奇妙なことだ。本来、日本人にとって欧米もアジアも異文化という点では対等である。

このような考えを先取りするようにして中国やアジアの研究に取り組んだのが1901（明治三四）年に上海で創立された東亜同文書院（後に大学）であり、その後身校として46（昭和二一）年に豊橋で創立された愛知大学だ。

この連載では、愛知大学『中日大辞典』出版の歴史を軸にして、東亜同文書院と愛知の中国についての取り組みを見ていく。

第2回 濃紺の表紙と朱色の表紙

ことばを使うのに欠かせないのが辞典だ。新聞や本を読むのに国語辞典を引いたり、英語の勉強で英和辞典を引いたりする人も多だろう。

辞典の「辞」はことば、「典」は規範のこと。世の中にあふれていることばの規範を作るというのは大変なことだ。

愛知大学（以下、愛大）は、そうした途方もない作業をして『中日大辞典』を出版した。この辞典は中国語の世界ではとても有名で、中国研究者に愛用者が多い。

1990年代半ば、愛大の学生だった筆者は朱色の表紙の『中日大辞典』を携えて北京に留学した。ここでは、多くの日本人留學生が愛大の辞典を使っていた。愛大生として内心、誇りしかつたことを覚えていいる。

しかし、教室で見慣れない濃紺の表紙の『中日大辞典』を見かけることがあった。持ち主に尋ねてみると、日本語を学ぶ中国人が使っていたもので、北京の書店で売っていると云う。

早速、書店行ってみたが、『中日大辞典』は見当たらない。店員さんに「我々一本愛知大学の中日大辞典」（愛大の辞典を1冊ください）と頼むと、翌日午後にまた来なさいと言う。言われた通りに出直し、やっと濃紺の表紙の辞典を買うことができた。

2つの『中日大辞典』を比べてみたところ、北京で買った濃紺の表紙のものは初版本、日本から持ってきた朱色の表紙のものは増訂第2版であった。

それまでは知らなかったが、愛大の『中日大辞典』を使って日本人は中国語を学び、中国人は日本語を学んでいたのだ。『中日大辞典』は日中の架け橋になっていたのである。

では、なぜそのような辞典を愛大は作ったのだろうか。それを理解するには愛大のたどってきた歴史を知る必要がある。

第3回 「荒尾精と御幡雅文と日清貿易研究所」

愛知大学の歴史をさかのぼっていくと、明治時代、中国の上海にあった日進貿易研究所にたどり着く。

設立者は名古屋生まれの荒尾精である。荒尾は陸軍将校だったが、日本の発展には国際貿易が重要であり、そのための人材養成には貿易相手国についての実践的教育が必要であると考えた。そこで、荒尾は軍人を辞めると、1890（明治二三）年、日本と地理的に近く、今後貿易が盛んになりそうな中国（当時は清）を専門とする日清貿易研究所を作った。

これをスパイ学校と見る向きもあるが、実際は福沢諭吉の弟子で長崎商業学校の元校長・猪飼麻次郎（いかい・あさじろう）という教育者が教頭を務められた学校だった。

中国を専門とする日清貿易研究所にとって最も重要な科目は中国語である。しかし、当時の日本の中国語教育は決して盛んではなかった。日本で重視されていた外国語は、近代化に必要な科学技術を学ぶための英語やドイツ語、フランス語だった。近代化とは直接結び付かない中国語への関心は低く、中国語を専門的に教える大学レベルの学校は

ほとんどなかった。

そうした状況の中、日清貿易研究所の中国語教員・御幡雅文は、中国語の日常会話教科書「華語陸歩」(かごきほ)、ビジネス会話教科書「生意雑話」、ビジネス文書教科書「文案啓蒙」、上海方言のビジネス会話教科書「滬語便商」(こべんしょう)など独自の中国語教材を作り、熱心に教えていた。日清貿易研究所は、当時の日本で最も進んだ中国語教育機関だったのだ。

この日清貿易研究所は資金難のために1893(明治二六)年に閉所してしまいが、その卒業生からは中国で起業して実業家として成功した白岩龍平や向野堅一、国宝を含む中国古美術コレクションを収集した藤井善助、大倉財閥で活躍した河野久太郎など中国と関わる多数の人材が出た。

第4回 「日清貿易研究所から東亜同文書院へ」

1890(明治二三)年、日本の貿易立国を目指した荒尾精は、上海に中国貿易を専門とする学校・日清貿易研究所を設立した。日本の近代的な中国語教育は始まったばかりだったが、日清貿易研究所では中国語教員・御幡雅文が独自の中国語教材を作って中国語教育を展開し、多数の中国専門家を養成した。しかし、この研究所は資金難などから短期間で閉鎖してしまった。

1901(明治三四)年、日中提携を目指す民間団体・東亜同文会が、上海に大学レベルの学校である東亜同文書院(以下、書院)を設立した。この時、東亜同文会会長・近衛篤磨(このえ・あつまる、近衛文磨の父)は、院長に根津一(ねづ・はじめ)を招聘(しょうへい)した。

根津は荒尾の親友で、日進貿易研究所の運営にも関わっていたことがあった。その経験を踏まえて設立された書院は、日清貿易研究所と同じく中国貿易を専門とする学校となった。

ここでは、当然、中国語教育が重視された。その中で中心的な役割を果たしたのが真島次郎だ。05(明治三八)年、書院を第2期生首席で卒業すると母校の中国語教員となった。

真島は卒業直後に大養毅の中国訪問の通訳を任されるほど中国語が抜群だったが、教育者としても優れていた。

教え子の鈴木格三郎(第5期生)は「真島先生は説明するときはいつも立ったまま発音から本の言葉までいちいち親切丁寧に説明される、ことに難しい発音になると先生は学生一人一人につき発音の仕方を教えられた。先生の口つきは60余年を経った今日なお眼にしみついておる」と回顧している。

こうした真島の教え子の中からは多くの中国語専門家が育ち、いつしか所員の日本人中国語教員のほとんどは書院卒業生となっていた。

8-4 d (4)

第5回 真島次郎、鈴木沢郎と「華語萃編」

愛知大学は、日中両国で評価される『中日大辞典』を作った。その成り立ちを見ていく。

佐賀県佐賀市の東泉寺には、1968（昭和四三）年に建てられた「真島次郎先生顕彰碑」がある。真島は愛大の前身校である上海にあった東亜同文書院に学び、卒業後は母校の教員になった。

明治、大正時代の書院生はみな真島から中国語を学んでいる。戦前、書院は中国語教育で高い評価を得ていたが、それを築き上げたのが真島だった。

そうした真島の教育活動の中で特筆すべきことは、書院独自の中国語会話教科書『華語萃編』（かごすいへん）を作ったことだ。

『華語萃編』は、さまざまな場面での会話を収録したものである。レストランや路面電車、人力車といった日常生活での会話もあれば、中国人教師との授業中のやりとりといった学校生活についての会話もある。

面白いところでは、日本式の風呂場の作り方を中国人に説明するというものがある。なぜ、このような会話が収録されているのかと言えば、当時の中国人の入浴とは身体を洗い流すだけであり、湯船に張ったお湯に漬かることは一般的ではなかったからだ。そうした中国で日本式のお風呂に入るためには、中国人に手伝ってもらいながら自分で作るしかなかった。

現代の外国語教科書は、旅行や留学、ビジネスでのやり取りといった訪問者としての立場を想定するのが普通だ。それに対して『華語萃編』は、日本式の風呂作りの会話からもわかるように、日本人が中国に根を下ろして暮らすことを考えたものだった。

また、真島は書院の中国語教員の養成に熱心だった。鈴木沢郎（第15期生、戦後は愛大教授）は、真島に「君はやはり教員がいいですよ」と言われて書院の教員になっている。他にも、松永千秋（第4期生）、富田寿男（第13期生）など、真島はこれと見込んだ教え子を所員の中国語教員にスカウトした。

真島は25（大正十四）年に43歳の若さで病没されてしまったが、その中国語教育は真島の薫陶を受けた鈴木を中心にして受け継がれ、さらに発展し続けていった。

第6回 「書院カラス」は上海で北京を思う

愛知大学の前身校である上海の東亜同文書院は、中国語教育で有名だった。

書院は中国にあったのだから、中国語の学習環境に恵まれていたと思うかもしれない。しかし、実際は必ずしもそうではなかった。

井上ひさし『国語元年』は、明治時代、日本人同士でも方言が異なれば意思の疎通が難しかった様子を描いている。同じことが中国にもあった。

書院が教えた中国語は「北京語」だ。北京辺りのことばである。ところが、書院があった上海では、北京語と発音や表現の異なる方言が話されていた。ある書院生は、上海

の街中で北京語を聞いたのは、白人のキリスト教宣教師のつじ説法だけだったと言っている。書院の北京語は上海では誰も使っていなかったのだ。

上海方言のただ中で、書院生はどのように北京語を学んだのだろうか。

現在の中国語学習は、拼音（ピンイン）。発音をあらわす中国式ローマ字（つづり）を覚えながら発音を習得し、さらに文法を学び、わからないことはや表現は辞書を引いて理解する。

しかし、1950年代までの日本の一般的な中国語学習は、教員の見よう見まねで発音を覚え、後は教材の文章をひたすら暗唱するものだった。師匠の嘶（はなし）を聞いてまねをする落語の稽古のようなものだ。

書院生は、そうした授業のほかに「念書」と呼ばれる自主学習会を開いて中国語学習に励んだ。そうして、毎日、書院の校庭には数百人の書院生による中国語が響き渡ったのだ。

それを近所の住人たちは「書院カラス」と呼んだそうだ。カラスの鳴き声はうるさがるれるものである。書院カラスということばは、書院生がうるさいほど熱心に中国語を練習していたことを物語っている。

第7回 東亜同文書院の中国語教育

愛知大学の前身は、戦前、上海にあった東亜同文書院だ。書院は中国語教育で有名だった。授業は日本人と中国人の教員が必ずペアを組んで行い、課外では「念書」と呼ばれる学生の自主学習会が毎日開かれた。

そうして中国語を学んだ書院卒業生は、中国関係の商社マン、新聞記者、外交官、教育者などとして、戦前だけではなく戦後も活躍した。

書院の中国語教育が成果を上げたのは、書院生と教員の熱心さに加えて、さらに具体的な目標があったことが大きい。それが「大旅行」だ。

大旅行とは、書院生が中国各地を2〜3か月かけてフィールドワークすることである。当時の中国は交通の便が良くなく、政情は不安定で治安の心配もあった。そうした中で大旅行するために、書院生はどうしても中国語を習得しなければならなかった。

この大旅行で、書院生は、多くの中国人と直接交流することを通して、より高度な中国語のコミュニケーション能力を身に着けた。

このように中国の人々と密着した書院の中国語教育は、語学の上達にとどまらず、中国人との間に信頼関係を築く素養を培われた。

真島次郎（第2期生・書院教授）は、人の言動に中国人差別を感じ取ると「中国人を見下してはいないか、もしそうだとしたらとんでもないことだ」と論じた。

坂本義孝（第1期生・書院教授）は、息子に「自分の居るべきところは中国だ」と言った。

石射猪太郎（第5期生・外交官）は、息子に「友人を持つなら中国の友」と言った。

8-4 d (4)

書院で学んだ人たちは、心から中国に親しんでいたのだ。

第8回 教科書の次は辞典をつくらう

愛知大学の前身である上海にあった東亜同文書院は、戦前、中国語教育で有名だった。しかし、そこには問題もあった。

坂本 郎（第20期生、卒業後は書院教授）は、卒業直後の自らの中国語の語学力について「聞くことと話すことと読むことには一応自信があったが、語学的に考えてみるとわからぬことばかり」と言っている。

聞く、話す、読むができるのにわからないというのは不思議に思えるかもしれない。それはこういうことだ。例えば、日本人だからといって誰もが外国人に日本語を教える事が出来るだろうか。日本語教育のトレーニングを受けなければ難しい。話せることと語学的に理解することは違うのだ。

明治、大正の頃、書院の中国語教育は、発音は教員や先輩の見よう見まね、話す・読む・書くについては、教科書をひたすら暗記させるというものだった。そうして書院生は実用的な中国語の表現をたくさん身につけたものの、一方で文法的な理解には欠いていた。

これは書院だけのことではない。戦前日本の中国語教育とは、そうしたものであったのだ。そのため辞典の必要性は高くなく、辞典と言っても詳しい説明もない単語集のようなものばかりだった。

そうした中、1933（昭和8）年、書院は鈴木折郎をリーダーに、本格的な中国語辞典の編纂（へんさん）を始める。このことは、書院の中国語教育が教材の丸暗記から変化し始めたことを意味する。

書院は中国語の教育経験を蓄積させていく中で、辞典を引きつつ中国語の仕組みを考えて理解する中国語教育を実現させようとしていたのだ。

第9回 書院生とラブレター

愛知大学の前身である上海の東亜同文書院を、日本の中国侵略のためのスパイ学校だつたとする見方がある。もちろん誤解だ。実際の書院は中国貿易に特化した商学系の高等教育機関だった。

しかし、日本の学校である以上、日本の戦争の影響を受けざるをえなかった。

日本の学生と戦争の直接的な関りは、1943（昭和18）年から行われた学徒出陣が知られている。しかし、それ以前に書院生が戦場に動員されていたことはあまり知られていない。

37（昭和12）年7月、北京郊外の盧溝橋で勃発した日中戦争の戦火は、8月には書院のある上海にも飛び火した。この時、80名の書院生が通訳として従軍し、1名の戦死者を出している。

こうした戦争の最中にあっても、書院生の中国への親しみが失われることはなかった。島田孝夫(第34期生)は、通訳従軍中に日本軍兵士に乱暴された中国人の女学生を助けている。

「我不是兵。我是東亜同文書院的學生」(私は兵士ではない。私は東亜同文書院の学生です)と島田さんは言い、彼女を中国人たちが戦禍を避けて隠れている山中まで送り届けた。交戦相手国の人々の中にたった一人、丸腰で立ち入るといふのは命がけだ。しかし、島田さんが危険な目に遭うことはなかった。誠意が中国人に伝わったのだ。

この話には後日談がある。

島田さんのものに助けた女学生からラブレターが届くようになったのだ。2人のやり取りは3年ほど続いたが、結局、戦争によって引き裂かれてしまった。しかし、島田さんは、彼女からの手紙を終生大切に持ち続けていたそうである。2人の気持ちは通じ合っていたに違いない。

第10回 東亜同文書院と本間喜一、愛知大学

1939(昭和十四)年、上海の東亜同文書院は旧制大学の認可を受けた。それまで商業実務教育中心だったが、この昇格によって、より高度な学術機関であることが求められるようになった(旧制大学は1947年以前の学校制度)。

そこで書院に招かれたのが本間喜一だ。本間は東京帝国大学法科大学法律学科(現・東京大学法学部)を卒業すると、検事、判事を経て、東京商科大学(現・一橋大学)や法政大学の教授として民法や商法の教育・研究を行い、弁護士としても活躍した。方角の実務・教育・研究を行い、弁護士としても活動した。法学の実務・教育・研究の全てに通じている本間は、旧制大学に昇格したばかりの書院にとつてうつつけの人物だった。

本間は書院に赴任すると、優秀な教員を集めるなどして、たちまち旧制大学としての教育体制を整えている。

ところが戦争が激化し、書院生にも学徒出陣が強いられるようになった。

本間は出征する書院生に「必ず生きて帰ってもらわねばならない」と呼びかけた。これは書院生を深く感動させた。国のために命をささげるのが当然とされていた当時、この言葉は異例だったのだ。

45(昭和二十)年、日本が敗戦すると書院は廃校となり、戦場から帰ってきた書院生は行き場を失ってしまった。

そうした教え子のために、本間は新大学設立に動いた。これに協力したのが東三河の人々だ。戦災を受けていたにもかかわらず、豊橋市は補助金を支給し、中部瓦斯(現・サーラエナジー)社長神野太郎をはじめとする地域の人々も熱心に支援した。

このようにして、46(昭和二十一年)年に開港したのが愛知大学だ。この大学は、教え子と思う本間と東三河の人々の教育が一つとなって出発したものなのだ。

8-4 d (4)

第11回 高師原に鳴く書院カラス

戦前、中国語教育で有名だった上海の東亜同文書院大学は、日本が敗戦すると中国で存続できなくなかった。

書院の学長だった本間喜一先生は、母校を失った教え子のために新大学設立運動を起こし、東三河の人々の協力を得て、1946（昭和二一）年、豊橋郊外の高師原に愛知大学を開講した。

愛大は「世界文化ト平和ニ寄与スヘキ新日本ノ建設」、『愛知大学設立趣意書』を担う国際的教養と視野を持つ人間の育成を目指し、「国際」、「アジア」、「地域」を重視する教育・研究を掲げた。

大都市にしか大学がなかった当時、地方都市から世界を目指す教育を興そうというのには大きな挑戦であった。それは現代社会で注目されているグローバルな姿勢（グローバルな視野に立ちつつ、同時にローカルの視点からさまざまな問題の解決を目指す）に通じる先進的なものだった。

愛大はアジア、特に中国を重視した。それは前身校である所員の伝統を継承したことにはかならない。

中国に関する教育・研究の基礎となる中国語教育では、書院の中国語教員だった鈴木折郎、桑島信一、池上貞一、内山雅夫が教壇に立ち、書院独自の中国語教科書『華語萃編』（かこすいへん）を使って教えた。

書院の雰囲気は学生にもあった。書院からやって来た学生が、書院時代と同じように自主的中國語学習会「念書」を開いたのだ。

こうして高師原の愛大キャンパスには、かつて上海市民が「書院カラス」と呼んだ書院流の中国語発音練習の音が響きわたるようになった。それは後輩たちに引き継がれ、愛大の伝統となっていく。

第12回 本間喜一の東奔西走

敗戦によって閉校した東亜同文書院大学の学長だった本間喜一は、1946（昭和二一）年、「世界文化ト平和ニ寄与スヘキ新日本ノ建設」、『愛知大学設立趣意書』を担う国際的教養と視野を持つ人間の育成を目指して愛知大学を開学した。

この時、本間は大学運営に豊富な経験を持つ慶応義塾大学の元塾長・林毅陸（はやしきらく）を初代学長に招き、自らは一教員として愛大を支えようとした。

しかし、翌年、本間は愛大を離れている。最高裁判所長官・三淵忠彦だったの願いで最高裁事務総長に就任したのだ。

三淵は本間の裁判官時代の上司である。二人の関係は師弟といえるもので、三淵の強い要請を本間は断ることができなかった。

50（昭和二五）年、最高裁の運営を軌道に乗せた本間は愛大に戻った。この時、三淵の後任の最高裁長官・田中耕太郎（本間の一高、東大以来の友人）が豊橋までやって

来て、本間に最高裁事務総長への再登板を懇請している。それを本間は固辞した。当時、愛大は深刻な財政難に直面しており、加えて林学長の体調が悪化していた。危機にひんした愛大のかじ取りができるのは本間以外にいなかったのである。

本間は愛大の学長になると、大学院や女子短大の設置、名古屋校舎（現・車道キャンパス）の拡充など現在に至る愛大の骨格を整えていった。そうした活動の中でも特筆すべきものが『中日大辞典』の編纂である。

第13回 受け継がれた中国語辞典作り

愛知大学の前身校である上海の東亜同文書院大学は、鈴木沢郎（戦後、愛大教授）をリーダーに中国語辞典を編纂していた。しかし、敗戦によって書院は閉校し、それまでに作成していた約14万枚の中国語語彙（こい）カードは中国に接収されてしまった。

本間喜一は、1950（昭和二五）年、愛大の学長に就任すると、すぐに書院の中国語語彙カードの返還運動を始めた。本間は、書院の中国語辞典編纂（へんさん）を、愛大で完成させようと考えていたのだ。

当時、日中間には国交がなかったが、中国科学院院長・郭沫若の協力も得て、54（昭和二九）年、中国語語彙カードが戻ってくるようになった。敗戦で接収されたものが戻ってくるというのは異例のことだった。

こうして中国語語彙カードを受け取った愛大は、55（昭和三〇）年、華日辞典編纂処（現・中日大辞典編纂室）を設け、鈴木を編纂委員長として中国語辞典の編纂を始めた。スタッフは、書院出身の教員。内山雅夫と桑島信一、中国から招聘（しょうへい）した張稼沢と歐陽可亮、愛大卒業生の今泉潤太郎である。加えて、学外の書院卒業生や中国専門家の協力も得ながら辞典編纂が進められていった。時には愛大生も手伝った。当初、6年間で完成を見込んでいたが、実際に『中日大辞典』として出版することができたのは、その倍以上の時間を費やした68（昭和四三）年のことだった。

今泉は、「大学の授業以外の時間はほとんど辞典作りをしていた」、「授業のない土日でも辞典編纂処に行くことが普通だった」と語っている。そのような作業を続けても、なかなか完成させることができないほど辞典の編纂は困難なことだった。

第14回 難航する編纂

1955（昭和三〇）年、愛知大学は中国語辞典の編纂（へんさん）を始めた。

この取り組みは国際的な注目を集め、中国やアメリカの学者がたびたび視察にやってくる。彼らの評価は高く、56（昭和三一）年には中国から辞典編纂資料が寄贈され、57（昭和三二）年にはアメリカの慈善団体ロックフェラー財団が支援を申し出た。

国内外から期待を寄せられた愛大の中国語辞典だったが、当初見込んだ6年間で過ぎても完成しなかった。

8-4 d (4)

辞典を作るというのは、変化し続けることばを集めて説明しようとする途方もない企てだ。例えば、『広辞苑』の初版は編纂に20年余りを費やしている。

愛大は、最初、東亜同文書院大学が戦前に作成した約14万枚の中国語語彙(一)カードをもとに辞典を作ろうと考えていた。しかし、うまくいかなかった。戦前と戦後では中国語が変わってしまっていたからだ。

漢字の変化。戦前は日中両国で同じ形の漢字が使われていたが、戦後はそれぞれ変化した。例えば、戦前は日中共に「豊橋」と書いていたのが、戦後は日本では「豊橋」、中国では「丰桥」と書くようになった。

発音表記の変化。戦前はローマ字表記の「ウェード式」、あるいは発音記号「注音字母」が使われていた。それが、戦後になると「拼音(ピンイン)」というローマ字表記が使われるようになった。例えば「北京」の中国語音は、ウェード式では「Peiching」、注音字母では「ㄅㄟㄐㄩㄥˋ」、拼音では「Beijing」と表わす。

さらに、使われなくなったりことばもあれば、たくさんの新語も生じていた。

こうした変化を反映させるための作業を続けた結果、中国語語彙カードはいつしか書院の時の倍以上、実に約30万枚に増えていた。

第15回 本間元学長、再び走る

戦前、上海にあった東亜同文書院大学は、当時の日本にはなかった本格的な中国語辞典を編纂(へんさん)していたが、戦争によって未完に終わった。

敗戦時の書院学長・本間喜一は、戦後、愛知大学を開校させると、1955(昭和30)年、書院の中国語辞典編纂を愛大で再開させた。

中国語の大きな変化もあって、編纂はなかなか進まなかったが、64(昭和三九)年頃になると、ようやく完成のめどがつくようになった。

しかし、出版費の調達がさらなる問題となった。

愛大の中国語辞典の出版では、日本にはなかった約3千字もの「簡体字」(中国語の漢字の字体)の活字を作る必要があり、当時の金額で1500万円以上という出版費が見込まれた(厚生労働省「賃金構造基本統計調査」によれば68年大卒初任給は月給3万6000円)。

その金額を愛大が出すことは難しかった。辞典を推進した本間は、すでに愛大の学長職を降りており、愛大は以前ほど辞典に対して積極的ではなくなっていたのだ。編纂委員長・鈴木沢郎は「愛知大学の内部でさえも、この辞典については認識が浅く、出版費の大学負担はたやすくは決定されなかった」と述べている。

この局面を打開したのは、やはり本間だった。本間は学内外宏邦粘り強く協力を呼びかけた。その結果、愛大はもちろん、図書印刷株式会社、日本通運、朝日新聞、毎日新聞、多数の中国関係の商社、中国書専門店の大安などからの支援が寄せられることになったのだ。

こうして、68（昭和四三）年、愛大の『中日大辞典』が出版された。愛大が編纂を始めてから13年、書院の辞典編纂開始からは35年もの年月が過ぎていた。

最終回 日中をつないだ辞典

愛知大学の「中日大辞典」の出版では、チャリテイーの手法も用いられた。日中友好を旨指して中国に贈呈する分の予約購入を広く募ったのだ。

1968（昭和四三）年、「中日大辞典」が出版された。日本では大好評であったが、中国での反応はすぐにはわからなかった。当時、中国は文化大革命の混乱の最中にあつた。

72（昭和四七）年、日中国交正常化がなされる。その翌年、突然、中国の有力大学・南開大学から愛大に招待電報が届いた。「中日大辞典」に関する学术交流の呼びかけだった。

愛大はすぐに辞典の編纂（へんさん）委員長・鈴木拓郎を団長とし、中国関係の教員・池上貞一、今泉潤太郎、中島敏夫からなる訪中団を派遣した。

交流会の席上、中国の研究者たちは、「中日大辞典」は日本人の中国語学習だけではなく、中国人の日本語学習にも役立つもので、両国の文化交流を促進させるものだと言った。さらに、辞典について200余りもの提言を寄せてきた。これは「中日大辞典」を詳しく研究していなければならないことだ。やはり、中国の「中日大辞典」への関心は高かったのである。

この学术交流をきっかけとして、愛大は南開大学をはじめとする中国の大学との関係を深めていった。

そして、「中日大辞典」は、中国の研究者たちが予想したように、中国両国の人々が互いのことを学ぶのに大いに用いられ、両国の交流に貢献し続けた。

現在、紙の本としての「中日大辞典」の編纂は終了している。しかし、その内容はインターネット上の「愛知大学中国語彙（ごい）データベース」で公開されており、今なお両国交流の一翼を担い続けている。

〔注〕東海日日新聞 令和四年三月〜六月毎週火曜日掲載。

米国における「東亜同文書院大学」と 愛知大学の『中日大辞典現象』

李春利

愛知大学経済学部教授・ICCS運営委員

1. 一、経緯

1901年に上海で設立された東亜同文書院大学を源流にもつ愛知大学の中国研究は「第二の世紀」に入った。「第二の世紀」の幕開けの象徴は2002年の文部科学省21世紀COE (center of excellence) プログラムの採択による愛知大学国際中国学研究センター (ICCS) の発足である。2001年の東亜同文書院百年祭が20世紀を締めくくったとするならば、2002年のICCS発足は21世紀への発進にほかならない。

私はたまたまICCS推進委員会のアメリカ部会に入っているため、米国の中国研究の拠点校と研究交流のネットワークを構築するために、2003年にICCS事務局長（当時）の山本一巳教授と共に2回にわたって、米国の主要大学を訪問した。

1回目は2003年3月13日から3月22日までで、アメリカ西海岸のカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA)、カリフォルニア大学バークレイ校、スタンフォード大学、ワシントン大学とハワイ大学を訪問した。2回目は9月7日から9月18日までで、中西部のミシガン大学とシカゴ大学、東海岸のプリンストン大学とハーバード大学を訪問した。

訪問先は主に各大学の中国研究センターもしくは東アジア研究センターや関連部、およびアジア図書館などであった。これらの研究機関には愛知大学が編纂した『中日大辞典』や学術誌『中国21』の中国語版などを贈呈してきた。

(中略)

四、米国における愛知大学の『中日大辞典』

約250年の歴史をもつプリンストン大学の美しいキャンパス・センタービルの3に、かつてアルベルト・アインシュタイン博士が教えていた教室 (302号) がある。この「アインシュタイン教室」と同じ階の反対側に、プリンストン大学東アジア図書館がある。その中の一角で、私は愛知大学が編纂した『中日大辞典』を発見した。収蔵されているのは1968年に出版された『中日大辞典』の初版である。辞書は相当使いこなされており、本体はかなり傷んでいる。「ご苦労さま」と言ってあげたいぐらいだった。そのすぐ近くに中国「五四運動」の旗手、太平洋戦争時の駐米大使を務めた胡適 (HU Suh) 元北京大学長の「開卷有益」という肉筆の字が掛かっている。ちなみに、胡適も魯迅もかつて東亜同文書院で講義したことがあり、また東亜同文書院の開校式には中国最初の大学の一つである南洋公学 (現在上海交通大学) の創立者、著名な洋務運動家である盛宣懷も出席したとの記録も残っている。

東アジア図書館副館長のMartin Heijdra博士によれば、愛知大学といえば、すぐ『中日大辞典』が思い浮かぶという (この評価は中国でもまったく同じである)。彼はオランダ人で、同国の中国研究の名門校・ライデン大学の出身で、プリンストン大学で博士号を取得した。彼の専門は中国研究であるが、『中日大辞典』を使って日本語を覚えた。その後、東京大学に2年間留学した後に、この図書館に勤めるようになった。ライデン大学では、東アジア研究の専門であれば、中国研究の専攻でも日本語が必修であるという。

また、館長のTai-loi Ma博士はもともとシカゴ大学で長く勉強し、仕事をしてきた。彼が学生の頃、米国での東アジア研究は中国語と日本語両方の習得が要求されていた。

日本ベースの中国研究の成果を読むために、日本語が必修である。そのために、『中日大辞典』は広く使われていたという。

プリンストンのほかに、今回訪問したミシガン大学、ハーバード大学でも『中日大辞典』が発見された。米国最古の中国研究機関・ハーバード燕京研究所 (Harvard-Yenching Institute=哈佛燕京学社) の図書館には『中日大辞典』第二版が収蔵されていた。ハーバード大学フェアバンク研究センター長のWilt Idema 教授も『中日大辞典』を愛用していた。Idema教授はハーバード大学東アジア学部で中国文学を教えているが、昔、北海道大学と京都大学で1年間ずつ訪問研究をしていた。彼もオランダ人で、ライデン大学で博士号取得後、ハーバード大学に移籍するまで母校で長く教鞭を取っていた。彼は流暢な日本語と中国語を使い分けていた。

副所長のRonald Suleski博士によれば、われわれが訪問する前に、Idema教授は愛知大学の『中日大辞典』について詳しく語っていたという。Suleski (中国通称名: 薛龍) 博士はHarvard-Yenching Instituteにも勤めたことがある。彼はイギリス人で、ミシガン大学で中国歴史研究で博士号を取得した後、テキサス大学と上智大学で教えていた。さらに、彼は米国ヒューロン大学 (Huron University) 東京校学長、日本アジア協会 (The Asiatic Society of Japan, 1872年設立) 会長などを歴任し、通算17年間に及ぶ長い日本滞在歴をもっており、ハーバード大学では有数の日本通である。彼は戦前の旧満洲について研究しており、前述のDouglas Reynolds氏 (中国通称名任達) の東亜同文書院に関する研究書を紹介してくれた。2008年、Suleski 博士は愛知大学の招聘を受けて来日し、講演したことがある。当時の講演録は、ロナルド・スレスキー著『満洲の青少年像』(愛知大学東亜同文書院ブックレット4、あるむ、2008年) と題した日本語の著書に収録された。

『中日大辞典』が刊行された時の世間の評価は高く、『朝日ジャーナル』や毎日新聞は「この辞典の出版によって、日本は中国語に関しては世界の学界に誇り得る金字塔を建てた」と絶賛していた。出版翌年の1969年には「中日文化賞」も授与された。欧米の主要大学では東アジア研究専攻の学生に向けて、カリキュラムの中に中国語と日本語両方が必修科目として組み込まれており、時代に先駆けて発行された『中日大辞典』はかつてこのような教育の仕組みとカリキュラムの構造の中で広く使われていたのである。(後略)

[注] 愛知大学国際中国学研究センター (ICCS) 設立10周年記念誌 (2013.3) 所載

8-5 a (2)

口財團より招請状

明年 渡米の小岩井教授

さきにロックフェラー財団より日本における優秀なる国際問題研究所として認められ「中国に関する欧米出版図書」の購入費」として一千^{ドル}前後の補助金を交付されその後の活動を注目されている本学国際問題研究所にも又も口財団より「小岩井教授渡米決定」の朗報が入り関係者を喜ばせている。

これはかねて口財団が本学国際研究所を日本における優秀研究所と認定して際、たまたま本学研究所を訪れた口財団人文科学担当C・B・ファース氏と研究所との間に交わされた口財団への要望のうち、先に決定した「中国関係欧米出版図書購入費補助金」と共に「本学優秀研究所員の渡米」問題が口財団の取り上げる所となり、その間学長への人選依頼、個人的折衝と次第に具体化し、ファース氏の尽力もあつて今度正式に決定したものである。

なお、小岩井教授の渡米は来年一月一日より十二月三十一日までの何れか都合のよい六ヶ月を選んで実現される予定で、本学研究所のみならず学問的連絡の拡大という意味で、本学の発展に寄与する所大である。

親愛なる本間学長殿

私は本財団が貴大学に小岩井浄教授が米国に約六ヶ月滞在し中国研究の調査を可能ならしむるために四千二百^{ドル}前後の必要とされる補助金を与える事に同意した旨御通知申し上げることのできるのを幸福に存じます。(中略)

補助金の総額は横浜・サンフランシスコ間往復船便の費用、米国内における汽車旅行の費用(シャトル・シカゴ・アイセーカ・ボストン・ニューヘヴン・ニューヨーク・ワシントン・カンサスシティ・サンフランシスコの経路による)及び一日十五^{ドル}として百八十日分を基礎として計上されています。この補助金に関する簡単な公表は本財団次期季報にて行われます。

私は小岩井教授の渡米が同教授にとつても貴大学にとつても有益である事を希望します。勧告或いは諸大学への紹介状等私がそれ以上に行う事がありませんならば「遠慮なくお知らせ下さい。敬具

一九五二年十一月六日

チャールズ・B・ファース

〔注〕 幻の英語版

愛知大学新聞第三六・三七合併号(昭和二十七年二月二十五日) 所載。

ピンポン外交による日米中接近に 「一字千金」の役割を果たした中日大辞典

国際中国学研究センター(CCCS)所長・経済学部教授 李 春利

1977年4月名古屋、世界卓球選手権大会

まずはピンポン外交とは何かをおさらいしておきましょう。1977年春に名古屋市の愛知県体育館で開催された第31回世界卓球選手権大会に、中国代表団が6年ぶりに出場しました。これは日本卓球協会会長だった後藤鉀二(こうじ)・愛知工業大学長が、北京を訪ね中国の周恩来首相と会談した結果実現できたものです。大会期間中の米中選手の交流をきっかけに、米国選手団が中国に招待され、朝鮮戦争以来敵対していた米中の外交が一気に動きました。キッシンジャー大統領補佐官の極秘訪中、続くニクソン大統領の訪中による劇的な両国の和解が世界を驚かせました。さらには、田中角栄首相の訪中により日中国交が樹立されました。名古屋を舞台にした卓球交流から始まった米中接近、日中国交正常化の流れは、冷戦下の世界の力関係を大きく変え、世界史に残る「ピンポン外交」とよばれるようになりました。「小さなピンポン球が大きな地球を動かし」とも言われています。中江要介元中国大使はピンポン外交30周年記念式典の際に、「世界史に残る名古屋発の出来事は2つある。1つは日本の戦国時代、もう1つはピンポン外交だ」と語っていますが、それほどのインパクトがありました。

米中で愛用されてきた

中日大辞典

この世界的な「ピンポン外交」の創世記には、実は愛知大学もかわっていました。米国選手団の訪中希望に対しては、中国側も大変苦労したようです。当時中国のトップにあった毛沢東主席や周恩来首相もぎりぎりまで迷っていたと伝えられています。大会閉会前日の夜、毛沢東による決断が下されたのを受けて、中国外務省から国際電話を通じて訪日代表団に指示を伝えたそうです。当時、国交のない日中の間ではまだ暗号通信システムが確立されていなかったため、傍聴を警戒した中国側が訪日代表団との電信暗号帳として使ったのが、愛知大学の中日大辞典でした。

中日大辞典のルーツは、愛知大学の前身とされる上海の東亜同文書院大学が19330年代から編纂しはじめた『華日辞典』にさかのぼります。敗戦時に接収された約14万枚の中国語単語カードが、当時中国全人代副委員長の郭沫若(かく・まつじやく)氏たちのお取り計らいで、1954年に愛知大学に返還され、それらを元に1968年に刊

8-5 b (1)

行されたのが、中日大辞典です。日本最初の本格的な中国語辞典として高く評価され、翌年には中日文化賞を授与されました。こうした経験を踏まえて、初版から今日まで、中日大辞典は中国側に常に最新版が寄贈されています。それが中国の大学や研究機関、外務省などで広く使われ、中国における愛知大学のブランドを定着させることに大きく貢献してきました。余談ですが、愛知大学豊橋校舎の正門に刻まれている「愛知大学」の4文字は、実は郭沫若氏の揮毫によるものです。

実は私も、中日大辞典で日本語を覚えた1人です。また、上海で日本語を勉強した時の先生の1人は、東亜同文書院の卒業生である王宏教授でした。約20年前にICCSが発足してまもなく、研究ネットワーク構築のために訪米した際に、ハーバード、プリンストンなど錚々たる大学で、使い込まれたポロポロの中日大辞典(初版)を見て、「お疲れ様！」と言ってあげたいぐらい感動しました。米国では東亜同文書院や中日大辞典は広く知られているのに驚きました。中日大辞典は欧米でも広く愛用されていたのです。文献を調べると、米国の「ロックフェラー財団」の理事たちが1950年代に二度にわたり、愛知大学を訪問し、「日本で愛知大学ほど中国研究が進んでいるところはない」と評価し、中日大辞典の編纂に対して寄付と支援を申し出ていたと記されています。

「一字千金」の役割を果たした 中日大辞典

縁があつて、2004〜05年と2018〜19年に二度にわたり、ハーバード大学でフェローとして訪問研究することがありました。2回目のときに、同大学フェアバンク中国研究センターで『江培植文存 対日外交台前幕後の思考(江培植文集 対日外交の表と裏の考察)』と題した本を発見しました。ピンボン外交の際に中国外交官の一員として名古屋に来た江培植氏の回顧録です。そこには中日大辞典が電信暗号帳として使われたという驚くべき事実が書かれていました。そこで私は内容を検証し、今年4月と8月に名古屋で開催された2回の「ピンボン外交50周年記念国際シンポジウム」で初めて発表したのです。2回目のシンポジウムには孔鉉佑中国大使が基調講演を行い、私はパネリストとして出席しました。

暗号の手法は単純なものです。中国外務省と訪日代表団がそれぞれ同じ版の中日大辞典を携え、国際電話で例えば「9601右138」と伝えます。それは「中日大辞典960ページ右段38行目の漢字」を意味しています。実際には事前に決めていた余分な数字も交えて複雑化していたようですが、この要領で「文字ずつ伝え、例えば「邀」「請」「美」「国」「隊」すなわち「邀請美国隊」「米国チームを招聘する」という文章にしたのだと考えられます。50年前の4月に、「ピンボンの首が世界中に響き渡った」と言われたこの毛沢東の決断は、このように中日大辞典を介して名古屋に届いたのである。

江氏はさらに、「これはおそらく最も原始的で最も解読しにくい暗号通信なのではな

いかと思う。現在、机に置いてあるこの中日大辞典を見ると、特定の歴史的な状況の下で『一字千金』ともいえる役割を果たしたことを思い出し、実に感無量である。」とつづっています。私の発表は、中日新聞朝刊（5月23日）・東京新聞夕刊（5月31日）の一面トップで報じられました。その時の編集関係者も「まさに007の世界だ」と言っていました。

世界の評価を

愛知大学の自信に

日本、中国、欧米にとつて、中日大辞典は長らく、代えのきかない重要な書物だったのです。私が愛知大学の学生や関係者の皆さんに知ってほしいのはこのことです。初版から中日大辞典の編纂に参加し、のちに編集委員長を務めた今泉潤太郎名誉教授にこのことを伝えると、非常に感銘し喜んでくださいました。8月末に、私は『エズラ・ヴォーゲル 最後の授業―永遠の隣人』と題した本をヴォーゲル先生故人との共著という形で出版しました。（本誌P. 21 Information参照）。ハーバード大学名誉教授のエズラ・ヴォーゲル先生は、『日中関係史』で10ページぐらい割いて、近衛篤磨や東亜同文書院、そして愛知大学についても書かれています。地方の一私立大学と自他共に捉えられがちな愛知大学ですが、見る角度を変え、時には世界から眺めると、独自の価値が認められているものなのです。これは学生には大きな自信になります。このような他者の真似できない部分を改めて自己評価し、もつと訴求して国際競争力の向上につなげていくべきではないでしょうか。

〔注〕愛大通信 三三三号（二〇二一年十一月二十日）所載。

8-5 b (2)

辞書が介したピンボン外交 〜中国 暗号の道具に五〇年前の新事実〜

外交官の回顧録 愛知大教授分析

一九七一年に名古屋市中で開かれた国際卓球大会を通じて米中両国が急接近した「ピンボン外交」を巡り、当時の中国外務省が大会参加中の中国代表団に対し、愛知大編さんの「中日大辞典」を暗号に使い、米国代表チームに訪中を要請するよう指示していたことが分かった。米中国交樹立や日中国交正常化の流れをつくったピンボン外交から五〇年の節目に、新事実が浮かび上がった。

中国代表団秘書だった外交官の江培植氏が二〇一三年、中国で出版した回顧録で経緯を明かした。愛知大国際中国学研究センター所長の李春利教授が一九九一年、米ハーバード大フエアバンク中国研究センターで同書の記述を見つけ、分析していた。

一九七一年三月四月に名古屋市の愛知県体育館で行われた第三二回世界卓球選手権大会には、中国代表が六年ぶりに参加した。

江氏の回顧録によると、中国外務省は代表団の訪日前から、中日大辞典を使った暗号で連絡すると決めていた。中日大辞典は愛知大が六八年に刊行し、当時唯一の本格的な中国語と日本語の辞書。本国と名古屋で電話をする際、「辞書のページ数と左右の位置、および行数」で機密を伝えたと記している。

李教授によると、暗号は例えば「960」右「38」と伝えた場合、「中日大辞典の九百六十ページ目の右側、上から三十八行目の漢字」を意味したと考えられる。この方法を「文字ずつ繰り返し返し」「激」「請」「美」「国」「隊」（邀請美国隊⇨米国チームを招聘する）といった文章にしたとみられる。実際の電話では事前に決めていた余分な数字も加え、暗号をさらに複雑化していた。

中国側は当初、敵対関係にある米国の代表チームと接触しない方針だったが、閉会前日の四月六日夜、毛沢東主席の決定を受けた中国外務省が、中国代表団に「米国チームを中国に招聘すること」と暗号電話で指示。江氏は「中日大辞典で指示を解読し、急いで代表団の責任者に報告した」と舞台裏を明かしている。

中国代表団は名古屋市中区のホテルに滞在しており、電話の盗聴や情報漏えいを警戒したとみられる。江氏は「おそらく最も原始的で最も解読しにくい暗号」と記している。

大会後に日本から中国に訪問した米国チームは、周恩来首相の歓迎を受けた。互いに関係改善を模索していた米中は急接近し、翌七二年二月にニクソン大統領が訪中。同年九月には田中角栄首相が訪中し、中国が国際社会の輪に加わる流れが生まれた。

李教授は「ピンボン外交を巡る最後のワンピースがはまった思いだ。米中、日中関係は今も複雑だが、各国が歩み寄ったピンボン外交の精神に立ち返ってほしい」と話している。

※ピンボン外交

1971年に名古屋で開かれた第31回世界卓球選手権に、日本卓球協会会長の後藤鉦二（こうじ）愛知工業大学長が、国交のない中国の代表チームを招聘。大会中、中国代表団のバスに誤って乗車した米国人選手と中国人選手が贈り物を交わすなど、米中チームの交流が生まれた。中国政府は大会後、米国チームを中国に招待。朝鮮戦争から敵対していた米中に和解の流れが生まれ、「小さなピンボン球が大きな地球を動かした」と言われた。大会会場となった愛知県体育館には2015年にピンボン外交記念モニュメントが設置された。

「一字千金」歴史動かす

～愛大編さんの「中日大辞典」～

一九七一年に名古屋で開かれた世界卓球選手権大会を通じ、中国に国際舞台への扉を開いた「ピンボン外交」。その過程で愛知大の「中日大辞典」が大きな役割を果たしたことは、ある意味必然だったと言える。

愛大は一九〇一（明治三十四）年、上海で開学した高等教育機関「東亜同文書院」がルーツ。日本各地から集まった俊才が全寮制で中国語や商慣習を学び、作家の魯迅も教壇に立った。同書院は中国語と日本語の辞書を作ろうと一四万枚の単語カードを作成したが、第二次世界大戦の日本の敗戦で閉校し、単語カードも中国に接収された。

後継の教育機関として四六（昭和二十一）年、愛知県豊橋市に愛大が誕生。後に単語カードの返還を中国政府に打診すると、五四年に実現した。愛大はこのカードをもとに六八年、初の本格的な辞書となる「中日大辞典」を刊行（中日文化賞受賞）。中国日本友好協会に千二百冊を贈呈した。大辞典は海を渡り、中国で日本語を学ぶ学生や研究者、外交官の間で必須の辞書となった。

外交の世界では、本国と海外の出先機関との間で重要情報を伝える際、他国の情報機関を警戒し暗号を使うのが常識。七一年当時、日本と国交のない中国はそのノウハウがなく、訪日した中国代表団との臨時の暗号帳として「中日大辞典」を選んだ。

日中関係改善の糸口を探る使命を担っていた中国代表団には、卓球選手以外に外交官も加わり、後に外相となる唐家璇氏もメンバーにいた。回顧録で当時の舞台裏を明かした江培植氏もその一人。外務省アジア局日本課や、在日大使館の役割を果たしていた日覚書貿易事務所駐東京連絡所に勤務していた。

その後の日中国交正常化交渉にも関与した江氏は、「中日大辞典」を手元に置き続け、回顧録の中で「現在、机に置いてある中日大辞典を見ると、特定の歴史的な状況の下で『一字千金』とも言える役割を果たしたことを思い出し、実に感無量である」とつぶつぶっている。

8-5 b (2)

文化大革命の動乱で国内が混乱し、国際社会から孤立していた中国が世界卓球選手権大会に参加したのは、日本卓球協会会長だった後藤鉦二・愛知工業大学長らの努力のたまものだった。そしてピンボン外交の過程で橋渡し役となった中日大辞典は、日中友好の精神から生まれたものだった。現在、日中政府は尖閣諸島の問題などで対立が続いているが、「民間の力」が対立を解きほぐすことができるということ、五十年前のピンボン外交が教えてくれる。

(平岩勇司)

「ピンボン外交」と「中日大辞典」を巡る江培植氏の主な記述(要旨)

1971年、第31回世界卓球選手権大会が日本の名古屋で開催された。(中国)外務省アジア局日本課と訪日した代表团との間の「極秘」の指示や報告で、日本最新版の「中日大辞典」の臨時の電信暗号帳として使った。機密の文字は、大辞典のページ数と左右の位置および行数に、固定の数字を追加して電話で伝えた。

4月6日夜、国内から暗号電話による指示が届いた。「中米両国の選手と人民の友情を増進するため、大会後に米国卓球チームの訪中を招聘(しようへい)する」。私は「中日大辞典」で指示を解読し、急いで代表团の責任者に報告した。

これはおそらく最も原始的で最も解読しにくい暗号通信ではないかと思う。現在、机に置いてある「中日大辞典」を見ると、特定の歴史的な状況の下で「二字千金」とも言える役割を果たしたことを思い出し、実に感無量である。

「江培植文存 在日外交台前幕後の思考(江培植文集 在日外交の表と裏の考察)」から

〔注〕 中日新聞朝刊令和三年五月二三日記事。

江培柱〈江培柱文存〉对日外交台前幕后的思考

社会科学文献出版社

2013. 8. 1 刊

中日邦交正常化亲历记

江培柱

我出生于山东，在东北长大，童年经历了抗日战争那段艰难的岁月。新中国成立后进入大学学日语的时候，遇到父老乡亲的一致反对。他们说日本鬼子那么坏，你还要学他们的语言，我说，这是工作的需要，再者从事中日友好交流也是我的志愿。正是组织上的这一安排和我的选择，使我毕业后到外交部工作并得以从事对日工作。但是刚开始工作的时候，中日关系尚处于无邦交的僵冷时期。当时我很羡慕别的司处的同事，可以出国到主管国家地区办业务，学习和深造，而近在咫尺的日本，却遥远而冷漠，仅有非官方的民间交往，还要绕道香港。

不过，到了20世纪70年代，情况逐渐发生了变化。随着我国的发展壮大，国际声望，地位日益提高。我国在联合国的合法席位得以恢复，一些同我国无邦交的国家要求同我国建交，同我国人民友好合作的呼声一浪高过一浪。长期敌视，遏制我国的美国也派基辛格秘密访华，摸求两国关系的正常化。当时的日本佐藤内阁却依然无视现实，在“两个中国”的死胡同里挣扎，做着“螳臂挡车”的幻梦。然而，日本国内要求中日友好，实现邦交正常化的浪潮卷日本，我国长期以来推行的“民间先行，以民促官”的对日政策和大量友好工作显现出明显的效果。双方交往日趋频繁，关系也更为密切。我们这些从事外交工作的人，也以民间人士的身份，参与多起访日代表团和接待日本访华团的活动，亲历了两国推进邦交正常化的全过程。有趣和巧合的是，我所经历的中日邦交正常化的几个重要片断，几乎都与“土”字沾边。

“土密码”办大事

1971年3月，第31届世界乒乓球锦标赛在日本名古屋举行。世乒赛组委会委员长，日本乒协主席后藤钾二向我国发来正式邀请。因“文化大革命”与世界体坛隔绝多年的我国体育界，就是否派队参加的问题，请示中央。报告最后送到毛主席那里。毛主席作了重要批示：“我队应去，要一不怕苦，二不怕死，准备死几个，不死更好。”大家得知，竞相传告，欣喜非

常。鉴于这是“文化大革命”以来我国首次派团出国比赛，又值我国调整改善与加强对外关系的关键时刻，国家体委与外交部协商并报中央批准，组成由运动员，教练员，外事人员共60多人的大型代表团，由国家体委的赵正洪任团长，多年负责对日外事工作的王晓云担任副团长，宋中任秘书长。我们几个外交部和中日友协的干部，也分别以秘书，翻译等身份随团前往。

中国代表团在“友谊第一，比赛第二”和推进中日友好的方针指引下积极进取，努力工作，获得优异成绩。运动员在比赛中敢打敢拼，技术和精神面貌都有很好的表现，取得了女团，女单，男双三项冠军，男团，女单，女双和混双四项亚军，并与包括美国在内的各国选手广交朋友，切磋球技，增进了了解和友谊。副团长王晓云等外事工作人员则利用这次参赛的大舞台，积极开展工作，同日本各党派，团体，各界朋友进行了广泛而频繁的接触，为中日友好助威加油，为改善两国关系奔走，拉开了“乒乓外交”的帷幕，媒体一致在日本刮起了一场强劲的“王（晓云）旋风”，掀起了前所未有的“中日热”。

特别值得一提的是，正是在这届世乒赛期间，我代表团正式向美国乒乓球代表团发生了访华邀请。毛主席高瞻远瞻的战略决策，以“小球转动大球”，不仅开除了长期处与敌对，隔绝状态的中美两国交往的大门，也赢得了世界。

本来中央批准的邀请方案是不包括美国的，“如美国队要求访华，可予婉拒”。但是4月6日晚，国内通过密码电话传来指示：“为增进中美两国运动员和人民之间的友谊，正式邀请美国乒乓球队于31届世乒赛之后访华。”我用带来的“土密码”——本《中日大辞典》译出指示，赶忙报告代表团领导。

4月7日下午，比赛仍在爱知县体育馆大厅紧张进行。观众为选手们精湛球艺欢呼，喝彩，掌声雷动。就在此刻，体育馆地下一层会客厅也是“于无声处听惊雷”。中国代表团秘书长宋中紧急约见美国乒乓球代表团负责人哈里森，向他转达了对美国乒乓球队的访华邀请。哈里森很是激动，感谢中方的邀请并答应立即报告国内，他表示相信，全美上下都会为之高兴。结果，以美国乒协主席格雷厄姆·斯廷霍文为团长的代表团4月10日即飞抵北京开始了正式访问，美国代表团包括哈里森和带姆博根等乒协官员和在名古屋曾同中国运动员有过接触的乒乓球选手格伦·科恩等人。

他们的访问获得成功并得到周恩来总理的亲切会见。周总理说，你们应邀来访打开了两国人名友好交往的大门。

这件事情对我个人来说尤其难忘。可能不会有人想到，在当时访日参赛的条件下，包括邀请美国代表团访华这样机密非凡的信息都是通过“土

密码”电话传送的。那时中日两国关系尚未正常化，我国驻日机构——备忘录贸易办事处也未设立密码通讯。前后方联系靠托带信件，紧急时只有打国际电话，而不宜公开的机密，就只能靠自己设定”土密码”了。此次赴日前，我们商定，前后方电话窗口的名字为”陈东新”，以20世纪60年代日本最新版的《中日大辞典》作为临时密码册，我带上一本随代表团赴日，外交部亚洲司日本处留一本。属于绝密，机密的指示和请示报告一律通过”土密码”，机要内容的字词以大辞典页码，左右边以及行序再加上固定数字，在电话上传达，因此，我打给”陈东新”的电话和”东新来电”常常夹杂着不少阿拉伯数字，需要”译”出才明白。这恐怕是最为原始又最难破译的密码通信了。如今，我每当看到桌前摆放的这本《中日大辞典》就想起它在特定历史条件下发挥的”一字千金”的作用而无限感怀。

[注] 〈江培柱文存〉对日外交台前幕后的思考 2013年8月
社会科学文献出版社所载。

8-5 b (4)

愛知大編さん 日・米・中友好 黒子の辞典

1972年の日中国交正常化から今年で50年。敵対していた米中や日中の国交回復につながった「ピンポン外交」の実現には、愛知大（名古屋市中）が編さんした「中日大辞典」が大きな役割を果たしていた。関係改善の糸口を探る中国政府が外交官に暗号で指示を伝える際を利用して。近年、その事実を知った同大関係者は「改めて友好の歴史を振り返ってほしい」としている。

中国、暗号伝達に活用

ピンポン外交

ピンポン外交は71年に名古屋市中で開催された世界卓球選手権を機に始まった。誤って中国のバスに乗り込んだ米国人選手に中国人選手が贈り物を渡し、その後、中国の招待で米国チームが訪中するなど交流した。

中国選手団に同行して来日した外交官の江培植氏が、当時の内幕を明かす回顧録を2013年に中国で出版。同大国際中国学研究センター所長の李春利教授（国際産業論）が米国で回顧録を見つけ、昨年4月にシンポジウムで報告した。李教授によると、江氏は選手権閉幕前夜の本国との電話で、毛沢東主席の指示を暗号で伝えられた。盗聴を警戒したとみられ、その際に使われたのが、初の本格的な中国語辞典として同大が1968年に刊行した中日大辞典だった。暗号は大辞典のページと列、行を示す数字にあらかじめ決めた数を交ぜたもので、該当する漢字をつなげて解読したとかがえられるという。

指示は「中米両国の選手と人民の友情を増進するため米国チームを中国に招待する」という内容で、江氏は「急いで代表団の責任者に伝えた」という。暗号については「おそらく最も原始的で、最も解読しにくい」と評していた。

「発想に驚き」

選手との交流は72年2月の米大統領訪中、同年9月の日中共同声明につながり、「小さなピンポン球が大きな地球を動かした」といわれた。編さんに携わった今泉潤太郎・同大名誉教授は「大辞典を暗号に使う発想に驚いた。ピンポン外交や国交回復に役立てたのは感慨深い」と話した。李教授は「民間交流が国交正常化の原動力になった。大辞典は友好の使者として役割を果たした」としている。

〔注〕読売新聞夕刊令和四年十月十四日・朝刊令和四年十月十五日記事。

中国日本友好协会用 箋

大安市店轉

爱知大学中日大辞典刊行会：

贵会赠给我会的《中日大辞典》1200册已如数受到。

对此隆重的赠品，仅致谢意。

贵会经过多年的努力，编纂出版了《中日大辞典》。它对于日本人民学习毛泽东思想、了解中国社会主义革命和社会主义建设，特别是史无前例的无产阶级文化大革命，从而发展中日友好和文化交流将起积极作用。对贵会为此而辛勤劳动所取得的成果，谨致祝贺。

我会将不辜负贵会的厚意，拟将这批辞典分送给各有关单位和人士参考、使用，以资中日两国人民的相互理解，进一步发展两国人民的战斗友谊。

谨 致

友 谊 的 问 候

中 日 友 协

1968年6月21日



訳文

大安気付 愛知大学中日大辞典刊行会御中

貴会より贈られた「中日大辞典」1200冊確かに受け取りました。この豪華な贈り物に対し感謝いたします。

貴会の多年にわたる努力により「中日大辞典」は編纂出版されました。これは日本人民が毛沢東思想を学び中国の社会主義革命と社会主義建設、特に史上例を見ないプロ文化大革命を理解して、中日友好と文化交流を発展させる上で積極的な役割を果たすことでしょうか。貴会のご苦心の結実に対し謹んでお祝い致します。

わが協会は貴会の厚意をむだにせず、この辞書を関係個所と関係者に送り届け、参考、利用させて中日両国人民の相互理解に役立て、更に両国人民の戦闘的友誼を発展させたいと存じます。

〔注〕初版本寄贈に対する中国側の礼状。

中华人民共和国国家教育委员会

爱知大学

学长 浜田 稔 先生：

《中日大辞典（增订版）》到，非常感谢。我年令已大，学习语言有一定困难，但我正愿以此学习日语。以增进中日友谊。

去年，对丰桥的访问，正今难忘。

至此，再次谢。

中华人民共和国国家教育委员会
学生管理司司长
杨学

8-6(3)

愛 知 大 学
名誉学長 本間喜一先生
学 長 浜田 稔先生

拝復 早春の候、本間先生、浜田先生には益々お元気で、ご活躍の趣、およろこび申しあげます。中日友好協会は貴校よりご惠贈いただきました中日大辞典増訂版一千冊をさる三月十九日に嬉しく拝受致しました。毎度ながらご芳情の程心からありがたく存じております。長い間中日友好と中日学術交流のために力を尽くしていらっしゃる貴大学の責任者の方々に厚くお礼申しあげます。特に本間先生は数十年一日の如く日中友好と学術交流に精魂を打込まれ、それが花を咲せ、実をむすんだことを心からお慶び申し上げ、敬意を表すものでございます。

ご惠贈下さいました中日大辞典はこれから関係部門にお分け致しますが、特に文化交流の面でより大きな役割を發揮することを期待し、又、その成果が本間先生と浜田先生及び辞典編纂発行に従事した方々のご苦勞にたいする最良のお返しになると考えます。

末筆ながら皆様のご健勝をお祈り申しあげます。

取り敢えず書中をもってお礼申し上げます。

敬具

1987年3月25日

中日友好協会会長 孫平化

中华人民共和国国家经济委员会

爱知大学学长 浜田 稔 先生：

春暖时节，谨祝安康。

您代表贵大学赠送给我国家经济委员会的1,000本中日大辞典（增订版）已收到，对于贵方的友好情谊，我们深表感谢。如同所期望的那样，我们即将这些辞典转发下去，同时转达贵方的友好之情。相信这1,000本词典将在中日友好及中日人才交流事业中得到充分应用。

此致

敬意

中华人民共和国
国家经济委员会副主任

袁宝华 张彦宁
一九八七年三月二十七日

8-6 (5)

爱知大学赠我一千部中日大辞典

本报东京六月一日电（记者陈志江）

日本爱知大学向我国家教育委员会赠送一千部修定版《中日大辞典》的赠书仪式昨天下午在名古屋市隆重举行。《中日大辞典》是一部在中日两国学术、文化交流上起过重要作用的工具书。

〔注〕「光明日報」一九八六年六月四日所載。

愛 知 大 学

愛総務第40号
1994年7月8日

中国日本友好協会
会長 孫 平 化 先生

愛 知 大 学
学長 石 井 吉 也

愛知大学『中日大辞典』寄贈について

拝啓 ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、本学出版の『中日大辞典』は初版刊行以来、出版部数12万冊を越え、「日中友好の船、学术交流の橋」として、国内外の関係者から評価を受け今日に至っています。

本年は、『中日大辞典』刊行の契機となった、東亜同文書院大学制作の「華日辞典原稿カード」が、1954年9月貴協会名誉会長郭沫若先生のご好意により中国人民保衛世界和平委員会より寄託されてから40周年の記念すべき年に当たります。

ご存知のことと思いますが、本学は1967年中日大辞典初版の刊行を記念して1,200冊を貴会へ贈呈しましたが、この度、カード返還40周年の記念として1,000冊を寄贈し、あらためて感謝の意を表することとなりました。なにとぞお納め下さるようお願い申し上げます。

就きましては、直接ご挨拶申し上げるべきですが、あいにく公務繁多のため、ここに中日大辞典編纂処所長今泉潤太郎教授を派遣しご挨拶させたいと存じます。ご多忙のところ恐縮に存じますが、ご配慮のほどお願い申し上げます。

なお、駐日本国特命全權大使徐教信先生には私がお挨拶申し上げる所存でございます。

敬具

8-6(7)

愛知大

ありがとう……原本カード返還40年

中日大辞典、中国へ寄贈

中日大辞典の原本となったカードの返還四十周年を記念し、編纂(さん)した愛知大が北京の中日友好協会に同大辞典一千冊(八百六十万円相当)を寄贈することになった。二十八日、東京の中国大使館に石井吉也学長らが訪れ、徐敦信中国大使に目録を手渡す。中日大辞典は、一九〇〇年代初頭、中国・上海に設立された日本最古の海外の大学「東亜同文書院大」の集めた辞典原稿カード十四万枚が原本。

昭和二十年の敗戦と同時に同大が廃校となった時、カードは中国の地に残されたが、「ぜひ返してもらって辞典を完成させたい」と、同二十九年、同大の最後の学長で愛知大の本間喜一学長が資料を接収した中国政府に要望。中国側も「文化交流を促進したい」と、同年九月、愛知大学へ引き渡された。

同大では「華日辞典編纂処」を設置し、編集に着手。同四十三年の初版刊行以来出版部数は十二万三千冊を数えた。現在は急激に変化する中国事情を踏まえた辞典の前面改訂版を計画中。

中日大辞典編纂所長の今泉潤太郎教授(六一)は「あのカードがなければ、日本で中国語研究の深まり方も違っていたと思う。これからもいい辞典をつくっていききたい」と話している。

〔注〕読売新聞一九九四年七月二十六日所載。

単語カード返還 40年

愛大『中日大辞典』1000冊中国へ

感謝の気持ち込め贈る

愛知大学（豊橋市町畑町一、石井吉也学長）は二十八日に東京の中国大使館で同国北京の中国日本友好協会に贈る「中日大辞典」千冊の目録を手渡す。中日大辞典は、愛大の前身の同国上海にあった東亜同文書院大学で中国語の大辞典を編纂するために初代編纂委員長・故鈴木沢郎名誉教授らが、収集した中国語を単語カード約十四万枚、七万語が、土台になっている。

この単語カードは、敗戦と同時に中国側に接収されたが、故郭沫若中国科学院院長が、当時の日中友好協会・内山完造氏を通して愛大から返還願いが伝えられ、「中日両国民の友好と文化交流促進のため」として一九五四年九月に返還。

愛大は、この単語カードをもとに華日辞典編纂処（現在の中日辞典編纂処）を発足、十三年の歳月をかけて同辞典が日の目をみた。戦後間もない時期に中国側の両国人民の交流を念頭に置いた温かい配慮が、今日の愛大の中国研究に大きな実りをもたらし、中日友好を発展させた。

愛大では、ちょうど四十年目を迎えるにあたり、同辞典千冊を贈呈することにしたもの。中国への同辞典の贈呈は初版以来、これで五千冊にのぼる。

〔注〕東海日日新聞 一九九四年七月二七日所載。

『中日大辞典』1000冊を寄贈へ

原稿カード返還40周年 愛大が友好協会に

中国研究者必携の辞典として知られる「中日大辞典」を編さんしている愛知大学中国大辞典編纂(さん)処は、辞典のもとになった原稿カードが中国から返還されて四十年になるのを記念して、中日友好協会に同辞典一千冊を寄贈する。二十八日、石井吉也学長が東京の中国大使館を訪れ、徐敦信大使に目録を手渡す。

二千八百^冊、約十四万語が収録されている同辞典は、国内最高水準の中国語辞典で、一九六八年の初版発行以来、十二万三千冊を出版。香港や北京でも販売され、中国政府には、これまでに愛大から約五千冊が贈られている。

中日大辞典は、愛知大ゆかりの東亜同文書院(中国・上海)が一九三二年に「華日辞典」として出版を計画。辞典の原稿カードを作成中、敗戦のため没収され、その後、中国政府の管理下に置かれた。五三年、当時の本間喜一愛知大学長が郭沫若中国科学院院長にカードの返還を要望。「日中文化交流の懸け橋」として翌五四年、辞典編さんの準備をしていた愛大に引き渡された。

返還四十周年記念事業では、寄贈とともに、九八年刊行をめどに同辞典を全面改定することも決定。八〇年代以降の中国の改革・開放路線に伴う学術成果を盛り込んだ内容にする。

〔注〕中日新聞 一九九四年七月二十八日所載。

中国へ中日大辞典
1000冊愛知大
寄贈、資料返還40年を記念

一私大として『中日大辞典』（大修館書店刊）を編纂（へんさん）、発行し続けている愛知大学（豊橋市）が最新版千冊を中日友好協会（孫平化会長）に贈ることにし、二十八日、中国大使館で石井吉也学長らが目録を手渡す。八〇年代以降の中国社会の変化を踏まえ、愛知大は同辞典の全面改訂を決め、新版をはじめ、新たに中日辞典としては初めてCD版、スタディー版発行の準備にかかっている。

愛知大学は、中国・上海にあった東亜同文書院大学の関係者が終戦直後の一九四六年に設立した。『中日大辞典』は書院時代に企画され、終戦直前には資料カード約十五万枚が収集された。しかし、敗戦で国民政府軍に接収された。

最後の書院大学長を務めた本間喜一学長は、中国科学院長の郭沫若氏に返還を願い出た。五四年九月、引き揚げ船で届けられた。

本間学長の決断で愛知大は「華日辞典編纂処」を開設、六八年二月、初版の刊行にこぎつけた。八六年四月に大改訂、二年に一回の増刷ごとに新語を採録している。これまでに十二万三千部、最近は年に五千部売れている。

「日中友好の船、学术交流の橋」と評価され、日中交流にかかわる人々の必携辞書といわれる。古典から現在の科学技術まで百科項目も収録、中国にはこうした多目的辞典は少ないため、逆引きに利用するのに重宝されている、という。

限定価八千六百円は中国の一般市民の一カ月分の給料に相当し、大学生らにとつては高根の花。愛知大は大学、図書館などに四千冊を寄贈してきたが、今年はカードが返還されて四十周年に当たるため、一千冊を贈ることにした。

辞典の大改訂は創立五十周年事業として行う。新版では八〇年代以降の改革・開放、社会主義市場経済体制の確立に伴う社会変化、学術研究の成果を踏まえて内容を一新する。

編纂処長は今泉潤太郎教授が務め、中国人スタッフも参加している。九八年に刊行する予定。

石井吉也・愛知大学長の話 『中日大辞典』の出発点であるカード返還に対し、改めて感謝の意を表したい。中国の教員から寄贈の希望も強く、ささやかだが、お役に立てればと思う。全面改訂は組織も確立したので、時代の要請にこたえられる内容にすべく努力したい。

〔注〕朝日新聞 一九九四年七月二八日所載。

8-6(11)

愛知大学 中日大辞典 100冊、中国へ寄贈

「華日辞典
原稿カード」 返還 40年を記念し

中日大辞典の原本となった「華日辞典原稿カード」が中国から返還されて四十年にわたるのを記念して、辞典を編さんした愛知大学が中国日本友好協会（中国・北京）に中日大辞典一千冊を寄贈することになり、同大学の石井吉也学長らが二十八日、東京の中国大使館を訪れ徐敦信大使に目録を贈呈する。

華日辞典原稿カードはいままで言えば、市販されている情報カードのようなもの（縦一〇枚、横一五枚）で、一つの単語について一、二枚使っている。太平洋戦争中、唯一海外にあった日本の大学、東亜同文書院大学が集めたもので約十四万枚に及んだ。一九四五年の敗戦で同大学は廃校となり、カードは中国に保管された。同大学最後の学長で、愛知大学の創始者でもある本間喜一氏が五四年にカードの返還を要請。中国側も「日本との文化交流の促進に」と同年、愛知大学に引き渡された。

文化大革命後に増訂版を刊行しているが、八十年代後半からの改革・解放政策で株式市場など経済的用語や、コンピュータ・ハイテク用語などが急増。全面改訂版ではこうした用語などを網羅する。

中日大辞典編纂所長の今泉潤太郎教授（六〇）は「中国の好意でカードを返してくれたからこそ辞典はできた」と中国への感謝の意を話し、全面改訂版編纂への意欲を見せている。

〔注〕毎日新聞 一九九四年七月二八日所載。

中国へ中日大辞典
1000冊贈る

学長が大使に目録渡す

愛知大学中日大辞典にとり、本年は記念すべき年となった。中日大辞典刊行の契機となった東亜同文書院華語研究会制作になる華日辞典資料カードが中国から返還され、愛知大学に託されてから、四十年目にあたる。本学では、これを記念して、このほど中国日本友好協会（孫平化会長）に対し中日大辞典一千冊を贈呈することとし、去る七月二十八日に東京の中国大使館において石井学長から徐敦信中国大使に目録が渡された。徐敦信大使からは丁寧な感謝の意と、この辞典が中国で重用されていることが述べられ、今後についても大きな期待が寄せられた。

（中日大辞典編纂処所長・今泉潤太郎）

編纂処所長、北京で孫中日友好協会会長に報告

中日大辞典編纂処編の中日大辞典は、一九六八年の初版刊行以来、出版部数は十二万三千冊を数え、「日中友好の船、学術交流の橋」と、国内外の関係者から評価を受け今日に至っている。本学は新版（第三版）を一九九八年に出版すべくあらたな編纂事業への取り組みを始めることとなり、併せてコンサイス学習版、CD-ROMの編集を進める予定である。本年は中日大辞典刊行の契機となった東亜同文書院制作の華日辞典資料カードが中国側の好意により返還され、愛知大学に寄託されてから四十周年にあたる。

中華人民共和国が成立したばかりの時期に郭沫若中日友好協会名誉会長、鄭振鐸文化省副大臣などが、内山完造日中友好協会理事長、本間喜一学長の要請をうけ、日中友好の見地から文化交流の贈物として、同カードが返還された。その後も中国側の数々の支援と協力のもとに、今日の中日大辞典が誕生したのである。

ここで華日辞典資料カード返還にいたる経緯について説明しておこう。

一九三〇年頃から東亜同文書院の中国語教員により、華日辞典編集のための資料カードの制作が始まり、敗戦時には十数万枚（約七万語）となった。書院の財産として、このカードも中国国民政府教育京滬特派員辦公処により接収された。この時の接収委員が著名な文学者である鄭振鐸氏であった。

愛知大学が創設され、学内も整備されつつあった一九五四年、同文書院大学の最後の学長であった本間先生が、このカードを返してもらい、ぜひ愛知大学の手で完成させたいと関係者に働きかけた。当時日本政府は台湾政府を認めていたため、この話は全て民間サイドで進める他なかった。日中友好協会は本間先生も設立発起人の一人として作られた当時、唯一の全国組織であった。同年七月、内山完造理事長（上海にあった内山書

8-6(12)

店のラオパン。郭沫若氏や同文書院とも親しい関係があった)を通して、郭沫若氏へこの件を願い出た。十月に康大川「人民中国」編集長宛へ申し出て欲しい旨の返事があり、結局、翌年の四月、「このカードは国民政府国立翻訳館に接収されていたが一部は散失し大部分は残存している。中日両国民の友誼と文化交流の促進の見地から、文化交流の贈り物として日本の方々に贈るものである。その送り方について知らせてくれ」との回答が寄せられた。中国人民保衛世界和平委員会(郭沫若名誉会長)の劉貫一秘書長名であった。

このカードは、大きな二つの木箱につめられ、引き揚げ船興安丸によって塘沽から舞鶴へ、更に東京へ送られてきたのが、一九五四年九月、本学へ着いたのは二月八日のことである。島田政雄日中友好協会理事が受け取りの責任者であった。現在の教職員組合事務所の建物に華日辞典編纂処が設けられ、一九五四年の四月、辞典編纂が大学の事業として正式に開始された。

思えば、愛知大学中日大辞典は今を去る六十年前、東亜同文書院での華日辞典資料カード制作を淵源としており、幾多の紆余曲折を経た結果、現在の体を成したものである。一九六八年初版刊行に当たって、倉石武四郎中国語学会会長から寄せられた推薦の言葉はよくこの経緯を述べている。

「それは教奇をきわめた辞典であった。はじめ中国は上海の同文書院に呱呱の声をあげ、十数年にして終戦とともに中国に接収された。―中略―それよりさらに十年、日本は豊橋の愛知大学で根本的な検討と整理が加えられ、いまようやく刊行されようとしている。―中略―この辞典は、かつて日中両国のあいだに介在して教奇な運命をたどったが、それはやがて両国文化交流の使命たる資格を賦与される所以となった」

「日中友好の橋、文化交流の船」と評せられる愛知大学中日大辞典成立の由縁を、これ以上適切に説明している言葉は他にない。

なお、今年度夏期中国語セミナーの引率として出張中の八月二十三日午後、北京の中日友好協会本部において孫平化会長にお目にかかり、挨拶をした。孫平化会長は本間先生のことをはじめ、いろいろと本学について承知しており、一千冊の寄贈に対して感謝されるとともに、辞典の配分方法などについても、充分活用できるように検討すると約束された。同席したのは同協会理事の陳兆華氏ならび到北京友好翻訳服務公司副經理の劉柏林氏で、劉氏は文学部講師をされたことがある。

〔注〕愛知大学通信第104号 一九九四年十月三十一日付。

程永華駐日大使、愛知大学の寄贈「中日大辞典」を受領

2010/12/17

程永華駐日中国大使は11月15日、佐藤元彦愛知大学理事長兼学長と会見し、同校から中国の大学113校に寄贈される「中日大辞典」第3版の目録を受け取った。佐藤学長は、愛知大学は中国の関係大学との交流・協力を重視しており、今回の辞典寄贈が中国の大学生の日本語学習を助ける積極的な役割を果たすよう希望していると述べた。

程大使は愛知大学の善意を賞賛し、日本から贈られる辞典は中国の関係大学で有効に活用され、中日友好に力を尽くすより多くの人材の養成に貢献するものと信ずると述べた。

「中日大辞典」は1955年4月に本格的編集が始まり、1968年、1986年と今年2月、第1、第2、第3版があいついで刊行、発売された。「中日文化賞」を受賞し、中国国内の日本語学習者の間で広く愛用されている。

[注] 中国大使館ホームページ掲載記事。

爱知大学中日大辞典出版说明

开端：在昭和初期（一九三〇年）以前，对学习汉语的日本人来说，最大的苦恼就是缺少汉语课本，参考书和词典。

中国出色的辞典《辞源》、《辞海》分别于一九一五年和一九三七年问世，但是，这两本辞典都以文言为对象。作为汉语辞典，最早的大概要属周铭三编《国语大辞典》（总共为二百八十一页的小型词典），问世于一九二二年，《王云五大辞典》是一九三〇年，《标准语大辞典》是一九三五年问世，真正的汉语辞典《国语辞典》的问世已是一九三六年。

汉语词典的出版莫如说日本更早。在大正初期（一九一〇年代）就已有石山福治的中国语辞典了。但是这本辞典就连学生使用起来都觉得不满意。（一九三五年石山福治出版了达一千七百五〇页的《新支那大辞典》）。其后，进入昭和年代，一九二八年《井上支那语辞典》，一九四一年竹田复的《支那语辞典》等现代汉语词典出版问世，基本上满足了需要。尽管如此，也难于适应形势的发展和要求的提高。

编写外国语词典并非轻而易举。明治中叶以来，在我国，西洋各国语言，特别是英语、德语、法语词典已基本齐全。这是因为在我国对这些外国语的研究较先进，实际上在这些国家对本国语言的研究都很先进，已出现了很好的辞典。

然而，在中国历来的学者中有重古文，轻口语的习惯，因此，中国学者对现代汉语的研究是不足的。在此情况下，石山福治、宫岛大八、井上翠、竹田复的词典虽有些不妥之处，但能编写出汉语辞典并非容易。尽管如此，深感有必要克服这些不妥当，不完全之处。

原来的东亚同文书院大学平时有十几名中日两国人组成的汉语教师队伍，有能力编写出汉语词典，也感到有责任。于是，汉语教师发起促进编纂汉语词典的工作。编纂方针是：以《井上辞典》为起点，补充必要的词汇，编写出能够适应现实需要的汉语词典。编纂业务都是由全体人员利用教学以外的业余时间进行的。后来由于七七事变、太平洋战争，编纂业务停顿下来。战败后，被作为敌产由中华民国政府接受时，原稿卡片约有十四万张，词汇数有七、八万条。当时参加词汇收集工作的有：

铃木择郎 熊野正平 野崎骏平 坂本一郎 影山巍 岩尾正利 内山雅夫
山口左熊 木田弥三旺 金丸一夫 尾坂德司 此外还有八名中国教师（省略其姓名）

归还原稿卡片：战后略稳定后的一九五三年七月，爱知大学校长（原东亚同文书院大学校长）本间喜一跟爱知大学文学系教授铃木择郎（原东亚同文书院汉语教授）热心地说：“我们要回辞典原稿吧。”铃木想起在交原稿卡片时，对接受委员郑振铎口头提出的愿望：“等条件允许时，我们想用我们的双手完成这本辞典。”以此，他试探性地提出了请求。请求信委托日本中国友好协会理事长内山完造送交中国科学院院长郭沫若。由于郭沫若的斡旋，遵照“为了中日文化交流，将原稿在赠送日本人民”这一宗旨，一九五四年九月，中国人民保卫世界和平委员会的刘贯一托付回国船“兴安号”送来了原稿卡片。接受单位

是日本中国友好协会，他们召集了此工作的原有关人员进行协商，最后决定委托原有关人员多，并对完成此项工作抱有热情的爱知大学。爱知大学决定完成这个有意义的历史性的事业，决定承担此项任务，不辜负委托。

编纂事业的开始：中日大辞典编纂业务的正式开始是一九五五年四月。开始时组织了编纂委员会，因为铃木择郎是一九三三年以来发起并促进本项事业的成员之一，被任命编纂委员长，原东亚同文书院大学教授内山雅夫和爱知大学中国文学科毕业的今泉润太郎为专职人员，铃木择郎和爱知大学教授桑岛信一为兼职专门委员，另外在大学内外聘任了几名协力委员，组成了基本阵容。一九五七年又增加专职人员，有北京中国大学毕业的张祿泽、原外务省翻译官远藤秀造、NHK 海外局的宗内鸿、东北大学中国文学研究科毕业的志村良治、爱知大学经济学科毕业的杉本晃等。之后，虽只是短期的又增加了中国大学毕业的欧阳可亮，充实了编纂阵容，此项事业的完成全靠上述各位的努力。

编写工作虽然进展顺利，但与此项工作相比不得不编辑队伍太小。所以在收集，选择词汇不能达到预期目标，很叫人感到遗憾。

另一方面，值得庆幸的是，在中国汉语研究工作有了很大的发展。中华人民共和国成立后，文字改革的形势日益高涨，汉语的研究工作急速发展，也涌现出很多出版物。辞典方面有《学文化字典》、《同音字典》、《新华字典》等优秀的小型词典。除此以外还出版了《机工辞典》等很多专业辞典，可以随时得到丰富的资料。在我国，香坂顺一、太田辰夫的《现代中日辞典》、钟江信光的《中国语辞典》、仓石武四郎的《岩波中国语辞典》等相继出版。我们《中日大辞典》从以上的辞典中受益非小，在此向日中两国众多的学者们表示谢意。

如上所述，国内外情况有力地推动了本项工作，但与此相反也有不少推迟本辞典完成日期的因素。一，原定一九六一年完成的计划过于乐观。二，因要全面地吸收中国的文字改革，有许多地方需要加工、改写。三，要铸造三千多新旧铅字。四，自一九六三年下半年开始，为了节约经费，缩小了编制，只剩下了不需要另付工资的铃木、内山、张、今泉四人。所以，到一九六三年才完成此项工作，用了十三年时间，比当初计划的时间晚了一倍。

中国方面的援助：一九五六年二月收到了由中国人民对外友好协会赠送的《同音字典》、《简明字典》、《中国语文》等其他资料。一九五五年十二月中国学术考查团副团长冯乃超访问本大学，并提词“为中日两国文化交流打好坚实的基础”。一九五八年四月中国法律家代表团团长韩幽桐等访问中日大辞典编纂处，并给予我们鼓励。一九六六年，郭沫若委托正在访华的丰桥市长河合陆郎带来他那雄浑的墨迹“激浊扬清”，给予了我们鼓励。还有，铃木择郎一九五八年访华时，北京大学教授吕叔湘和文字改革委员会的庄栋等就有关文字改革方面给予很多指教。以上这些都使我们不胜感激。

校内外对编写，印刷资金方面的援助：此项事业很难进行商业性核算盈亏，财务上的困难是难免的。幸好在这期间，一九五六年文部省科学资助金机关拨给了一笔研究费，一九五七年朝日新闻社、中日新闻社以及某位不愿公开姓名的热心人提供了许多资助，另外

还有两位自称“贫者一灯”的人也捐了款，支持我们的编写工作。这些理解日中文化交流的人们的好意，的确是难能可贵的。

编纂工作在一九六六年四月已基本完成，但是出版资金方面无着落。经本间校长数年的奔走，一九六七年四月受到日本通运社长福岛敏行的关照，得到了许多订购。在有，当时正值爱知大学创立二十周年，大学评议会决定把本辞典的出版作为纪念活动的一项，所以，出版费的大部分有了保证，于是决定印刷出版。而后，朝日新闻社、每日新闻社也都有很多订购，这两个报社的订购，都以订购者的名义赠送给中国，以感谢中国的好意。

印刷出版：出版计划全部委托给大安股份公司，印刷委托给图书印刷股份公司。这两家公司都是赞同本事业的日中文化交流。日中友好的性质，全心全意地为完成这部辞典尽力。大安承担与印刷厂的交涉，有关进行印刷的计划、校对、预定和实施有关销售的计划。图书印刷公司不惜牺牲巨资新铸了中国的简化汉字和在我国不常用的旧汉字等三千多个铅字。大安和图书印刷与编写人员经常取得密切的联系，工作进展顺利。

本间喜一对中国赠还原稿卡片，身为东亚同文书院大学的最后一代校长，把出版工作作为爱知大学的事业，深感责任重大，从各方面给予了关照，使这项事业得以完成，尽力尽责。这项事业完全是从本间的热心开始，并在其关怀下完成的。

另外，在此期间，一九五五年十一月就任校长，一九五九年去世的小岩井净也在爱知大学紧张的经费中拨出编纂费，始终激励编写人员，期待着辞典问世，做出了种种努力。

增订版：为了适应中国日新月异的发展，修订中日大辞典成了当务之急。一九六八年二月，中日大辞典出版发行时，向郭沫若提出了本辞典有关人员要访华的愿望。这一愿望在一九七三年六月终于得以实现。在南开大学、北京大学、复旦大学同中国的专家们进行了长时间的交换意见，得到了一些宝贵的经验，并想将其用于修订辞典中。幸好，得到了久曾神升校长及大学当局的赞同，一九七五年四月再次设立了中日大辞典修订编辑委员会。

此次修订始终是在初版范围内进行全面的修改，根本的修订工作还有待于将来。当修订工作走上正轨的一九八二年一月，铃木择郎不幸突然逝世。

修订版比起在初版，更是日中友好合作和学术交流的产物。日中邦交恢复后，随着交流的扩大增加，得到了中国访问学者和中国进修教师的帮助。爱知大学教授高临渡和黄异长期协助我们工作。北京农业机械学院教授黄志明协助编写辞典两年，回国后不久因病逝世。我们对这些中国老师的始终如一的真挚的合作表示感谢。修订工作一九八四年完成，此次印刷委托了凸版印刷股份公司。他们使用 CTS 完成了这本辞典。修订版的发行委托大修馆书店。

1990年5月

中日大辞典内容概要

初版

所收单字	11, 195 字 (含繁体字 2, 264 字, 异体字 1, 195 字)
词 条	115, 000 余条
正文页数	1, 947 页
印 数	70, 000 册
开 本	787×1092 1/32 (B6 版)
编 印	1955 年开始编写, 1965 年完成初稿, 1967 年印成。

增订第二版

所收单字	13, 166 字 (含繁体字 2, 759 字, 异体字 1, 595 字)
词 条	136, 000 余条
正文页数	2, 520 页
印 数	40, 000 册
开 本	787×1092 1/32 (B6 版)
编 印	1975 年开始编写, 1984 年完成初稿, 1986 年印成。

爱知大学中日大辞典编纂处

爱知大学的创立与东亚同文书院大学象是深深地连接在一起，中日大辞典编纂处的设立也是和同文书院的中国语研究教育难以分开。

设在上海的同文书院，从1932、1933年为了华日辞典的编纂，开始制作资料卡片。直到战败前，整理的资料卡片已达14万张，但是，却作为敌产被没收了。

爱知大学创立后，不久，本间喜一校长（前同文书院大学校长）同铃木择郎教授等人磋商，打算向中国方面游说，请求把这些资料卡片返还。其结果，1954年12月，资料卡片委托给爱知大学。1955年4月1日开设了华日辞典编纂处，中日大辞典的编集开始了。

中国成为社会主义国家后，中国语的变化也很显著，被返还的资料卡片也不能按原样发挥作用了，结果，从最初的重新制作到成书，经过了13个岁月。1968年，作为“爱知大学中日大辞典”出版发行了。不仅被评价为日本国内第一部正式的中国语辞典，而且被授予中日文化奖。深藏青色的初版本到1986年增订版发行前，共印刷了5万册。

1973年，作为爱知大学学术访中团的辞典编集成员，在“文革”的高潮期，在南开大学、北京大学、复旦大学召开了有关中日大辞典的座谈会，直接听取中国方面的意见。是一次非常难得的机会。1975年，由于增订版出版的需要，再开编纂处。以旧版为基础，在内容上更加充实的红书皮的增订版出版发行了。现在，增订第二版已印刷了7万余册。

中日大辞典从诞生的第一天起，就成了连接中日友好的纽带之一，并作为“中日友好的使者，文化交流的桥梁”在广大的中日两国人民之间，发挥着积极的作用。

辞典资料卡片的返还

1932、33年 华日辞典编纂由东亚同文书院研究会开始。战败时，作成了14万张（7万词条程度）的辞典资料卡片。用木箱3至5个收藏。

1945年11-12月 由于战败，被国民政府教育部京沪区特派员办公处（负责人蒋复瑰、

委员郑振铎）没收。东亚同文书院大学停办。

1946年11月15日 爱知大学创立。

1948年 辞典资料卡片在国内翻译馆（郑振铎：）被保存。一部分遗失了。

1949年10月1日 中华人民共和国成立。

1950年末 以铃木教授的名义，委托日中友好协会向中国转达了希望返还资料卡片的意愿。该会还向中国新闻总署国际新闻局的康大川科长转达了请求。

1951-1952年 资料卡片在中国的调查开始了。很快就了解清楚了，在郑振铎文化部副部长的身边。

1953年7月 本间校长经由日中友好协会内山完造理事长向郭沫若中国科学院院长、郑振铎文化部副部长寄送了希望返还资料卡片意愿的信件。

1953年10月5日 康大川科长向内山理事长指示，资料卡片返还之事向“人民中国”编辑部发信。

1954年4月10日 受郭沫若主席的指示，很快地找出了资料卡片。被国民党的国立翻译馆没收后，一部分已遗失，但仍保存了14万张，是中国政府接收的。从中日两国人民的友谊和文化交流促进的角度，作为文化交流的礼品赠送给日本。想让日本人知道，怎样送给日本为内容的刘贯一中国人民保卫世界和平委员会秘书长的来信，送到日中友好协会内山理事长那里，当日，转送给了爱知大学。

1954年9月12日 把资料卡片堆积在日本人归国的兴安丸号船上。同船从舞鹤港出发的是日中友好协会乘船代表岛田政雄，资料卡片的领回也进行了。

1954年9月27日 兴安丸从塘沽到达舞鹤。资料卡片被送往日中友好协会总部（东京）。

1954年10月10日 日中友好协会召集与资料卡片有关的人协商。原来与此有关的人

很多，可结果是：意见特别一致地把辞典编纂的任务委托给具有热忱的爱知大学完成。

1954年11月 在爱知大学设立了华日辞典编纂处开设准备室。

1954年12月8日 两大木箱资料卡片到达爱知大学的消息，向日中友好协会伊藤武雄理事长报告。

1955年4月1日 华日辞典编纂处开始运转，着手編集。由有关人员组成的华日辞典刊行会设立了。

透过数字来看中日大辞典增订第二版

收录辞条数	143000 个词
词头数	1366 字
简化字	8812 字
繁体字	2759 字
异体字	1595 字
页数	正文 2520 页 索引 197 页 附录 24 页
书的厚度	70mm/大型版 95mm
长×宽	185mm×140mm/大型版 270mm×205mm
书的重量	1. 45kg/大型版 3. 7kg
正文一行字数	24 字 左右双栏排版
正文一页行数	66 字 左右双栏排版
解说最多字数	488 字
汉字笔划最多	25 划
汉字笔划最少	1 划
大标题最多字数	15 字
出版发行日	1987 年
发行册数	73500 册（总计 123500 册）
定价	8600 日元/大型版 12000 日元

原稿大征集中

中日大辞典编纂处，从象以下的利用者中募集知音，请踊跃应征。

题目 爱知大学中日大辞典与我

页数 400字稿纸3页为限

被应征的人赠送纪念品。

中日大辞典与郭沫若先生

被挂在辞典编纂处的匾额，“激浊扬清”四个字是郭沫若先生书写的。既是文学家、文字学家、历史学家，作为诗人、作家还是书法家的著名的郭沫若先生，在文学革命运动时期十分活跃，并组织了创造社。在国民革命时期，以政治家的身份活动。日本留学和流亡日本，并且从处境危险的日本逃离，同日本有很深的缘分。特别是中华人民共和国成立后，作为新中国的代表，给日本国民留下了深刻的印象。

中日大辞典的刊行成为契机，有关资料卡片的返还，金仰仗先生非凡的努力。战后，第一次率中国代表团来日之际，为鼓舞辞典编纂，派副团长冯乃超（中山大学副校长）访问了爱知大学。中日大辞典出版后，在文化大革命中的1973年，能够在南开大学、北京大学、复旦大学，召开有关辞典的座谈会，也是郭沫若先生聘请的结果。当时，在北京的人民大会堂有机会受到郭沫若先生的亲切接见。

“激浊扬清”书帖，是河合陆郎丰桥市长（本学理事）1965年访中拜会郭沫若先生之际，托该氏送到中日大辞典编纂处。激浊扬清一词的含义，指从浩如烟海的词汇中采摘的应该达到典范的词语，可以说，的确与辞典编纂的宗旨相吻合。

日中友好的船 文化交流的桥梁

中日大辞典脱胎于中国，成长在日本。（另载“辞典卡片返还”）被称为中日友好的

使者，文化交流的桥梁的中日大辞典，向中国赠送了 5000 册。

1968 年 初版发行时向中国日本友好协会赠送了 1200 册。

1986 年 增订版发行时，向中国国家教育委员会赠送 1000 册。

1988 年 增订第二版发行时，向中国国家经济委员会赠送 1000 册。

1994 年 为纪念辞典资料卡片返还 40 周年，向中国日本友好协会赠送 1000 册。

另外，1986 年向中国大使馆赠送 100 册。

除此之外，向访问爱知大学的中国的各代表团，以及，访问中国的爱知大学代表团向中国方面赠送的等等，合计数百册。

1973 年 6 月，爱知大学代表团初次访问中国，在上海市乘坐公共汽车时，无意之中看到了一位携带中日大辞典的中年妇女。言谈之中了解到，因为她是上海市教育局的职员，68 年赠送给中日友好协会的 1200 册中的 1 册，恰巧被分配到这里，懂日语的她有幸得到此书。真是一次令人惊奇的奇遇。

中日大辞典编纂体例的样本及特色

汉字的标题。

行数的表示 每隔（文字的）5 行用“a、b、c…”来表示。卷末的《日语索引》用这个表示（五十音图的）行。

典故的出处

鲁迅、老舍等作家的小说啦、毛泽东的论文啦、还从《水浒传》、《西游记》、元代杂剧等古典文学名著中广泛地旁征博引。

同义词的集中处理

同义词集中在主要的大标题后，总括起来施行解释。

索引

汉字部首不同，按笔划数顺序进行汉字索引。通过眼前的感受，很容易引出新的部首。复杂的字给予两个以上的部首。

拼音标题

单词的说明

施行详细而又具体的说明。

汉字字头的字体

为使中国的字体规范化，以《印刷通用汉字字形表》为标准，采用正确的字体。

“·”的后面是繁体字，前面是简化字。“（ ）”内是以体字。

汉字字头的读音和拼音分类

汉字的读音用粗线条字表示。一个字有两个以上的读音时，每一个读音分为“A，B…”施行解释。

汉字字头的解释

①，②，③的区分下，给予丰富的译文，施行详细的注释。例句尽可能地多举，加上译文，使意思和用法更加明确。

附录

部首表

部首名称一览表

根据《异读词审音表》修订音一览表

日中字形对照表

中国历史略表

省、自治区、直辖市简称表

中国政治机构一览表

中国重要纪念日、二十四节气、旧历主要节日一览表

亲戚和家族关系表

北京传统住宅图解

世界国名、首都名一览表

度量衡比较对照表

化学之素表

中国略图

汉语拼音字母、托马斯·威妥玛式的罗马字、注音字母对照表

〔注〕中日大辞典出版案内（1990年版）

Chu-Nichi Daijiten (Chinese-Japanese Dictionary.)

Aichi University Chu-Nichi Daijiten Office of compiling and Editing. Approx. 2,000 pages ; 10,000 characters ; vocabulary of about 130,000 words. List price 4,000 Yen (app. \$11.00). Publisher : Agent of Chu-Nichi Daijiten compiling and Editing committee in Tokyo. 2-4-10 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo.

Those students of Sinology who have grown to respect and depend upon Morohashi's Daikan-wa Jiten for the study of early, medieval and modern Chinese texts, will be delighted to know that scrupulous Japanese scholarship has now produced an exhaustive dictionary for contemporary literature in the vernacular idiom.

Compilation of this work was begun in 1931 by a committee of Chinese and Japanese professors at the Shanghai Towa Dobun Shoin (East Asian Dobun Institute of Shanghai). By the end of W.W. II about 140,000 data cards had been compiled; all were then confiscated by the Chinese government as a war-prize. It was not until 1954 that, through the efforts of various parties, the crates of data cards were shipped to Japan so that work could be continued. With the publication of this dictionary Aichi University Professor Takuro Suzuki, Editor-in-chief and head of the compiling committee, climaxes thirty-seven years of work.

This lexicon embraces over 130,000 words, including current political and economic, scientific and technological terms in addition to the proverbs, slang expressions, figurative speech, maxims and puns with which the vernacular language abounds. For the linguistics student, expressions peculiar to a certain dialect are all noted as such.

A particularly attractive feature is the inclusion of onomatopoeic and mimetic expressions : the dilidala's and qichikacha's which enrich the Chinese tongue in great number.

Characters are presented in both simplified and complex form, but sample sentences and compounds are printed only in simplified Kanji. The spelling system used for pronunciation of characters is the "pin-yin" system approved and sometimes used by the mainland Chinese today. Characters, and all combinations under each character, are listed in alphabetical order to facilitate reference when pronunciation is known; there is, of course, an index based upon radicals, and an index of characters whose radicals are difficult to determine.

Other features of this dictionary include: a Japanese-Chinese index; a list of annual events in mainland China; charts showing family relationship terms; a

8-7 a (2)

diagram of a traditional Peking residence; a map of China; a chart of the political structure of mainland China; a chart of the chemical elements.

A gift-copy of the above dictionary is being forwarded to your University Library with our compliments.

Aichi University
Chu-Nichi Daijiten
Compiling and Editing Committee

[注] 初版出版案内英文版 (1968 年)

CHU-NICHI DAIJITEN
OF
AICHI UNIVERSITY
(INTRODUCTION TO THE PUBLISHING)

Aichi University

Chu-NIchi Daijiten Compilation Office

Introduction to the publishing of Chu-Nichi Daijiten (Chinese-Japanese
Dictionary) of Aichi University

*The Beginning :

Before the early part of Showa(the 1930s), the greatest obstacle for students of Chinese language in Japan was the lack of appropriate textbooks, reference books and dictionaries.

Two outstanding dictionaries, *Ciyuan* and *Cihai*, were published in 1915 and 1937 respectively. However, both these dictionaries were intended for literary language. As for Chinese dictionaries, the earliest were probably the series of three dictionaries compiled by Zhou Ming : *Guoyu Dacidian* (a compact dictionary of 281 pages) published in 1922, *Wang Yunwu Dacidian* published in 1930, and *Biaozhunyu Dacidian* published in 1935, but the publication of a genuine Chinese dictionary *Guoyu Cidian* did not take place until 1936.

It is not wrong to say that a Chinese dictionary was published in Japan earlier than in China. In the early Taisho period(second decade of the twentieth century), a Chinese dictionary compiled by Fukuji Ishiyama had already been published. However, even learners of Chinese language did not find this dictionary very satisfactory. In 1935 Fukuji Ishiyama published the 1,750 page *New Chinese Dictionary*. Later, in Showa, the publication of modern Chinese dictionaries such as *Inoue's Chinese Language Dictionary* in 1928 and *Chinese Language Dictionary* by Wataru Takeda in 1941 satisfied the basic needs of learners of the Chinese language. Nevertheless, it was still difficult to meet the demand for higher standards.

Compilation of foreign language dictionaries is by no means an easy task. Since the mid-Meiji period, dictionaries of foreign languages, particularly of English , German, and French have basically been completed. That is because Japan was relatively advanced in the study of these foreign languages. In fact, these countries were very much advanced in the study of their own languages, so good dictionaries appeared.

In China, however, Chinese scholars traditionally valued classic literature much more than colloquial language, which explains why modern Chinese language had not been studied so deeply. Under these circumstances, the dictionaries compiled by Fukuji Ishiyama , Daihachi Miyajima, Midori Inoue and Wataru Takeda may not be perfect, but it is not an easy task to compile Chinese dictionaries. One still feels keenly the need to overcome the defects and weak points of these dictionaries.

Toa Dobun Shoin (East Asian Dobun Institute of Shanghai) had a group of more

than ten regular Chinese language teachers, both Chinese and Japanese ,who had the competence to publish a dictionary and thought it was their duty to do so. They therefore set to work on the compilation of a Chinese dictionary. Their policy was to compile a dictionary, based on *Inoue's Chinese Dictionary*, which would be able to meet the needs at that time by supplementing necessary vocabulary to it. They found the time for their compilation work during their spare time. Later , their compilation work came to a halt due to the 7 July Incident and the outbreak of the Pacific War. When the draft of the dictionary was confiscated by the government of the Republic of China as enemy property after the defeat of Japan, there were approximately 140,000 cards bearing 70,000~80,000 words. Among the compiling staff were Takuro Suzuki, Shohei Kumano, Shunpei Nozaki, Ichiro Sakamoto, Takashi kageyama, Masatoshi Iwao, Masao Uchiyama, Sakuma Yamaguchi, Misao Kida, Kazuo kanamaru, Tokuji Osaka and eight Chinese teachers.

*The Return of the Cards :

In July 1953, when the Post-war situation had become more stable, Kiichi Honma, the President of Aichi University (previously the President of Toa Dobun Shoin Institute) and Takuro Suzuki, Professor of the Literature Faculty of the same university (previously Professor of Chinese Language at Toa Dobun Shoin Institute) were very enthusiastic about putting a request to the Chinese government for the return of the draft of the dictionary. Prof. Suzuki remembered expressing their wish to the Chinese official Zheng Zhengduo at the time of the confiscation of the cards, that they would very much like to complete the dictionary for themselves when conditions permitted. Because of this, he made a tentative request to the Chinese government. The letter of request was handed to Guo Moruo, the Director of the Science Institute of China through Kanzo Uchiyama, the Chairman of Japan-China Friendship Association. With his assistance, and in accordance with the policy decision that, "Based on the spirit of promoting cultural exchange between China and Japan, the draft will be presented to Japan", Liu Guanyi, a member of the Chinese People's Committee to Protect World Peace, ordered that the cards should be returned to Japan on the boat "Koanamaru", which brought Japanese returnees back from China in September 1954. The recipient was the Japan-China Friendship Association. They discussed future plans for the drafting with people related to this project, and finally decided that the task should be entrusted to Aichi University where there were many people who had worked for it previously and who were very enthusiastic about completing the job. Aichi

University decided to take up the task of completing this valuable and historic project so as not to disappoint people's expectations.

*The Start of the Compilation:

The compilation of Chu-Nichi Daijiten formally began in April 1955, when the Compilation Committee was set up. Takuro Suzuki, one of the members who had been involved in the project from the beginning, was appointed as Editor-in-Chief. The main staff consisted of Masao Uchiyama, previously Professor of Toa Dobun Shoin Institute, and Juntaro Imaizumi, a graduate of Chinese literature at Aichi University, as full-time staff. Takuro Suzuki and Shinichi Kuwashima, Professors of Aichi University, were part-time staff, and some assistants were recruited from both within and outside of the university. In 1957 the full-time staff were increased: Zhang Luze, a graduate of the University of China in Beijing; Shuzo Endo, a former translator at the Ministry of Foreign Affairs; Kou Muneuchi, a staff at NHK overseas programs; Ryoji Shimura, a graduate of Chinese Literature (post-graduate course) from Tohoku University; and Akira Sugimoto, a graduate of Economics from Aichi University. Later, Ouyang Keliang, a graduate of the University of China joined them, although only briefly, which strengthened the compilation office. The completion of this enterprise depended entirely on the efforts of the above mentioned staff.

Although the work went on smoothly, it could not be denied that the size of the staff was too small for this kind of project. Therefore, to their great regret they were unable to fulfill the original target in terms of collecting and selecting vocabulary.

However, what was very fortunate was that the study of Chinese language in China made a great progress. After the foundation of the People's Republic of China, the Chinese Character Reform movement advanced rapidly, and a great number of publications appeared. Among them there were *Xue Wenhua Zidian*, *Tongyin Zidian*, and *Xin Hua Zidian*, all of which are compact dictionaries of high quality. In addition, the publication of many technical dictionaries such as *Ji Gong Cidian* (Dictionary of Technology) began to provide abundant materials. In Japan, *Modern Chinese-Japanese Dictionary* by Junichi Kosaka and Tatsuo Ota, *Chinese Dictionary* by Nobumitsu Kanegae, and *Iwanami's Chinese Dictionary* by Takeshiro Kuraishi were published one after another. Our *Chinese-Japanese Dictionary* owes a great deal to above mentioned dictionaries, and we would like to

express our gratitude towards the great number of scholars concerned, both Japanese and Chinese.

As mentioned above, although the general situation, domestic and foreign, had been encouraging towards the project, there were quite a few elements which delayed the completion of the dictionary. (1) The original estimate of 1961 for its completion turned out to be too optimistic. (2) In order to absorb the Character Reform in China completely, many additions and rewritings had to be made. (3) It was necessary to cast more than 3,000 types of characters, both made. (4) From the latter half of 1963, due to financial difficulties, the size of the editorial staff was cut down to four – Suzuki, Uchiyama, Zhang and Imaizumi– to whom the university did not have to pay extra allowances. Therefore, it was not until 1963 that the task was finally completed, having taken 13 years altogether, twice as long as had been estimated at the outset.

*Aid from China :

In February 1956, we received *Tongyin Zidian*, *Jianming Zidian*, *Zhongguo Yuwen*, as well as other reference materials sent by the Chinese People's Association for Friendship with Foreign Countries. In December 1955, the deputy head of Chinese Academic Research Group, Feng Naichao, visited our university and left us a written message of encouragement : "Let us establish a firm foundation for cultural exchange between China and Japan." We received several groups of visitors from China : a group of Chinese legal specialists in April 1958, Chinese economic delegates in June 1964, and in December of the same year delegates of Chinese legal specialists, including their leader Han Youtong, visited the compiling office to give us their support. In 1966, Guo Moruo entrusted Rokuro Kawai, Mayor of Toyohashi City, who was visiting China at the time, with his buoyant calligraphy "Ji Zhuo Yang Qing" (obtain clean water by stirring dirty water), which gave us enormous encouragement when we received it. Moreover, in 1958, during a visit to China, Takuro Suzuki had been given valuable advice concerning Character Reform by people such as Lü Shuxiang, Professor of Beijing University, and Zhuang Dong, member of the Character Reform Committee, to all of whom we express our sincere gratitude.

*Financial Aid from within the University and from Other Sources for the Compilation and Printing of the Dictionary :

It is difficult to discuss a project such as this in terms of commercial profit and

loss, since financial difficulties are unavoidable. Fortunately over this time, the Research Assistance Division of the Ministry of Education provided us with funds in 1956, while in 1957 the newspaper companies Asahi Shinbun and Chunichi Shinbun, as well as an earnest supporter who wishes to remain anonymous donated considerable sums of money. Also, there were two people who donated money as “a small candle from the poor” in support of our dictionary compilation. The good will of those who show their understanding towards cultural exchange between Japan and China is certainly very precious.

By April 1966, the compilation of the dictionary was basically complete, but the problem of funding the publication had not been solved. Through the good offices over many years of Kiichi Honma, the Honourary President of Aichi University, we were able, in April 1967, to obtain a considerable number of advanced purchase orders thanks to Toshiyuki Fukushima, the President of Nippon Express Co., Ltd.. In addition, it was the occasion of the twentieth anniversary of the foundation of Aichi University, and the University Council decided to include the publishing of the dictionary in the anniversary events, which meant securing most of its publishing costs. Thus publication became possible. Both the Asahi and Mainichi newspaper companies made many advanced purchase orders, which were donated to China in the names of these companies to express our gratitude for their cooperation.

*Printing and Publication :

The entire publishing plan was entrusted to Daian Co., Ltd., and the printing to Tosho Printing Co., Ltd.. Both companies had been in favour of the spirit of promoting Sino-Japanese cultural exchange and friendship between the two countries of our project, and devoted themselves to the completion of the task. Daian managed the negotiation with the printing factory, printing plans, proofreading, and sales. Tosho Printing newly cast more than 3,000 types of characters for the simplified Chinese characters and those outdated characters which were not in frequent use in Japan, investing sacrificially large sums of money. The staff and the two companies worked in close cooperation and the work went very smoothly.

Kiichi Honma, as the last President of Toa Dobun Shoin Institute, assumed great responsibility for the return of the data cards by the Chinese Government and for the final product, the publication of the dictionary, as a project of Aichi University.

His tireless efforts, together with support from various quarters, made the project

a success. The project owes its entire success to the initial enthusiasm shown by Honma and his patronage during the process.

Moreover, great efforts were also made by Jo Koiwai, who was installed as President of Aichi University in November 1955, in raising funds for the completion out of university's tight budget, and in his constant encouragement to the staff. He was very much looking forward to the publication, but unfortunately died in 1959.

*Revised Edition :

In order to catch up with the continuous progress of China's development, a revision of *Chu-Nichi Daijiten* became urgently necessary. In February 1968, when the dictionary was published, a request was made to Guo Moruo that the staff should be allowed to visit China. This request was finally granted in June 1973. They spent a long time exchanging opinions with Chinese scholars at Nankai University, Beijing University and Fudan University, and obtained precious experiences with the intention of utilizing them in the revision of the dictionary. It was very fortunate that the Compilation Office of *Chu-Nichi Daijiten* was reestablished in April 1975, with the agreement of the President, Hitaku Kyusojin, and the university authorities, while the Committee for Revising *Chu-Nichi Daijiten* was organized with Takuro Suzuki as the Chief Editor and Juntaro Imaizumi as Committee Chairman.

The revisions at this time were mainly made within the framework of the first edition, and a complete revision was to be made in the future. However, in January 1982, Takuro Suzuki's sudden death came just as the revision work was getting under way.

The revised edition, compared with the first edition, was to a greater extent the product of friendly cooperation and academic exchange between the two countries. Following the recovery of diplomatic relations, and with the expansion of cultural exchange, we were able to obtain assistance from visiting Chinese scholars and Chinese teachers studying in Japan. Professors Gao Lindu and Huang Yi of Aichi University also helped us for a long time. Professor Huang Zhiming of Beijing Agricultural Machinery Institute helped us with the compilation for two years, but died not long after his return to China. We express our deepest gratitude towards those Chinese teachers for their sincere and reliable assistance. The revision was completed in 1984 and the printing was entrusted to Toppan Printing Co., Ltd., who completed the dictionary making use of computer technology. The publishing

of the revised edition was entrusted to Taishukan Publishing Co., Ltd..

Chu-Nichi Daijiten

First Edition

Characters 11,195 characters (including 2,264 complex characters and 1,195 related characters)

Vocabulary more than 115,000

Pages 1,947

Number printed 70,000 volumes

Size 787 × 1,092 1/32 (B6)

Compilation and Printing

Compilation commenced in 1955, first draft completed in 1965, printed in 1967.

Second Edition (revised)

Characters 13,166 characters (including 2,759 complex characters and 1,595 related characters)

Vocabulary more than 136,000

Pages 2,520

Number printed 40,000 volumes

Size 787 × 1,092 1/32 (B6)

Compilation and Printing

Compilation commenced in 1975, first draft completed in 1984, printed in 1986.

[Footnotes]

P2 L7 Ciyuan 辞源

- Cihai 辞海
- L10 Zhou Ming 周 铭
Guoyu Cidian 国语大辞典
- L11 Wang Yunwu Dacidian 王云五大辞典
- L12 Biaozhunyü Dacidian 标准语大辞典
- L16 Fukuji Ishiyama 石山福治
- L18 New Chinese Dictionary 新支那大辞典
- L20 Inoue's Chinese Language Dictionary 井上支那語辞典
Chinese Language Dictionary 支那語辞典
- L21 Wataru Takeda 竹田 復
- L32 Daihachi Miyajima 宮島大八
Midori Inoue 井上 翠
- P3 L3 Toa Dobun Shoin 東亜同文書院
- L14 Takuro Suzuki 鈴木 沢郎
Shouhei Kumano 熊野正平
Shunpei Nozaki 野崎駿平
Ichiro Sakamoto 坂本一郎
- L15 Takashi Kageyama 影山 巍
Masatoshi Iwao 岩尾正利
Masao Uchiyama 内山雅夫
Sakuma Yamaguchi 山口左熊
Misao Kida 木田彌三旺
- L16 Kazuo Kanamaru 金丸一夫
Tokuji Osaka 尾坂徳司
- L18 Kiichi Honma 本間喜一
- L24 Zheng Zhenduo 郑 振铎
- L27 Guo Moruo 郭 沫若
- L28 Kanzo Uchiyama 内山完造
Japan-China Friendship Association 日中友好協会
- L31 Liu Guanyi 刘贯一
- L33 Koanmaru 興安丸
- P4 L1 Aichi University 愛知大学
L7 Chu-Nichi Daijiten 中日大辞典
L11 Juntaro Imaizumi 今泉潤太郎
L12 Shinichi Kuwashima 桑島信一
L15 Zhang Luze 张 禄泽

- Shuzo Endo 遠藤秀造
- L16 Kou Muneuchi 宗内 鴻
- L17 Ryoji Shimura 志村良治
- L18 Tohoku University 東北大学
- Akira Sugimoto 杉本 晃
- L19 Ouyang Kelian 欧阳可亮
- L29 Xue Wenhua Zidian 学文化字典
- Tongyin Zidian 同音字典
- L30 Xin Hua Zidian 新华字典
- L31 Ji Gong Cidian 机工辞典
- L32 Modern Chinese – Japanese Dictionary 現代中日辞典
- L33 Junichi Kosaka 香坂順一
- Tatsuo Ota 太田辰夫
- Chinese Dictionary 中国語辞典
- L34 Nobumitsu Kanegae 鐘ヶ江信光
- Iwanami's Chinese Dictionary 岩波中国語辞典
- P5 L1 Takeshiro Kuraishi 倉石武四郎
- L17 Jiangming Zidian 简明字典
- L20 Feng Naichao 冯 乃超
- L25 Han Youtong 韩 幽桐
- L26 Rokuro Kawai 河合陸郎
- L27 Toyohasi 豊橋
- Ji Zhuo Yang Qing 激浊扬清
- L31 Lü Shuxiang 吕 叔湘
- Zhuang Dong 庄 栋
- P6 L5 Asahi Shinbun 朝日新聞
- Chunichi Shinbun 中日新聞
- L15 Toshiyuki Fukushima 福島敏行
- Nippon Express Co., Ltd., 日本通運株式会社
- L19 Mainichi 毎日新聞
- L28 Daian Co., Ltd., 株式会社 大安
- L29 Tosho Printing Co., Ltd., 図書印刷株式会社
- P7 L5 Jo Koiwai 小岩井 浄
- L14 Nankai University 南开大学
- L15 Beijing University 北京大学
- Fudan University 复旦大学

- L18 Hitaku Kyusojin 久曾神 昇
L30 Gao Lindu 高 临渡
Huang Yi 黄 昇
L31 Huang Zhiming 黄 志明
P8 L1 Toppan Printing Co., Let., 凸版印刷株式会社
L3 Taishukan Publishing Co., Let., 大修館書店
-

[注] 愛知大学「中日大辞典案内」英文版（1990年）

編纂者のことば

この辞典の編纂事業は、すでに昭和六年頃から上海東亜同文書院で企画準備され、同二十年には、十四万枚にのぼるカードが作成されていましたが、敗戦の結果、その継続はほとんど不可能と考えられていました。

その後両国有志者の尽力、とくに中国人民保衛世界和平委員会の御好意によって、日中文化交流促進のため、この編纂資料は日本人民に贈られることになり、日中友好協会に届けられました。同協会では早速各方面の関係者と協議の結果、この辞典編纂事業はもとの関係者が多く、かつその完成に熱意をもつ愛知大学に、これを委ねることになったわけでありました。

愛知大学（当時の学長は元東亜同文書院大学学長 本間喜一氏）では、この意義ある歴史的事業を完成するため、その重任にあたることを決意し、付託にこたえることになりました。

不肖私は、この事業の発案ならびに推進にあたった者の一人として編集委員長を命ぜられ、内山雅夫君を専任委員とし、多くの人々の協力をえて、約十一年の歳月をその検討整理にあててまいりましたが、今日ようやくその完成をみることになったのであります。

中国では社会体制の変革にともなって、言葉の上でも文字の上でも目ざましい変化があり、このため従来のカードはほとんどこれを書きかえ、また増補につとめました結果、ここに親字約一万、語彙十三万の大辞典として、この間長期の編纂業務を継続するにあたっては、文部省科学研究補助、朝日新聞、中日新聞社および篤志家の御援助を仰ぎ、また出版にふみきるにあたっては福島敏行氏（日通社長）の御協力をいただきました。ここに記して厚く謝意を表する次第であります。

この辞典の実現が、日中文化の交流発展に少しでも貢献するところがあれば、幸これにすぎるものはないと存じます。

鈴木 択 郎

日中文化交流の使節

倉 石 武四郎

それは数奇をきわめた辞典であった。はじめ中国は上海の同文書院に呱呱の声をあげ、十数年にして終戦とともに中国に接収された。書院の教授たちは、おそらく永久に日の

目をみないものとおもわれたにちがいない。戦後十年にちかく、その膨大な資料が中国から返還された。そだての親たちのうれしさは想像にあまりある。それよりさらに十年、日本は豊橋の愛知大学で根本的な検討と整理がくわえられ、いまようやく刊行されようとしている。それには実に、日中両国人の心血がそそがれていた。

日中両国は、いわゆる一衣帯水のあいだいにありながら、言語系統のまったくちがった民族である。しかも、日本は中国の漢字を吸収し、もっぱら漢字によって意思をつたえようとして、中国の言語そのものに肉薄することをおこたった。こうして中国語の研究はおくれ、中国語の辞典が本格化したのは、きわめて最近のことにすぎない。自然、この辞典のごとき膨大なものは、まだあらわれていない。いまやその刊行によって、中国の古今東西にわたるおびただしい語彙は、きわめて容易に検索することができ、日本の中国語研究に一大利便をくわえることになった。

おもえば、この辞典は、かつて日中両国のあいだいに介在して数奇の運命をたどったが、それはやがて両国文化交流の使節たる資格を賦与される所以となった。前後三十余年にわたる編集各位の努力にたいし、こころからなる敬意をささげたいとおもう。

(東京大学名誉教授)

中日大辞典に寄せて

金子 二郎

待望久しい愛知大学の中日大辞典が、いよいよ出版されることを承り、喜びにたえません。この辞典がで上がるまでのいきさつについては、別に詳しい報告もあると思いますが、要するにそれは日中文化交流史上に特筆されるべき、美しい心暖まる話です。そしてそれをこんな美事な形に結実させられた愛知大学の諸先生はじめ関係の皆さまに、心からのお祝いと敬意を表したいと思います。

この大辞典は、そうした因縁によるだけでなく、内容からみても、質量共に日本の中国辞典にとって画期的なものになりました。凡そ中国語のあらゆる問題は、この辞典の中で解答を求めることができるでしょうし、付録を活用することによって、ある程度中国についての百科事典的な役目さえ果すでしょう。良い辞書に乏しいことをなげいていた、日本の中国語学界もようやくこれで不満を解消することができるでしょうし、学生諸君も大きな恩恵を受けることになりましょう。

(大阪外国語大学学長)

〔注〕初版発売チラシ (1967年)

最新の資料をもとに増補改訂された わが国最大の中国語辞典

一九六八年、戦前からの膨大な蓄積をもとに出版された
愛知大学の『中日大辞典』は、
豊富な語彙と的確な解釈によって高い評価を得て世にむかえられた。
以来二十年、近代化を進める中国の最新の資料をもとに増補改訂し、
最新最高の中国語辞典として改めて世に贈る。

5 大特色

- ① 中国の多方面の資料にもとづき、最新の語彙までくまなく検討して収録した増補改訂版。
- ② 用字はすべて正確な簡化字を使用。親文字の見出しには繁体字（旧字体）・異体字を併記した。収録親文字数一万三千字。
- ③ 一般語彙はもとより、政経時事・科学技術用語から、方言・俗語・成語・諺語・古語におよぶ十四万語の豊富な内容。
- ④ ふんだんな百科項目、充実した各種付録は、中国に関する総合辞典としての性格をあわせ持つ。
- ⑤ 使いやすい漢字部首索引を採用。巻末の日本語索引は、日中辞典としても活用できる。

B 6 判・上製函入・2, 7 6 5 頁
定価 6, 8 0 0 円

刊行のことば

愛知大学の『中日大辞典』は、戦前からの膨大な資料の蓄積をもとに、一九六八年に出版されました。爾來二十年、その豊富な語彙と的確な解釈は中国語学界・教育界はもとより、広くマスコミ・実業界からも高く評価されてきました。

またこの辞典の資料が、一九五四年中国から返還され、その後も一貫した中国側の好意により日本での出版が実現したということもあって、この『中日大辞典』が日中友好のために果たした役割は計り知れないものがあります。

愛知大学では、近代化を進める中国の最新の資料をもとに、増補改訂の作業を進める一方、小社にその出版を委嘱され、一九八六年春、『増訂版』発行に至りました。

この間、中国では一九八五年「关于普通話異読詞審音表的通知」が発表され、一九八六年には「簡化字総表」が再発表されるなど、発音及び文字表記のうえで重要な決定がなされました。本辞典はこれら中国側の決定を全面的に取り入れて内容を補正し、『増訂第二版』として新たに出版するものです。

なお今回、『増訂第二版』発行と小社創業七〇周年を記念し、文字を大きく読みやすくした「特装大型版」も併せて発行することにいたしました。

『中日大辞典』が、広く読者に愛用され、ひいては日中友好のために役立つとすれば幸いこれに過ぎるものではありません。

一九八七年三月 大修館書店

この辞典を推薦します

●増補改訂を喜ぶ

中国はいま、非常に大きな転換期に直面しております。特に、日中両国の経済関係においても、貿易不均衡の問題をはじめ、合弁合作事業の推進、技術転移の促進など、解決が急がれる問題があり、そうした問題の解決のためには、さらに、日中両国の相互理解を深め、広い分野にわたる交流をたかめることが、なんとしても必須の要件であります。

このたび、愛知大学の中日大辞典編纂処において『中日大辞典』が、最近の中国における現代化をふまえて、増補改訂されますことは、まことに喜ばしく、日中友好の拡大発展に大いに寄与されるものと信じます。

8-7 b (2)

わたくしは、今回の増訂版にかかわられた諸先生に、敬意を表するとともに、一層のご精進を期待するものであります。

南海電気鉄道株式会社取締役会長

日中経済協会副会長・関西本部長

川 勝 傳

●現代中国理解のための新しいキーワードの数々

昭和四十七年、日中両国の国交正常化以来、両国の交流が広がり深まる中で中国語辞典、事典類の出版も次第に増えてきた。だが何か心待ちされていたのが『中日大辞典』増訂版の出版であった。他の類書の特徴、長所を認めるのにやぶさかではないが、やはり昭和四十三年の初版以来使い込んできた『中日大辞典』が僅かずつとは言え時代に遅れていくのがもどかしく思われていた。

今回ようやく『中日大辞典』増訂版が発行され、そのもどかしさも解消されることになろう。試みにページを開くと「一言堂」、「包産到戸」、「気管炎」など今日の中国を理解する新しいキーワードの数々が目に触れる。一挙に十四万に増えた語彙は現代中国理解の有力な武器となるであろう。

生命を持ち、常に成長する言語、とりわけ大きな転換の時代のある生きた中国語をどこまでとらえるか。困難な作業に当られた編纂者の御努力に敬意を表するとともに、『中日大辞典』増訂版が最も信頼できる中国語辞典として、また事典として広く利用されることを期待している。

東海大学教授

毎日新聞前北京市局長

辻 康 吾

●日中友好・文化交流の架橋

数千年の歴史をもつ漢字は、東洋の文化とその発展に大きく寄与しました。漢字は中国人民の貴重な財産であるばかりでなく、日本人民にとっても貴重な財産です。愛知大学編纂の『中日大辞典』は、語彙が豊富で、大変使いやすく、中国研究者の良き友でありました。このたび、中国の最新資料にもとづき、全面的に修訂されて、大修館書店から出版されるという朗報に接し、心からお祝いの意を表します。また、改めて修訂されたこの『中日大辞典』が、中日両国人民の友好と文化交流促進の面で、さらに大きな役割をはたすことを願ってやみません。

中華人民共和国駐日本国特命全権大使

章 曙

●新たな発展を祝す

愛知大学が編纂された『中日大辞典』は1968年に出版され、ここに18年を経、発行部数も7万冊に及び、読者に大いに歓迎され中日両国文化交流に多大な貢献をされたことは喜ばしい限りである。

『中日大辞典』は語彙は豊富、解釈は正確であり、実用価値もあり、かつ高い学術水準に達しており、中日両国人民が言葉を学び合い理解を深め合う上に必ず備えるべき書籍である。

いま、編纂者は精益求精という進取的精神を持って全面改訂を行った。新版がまもなく世に出るに際し、私はこの新版を読者諸氏の良き師、良き友として推薦したい。

『中日大辞典』の編纂は中日両国の友好協力の輝きをいや益すとともに、南開大学と愛知大学の友好協力関係を結ぶための媒介ともなった。私は本辞典の新たな発展を祝し、かつ中日両国人の友情がとこしえに続くことを祈るものである。

南開大学と愛知大学の友好協力が日まじに繁栄することを願いつつ。

南開大学学長

藤 維 藻

●『中日大辞典』改訂版出版を祝う

愛知大学で編纂中の『中日大辞典』改訂版がまもなく出版されるとの朗報を聞き、ここに謹んで北京語言学院を代表し、衷心よりお祝い申し上げますとともに、私個人からも心よりお祝い申し上げます。

言葉は人類の最も重要なコミュニケーションの手段であります。中日両国の文化交流と経済協力をさらに強めるため、また両国人民の世々代々の友好のために私たちは互いに相手の言葉を学ぶ必要があります。現在日本語を学ぶ中国人はますます多くなり、中国語を学ぶ日本人も日まじに増えています。『中日大辞典』は中国人が日本語を学ぶうえで、また日本人が中国語を学ぶうえで重要な役割を果たし、大きな貢献をなしてまいりました。改訂後の『中日大辞典』はより一層大きな役割を果たし、大きな貢献をすることでしょう。

愛知大学が学術上更に大きな成果をあげられるようお祈り申し上げます。

北京語言学院院长

呂 必 松

〔注〕増訂版発売チラシ（1986年）

創立60周年記念事業のご案内

愛知大学は、1946年11月15日に中部地区唯一の旧制法文系大学として誕生し、2006年に創立60周年を迎えます。これを記念して、さまざまな事業を計画しています。

「中日大辞典第三版」の出版

我が国最初の本格的中国語辞典として評価され、本学と中国との深い関わりを象徴する『中日大辞典』。増訂第二版が刊行され、すでに17年が過ぎており、新たに多数の新語・新義を収録させた新版を出版します。

[注]第三版刊行の予告。創立60周年をむかえるキャンペーン用パンフ(2006年5月)所載。

曹全碑全文

君諱全，字景完，敦煌效穀人也。其先蓋周之胄，武王秉乾之機，翦伐殷商，既定爾勳，福祿攸同，封弟叔振鐸于曹國，因氏焉。秦漢之際，曹參夾輔王室，世宗廓土斥（境）竟，子孫遷于雍州之郊，分止右扶風，或在安定，或處武都，或居隴西，或家敦煌。枝分葉布，所在為雄。君高祖父敏，舉孝廉，武威長史、巴郡胸忍令張掖居延都尉。曾祖父述，孝廉、謁者、金城長史、夏陽令、蜀都西部都尉。祖父鳳，孝廉、張掖屬國都尉丞、右扶風隴糜侯相、金城西部都尉，北地太守。父瑋，少貫名州郡，不幸早世，是以位不副德。

君童胤好學，甄極悉緯，無文不綜。賢孝之性，根生於心，收養季祖母，供事繼母，先意承志，存亡之敬，禮無遺闕，是以鄉人為之諺曰：“重親致歡曹景完。”易世載德，不隕其名。

及其從政，清擬夷齊，直慕史魚，歷郡右職，上計掾史，仍辟涼州，常為治中、別駕。紀綱萬里，朱紫不謬。出典諸郡，彈枉糾邪，貪暴洗心，同僚服德，遠近憚威。

建寧二年，舉孝廉、除郎中、拜西域戊部司馬。時疏勒國王和德，弑父篡位，不供職貢。君興師征討，有吮膿之仁，分醪之惠。攻城野戰，謀若涌泉，威牟諸賁，和德面縛歸死。還師振旅，諸國禮遣，且二百萬，悉以簿官。

遷右扶風槐里令，遭同產弟憂，棄官。續遇禁網（岡），潛隱家巷七年。光和六年，復舉孝廉。七年三月，除郎中，拜酒泉祿福長。詆賊張角，起兵幽冀，兗、豫、荆、楊同時並動。而縣民郭家等復造逆亂，燔燒城寺，萬民騷擾，人裏不安，三郡告急，羽檄仍至。于時聖主諳諷，群僚咸曰：君哉！轉拜郃陽令，收合餘燼，芟夷殘迸，絕其本根。遂訪故老商量，備艾王敞、王畢等，恤民之要，存慰高年，撫育鰥寡，以家錢糴米粟，賜癡盲。

大女桃妻等，合七首藥神明膏，親至離亭。部吏王宰、程橫等，賦與有疾者，咸蒙瘳俊。惠政之流，甚於置郵，百姓繼負，反者如雲。戢治廡屋，市肆列陳。風雨時節，歲獲豐年，農夫織婦，百工戴恩，縣，前以和（河）平元年，遭白茅谷水害，退於戊亥間，興造城郭。

是後舊姓及修身之士，官位不登。君乃閔縉紳之徒不濟，開南寺門，承望華嶽，鄉明而治。庶使學者李儒、樂規、程寅等，各獲人爵之報。廓廣聽事官舍，廷曹郎閣，升降揖讓朝覲之階。費不出民，役不干時。

門下掾王敞、錄事掾王畢、主簿王歷、戶曹掾秦尚、功曹史王顛等，嘉慕奚斯，考甫之美，乃共刊石紀功。其辭曰：懿明后，德義章，貢王廷，征鬼方，威布烈，安殊荒。還師旅，臨槐里。感孔懷，赴喪紀。嗟逆賊，燔城市。特受命，理殘圯，芟不臣，寧黔首。繕官寺，開南門，闕嵯峨，望華山，鄉明治，惠沾渥。史樂政，民給足。君高升，極鼎足。中平二年十月丙辰造。

（注） 漢郃陽令曹全の碑、曹景完碑ともいう。後漢の靈帝中平2年に建碑、明の萬

歴初、陝西省郿陽県に出土した。

文字はほぼ完全で彫鏤も絶佳なため、古来より隸書の模範として最も珍重された。殊に我国では隸書といえは曹全碑というほどで、隸書の祖師というべきである。

「中日大辭典」の題字は、昭和17年大阪鬚々堂書店の昭和新選碑法帖大観第2輯第7巻漢曹全碑から採ったものである。